

奇譚グラス

Osaka Japan



4月号

新しい風俗文献誌

1973 · 4

73

4

雜誌 2805—4

¥400



極彩色のカラーで描く  
五人のM女の美しき生態

全裸開股開陳縛り  
 カラー三枚一組 一〇〇〇円  
 深田 菊子 略号△ある▽  
 思いきり両股をひらいて開陳する可憐で美しい女体も、縛られてこんなあどけない表情なのです  
 白肌と赤白斑ら紐  
 カラー三枚一組 一〇〇〇円  
 深田 菊子 略号△あり▽  
 真白い肌をぐっとくびる斑ら紐の美しいムードを盛りあげることか甘いコントラストは惨虐のな  
 浣腸と緊縛と弄戯  
 カラー三枚一組 一〇〇〇円  
 福井 桃子 略号△あや▽  
 各種の浣腸器を前にして大の字に正面開股したマダムと後手高小手に縛られた  
 縛りの羞恥に喘ぐ  
 カラー三枚一組 一〇〇〇円  
 笠井奈保子 略号△あむ▽  
 すぐ赤面する恥かしがり屋の奈保子が大好きな縄で縛られるというナマナましい色彩の中の羞恥  
 羞らしいの坩堝の中  
 大手札三枚一組 一〇〇〇円  
 笠井奈保子 略号△あも▽  
 原色のな配色の中心に全裸の肌、に腋毛もあらわに繰り展げられる緊縛と羞恥のかもしだす震宴

笠井奈保子 略号／あめ＼  
縄にくびられた乳房の先のグミ  
のような乳首もピンク色に染まり

全裸を晒して縛られた美麗な女性  
猿轡に悶える女性  
カラ―三枚一組 一〇〇〇円  
略号△あみ▽  
笠井奈保子  
喘まざれた豆絞りの猿轡にうめく  
き思わされ開股する女性の息づまる  
ような迫真的な色美しきシーン  
全裸で見せる狂態  
カラ―三枚一組 一〇〇〇円  
略号△あき▽  
松本たえ  
芸者福竜が全裸にひん剝かれて  
三種三様の縄にて交った縛りをさ  
れ、そのM性を露呈してゆく  
強烈後手縛り展開  
カラ―三枚一組 一〇〇〇円  
略号△あね▽  
松本たえ  
如何な強烈な責めにも耐える  
というM女の繊細な裸身を厳重に  
縛りあげて執拗にいたぶり抜く  
臨月腹緊縛の発端  
カラ―三枚一組 一〇〇〇円  
略号△ある▽  
福井桃子  
覚悟はしていても出産予定日が  
目前に迫ってくれば躊躇するのだ  
が、それを払いのけて緊縛する  
便々たる太鼓腹を  
カラ―三枚一組 一〇〇〇円  
略号△あね▽  
福井桃子

丸々と極めて美しい線を見せた  
福井 桃子 略号△あれ▽

妊孕腹をツンと突き出させて非情な縄は妊婦の裸身にからみつく。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円  
福井 桃子 略号△あよ▽  
出産間際の便々たる蛙腹でも苦

しいのに、更に縄目も凄いで後手高  
手小手縛りが肌を痛めつける。

海老責め後手吊り

カラー二枚組 八〇〇円  
江口 淑子 略号△あお▽  
強烈な海老貴めと伸した後手を

逆に吊り上げた姿態のなかに、あられもないM女の秘密があった。

カラ―二枚一組 八〇〇円  
江口 淑子 略号△あわ▽

◎お申込みは前金にて、大阪市阿倍野郵便局私書箱第14号天星社へ略号記入の上、御注文下さい。送料当方負担にて急送いたします。

本誌愛読の女性の方々へ

[illegible]

▽賞金△

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

一、形式は、小説、創作、読物などのフ  
ィン物でも、告白、体験、手記のよう

者く一などッ戻れ歓実  
 の家まで、る、もセ、は迎フ  
 の方輩野模、イ、求添致  
 登出心と、何感に下しシ  
 竜門とせ、垂、想、じレポ  
 として新作は形式手まば写  
 本誌に絶対執筆紙す真、  
 試みに限る筆もの、更、  
 みて下すに、シナ論、参  
 い。野心、のでも、最、  
 幾多の、意、得、  
 心ある、意、と、  
 の読、読、と、

稿用紙を御利用願います。原稿は必ず二百字詰又は四百字詰以上、一枚に制限致します。枚数は三十枚以上。

入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚  
掲載の際、発表の支障を来すおそれがある  
場合は、原稿は原則として返戻は申上り  
前除するものとさせていただきます。ご了承  
故す。原稿は原則として返戻は申上り  
つて、懸賞応募作品は第一頁般に  
一、別懸賞応募作品は第一頁般に  
下区別するため、第一頁般に  
住所（又は連絡先）は必ずお書き願  
住者（又は連絡先）は必ずお書き願  
応募者の氏名を公開したり、他へ洩  
性は絶対の奇く致しません。故に、  
箱第四十一号の送付先は、大阪市住吉  
並に郵送（第一種郵便）として下さい。  
直接の訪問は、必ずしも必要でな  
ず、郵送（第一種郵便）として下さい。



竹の部屋の憂囚

＜中河恵子＞





奇

譚

ク

ラ

ブ



# 四月号目次

△昭和四十八年△

△第二十七卷△第四号△通刊第三〇二号△

本

文

フォト「清純さを縛る僕」	△山路ミヨ子△	阿部 久一	(21)
△告白△	玉木章子のSM生活		
『日蔭の女から日向の女に』	……	玉木 章子	(22)
懸賞入選告白「つつましきSMプレイ」	……	河西 逸雄	(28)
読切創作『九州旅行』	……	久留木 栄	(32)
夫婦交換プレイに思いを馳せた			
『愛妻への特訓プレイ』	……	早坂 信治	(52)
連載・奴隷妻小説「命預けます」(7)	……	柴 利好	(62)
二月号の「とき子の自縛教室」を読んで	私の高もも自縛法	……	岩井たけ子 (80)
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ	△西条紀代の巻△		
『縄で縛ればMの感度抜群の娘』	……	塚本 鉄三	(82)
連載小説「大噴火」	△五十五回△	……	千葉 青鬼 (110)
秋山夫妻「新残酷ショー」見聞記	……	香川ミノル	(118)
ある老人の泣き「月光の中の女」	……	白鳥 大蔵	(121)
手記「実験動物」としての私	(花田一郎様に お答えして)	……	大塚 啓子 (124)
△M女26△	玉木章子をこうして責めてほしい	……	西村 真 (131)
連載・S大河小説『パロディ花と蛇』(16)	……	山光 純	(132)
編集長に対する手紙「長いトンネルの彼方」	……	四国 三郎	(142)
SM渉猟「耽奇房」我楽多控(1)	……	辻村 隆	(144)
M女通信「黒い乳房」に答えて(諏訪大路健さまへ)	……	高村 浩子	(163)
連載・アブ紳士行状記『M派交友録』(37)	……	鬼山 絢策	(168)



鼻責めモデル撮影会の提唱……真鍋五十三  
 奴隷志願の女の宣約書……山下 悠子  
 手記「玉木章子論」……峯村比等志  
 玉木章子責めのアイデア……宇野 高夫  
 和装縛りの美と共に……山本 五郎  
 マゾおんな「恋縄のウタ」……北川まりこ  
 短信往来 内田容子さんへ……今井 博  
 イメージ画「鬼ゴッコ」……名古屋S生  
 短信往来 小杉千恵様へ……扇 由起夫  
 イメージ画「調教」……J・U・N  
 短信往来 梅川幸子さんへ……長井 収  
 豊胸恋歌「歎く妻よ」……広島 一騎  
 短信往来 三浦ご夫婦へ……水戸しほり  
 イメージ画「逃亡失敗」……丸鬼怒叉奴

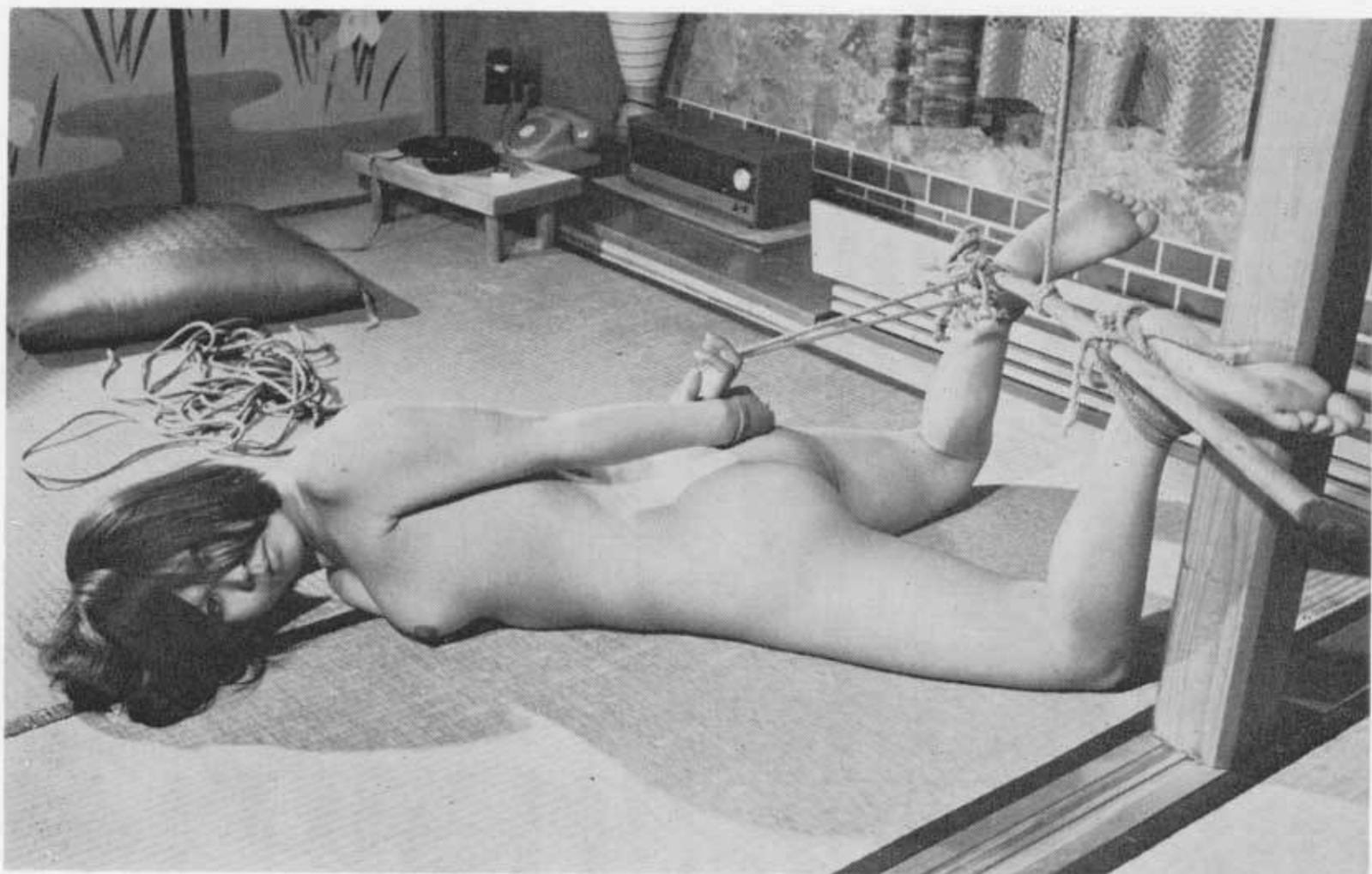
私の花電車……大林小夜子  
 責め随想 おだてと奢……早木 夢二  
 フォト「菱縄の悶え」……左近麻里子  
 サロン落穂抄(一)……塚本 鉄三  
 ある想い 憎悪と縛り……亜須香 透  
 蟲惑的な禁じられた世界……諸見 弦吉  
 ゴムマニアのたわごと……藤田 公一  
 イメージ画「滑やか比べ」……志羽 利也  
 私はぬいぐるみマニアです……茂木 久  
 イメージ画「人形しほり」……一宮ひかる  
 マニアの告白 臨月妊婦讃……川尻 則夫  
 編集部だより……編集部  
 西条紀代嬢に捧げる……河本 光三  
 SM的女性下着について……河本 光三

竹の部屋の憂囚……中河 恵子  
 麗人脚挙げの図(2葉)……深田 菊子  
 牝猫をいたぶるの図(2葉)……前田真知子  
 イルリガートル浣腸(2葉)……高村 浩子  
 二〇〇Cの浣腸器(2葉)……三浦 純子  
 「M女通信」の具現化(2葉)……谷山久美子  
 豊満な乳房を縛る(2葉)……前田真知子  
 愉しき悦虐への入口……富田由美子  
 光源へ向って晒す……前田真知子  
 華麗なる責めの饗宴……笠井奈保子  
 責め抜かれた稚妻……松本 たえ  
 光影の中に悶える(2葉)……前田真知子  
 柔肌は縄に抵抗す(2葉)……前田真知子  
 豊満のコード縛り……笠井奈保子  
 惑溺の一瞬……松本 たえ

目次  
 女薄情記「お尻で責められるとき」……松田 章宏 (185)  
 告白『二の腕の縄痕に想う』……前田真知子 (192)  
 連載・S時代小説「紫蘭の門」(20)……風流極道軒 (200)  
 懸賞入選創作「窮鳥の囁き」……吉田 遙 (214)  
 孤独な男の告白「自虐自慰」……工月 洋一 (224)  
 奇ク「三月」浣腸マニアの願望と期待……竹迫 誠也 (231)  
 読者通信……編集部選 (266)  
 イメージギャラリー……  
 花「宮城昌子」(37)……「愛しさあまって」岡たかし (30)  
 鷹I・C (47)……「宇宙のどこかで」飯田ひろく (43)  
 たかし (172)……「起きあがり小法師」三鷹I・C (119)  
 ハルミ (237)……「調教開始一分前」飯田ひろく (137)  
 ナミオ (171)……「フタの悦鳴」岡たかし (176)  
 (180)……「陶酔のうま酒」岡たかし (188)  
 「責め問い部屋」三鷹I・C (204)……「地下室へどうぞ」飯田ひろく (207)  
 「乱世の哀花」岡たかし (210)……「生体のショック学研究」飯田ひろく (218)  
 西条紀代







麗人脚挙げの図



△深田菊子▽



牝猫をいたぶるの図

△深田菊子▽

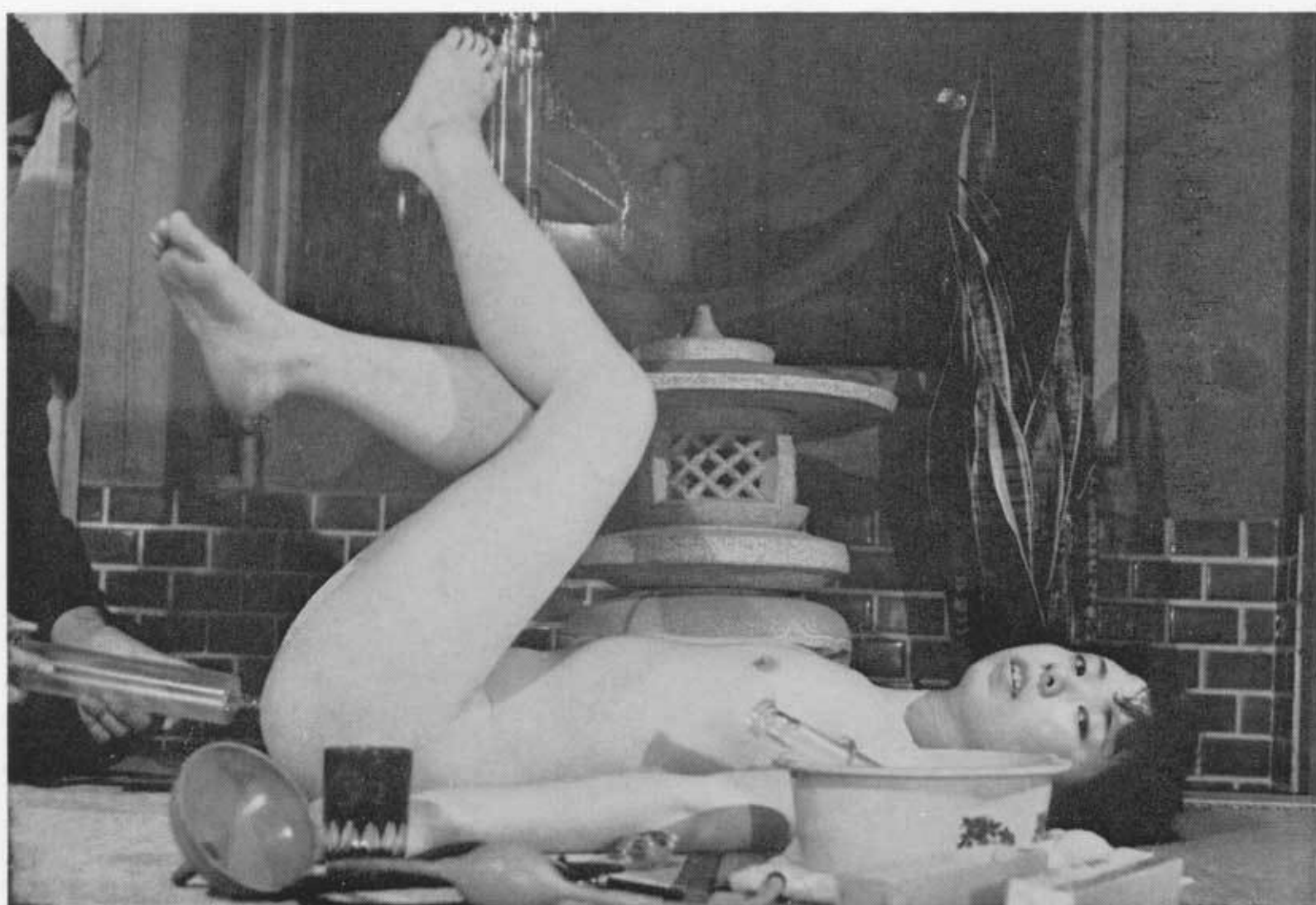






イルリガートル浣腸

＜前田真知子＞





二百 cc の浣腸器

＜前 田 真知子＞





「M女通信」の具現化

△高村浩子▽





豊満な乳房を縛る

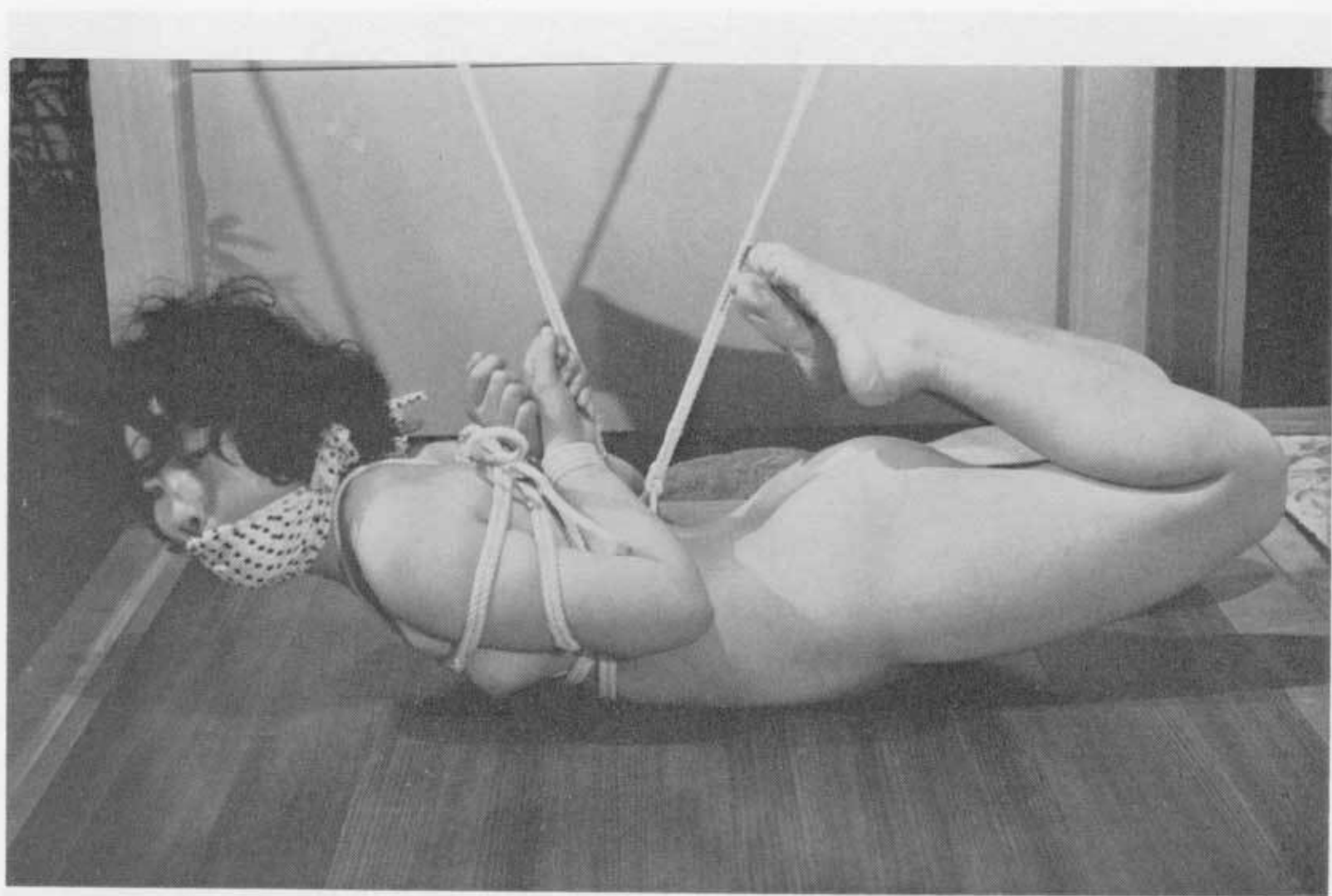
＜高村浩子＞





羞恥責めの序曲

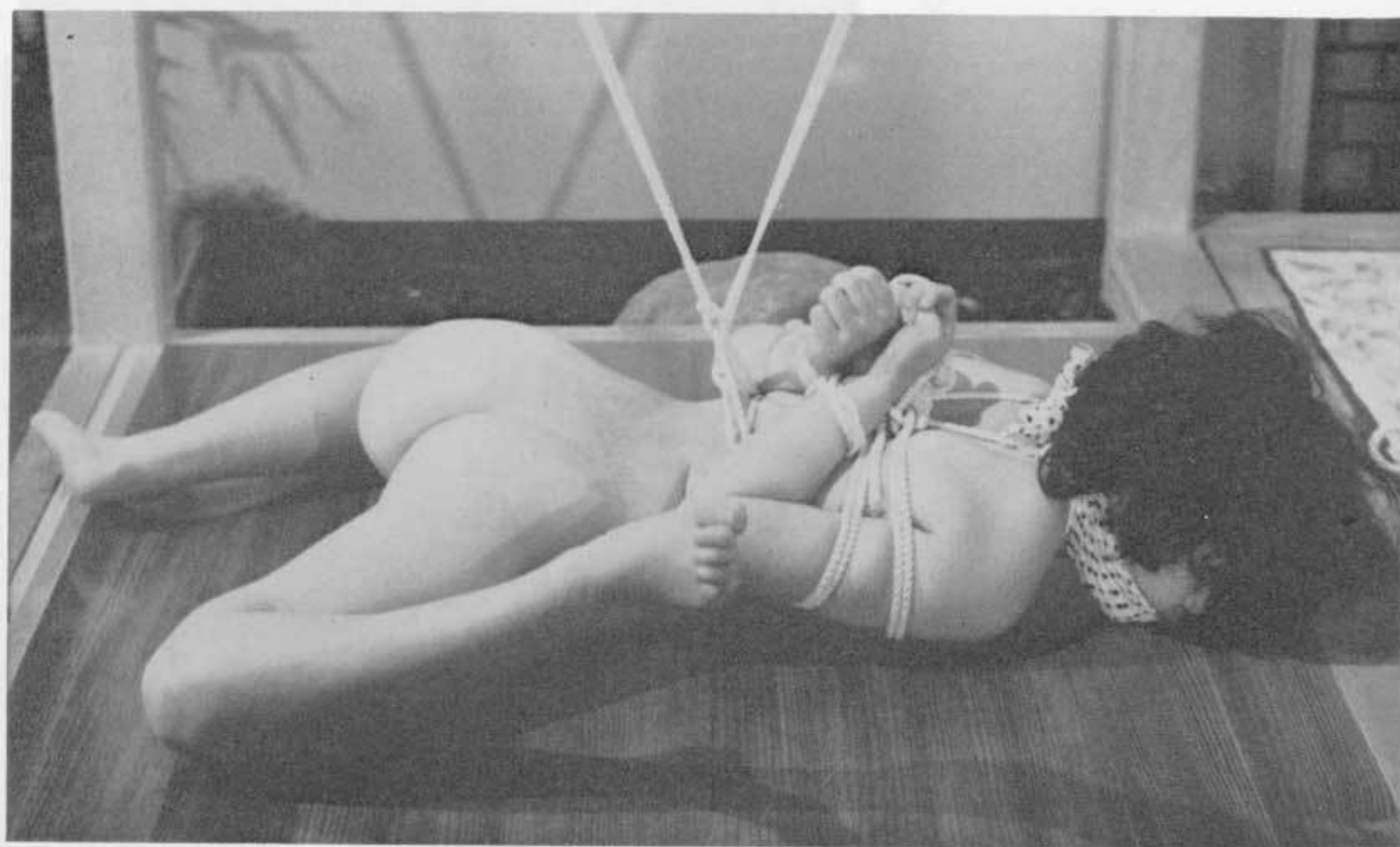
△西条紀代▽





若々しき肢体の躍動

＜西 条 紀 代＞







愉しき悦虐への入口

△三浦純子▽



光源へ向かって晒す

△谷山久美子▽





華麗なる責めの饗宴

＜前 田 真知子＞



責め抜かれた稚妻

＜富 田 由美子＞



光  
影  
の  
中  
に  
悶  
え  
る



△前田真知子▽



柔肌は縄に抵抗す



△前田真知子▽





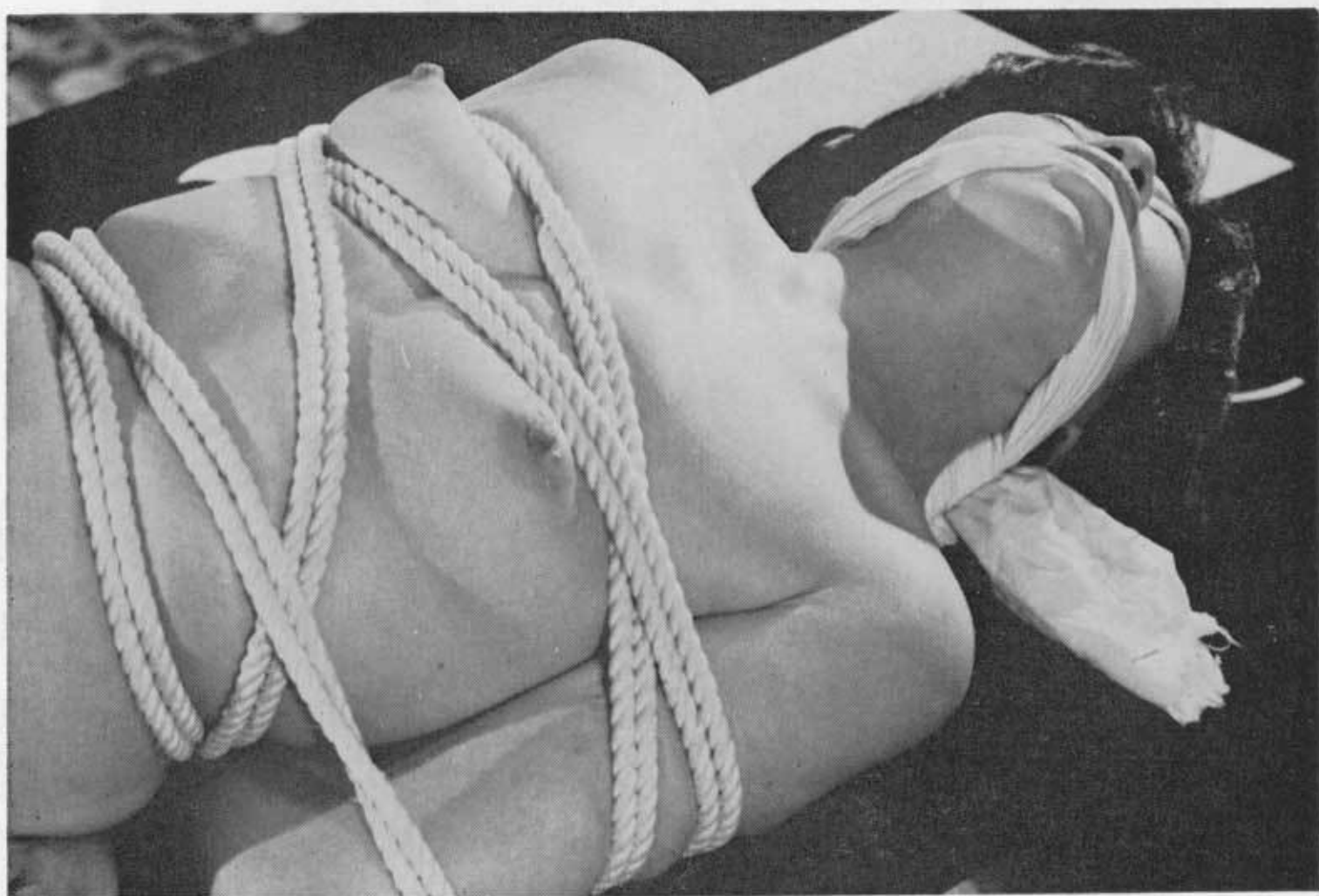
豊満のコード縛り

△笠井奈保子▽



惑溺の一時

△松本たえ▽



奇

譚

ク

ラ

ブ

昭和四十八年 四月号

(第二十七卷 第四号)  
通刊 第三〇二号



### 清純さを縛る僕

モデル……山路ミヨ子

程よくふくらんだ格好のよい双つの乳房。清純派らしい、可愛い臍窩が僕に向かってエクボを見せている。君はなぜ、こうして縄で縛らなければならぬか、知っているか。

僕は君のけがれの肌を、目でなめ回しながら、どこから手をつけたらいいかを考えている。身にまとった一片の白布が、いつ、僕の手によって剥ぎとられるか、君はソレを心のなかで秘かに怖れていることだろう。

だが、もう一つの君の心は、その白布が僕の手によって、荒々しく剥ぎとられることを心待ちしているかもしれないのだ。

だから僕は、君のその、もう一つの心を満足させてやりたいと、今、ここで思っているところなのだ。

(阿部久一・記)





△告白▽ 玉木章子のSM生活

日<sup>ひ</sup>陰<sup>かげ</sup>の女<sup>おんな</sup>から日<sup>ひ</sup>向<sup>なた</sup>の女<sup>おんな</sup>に

玉<sup>たま</sup>木<sup>き</sup>章<sup>あき</sup>子<sup>こ</sup>

私が自分の事を書いてみないかと、すすめられた時、もし主人の許しがなかったら、書く気にはならなかったと思いますが、「君がいついつ迄も僕の手元にいてくれる事になるのだったら、僕にしても、その方がうれしいよ」と言ってくれましたので、つたない文ですが書く気になりました。

二月号に塚本さまの文で、私のルポと写真が誌上にのりましてからの主人の感激は、それは大変な物でした。年末で忙しい時だったのに、私の所へ入りびたりだった事でも、それは、よく分かります。私の写真を沢山、塚本さまから頂いた時も、そうですが、それはそれは、今までに経験した事もないような大変な主人の喜びようでした。

「こんなんだったら、もっと早く、章子の緊縛写真をとって貰うんだったのに——」

主人は真底から、そう考えていたのでしょ

う。それは、主人の私に対する態度にも、はっきりと現われていました。主人も私も、今までにない激しい身も心も、とろけるような快感を味わったのですもの。

その当時、十九才だった私は、小さな特定郵便局に勤めて窓口に坐っていました。一週間か十日に一回位の割で顔を見せる青年と、いつとはなしに顔見知りになっていました。私が、その青年の住所と名前を知ったのは、窓口で始めて彼の預金通帳を、自分の手で作る事になったからです。

それから暫くして、彼がその通帳に回り小切手で入金された事から、私は彼と電話で話をする機会を持ったのです。その小切手は大阪市外で発行された物だったので、取立料があるかいらないかについて、お返事するような用件だったと思います。

私の紺の事務服の胸には、玉木という名札がついていましたので、彼には私の事が、すぐに分かったようでした。

次に逢った日、お茶に誘われ、そ

れからは一緒に映画を見たり、郊外へハイキングをしたり、その頃、まだ今ほど流行していなかったボーリングへ行ったり、そして、いつとはなしに、お互いに離れ難くなった時

私は彼から重大な告白を聞いてしまったのです。

「君にはかくして済まなかったが、実は僕には妻も子供もあるのだよ」

彼の口から、その言葉を聞かされた私は、頭をガッと、金槌で叩きめされたようなショックを受けました。しかし、結局は、私は彼の世話を受けて、マンションで一人暮らしをする日陰の女となってしまったのです。

彼こそ、今の私の主人なのです。彼には一つの変わった性癖がありました。夫婦生活の夜のひととき、枕もとに女の縛った写真を置いておかなければ可能にならなかったのです。彼の奥さんは、それを極度に嫌がり、ずっと冷戦状態が続いているそうなのです。それも、同じ写真だったら、次第に効果が薄れてきますので、いつも新しい女性の変わった緊縛写真が必要だったのです。

そうした事から、いつも私の名前で、女性の緊縛写真を求めさせていました。そして、いつとはなしに、





私自身も、主人の手によって縛られる事になっていました。

そうした写真をお手本にして主人が、ただどしい手つきで私を縛るのですが、とても写真の様に、うまくは出来ませんでした。それでも、私を縛った時の主人のハッスルぶりを、じかに我が身で感じると、いつしか私も縛られる事が嫌ではなくなっていました。

それどころか、きつく縛られたり、みだらな責めを受ける事に対して、ほのかな期待を持つ様にさえなっていました。

そして、いろんなSM雑誌や写真を見ているうちに、単調な主人のやり方に物足りなくなつて、私の方から、こうした方がいいのじゃないかしら、と主人を逆に、そそのかす様にさえ、なってきました。

主人は家庭の事もあって、一週間に一回ぐらいしか泊まってゆきません。もっとも、仕事の合間を見はからって時折、顔を見せる事はありませんが、それも、そう何度もというわけではありません。

こうして、私の日陰の女としての生活は、数年間、主人という一人の男を守って続けられて来ました。お互いの嫉妬心から、時には波風の立つ日もありましたが、それでも、と



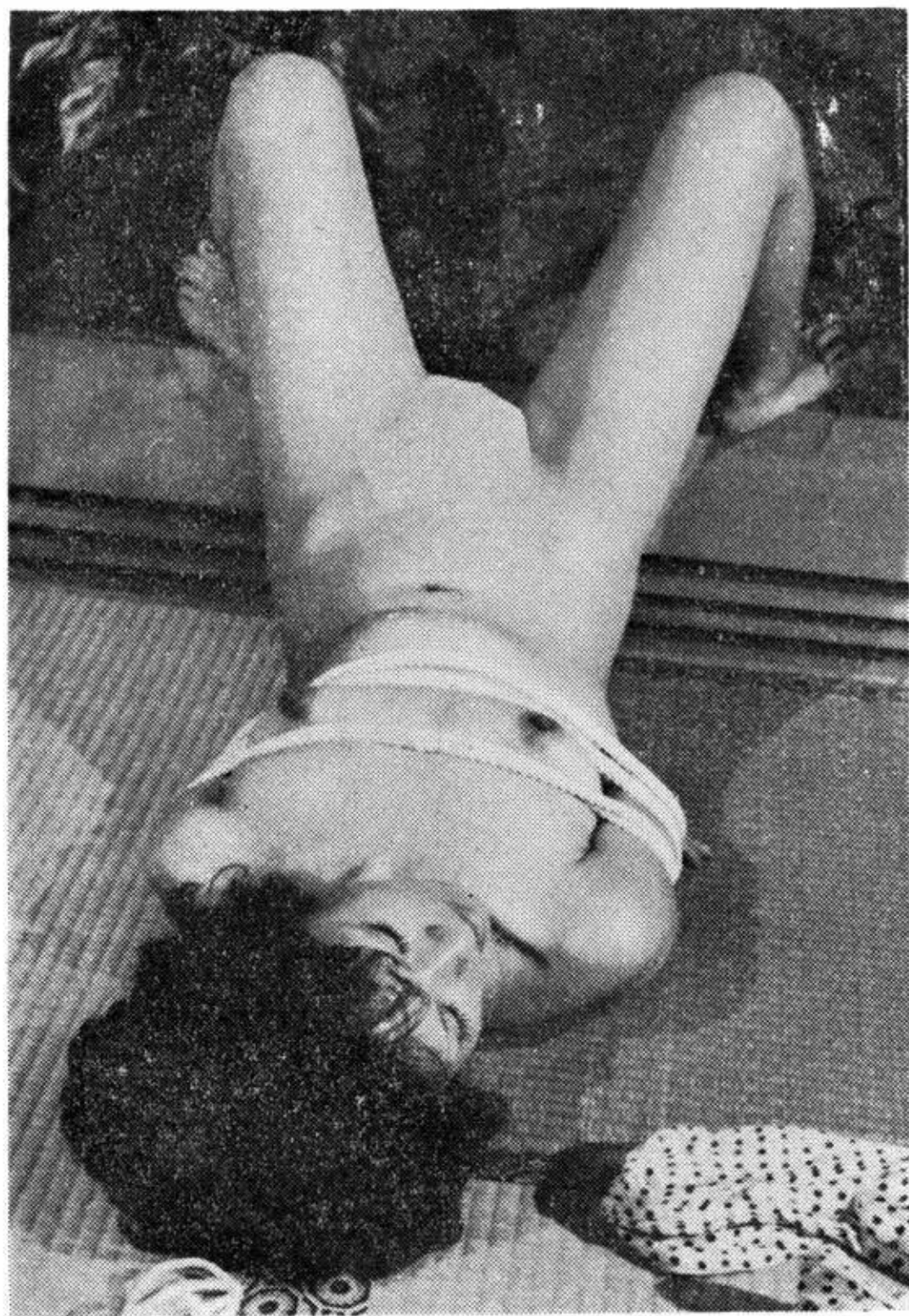
にかく、平穏な日々が続いていました。

どんな澄んだ水でも、淀んだままでは、濁りが出て来るものなのでしょう。私達二人の生活も、平穏なだけに、刺戟に乏しく、感激性もうすれ、毎日毎日が惰性で日を送っているような気がしたのでしたのです。

緊縛と責め、そして、正式の夫婦ではない

愛人関係、そうした男女のSM生活の中にさえ、倦怠期という、ありきたりの危機が忍び寄って来たのでしょうか。

日々が空しく、そして、なんとなく、つまらない物に見えて来て仕方なかったのです。そんな時、私は退屈のあまり、奇巧の読者通信に投稿したのです。



静かな水面の上に、ポツンと投じた小石の一つが、同心円の波紋を描いて、それが今のこの素晴らしい緊張と快楽のSM生活を、もたらしてくれたとは、私には本当に信じられない気持ちなのです。

主人以外に、一度も縛られたり責められたりした事のない、この私が、他の男性によっ

ていじめられるという事が、これ程、素晴らしい事なのだろうか。これ程の快楽を味わう事が出来るものなのだろうか。

それは、私一人のみではありません。主人の方も、私以上に刺戟を受け、そして、今迄にない感激を味わっている事は、この私にははっきりと、よく分かるのです。

「自分一人の、かけがえのない宝物だと思って大切にしていた章子だが、こうして奇クの誌上にのせてもらっていると、なんだかSMのスターみたいで、後光がさして来たようだな。それに、以前の章子と違って、縄一本掛けても、感激が入だよ」

主人はそう言って熱意をこめて、私の身体を縛るのですが、とても、塚本さまのように縛れなくて、サジを投げてしまいます。それよりもむしろ、心理的な面が大きいのではないのでしょうか。私のあられもない全裸の緊縛姿態が奇クの誌上に生まれてからは、主人の持続性が一段と高まっているのです。

自分で下手な縛り方をするよりも、塚本さまに責めて頂いて写真にして貰った方が、いくらましかも知れないと思っている主人なのでしょう。

もう一度、激しく責めて貰って来い、と盛んに私を、そのかすのです。本当は、私が責めさいなまれて苦悶するさまを、自分の目で、じかに眺めたいのかもしれない。

私も、主人以外の男性の手で縛られ、責められるという事には大いに興味があります。子供のない私が、一人でマンションの部屋の中に閉じこもっている平穏な生活から一転



して、刺戟と変化のある生活に移ってしまつた私は、日陰の女から、今では日向の女になつてしまったのでしょうか。

私と主人の関係は、正式に結婚した間柄ではありませんが、それでも、私が他の男性の方の手で縛られるということにつきましては相当の抵抗がありました。籍の入った奥さん程ではないにしても、やはり主人に気兼ねするような後めたさというものがありません。

主人にしましても、私の緊縛写真がほしいという強い欲求はありましたでしょうが、それでも、私を他人の手で縛らせるといふ事は、やはりためらう物があつただろうと思います。

それなのに、実際に、こうして私の緊縛写真が奇巧の誌上についてしまいますと、最初抱いていました、あらゆる危惧が、すっかりふっ飛んでしまつて、逆に二人の間柄が一層深くなつてきたように感じられるのです。

本当に、不思議なものですわね。

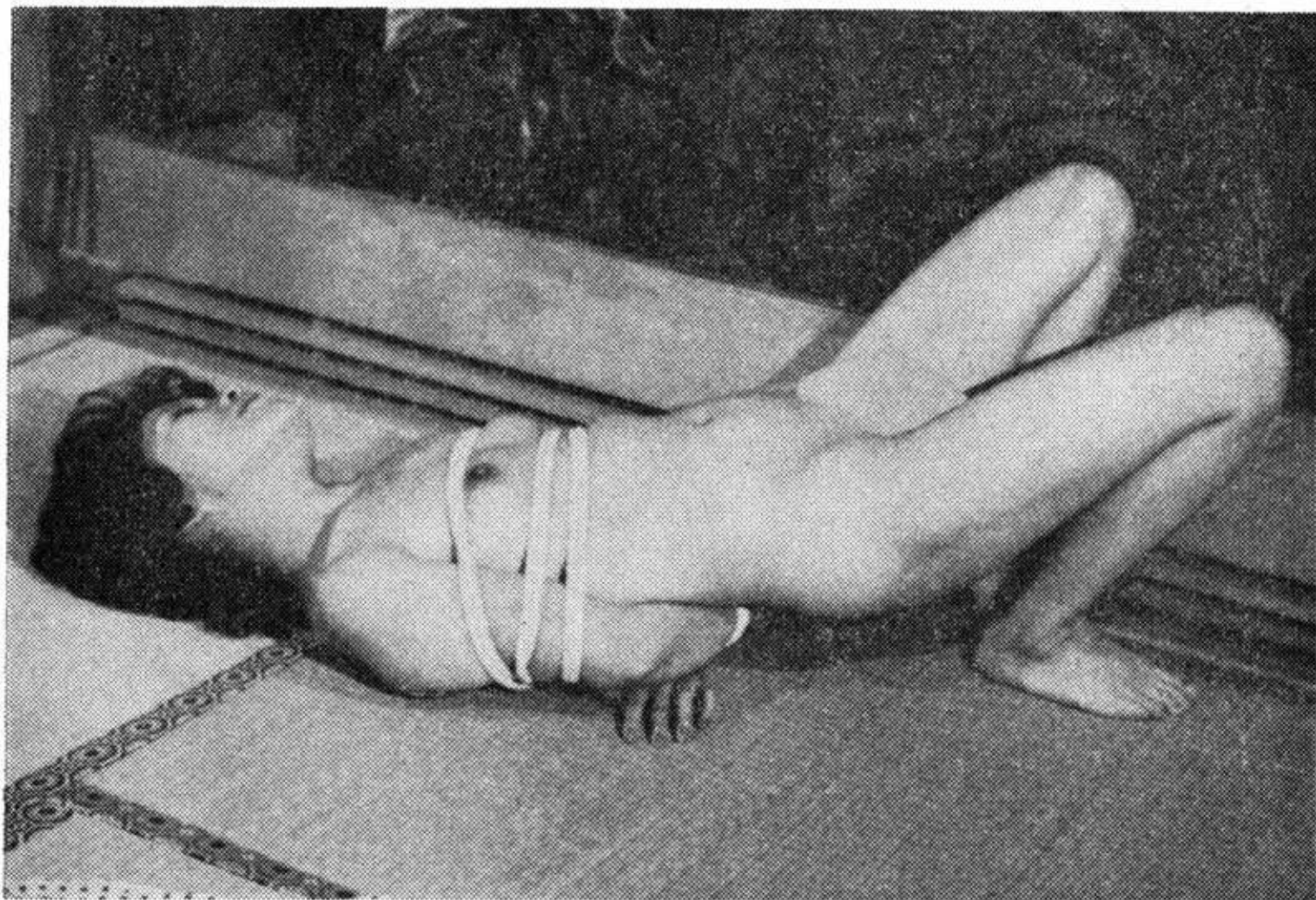
あれ以来、私の元へ通ってくる主人の回数も断然、多くなり、又、主人の強さも以前とは比較にならない位なのです。

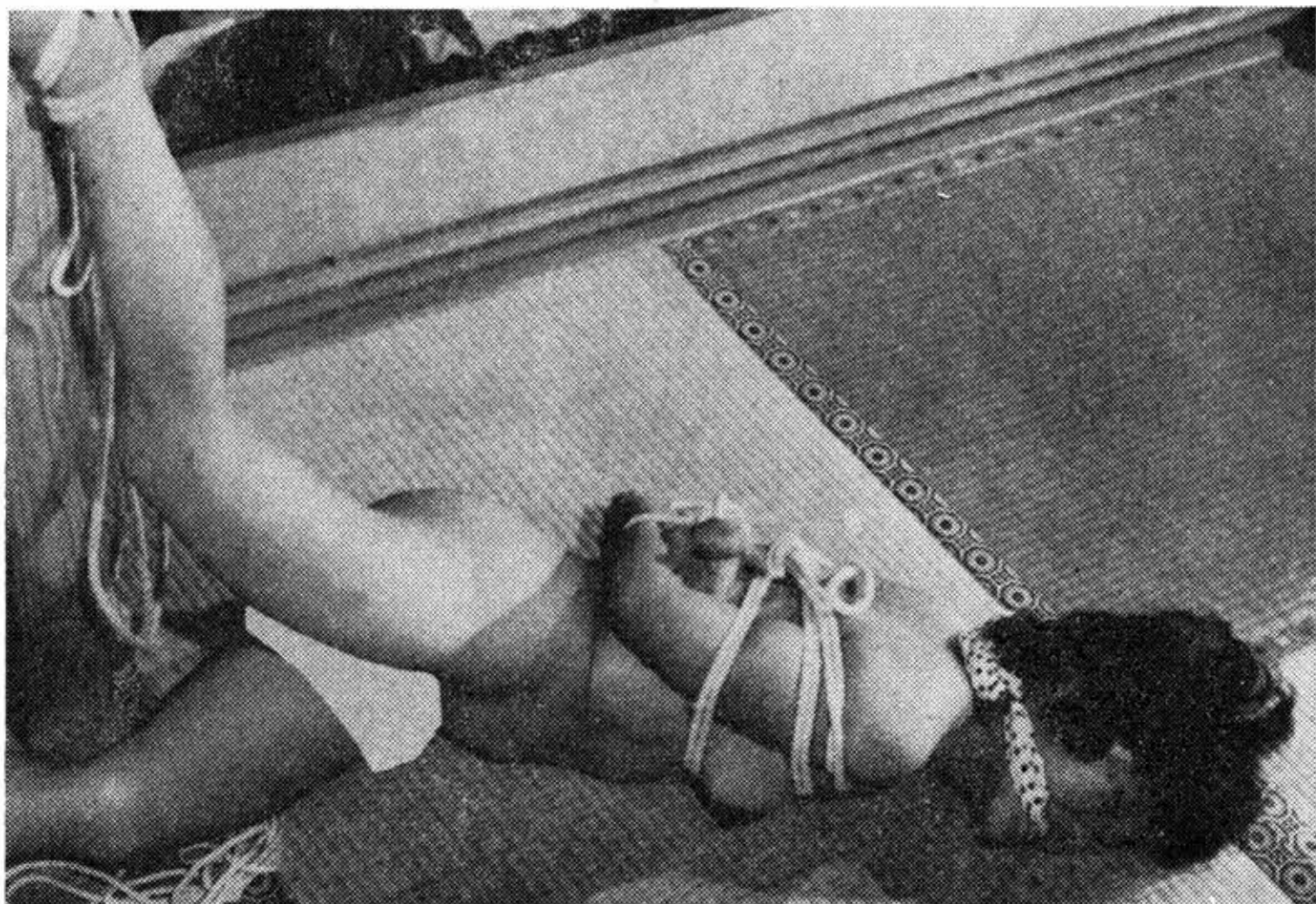
なんと言いましても、見ず知らずの女性の緊縛写真を見ているよりも、私の写真を見な

がらの方が、感激性が一段と強いのですが、それと共に私に対する嫉妬心が、そうしたハッスルを呼んでいるのだという事が、彼の口の端々から、よく分かるのです。

数年間、主人という一人の男性からだけ飼育されてきました私は、男性とは、こういう物だといふ事を、主人を通してだけ知って来ました。それが、今度始めて、主人以外の男性に縛られてみて、一ぺんに目が開いた様な、気持ちになりました。その点、主人も一緒に、私という女性を見直されたと思います。

章子は、あれ以来、以前の章子ではなくなりました。新しく脱皮した章子に生まれ変わって主人の前に現われたのです。きっと、主人には、新鮮でピチピチと威勢のよい章子に、うつった事だと思ひます。





これが本当のSM生活というのでしょうかしら。いつも新鮮な期待が目の前にぶらさがっているようで、生活に張り潤いが出来て来ました。爆発する様な心の奥底から、身体の中心からの激しい悦びは、今までに味わった事のない物です。

新しい年を迎えました。今年こそは、他の主人以外の多くの男性の方々から、自分の身体を縛られてみたいと思います。そこには、私にとってどんな感激が待っているのか私は、自分の身体で、じかに試してみたいと、思っています。

いろんな方から、いろんな責められ方をされた時、一体私の身体が、どんな反応を示すでしょうか。私は自分の身体を実験台として、もっともっと、いろんな事を引き出してほしいと思っています。

私の、この身体の中には、そんなM女としての謎が秘められているのではないのでしょうか。その謎を、どなたか解きほぐして下さいませんか。私は、それを望んでいます。

私は昼寝をしておきますから、主人の訪ねて来ない日でしたら、一晩中、連続で責めて下さっても構いません。それに、責めの実験台になるつもりですから、縛りばかりではなく、浣腸責めや排泄責めもやって下さって面白と思います。私の部屋には、バス、トイレが付いておりますので、その点は便利だと思います。

先日、塚本さまに送って頂いた時、ちょっとお誘いしたのですが、彼は忙しいとかで部屋には、お入りにならず、直ぐにお帰りになってしまわれました。

主人は写真を撮って貰えと、やかましく言いますが、私は本当は写真を撮る時間があつたら、もっと激しく責めて欲しいものだと思っています。

玉本章子という女のベールは、まだまだ十分には剥がされてはおりません。

どなたか、この私のすべてを、さらけ出して下さる方って、いらっしゃらないでしょうか。



カット・マエダヒオミ



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## つつましきSMプレイ

河西逸雄

この頃の、書店に於けるSM風潮は、まことに凄まじいばかりのものがあって、永年の奇ク愛読者たる私のような好き者でも、応接に違ないくらいのものですが、これら類似誌の中には、少し逸脱しかけた面のあるようなものもあると思います。

元来、SMプレイというものは、ヒッソリと人知れず楽しむところが良い、という考えを持つ私としましては、徒らに煽情的なショーめいた見せかけのSM演技や、オーバーす

ぎるアクロバット式SMは、どうもピッタリと来ず、あまり好きではありません。

私の自覚するS傾向は中学生頃から、その兆しがあつたようですが、もちろん年令的な関係もあって、いつも独りきりになった時だけで、ひそかに集めた縛られた女の絵（それは雑誌などから切り抜いた時代ものの挿絵が殆どでしたが）を眺めて楽しんでいたことを覚えております。

まず大抵の人が、そうだと思うのですが、

一度、女を縛ってみたいと願望しながら、ガールフレンドがあつても、なかなか言い出せないのがSMプレイでして、私など、結婚してから、妻にすら要求出来なくて、もどかしい思いをしたものです。

一度、ささやかな口ゲンカをしたハズミを利用して、冗談めかして軽く、「そんなことを言うんなら荷造りだぞ」と、口に出したことがありましたが、後で妻に聞いてみると、その「荷造り」という言葉に「ギクリ」とし

たそうです。

そんな気の弱い私が、初めて妻を、形だけにしろ、縛ったのは結婚後、相当な月日が過ぎてからでした。それも、縛るという前提があつてのことではないのです。

ある時、一仕事終わった後で妻に肩を揉んでもらったのですが、「おまえも、ちょっと揉んでやろう」ということになり、アンマ役を交替したのです。私は妻の背後にまわって肩から背筋を揉み下げているうちに、ふと、いたずら心が頭をもたげ、腰の辺りに来た時に、ぐりぐりツと力を入れてやりました。妻は、くすぐったがって背中をそらしながら、腰の後ろにまわした両手で、私の揉む手を払いのけようとしてました。私は、その妻の背後に回された両手首を見て、ゾクリとなりました。思わずその両手首を片手で掴み、なおも腰をグリグリやってやりますと、妻は掴まれた両手を盛んに動かそうとします。「ここはよく効くんだから、じっとしてッ」と私は、わざと言います。しかし妻は「だってえ」と言っ一向に、じっとはしません。私は「よし、それなら……」と、傍にあった扱帯でその両手首を結えてやったのです。たったそれだけのことで、あの時の私と

しては「ヤッター!」という感じでした。ドキドキしながら、両手首を腰の後ろで結かれた妻の様子を窺いました。しかし、さぞ怒り出すだろうと思つた妻は、案に相違して、うつむき加減で、じっとしているのです。

「せっかく揉んでやってるのに、おとなしくしなかった罰だ!」

と、私は内心のテレ臭さをゴマカス理由づけをしながら、思いきって、両手首を結えた扱帯の余りを引き上げ、胸を一巻きして後手首に結び合わせたのでした。

ワンピースの上から、ホンの形だけの縛りでしたが、それが生まれて初めて私の手で縛つた妻の、いえ、生身の女体の被縛姿であつたのです。挿絵や映画以外では見たことのなかった「縛られた女の姿」を、文字通り目の前に見て、私はもう、とりつくろうことも忘れて、ただゾクゾク、ワクワクと上ずってしまつたものでした。

妻は、このことで、私が縛りを好む人間であることを直感したそうで、私にとっては、まことに有難い結果を生んだ訳です。

以後、機会をみては時々縛るようになりましたが、妻は、とりたてて反抗らしい言動も見せずに縛られてくれました。

しかし、夫婦のSMプレイが、いわゆる前戯であるということを実感して、縛りをセックスの中に取り入れるようになったのは私たちの場合、かなり後になってからでした。なるほどある意味では、縛りを伴う夫婦の営みはムード助成に大変、役立つと思います。

しかし私の好みだけから言えば、縛つたままだと、どこかに固さがあるようで、互いに愛し合う場合の妻の躰全体から感じられる柔らかさが欠けてしまう感じなのです。それで私は、SMプレイの延長としてのセックスでも、途中で縛りを解く場合が多いのです。

ところが、M性が進んだとでもいうのでしょうか、妻の場合は私と反対なのです。つまり、妻は縛られたまま私に抱かれることを望み、解こうとすると嫌がるばかりではなく、プレイなしの時にでも、燃えてくると「縛ってえ」とネダツたり、私が縛らないと、自分で勝手に両手を背中に組んでしまうようになって来たのです。

縛りは縛り、セックスはセックスと、判然とはなくとも、区分したいとする私。混然一体で燃え尽したいとする妻。同じSMの悦びでありながら、ここにも微妙な差違がある事を不思議に思いながらも、私たち夫婦の間



イメージギャラリー 『愛しさあまって』 岡 たかし



に一度も倦怠期らしいものがなかったのは、縛り方こそ、その日によって、いろいろ変えても、責めらしい責めは何もないという手ぬるさですが、私たちなりのSMプレイがあったからだと思っています。

縛りとセックスの関連性は別として、私たち夫婦の間には、縛りは欠かせないものとな

ってしまったのですが、私としては、後手は当然ですが、胸に掛ける縄は一筋か二筋だけという縛りが好きなのです。簡単な縛りでもしっかりと締め上げれば、女体の自由は完全に奪えますし、却って、緊縛感が増すと思います。やたらなグルグル巻きは、折角の女体縛りの美観を損ってしまうような気がしてな

らないのです。

その上、私たちの縛りプレイでは、全裸縛りは殆ど行わず、必ず妻には何か衣類を着させておりました。というのも私の好みからでして、緊縛美の最高は、和服をイキに着こなした女が、二の腕から乳房の上下にかけて二、三条の縄にしっかりと締め上げられた後手縛りで、正座か横坐りで柱に括りつけられている姿だと感じられるからです。

その点、映画やテレビに、よく出てくるだけに幸福といえますが、正式な着付けでなくとも長襦袢で結構ですし、猿ぐつわにも受感します。といって裸体縛りはイヤだというわけでもありませんが、要するに、その女の縛られ姿に、これから起こるであろうと思われる、いろいろな情景を想像出来る状態であってほしいということなのです。

たった今、捕えたばかりの女。これからどうにでも料理出来る女が、不安そうな様子で後手に縛られているのを、いろいろな妄想を描きながら眺めることに、私は陶然とした醍醐味を覚えます。だから、夫婦SMプレイには違いありませんが、私の場合は常に、妻にこんなポーズをとらせるだけで、十分に堪能して来たわけです。

責めるための縛りではなく、ただ縛りのポーズを眺めるための縛りという、まことにつつましい私たちのSMプレイですが、この程度のことなら大抵の家庭で行なわれているのではないだろうか？ という気がします。いくつかの週刊誌にも、団地などのアパート群では、夜ともなれば各戸で縛りが行なわれているというような記事が載っていました。私は自分の性向に引きくらべて、この記事が、週刊誌流のオーバー記事にしろ、あり得ることだろうと思っています。

夫婦生活も長くなると、いろいろなことが話題になるのですが、いつか私は、例によって縛った妻を抱きながら「折角、こうしておまえが縛られることを好きになったのに、もしおまえが死んだりしたら、どうしよう。オレは縛りが出来なくなる」と言ったことがあります。すると妻は「そんな心配しなくても、だれでもすぐ馴れますわよ」なんて答えていましたが、それが言い当たったように実は今、その妻はもう逝ってしまっていて居ないので。現在の私は、以上のような「つつましいSMプレイ」すら出来ないのです。

唯一の楽しみとしてある奇クを読んでいると、ありし日の妻との数々の縛りプレイの思

い出が浮かんできて、懐かしさと淋しさが私を包みます。しかし、いくら忘れ兼ねる愛妻であっても、亡くなってしまった以上は、菩提を弔うほか方法はないのです。

私は今、この拙い一文を亡き妻への供養の意味をこめて投稿しようと思っています。傍で、妻の遺影が微笑しているのですが、私は妻の声が聞こえます。「だれでもすぐ馴れますわよ」……と。

その言葉を、白い半衿をつけた緋の長襦袢の裾を乱し、後手に縛られた腰紐が胸に回って、はだけた衿から、ぷっくりと、こぼれ出している乳房の上下を、ギッチリと締めあげられた妻が、私の膝の上に抱かれて悶えながら口にした時は、まさか自分の余命がいくばくもないことを知っていたとは思えません。

だから「だれでも、すぐ馴れる」という言葉の意味は「こんな程度の縛りは戯れにすぎない」という意味にもとれますし、「女は縛られることぐらい何とも思わない」というふうにも解釈できそうに思います。

ムシの好い考えかたをすれば、「もし私が死んだら、縛られることが好きな女の人を、お嫁さんに貰い直せばいい」という受けとりかたも出来ますし、「女ならだれでも飼育す

ればMになる」と言っているようでもあります。ともかく、私の縛りを好む性向を、亡妻は、ごく普通のことのようにして受け入れてくれたのですから、私自身が当初に感じていた縛りは異常なものだとか、反社会的な背徳感が鳴りをひそめ、少しも後めたさなど覚えずに、縛りの愉悦に浸りながら夫婦生活を楽しんでこられたのだと思います。

奇クの誌上には、自分の妻のM性を他の同好者に見てもらいたいとか、スワッピングSMの呼びかけをされる人の文が載っていますが、私にはどうも、もう一つ、ピタリとはきません。文献的なものとして、読むだけなら確かに面白いのですが、これを現実に実行するととなると、もう私には、とてもついてゆけそうにありません。私の考えが古いのかも知れませんが、アブノーマルの中の、更にアブノーマルな刺激とでもいうべきでしょう。もっとも私が、いくらそれに同調しようとしても、現在は交換すべき妻を亡くしているのですから不可能ですけれど……。

だからだと取りとめもなく書いてしまいましたが、性癖の欲求を受けとめてくれる縛られ妻を亡くした私の、いいようのない淋しさを、お察し下さいまして、お許し下さい。



読切創作

九

州

旅

行

久留木 栄

カット・志羽利也



友の鈴木からだった。

『君か——一体、どうしたんだ』

『うん、ちょっとした事件だ。君の力を借りたと思ってネ』

『で、何だ、その事件は!』

『事故だ。次長の原が、婦人をはねたのだ。相手は労務者、それも日雇いだ、出がうれしいんだ。傷害度は脾臓摘出で5度ぐらいだが、実際は九死に一生を、えたというところだろうな』

『で、補償の話は』

『一応、顧問弁護士の梅野に頼んでいる。相手の要求は、まだ第一次要求だが五百万円。』

ホフマン方式で計算しても三百五十万円ぐらいにしかないそうだから高すぎることになる。これから第二次、第三次の交渉に入ることになる。原は二百万ていどは自賠責で

もらえるのではないかといっている。そこで会社に五十万から百万ほど持ってもらえないだろうかというのがオレの頼みだ』

『原は何の用で行っていたんだ。相手会社との相談か』

『商談の帰りというところだろう』

『わかった、楠田専務と相談してみよう。ともかく五十万だけは、なんとか出るように工夫しよう。百万は交渉しだいだな』

『わかった。恩に着るぜ。ともかく朗報を待つよ』

『OK』

と常夫は、そこで電話を切った。

石川は伊原商事の総務部長。親友の鈴木は福岡支店長だった。仕事に使う金なら五十万や百万ぐらいは、わけなく出せる地位にあったが、こんな名目のない金は切りにくい。鈴木が石川の助言を頼んだのも、そうしたこと

リンと電話がかかってきた。常夫は無意識にとる。と——

『常ちゃん、ぼくだ』

と、なつかしい声があった。福岡にいる親

が原因だった。二人は同時入社で、ともに出世コースを歩いた。ともに腹黒く、策士で定評がある男だけに仲が良かった。総務部長のくせに石川の方が温情的で、鈴木の方が悪賢く、冷たいという社内の評判だった。

石川は、すぐ総務課長に命じて一件書類をとりよせて点検した。原の交通事故は要領よく、まとめられていた。それを持ち、石川は専務室に入った。

入って行くと、すぐ楠田は

『鈴木から電話があったな。よいところ五十万というところだが、八十万まで出してやろう。三十万は、あいつの功労金と思えばいいさ。年寄りの冷水はするなといってやれよ』  
と言った。

石川は頭をかいいた。

よく考えてみると原は楠田の同僚だったが清廉潔白な原は楠田と、そりが合わず、専務になって楠田は原をいじめているとみられていた。しかし人は見かけによらぬものと石川は、しみじみと、この時いい上司を持って幸せと思った。石川のひそかな調査によると、原の事故は全く私用の帰りだという――。

石川が帰ろうとすると楠田が呼びとめた。

『九州が乱れとるな。総会も終わったことだ

し、このさい、綱紀引き締めの意味もある。一度、福岡支店に行つて清遊してこい』  
という。

石川は一瞬とまどったが、次の瞬間には相好が、くずれた。

石川の九州旅行は、この一言で決まった。

## (二)

石川は山口の産だった。福岡は何度か行つたことはあったが会社に入ってから初めてだった。心配して鈴木に相談すると万事まかせとけという。

出張は一カ月後と決まった。

その日が来た。日航、朝の351便に乗ると8時50分ごろ板付空港についた。朝もやの中を、ゆっくりロビーに歩いて行くと鈴木実が、にこやかに待っていた。

『久しぶりだな』

『オウ』

と二人は肩を、たたきあった。

『支店長じきじきの出迎えとは恐縮だな』

『それは珍客だからだよ』

『結局、いくらになった』

『君のいうとおり八十万になった。相手は現金で二百三十万までこぎって、示談が成立し

た。あとは自賠責だけだ』

『それはよかった』

『ほんとうだ。やっぱり専務は原がかわいいようだな』

『君も、そう思うか』

『思うよ。君は?』

『オレは楠田にあの話をもって行ったトタンそう思ったよ』

『そうか! これからどうする』

『専務の命令だから一応、監査をし、会社で一席ブタねばならんが』

『それもよからう。それがすんだら、午後は郊外に出よう。福岡には古い寺があつて楽しいよ』

『それはありがたい。アスにならないよう祈っておこう』

常夫は、軽く応待した。

会社につくと一同事務室に集まっていた。

原がとんできて、すぐ頭をさげ

『すみません』

とあやまった。石川は

『もうすんだことだよ。元気を出し給え』

と言い、石川は一息入れたあと、全員に会社のこれからの方針を、ゆっくりと話した。

さいきん社内の事故がふえていること、また



仕事の上でも事故が多く、こうした事故については、ささいな点も追及する方針であること。したがって事故には十分、注意してほしいというのが、その趣旨であった。

話し終わると、時間はもう11時を過ぎていた。常夫は帳簿の監査を午後に関し、鈴木にすすめられるまま、鈴木案内で筑紫路の観光に出た。鈴木が、監査の前に話しておきたいことでもあるのではないかと考えたからでもあった。そんな思惑も乗せ、車は福岡市内から南へ走り、観世音寺、太宰府、二日市のおきまりのコースを走った。

ちょうど梅のシーズンだった。太宰府はお客様が多く、ごったがえしていた。鈴木は人ごみをぬって参拝したあと、境内の一隅、光明寺の横にある水月庵に案内し、そこで軽い昼食をとった。

『ここは湯どうふで有名なところだ。まさか昼から湯どうふで一ぱいというわけにはいくまいが』

鈴木は二人だけになると冗談をとばした。

『太宰府は思ったより広いな』

『ああ、なれると狭いよ。ところで今夜は飲むか』

『いやあ、ぼくにその趣味はない』

『じゃ、これか』

と鈴木は小指を、おこしてみせた。石川はわかっていくくせにという風な目をした。

『どうだ。福岡にはガイドさんも多いが、それとは別に一盗二婢のうち、一盗をやってみないか』

鈴木支店長は突然、ただならぬことを言いだした。

『一盗。誰だ一盗というのは』

『美代ちゃんさ。君は知っているだろう。本社文書課の綾女史の妹。これがスケベエなんだ。去年結婚したんだが、夫は結核で入院した。そのあと社に臨時で入れたんだが、本人は金に困って公金に手をつけた。それがわかったんで、まあボクが何とかごま化して、補っておいた。帳簿は一応、辻つまがあっているが、美代ちゃんには、こんど監査に来る石川部長はこわいよといっておいた。この人を説得しないとボクは安心できないとオドしておいた。まさかオレが自分で入れた人妻に手をつけるわけにはいかんだろう。今夜あたり君のホテルをたずねてくるかも知れんぞ。彼女なら、もうその覚悟は決めているだろう』

『なるほど、あいかわらず悪党だな、君は』

『いまさら、お互いに何を言う』

『そりやそうだな。例の八十万円も、実際は何に使ったかわかるものか』

『その通りだ。五十万円は確かに原に手渡したが、二十万円は美代ちゃんのために融通したかな。なにしろ彼女の夫はその道のベテランだったそうさ。それができないといって女は、このところ、もっぱら、ふさぎ込んでいる。美女を慰めるのは、選ばれた男の必要悪だと思ふのだが——』

『なるほど——ともかく同僚のこしらえてくれた落とし穴だ。おちるのもおもしろい。美しい据膳だから、おいしくいただくとしようか。ところで美代ちゃんだが、いま会社では何をしている』

『まだ臨時雇で庶務で雑務をしてもらっている。亭主の入院中ぐらひは、綾女史とのよしもあることだし、めんどろみてやろうと思っているよ』

『そうか、そういう点になると君は世話が行きとどくなあ』

『バカ、オレは口説きたかったから、そうしておいたのだ。穴をあけさせたのも、そんな誘惑を感じるようにしたのもオレのずるいやり方さ。本人はそれを知らないから、いい気になっているだろう。だがよく考えてみる、

直接の部下には手がつけにくいものよ。そのうちオレの方は適当な人が社外に見つかったので、いつか役立つだろうと放牧していたよなものさ』

『ふうん……まあいい。オレは福岡は知らないだし、バーには、あまり興味がない。あすは仕事ですんだら阿蘇に回ろうと思うが彼女は連れて行くわけにはいくまいな』

『かまわんよ、臨時だから。亭主が大牟田の近くの療養所にいる。そこをたずねたということにしておこうよ』

『なるほど、悪徳の智恵か。フッフ』

と石川はその時、はじめてイヤらしそうなふくみ笑いをした。

### (三)

二時ごろ太宰府から帰ってきた石川は夕方の五時ごろまで応接室を借り、帳簿の点検をした。帳簿は、整理されていた。それだけに仕事は、はかどり、午後五時の退社時間に近づいたときには、あらかた、終わっていた。

東京時代、部下だった総務課長の吉村と先輩の次長の原と鈴木を誘って町に出ると、なんだか胸が、うずくような感じだった。

三月といえば九州は、もう暖い。春宵一刻

値千金というのは、こんな感じだろうかと思う。料亭の新三浦まで歩いて行くことにし、そこで水たきをたべた。中券のきれいどころを呼んで座は、にぎやかになった。鈴木や吉村は、はしゃいでいたが、原は何となく浮かぬ顔であった。鈴木は酒よりオサスリに回る方なので石川は自然、原と語る破目になり、原を勇気づけた。このあたりが石川の世渡りのソツのなさである。酔いが回り、皆が中洲にくりだそうというころ、石川は皆とわかれた。酒をあまりたしなまない石川のため、ホテルまで吉村が送ってきたが、それもすぐネオンのともる闇に消えた。

石川がボーイに案内されて落ちつく間もなく、そのボーイが若い婦人がお待ちかねのようでしたと、つけた。

『その人の名は』

『緒方美代子さんです』

『緒方？ ま、とおしてもらおうか』

『ハイ、承知しました』

『夕食は、ぼくはすんだ。とりあえず、レディにジュースとデザートを頼んだよ』

と言いなから石川は一たん、とった上衣をまた着た。ソファで、ゆっくり待っていると、その婦人が現われた。女は鈴木と言うと

おり、まぎれもなく花村綾の妹、花村美代子だった。緒方というのは夫の姓らしい。

『緒方でございます。おなつかしゅうございます』

『やっぱり美代ちゃんだな。何年ぶりかな。お姉さんの家から女子大に通っていたんだっけ』

『はい、もう六年になります。恥かしい限りでございますが、きょうは恥をしのんでまいりました』

『お金のことだろう』

『はい、あっ、ご存じでしたか』

『帳簿を見ればネ。ぼくは、その道の専門家なんだよ』

『見逃がしていただけですか』

『さあ、まずダメだネ。穴埋めをしてくれたのは誰かネ』

『支店長さまです』

『鈴木か！ 鈴木はどうして、そんな金を出したんだろう』

『わが身が大切とおっしゃいました』

『そうか、鈴木らしい。で、美代ちゃんは鈴木にも、こんな夜ふけにたずねたのか』

……

石川は、じっと美代子の顔を見すえた。美



代子の顔は白く、くちびるはふるえ、思い詰めた顔をしていた。

『はい、でも、支店長さまは……』

『もういい——美代ちゃん。ところで緒方君といったな。御主人は少しは、いいのかね』

『それが、ちっともよくなくて』

『いかなあ——。なるほど、わかった。ばくは万更、君を知らない人間じゃない。頼まれたからにはイヤとはいえないだろう。だがこのままではイヤだな。鈴木にはボクから話しておこう。実は、あすの夜から阿蘇、鹿児島に回ろうと思っている。つき合わないか。あすは午前中、銀永苑に行き、午後の汽車にのって二人いっしょに旅行という趣向だ。どうだ。旅費一切は、こちらが持つ。ことによつては将来の美代ちゃんの生活ぐらい保証してもよいと思う。ぼくは昔、君に憧れていたからネ。それだけにキミがムキになられると冗談一つも、いえなくなる』

『……』

『君は、自分だけがいいこになろうと思っ

ているらしいが、世の中は、そう甘いものではない。どうだ、このプランは』

『はい……承知しました。あなたさまのことは、よく知っているつもりです。だから、こ

んどのことは何分にも内聞に』

『わかったよ』

『ハイ』

『ともかく、もうこのオレが引き受けたのだから、大舟に乗ったつもりでいいよ』

『ほんとに、良いんでございましょうか』

『くどい。あんまりくどいと嫌いになるよ。』

美代ちゃん、美人は、いつもシャンとしているものだよ』

『す、すみません』

美代子は、そういうと泣き出した。

『ま、そう泣かずに、気分直しに酒でものむんだな。どうだ、少しつき合わないか。夕食は、まだなんだろう』

『ハイ』

『じゃ、さっそく、とりよせよう』

石川は、さっと立ちあがった、変わり身のうまさを見せ、食事をさせて美代子の気をやわらげ、あした主人を見舞いに行く費用として、一万円をあずけ、夜七時四十七分、大牟田発の下りサンベ2号に乗るよう約束して、ボーイに車を呼ばせ、送って行かせた。

常夫は、それから電話を回し、鈴木らが、中洲の「赤い靴」にいるのを確かめると、また夜の町に、とび出した。

(四)

曲はアルゼンチンタンゴだった。一番ボーイに千円のチップをはずむと、鈴木たちの席はすぐわかった。ゆっくりと席に行く石川に

『あつ、部長』

と吉村が、びっくりした声を出した。

『石川！ きみ……』

と鈴木も驚く。

『うふふふ、うまく行ったよ鈴木！ だらきたんだ』

『あつ、そうか、ちゃっかりしているね』

『何ですか、支店長』

吉村が、げげんな顔をする。

『いや、こちらの話』

と鈴木が、うまく、ごまかした。

かけつけ三杯という女のダンサーにすすめられながら、ビールを軽く受けた石川は、次の瞬間には、もうそのダンサーを抱いてフロアで踊り出していた。

『何ですな、支店長。やっぱり総務部長は神出鬼没ですネ』

原が感心したように言う。

『あいつは、そんな男さ。そこが、また魅力な男だよ——』と鈴木。

----- イメージギャラリー ----- 『折檻部屋の哀花』 ----- 宮 城 昌 子 -----



『ともかく有言実行の士酒、女、マージャン、何でもござれですからネ』と吉村。

たしかに石川は、そんな男であり、仕事も確実なところを押えていた。その石川は、見事なターンでクイックを踊っている。惚れ惚れするスタイルだった。

『うらやましい奴め』

と、鈴木は、つぶやいた。いまいまい奴めと言いたいくらいだった。

ひと踊りすると石川は帰ってきて皆を笑わせ、酒を飲むと次の女を抱いて踊った。こんどは「港町ブルース」だった。そのゆるやかなリズムにつれ、チークを踊る。チークを踊ると高い背が丸くなり色気があった。そればかりでない。小さな女

を抱えるようにして踊り、ダンサーが興奮するのが、わかるくらいだった。

こうして四人は一しきり遊び、再び夜の町に出た。

つぎは、バー「くるみ」で、ここは原の巣だった。「まあ、原さん。あら、支店長さんも」とマダムのルミが嬉しそうに、よってきた。

『きょうは、もっと偉い人を、お連れしたんだ』

『だれ』

『本社のイーさんだ。将来の重役さんだよ』

『あら、ほんと。それが、このお方なの。ルミです、よろしく』

とマダムは如才ない。

『よっしゃ、原さんの顔にめんじ、ボクが、もとう』

と、石川は一万円札を出してルミにつかませた。

『まあ！ 前金なの』

『一現の客はな。……石川流の酒のみだよ』そう言って石川は軽く笑い、若い女の子をヒザの上に抱いている鈴木の向かい側に坐った。

『イーさん、ハイ』



と長顔の若い子が、体をすりつけるようにして寄ってき、コップを、さし出した。それを受け、ぐいぐいのみながら、石川は、

『なんていうの、エリさん？ 浮気しない。』

ボクのは太いよ』

などと冗談をとばす。まったく達者な飲みっぷりだった。

こうして石川は夜遅くまで飲み、門限過ぎてかえった。ボーイにチップを、たっぷりはずんでいたの、ボーイは愛想よく迎えてくれた。そのボーイとワインを飲みながら、石川は博多の夜を満喫したのだった。

（五）

翌日、早く目がさめた石川は、散歩を楽しむ余裕があった。ホテルのボーイに頼んで、熊本の一流ホテルに予約させたあと、ゆうゆう会社に出社した。

『いやあ！ 昨夜はお世話になったな、吉村君』

そういいながら石川は総務課長を呼び、前日に引き続いて、書類の検査に入った。昼ごろまでかかったが、それが終わると石川は、この日、初めて鈴木のところに行った。

『終わったよ』

『御苦労さん、今から出掛けるのか』

『うん、多分、阿蘇まで行きたいの。きのうは楽しかったよ』

『彼女、来ていないが』

『まあ、多分、いまごろは亭主のところへ行っているだろう。きのう、オミヤゲを買い与えておいたので』

『なるほど、じゃ、駅まで送ろう』

『いいよ、ひとりで行きたい。帰りは鹿児島から空路、とびたつことにする。本社に、そう報告しておいてくれよ』

『OK』

『じゃ、さようなら』

『さようなら』

石川は、見送りは玄関までということにし鈴木や原や吉村など多勢の社員に送られて外に出た。それから、ひとり博多の町を歩きながら、ふと今夜の楽しみを思った。

石川は、もともとソフトなサジスチャンである。

花村綾と関係ができたのも、妙なことが原因だった。大学の後輩にたのまれ、女子大の陸上部にコーチに出かけたことがある。四百メートル22秒台の記録を持つ石川は、社会人になっても、まだ都市対抗などに出ていた。

もともと高校、大学を通じての選手生活だったので基礎ができていた。このとき一番遅く一番熱心なのが花村綾だった。また一番美貌でもあった。だから徹底的に、しごいてみた。

青白い顔を、より一そう青白くしながら、それでも綾は走りつづけ、倒れるまで、やめなかった。かっくりと芝生にのび、おこりのついたように、ふるえる体に水をかけ、叱りつけながら石川は手当ては怠らなかった。はたからは残酷とみえるこのうちに、競技部がピリッと、しまったように思えた。

こうしてその年、競技部は女子の日本選手権で花々しい活躍をしたが、綾はついに補欠のまま、一線にはおどりでなかった。石川はそれをあわれんで、ひそかに綾を呼び、ふるまってやった。その心が通じたのか綾と石川は親しくなり、ついに結ばれてしまった。その綾を会社にひきとったのも、だから石川であった。

『あのとき君は何かを感じたと思う。だが、それが何か、当時のボクには、わからなかった。しかし、いまはわかる』

『光栄ね。だからといっていまの私が、あなたの気ままになる人間とは限らないワ。むしろ』

ろ気にいらなことをする——』

『そう、それは裏返しなのだ。その裏返しがあなたに幸福をもたらしたかもしれない』

綾が結婚したあとで、こうした会話ができるまでには長い年月がたっていた。石川が綾に感じた何かは——それは石川と綾の交際が普通のものでなかった、SMの関係だったことをみれば明白だったろう。

美代子は、その妹である。姉妹であれば同じ嗜好があるのではないか。石川は、そう期待していた。

だから、わざわざ駅に行くのにも鈴木と、わかれたのだった。博多駅前ステーションにいった石川は、今夜おること、いや石川自身がおこそうと計画していることを考えて、何となく愉悦が、こみあげてきた。ステーションビルのデパートを回りながら、何となくしまらない気持で、呉服部でサラシ一反と赤シゴキを一本、家庭用品部で8ミリ、長さ7メートルの荷造り用綿ロープを三本買い、カバンの中にしまいこんだ。このほかパンティストッキング二足、ネッカチーフ、スケスケルックのネグリジェも用意した。そして何くわぬ顔をして下り急行サンベ2号のグリーン車に、のり込んだのだった。

汽車は予定どおり大牟田駅についた。石川

は目をつぶった。果たして女がくるか一瞬このときにかけてなのだ。ゆっくり目を開いたとき石川は、いちはやく緒方美代子がホームを小走りにかけてくるのを見つけた。シックなウールの和服を着た細面の美代子は、まじめな貴婦人に見えた。

青白い頬を紅潮させ、肩を泳がせながら、グリーン車に乗り込んで来た美代子は、

『ああ、やっと間に合ったワ』

と、ひとつ大きなイキをついた。

『やあいらっしゃい。奥さん、こんばんわ』と、石川はわざと、いんぎんにあいさつした。そして、横に坐る美代子の耳に口をつけるようにしながら、『待っていたよ』といった。

『お口が、うまいのネ』

『いや、そうでもないんだが、とにかく一瞬に、かけてみたのだよ』

『あらほんと、光栄』

美代子ははじめて微笑を浮かべた。そしてよく話したが、汽車が荒尾をすぎるころには話も一段落したとみえて口数も少なくなってきた。だが、その半面、もう何もいわなくなると何となく心と心が通うような気がしている

らしかった。

そうなるのを見通したうえで、『これからボクが主人、あなたが奥さんで旅行しようか』

石川は機をうつさず、口説いた。

『いいワ、それなら誰れも疑わないでしょうネ』

そう答える美代子は、前夜とはまるで別人のようだった。

『乱暴で、女をいじめるのが大好きなペッポコ亭主。それに日本一、貞淑な奥さん。純情可憐で涙もろいと来てるんだから、これなら芝居でも、うけるわね……フッフ、まるで恋愛小説ネ。ロマンチックよ』

『そう、まるで夢物語だネ』

石川は素晴らしい、はじめて、やさしく美代子の手を、にぎった。

(六)

汽車が熊本駅についたのは午後8時を過ぎていた。車をかって新市街に出る。熊本市は商店の店じまいが早いといわれるが、歓楽街のネオンだけは、あかあかとついている。

電気館前で車を捨てた石川は、ゆっくりとした歩幅で町を歩いていく。そのあとを慕う



ようによりそって、美代子は小幅な足どりで続く。

『腹が減ったな』

ひとりごとのように言いながら、いくつか町をやりすごしたあと、明かるいネオンのきらめく焼肉店に常夫は、はいり込んだ。

『ここは、馬刺しにシヨウチュウが、うまい店だよ』

石川は、一度も来たことのない町のことをよく知っていた。

『あなた一体、どこで調べたの』

『東京でさ。そのくらい常識だよ。美代ちゃん、馬刺はどう』

『どうもネ。私はミノがいいワ』

『そうか。じゃ、ロース二人前、ミノ二人前馬刺一人前だ』

と石川はボーイに命じた。

『そんなに、たべられるの』

『食えるよ。スタミナがないって笑われたら男子一生の恥だよ。奥さんが、くやむといけないから』

『まあ』

美代子は、さすがに赤くなった。常夫は、そんなポーズを美しいと思う。

二人が食事をすまし、ホテルについたのは

九時過ぎていた。メイドさんにチップをはずみ、いろいろ話をきいたあと『おやすみなさい』といって部屋にくつろいだのは、九時半を少し回っていた。

人影がなくなると石川は、いきなり美代子を抱いた。あっという間もない素速い行為だった。大きな腕を背に回して、しめつけたあと、くちをすった。それからゆっくり顔をみて、ほほえみ、また息もつまるようなキスをした。その激しさ、美代子は呆然とした。その美代子の手を背中に戻し、両手でワシづかみにすると三度目のキスをした。常夫は息をとめ、目をつむり全精力を傾けてキスした。力のこもったキスから柔和な、相手の心をとくかすようなキスへ変わり、美代子の舌を求め口の中をまさぐり、やがて徐々に力をこめて官能の高まりを求めるキス。常夫の技巧は抜群だった。美代子がこれまで経験したことのないキスだった。機先を制せられてゆれ動いた美代子の胸は、次の瞬間にカッと燃えた。体も火がついたようになった。常夫はそのままの姿でベッドへ倒れこんだ。

長い長いキスだった。そしてキスに美代子がこたえだしたところになって、やっと口を離し体をはなしたが、石川は美代子をベッドの

上に押したおしたまま、いぜんとして攻撃の手は、ゆるめなかった。

美代子の背中の手は、そのまま右手で、にぎりしめ、左手で乳房をかくくまさぐり、うなじをくちびると舌で軽快にタッチした。緒戦の興奮が心地よい血の奔流となって五体をかけめぐるのを美代子は覚えた。

『スキだよ』

常夫は、殺し文句をいうのも忘れない。左手で美代子の帯をほどき、腰ヒモを一本ぬきとると、背中の手首にまきつけた。ハッと美代子が、からだをかたくするのが分かった。常夫は、その気配を楽しみながら、厳重に縛りあげると、ゆっくりと美代子を仰向けにした。

常夫は手をはなし、ゆったりと美代子の傍のベッドに腰かけた。上衣を脱ぎ、衣物かけにかけて、くつろぎながら、

『覚悟はできてるな。これから一週間、旅行中は、君はオレの奴隷だ』

と宣言した。

美代子は、大きな目を見ひらいて常夫を凝視していたが、ゆっくり、うなずいた。

『じゃ、その証拠に靴下をとれ』

と常夫は、美代子の顔の前に足をつき出し

た。美代子は不自由な体をねじり、口で靴下を下ろそうと、けんめいになった。うまくぬげそうになると、わざと足を動かし、それを追いかけてくると軽く顔をける。まるで子猫をなぶるように常夫は美代子を、あしらう。

それが終わると、常夫は美代子にカバンを持ってくるように命じ、自分はユカタにきかえ寝台の上に横になった。美代子は入口においたカバンの傍に行き、しゃがんで、縛られた後ろ手でカバンをつかんで、常夫の傍にもってきた。

『よしよし、なかなか、よろしい』

常夫はそれをとると、寝台の下に置き、中から来る途中、買い求めたロープや、しごきなどをとり出した。それらは、いずれも嚴重に包装してあり、中に何がはいっているか美代子には分からなかった。それを寝台の上に並べると常夫は口であけるように命じた。美代子は忠実に、したがった。そして一つずつ内容品があらわれるに従って、驚き、あわて体がふるえるのが常夫には分かった。

全部、包みが開いたところで、常夫は、『よしッ。よくやった。これから、かわいがってとらす』

といった。美代子の顔が、ほんのり赤くな

った。それを楽しみながら常夫は追いうちをかけた。

『奴隷め！ 御主人様、どうぞ私を裸にして下さい、と言え』

と常夫は命じた。美代子は忠実に、それに従い『ハイ、御主人様。どうぞ私を裸にして下さい』と、恥かしそうに言った。いい終わると顔色が一層、赤くなるようだった。

『なに、裸にしてくれと。無礼者め。裸には自分でなるものだ。自分で』

『ハ、ハイ。ですが御主人様。美代は縛られています。ひとりで裸にはなれません』

『何、バカめ。口答えは許さん。なれるかなれぬかは、やってみねばわからん。後ろ手に縛られていても、帯はとける。パンティは脱げる。その動作もしないうちに、口答えするなど、もってのほか。罰としてサルグツワをとらす』

と常夫は命じた。

『そのロープを、くわえてこい』

と寝台の上に放り出してある別のロープを指さした。美代子が、それをくわえてくるとひったくり、柔らかさを、ためすようにしごいた。それからハンカチ、しごきと、一つずつ材料をくわえさせてもってこさせ、いきな

り一回、口へキスした。それは、あくまでも陽動作戦だったのだ。とまどう美代子の口へハンケチをつめ、赤いしごきで覆う。歯にくわえさせて一回、幅を拡げ鼻からアゴまで被って一回、回して締めあげたあと、最初くわえてもってこさせた綿ロープで、首のうしろからあごの下に回して縛り、口から鼻とヒモを縦に回したあとで再び首のうしろで止め、それを左右にわけて、口の上で二重になって

いる縦しぼりのヒモにかけて引きしぼった。この縦しぼりのロープは、あごの上と鼻の上に結び目を作ったので、左右に開いて菱型となり、ぐいと顔にくいこむ嚴重なサルグツワとなった。その余りを背後で固定し、長々と垂らしながら、ロープのさるぐつわの上に再び赤いシゴキの余りを回してサルグツワを完成させた。これで外見は普通のサルグツワのようだが、内実は息をするのが、やっという苦しいものになった。

これをはめたところで常夫は、ほんと、ひといき入れた。そして、ゆっくりお茶をのんだあとで、ゆうゆうと美代子の着物をハギにかかった。

女はサルグツワをされると無抵抗になるものである。また妙に同情するより、最初から



嚴重の上にも嚴重に縛り上げる方が、落ちつくものである。常夫は再三、遊んだ経験からこうした責め手のコツは十分、なっとくしていた。だから後ろ手のナワをはずし、上半身を裸にして縛り直すとき、強烈な菱縄をかけたし、下半身をはいで縛りあげるとき、ふとももにくいこむ股間縛りを遠慮なく施した。

それにしても裸にむいた美代子の姿は美しかった。真っ白な肌は羞恥で赤味を帯び、ひそやかに息づいていた。膚は次第に汗ばみ、じっとりとしめって動いていた。肩から乳房にかけての、なだらかなカーブ。きゅっとしまった腰。豊かな臀部の肉の盛り上がり。草原のふさふさとして成熟した女であった。乙女ではない、人の奥様の落着きと、心にくいばかりの細心な配慮が、ほのかな香氣となつて、体全体から立ちのぼっていた。

常夫は、しばらく見とれていた。姉の綾に似ているな、とも思った。だが美しいものは汚さなければならぬ。アグラ縛りした足の中に軀を強引に突っ込み、ヒザの上に坐り込み、押し倒した上半身を、くすぐり始めた。ワキの下からワキ腹。ワキの下から乳房へ。常夫の手は、おどる。そのたびごとに美代子はのけぞり、自由なわずかな空間を利用して

のたうち回る。とはいえ、逆えび縛りの体制である上、仰向けにされ、男にのしかかられていては、何の抵抗もできないのだ。

激しいけいれんと、熱い川の流れが、わかった。だが常夫は息を殺して美代子だけを頂上に押しあげるように導く。

こうして完膚なきまでに痛めておいて、常夫は美代子から離れ、いま一度、深呼吸をした。それからシニツクな笑いを浮かべながら旅行カバンからカメラをとりだしてきて、レンズを美代子の浅ましい姿に向けた。

撮影が一しきりすむと常夫は、やっとナワのサルグツワだけは解放してやった。胸一杯むさぼるように、空気を吸っていた美代子は口が自由になると、

『もう、やめて。殺して！』

と、かばそい声を出して泣きじゃくった。だが常夫が平然としていると、すごい目で、にらみながら『ひどい方』と一言いったきり唇をかんでしまった。

そんな美代子に、常夫は再び口につめものをし、ロープとしごきで、さきほどと同様、嚴重なサルグツワを、はめてしまった。

『哀訴歎願しても、うらんでも、手はゆるめないぜ。見込まれたが因果だ。地獄まで行っ

てもらうぜ』

美代子の耳に口をつけるようにし、ドスのある声でおどした。それから一時間、逆さエビ縛りにして、いろんなもので責めあげたあげく最後に足だけ、といってフロ場に連れて行き、体中に石鹼をつけ、くまなく洗った。顔にも頭から水をかけると、顔に菱型にかけたナワがしまり、しごきが水をすって、いきができなくなる。そこで鼻の下にクギで穴をあけ、ストローを通して息だけできるようにすると美代子はヒューッと音をさせて深呼吸するくらい空気に飢えていた。

湯からあげようとして、あがり湯のかわりに水をぶっかけると女は体をゆすり、しきりに尿意を訴えた。常夫は、そのままの姿で美代子を便所につれて行って目の前でさせ、再びフロに入れ、バスタオルでふいて、ベッドに追いあげると、女はやっと落ちついたといった表情で、不安げな心細さが消え、やわらぎが顔に出てきた。

いっしょに寝、サルグツワをはずし、手首だけ縄を残して美代子を解放、ゆっくり愛撫しはじめると、やっと笑顔が浮かんできた。

何もいわず、ただうるんだ目でにらんでいた美代子は、常夫が優しくしはじめると、少

しずつ体を動かして応じはじめ、『あっ、あっ』と、うめきだした。

あとで聞いた話によると、あまりにひどかったのでカンシャクをたてていたというが、体が燃えはじめると、それどころではなくなっていたという。

『あっ、やめて。やめて』

と、かすかな声で、せつなく訴えるのを、常夫はやめるどころか、もっと巧みに、もっと素速く、もっとこまやかにする。

女は狂ったように求めはじめた。その燃え上がり方を確かめ、途中で両手の自由を解放してやると、美代子は力いっぱい常夫を抱きしめてきた。常夫はそんな女体を、いとおし

むように、いたわり、そして一気に攻略に移っていった。

常夫は、女をいたわるように背中から抱き首すじにキスして、しばらく、じっとしていた。ほどよい疲労が全身を、つつんだ。

『さ、ねようか。いや、だめだ。君をもっといじめるのを忘れていた。まだまだ、いじめるんだぞ。君の一生の記念に朝まで、君をねむらせるわけにはいかない』

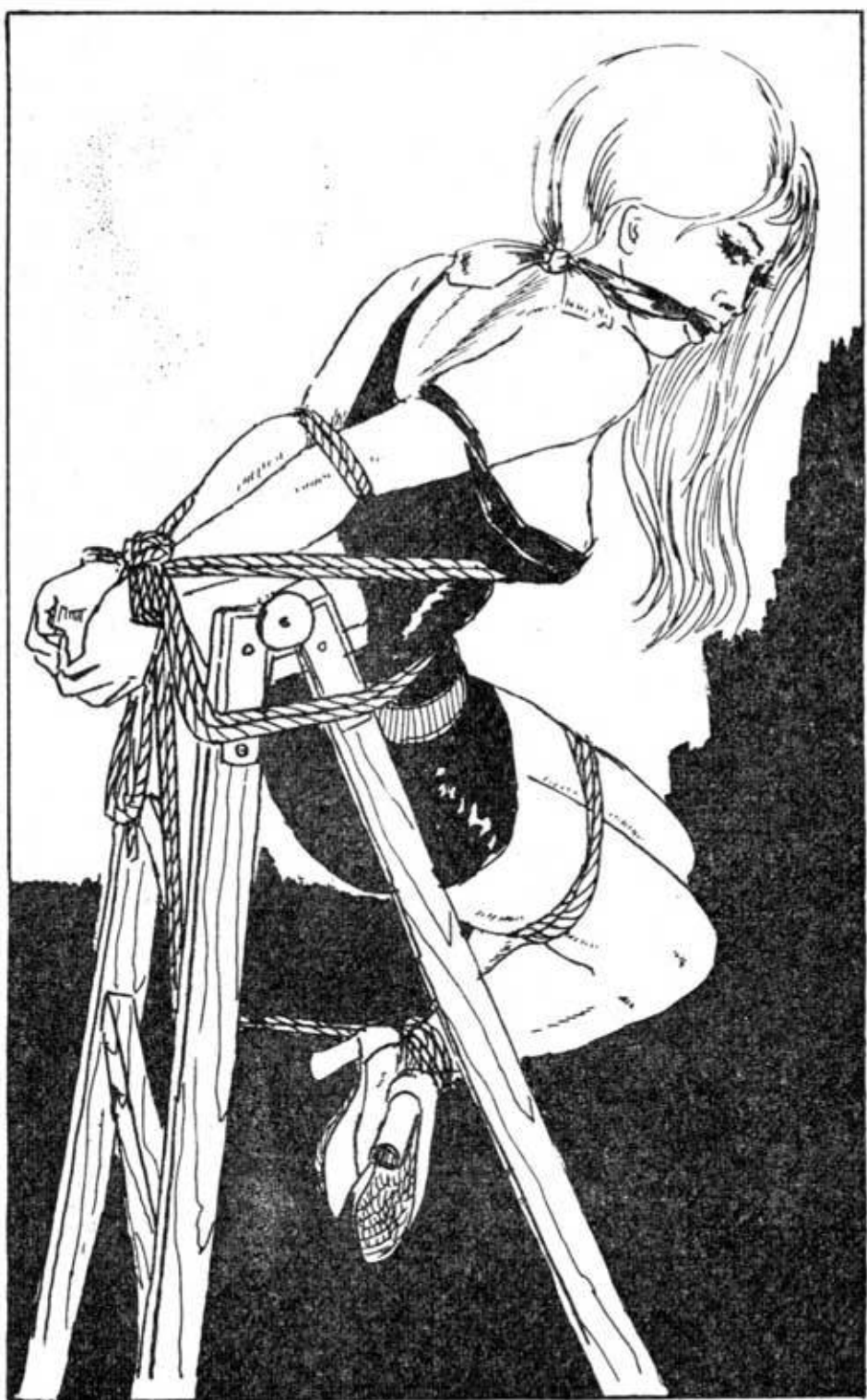
『そんな！ もうかんにん』

『いやだ。好きな女に対する男の執念を思い知らせるまでは解放できない』

『わかったワ。もう貴方の執念は、よくわかったのよ』

『ウソ言え』

問答無用と常夫は美代子の手を背中に回した。美代子はピクリと肩をふるわしたが、別に抵抗はしなかった。ぬれたロープでなく、新しい別のロープで、きっちり縛り合わせ、常夫は方円流の女五六の方式で縛りあげた。そのあと、口にもロープ二本を噛ませてサルグツワとし、足も両足首を縛って、常夫は始めて安心したような表情に戻った。美代子の横に横たわり、こんどは前から、身動きできない美代子を抱きしめ、やがて本当に安心し



……イメージギャラリィ……

『脚立に咲く花』

志羽利也



たのか、すやすや寝息を、たて始めた。

美代子は、その寝姿に無性に腹が立ってきた。しかし、どうすることもできなかった。立腹が過ぎると、つぎは情けなくなり涙を流した。憎んでも、あきたりない男——とは思いつながら、不思議と、そう憎しみの湧いてこない自分に愛想をつかしながら美代子は一晩中、苦しみもだえながら、わずかに明け方、ところと、まどろんだに過ぎなかった。

美代子は夫のこと、常夫のこと、それからそれへと思い出を目の前に再現させながら、夜の明けるのを待った。

さきほど別れてきた夫の病み衰えた顔。もうあと何日、もてるかと疑うほどに、やつれていた。その夫との出会いは音楽会からの帰りだった。ドボルザックの『新世界』の演奏を聞き、外に出たとき、ぱったり、ぶつかった。肥えて底抜けに善人だった夫は、わびながら笑った。美代子は、その笑顔に魅せられた。夫との楽しかった新婚生活、性生活は割と、あっさりしていた。一週間に二度もあれば多い方で、SMについても雑誌をみながら女は、しつこい方が、うれしいのだろうが、ボクには余り興味がないといって、縛りを求めたこともなかった。

それに比べると、常夫と美代子の出会いは劇的だった。常夫に逢ったのは、たしか綾姉さんの家だった。

『いい人なの、フィアンセよ。とても素晴らしい政策家よ』

と、姉は常夫を紹介した。そのときから姉は常夫と結婚する気はなかったらしい。以来長い長いつきあいの間に、美代子も常夫に抱かれたいという気持が何度もおきた。そのたびに、それを察したかのように綾は、

『常夫さんで、優しいように見えて冷たい人なの。何を考えているか、わからないのよ』

とか、

『あの人、とても残酷よ。平気で蝶々の羽根を、むしる人だわ』

と、いつていた。それでも綾は常夫が好きだった。綾は結婚してから常夫の事になると夢中になった。そして『人間は稔りのない恋をするものではないワネ。それは悲劇よ』というのが口ぐせになった。いまこうして残酷きわまる状態で常夫と結ばれてみて、美代子は、その姉の言葉が、やっとわかるような気がした。

夫のために支店長か総務部長を選ばねばならなくなったとき、美代子は常夫を選んだ。

そのことに悔いはなかった。そして常夫から手ひどく扱われれば扱われるほど、心にやすらぎが出てきた。それは、不思議なことだった。人間の中に、ひそむ動物性、性欲でも生活の面でも極限の状態で、かくも逞しく人が生きられるということに美代子は驚異を感じた。綾と常夫が、それぞれ別の人と結ばれ、同じ会社に勤務している。しかも元気いっぱい生活を楽しんでいると思うと快哉を叫びたくなる。姉と常夫の長い交渉を、目のあたりに見て過ごした青春が、いまこうして、再び芽ばえようとしている。美代子は自分を決して善良な嫁とは思っていない。だが、縛られながら、それに感応するとは、いったい自分は何を信じ、何を頼りに生きたらよいのだろうか。美代子の心は考えれば考えるだけ、まるで砂漠の迷路に踏み込んだようで、寂寥としながら、千々に乱れるのであった。

（七）

阿蘇山に行く。

常夫はフロントにレンタカーを予約した。というのは、美代子の顔や体に縄の跡が残っていて、とても汽車で旅行できる状態ではなかった。ホテルを出るときも首すじにネッカ

チーフをまき、ハンカチで口を押さえて出ねばならなかった。

さすがに常夫は、気の毒そうに美代子を案内して車に乗せたが、常夫より美代子の方がさばさばしていた。

午前八時、二人はホテルを出発。熊本城を見て、国道57号線を一路、阿蘇へ向かった。

常夫は満足して、ゆったり寝たせいもあってハンドルさばきは鮮かだった。大津街道の松並木を突きぬけ、立野の谷を眺めながら車は快調にエンジンを廻し続けた。

普通なら常夫の横に乗るはずの美代子だったが、睡眠不足だったので、とくに頼んで後部客席へ乗った。熊本城を見るまでは覚えていたが、車が子飼橋の電停を過ぎる頃には軽い寝息をたてはじめ、美代子は山頂につくまで全く覚えがなかった。山頂の駐車場に着くと、すぐコンパクトをとり出して顔を眺めてみた。顔のナワの跡は、もう殆ど、消えていた。なにしろ、ほどこしてもらったのが朝の七時。出発したのが八時半であるから、美代子にとっては予想以上の酷なスケジュールとなっていた。しかし、この睡眠で若い美代子の体力は、すっかり回復。火口壁を回るときは作ってもらっていたサンドイッチを、ほうば

っていた。

火口縁の一番、高いところに立ったとき、常夫も美代子も、思わず、いっしょに、

『すばらしい！』

と、つぶやき、顔を見合わせた。それは美代子にとっては何にも、かえがたい一瞬だった。噴煙は少なかったが、いつもよりジェット音は高く、ヨナを少し噴出し、火山性微動が高まっていると、日刊紙が報道していたのを美代子は思い出した。

『このところ、阿蘇山は、ご機嫌が悪いんですってよ』

『そうか、誰かさんのようにか』

『アラ、ちがうワヨ。誰かさんは阿蘇山とは違って、しとやかで優しいのよ』

『そうか、それは、ありがたい。どうだ、こんどは天地自然を見ながら、裸で愛し合わないかい』

『いいわねえ。でも、それこそ、阿蘇山がおこりになってよ』

『いや、喜ぶかもしれない』

そう冗談をとばし、二人は訳もなく高笑いした。大声で話し、大声で笑えるのが阿蘇山頂の特色でもあった。ともかく、そこに一時間もいたろうか。みやげ品などを買い、一息

いれると、二人はまた、車に戻った。

『米塚のかげに、だれからも見られないところがあるそうだよ。そこに行こう』

常夫は人から聞いた、そんな話を真に受けていたとみえて、米塚のスソ野で、道から草原へ乗り入れ、凹みを探した。すると噂どおりの恰好の場所が、みつかった。車をとめると、常夫は中からロックし、美代子をひきつけると、強引にキスした。それだけで美代子は鼻をならした。

『うん、いける。断然、ハイジャックだ』

と常夫は、美代子の気持を察し、強引に上半身を裸にしまった。蛍光灯の光でみたのとちがって、青い草原と青空天井の下での美代子は、膚が幾分つややかで、ピンクがかっていた。すんなり、のびた二の腕。その附け根から首にかけての、なだらかなカーブ。首から胸にかけての、ふくよかなふくらみ。乳房は、ふくらんで大きかった。着物を着ているときは瘠せて見えるが、裸にしてみれば、けっこうグラマーだった。口と口をあわせ、目と目をあわせ、膝の上でリズムをとると、美代子は心地よさそうに目を細めた。

美代子の膚を毛虫が這うように、ゆっくり眺め回すと、



『何、みてるの』

と、きいた。

『昨日の戦いの跡さ。腕にも乳房にも、あざがついているんでね』

『いやな人』

『ところで、ハイジャックの本当の意味しているのか』

『どういうこと』

『こういうことだ』

いいさま、常夫は美代子を、うつむけに膝の上におしつけ、かくし持ったロープで、美代子の両手首を、きりきりと高手小手に縛り上げてしまった。すばやく両腕から乳房の上胸、股とヒモを回して荷造りしていった。

『そんなことなの。きょうは、もうしないかと思ったのに』

『白日の下でやるのは又、格別なのさ』

そういいながら常夫は遠慮なく下半身を剥き上げ、足首をあぐら型に交差して縛った。

こうすると美代子は、再び一切の身動きを禁ぜられた形になる。

常夫は、そうしたあと、しみじみ観察していたが、やがてコートを裸の体の上にかけて人目をさけた。そして、自分はコートの下に手をつっこみ、美代子の縛られた肌を、ゆっ

くりと愛撫しはじめた。美代子のからだは次第に波をうちはじめた。常夫は、あたりに人気がないのを確かめると自分も裸になった。

美代子は、犯される女を実感させられたあと、車外に引き出され、体の四方をカラーで写された。遠く阿蘇五岳を背景に入れながら常夫は美代子のからだを表向けにしたり、後ろ向きにしたり、えび縛りに縛ったりして撮影した。それが終わって、やっと縄を、ほどいてくれた。

美代子は自由になっても、文句を言う氣力を失っていた。そんな美代子を、せきたてた常夫は、再び盛装させたあと、熊本に向かい再び、きのうと同じ宿についた。

『阿蘇は、どうぞございました』  
フロントのおばさんの質問に、

『とても楽しかったよ。やっぱり噂どおり素晴らしい山だね』

と常夫は、笑って答えた。

阿蘇山も素晴らしいが、美代子は更に素晴らしい。阿蘇山で浩然の氣を養ってきただけに常夫は、この日のことは忘れない思い出になると思っていた。

『夕食は、ご一緒になされますか』  
『七時ごろ、部屋に準備して下さい』

そういったあと、常夫は部屋に入ると、ベッドに、いきなり横になり、

『ああ、疲れた』

と、つぶやいた。美代子は、その横に並んで、大胆に常夫の肩に手を回し、『だいてえ！ ねえ』と甘えた。

美代子をだいて、ゆっくりと着物の上から愛撫すると、もうそれだけで女は燃え始めていた。着物の腋の下から手を入れ、くすぐると目を細めて笑う。あんまり笑い声が高いので、つい口を押えつける。それが合図であるかのように、男の官能にも火がつく。この女を、今夜どうして、いじめようと思う。

常夫は女を裸にして、ゆかたに着替えようと思い、実行した。淡い桃色の花模様の入った宿のゆかたを着せると、その腰ヒモの余りで、後ろ手に手首だけをとめた。そのあとで自分もゆかたに着かえ、美代子をヒザの上にかかえてテレビのニュースを見た。

女中が入ってきて食事の準備をはじめたとき、常夫はもう美代子が両手を背中にくぐらせていることを忘れていた。美代子が、それを気付かれないようにソファアに、もたれているのを見て、急に滑稽になってきた。女中が出ていくと、常夫は、

『よしよし、ボクが食べさせてあげるよ。食事しよう』  
と誘った。

『こぼすと裸にするよ』

『初めから、裸にしたいのでしょ。そうおっしゃい』

『いやだね。食事は食事、裸は裸だ』

『そんなことって』

『君になりたいなら、いつでも裸にするぜ』

『裸で食事したことは、まだ、ないの』

『それは、いいな。君の希望とあれば——』  
と、結局は美代子は素裸にされ、綿ロープ



イメージギャラリー

『木立陰のデート』 三鷹 I・C

で本縛りにされたあと、あぐら縛りにされ、軽いエビ責めスタイルで食卓の前に、すえられた。その横に常夫は坐り、

『まず、スイモノからか。これは珍しい。スズキの吸い物だよ』

と、ていねいに白身をむしって、一はしずつ美代子に喰べさせてくれ、汁物も吸わせてくれた。サシミはヒラメだったが、これも巧みに喰べさせてくれた。常夫はビールをのんでいたが、美代子はその器に目をむけると、ちゃんとコップを口にあてて、飲ませてくれた。酒に弱いというより、アルコール分が入ると、つけ物でも赤くなるたちの美代子は、コップ一、二杯のビールで、エビのテンプラのように赤くなった。体中が赤くなるので、常夫はホウと、その素晴らしい眺めに、思わずタメ息をついた。

『恥かしいワ、そんなに見ちゃ』

『だって、美しい。これなら毎晩でもいい』  
そういいながらも常夫は、ハシを動かすのを忘れない。貝の酢の物を食べさせながら

『これは鳥貝だよ。生が、おいしいのだ。瀬戸内海は周防灘、豊前海域の特産だよ』

とか、

『キュウリが、おいしいだろう。確か山東四



葉を改良した形と聞いたのだが、九州界限で開発したものだ。形が手頃な大きさになること。味が水っぽくなく、クセがなく、生食用に適していると聞いたんだが』

と、一品ごとに説明した。その知識の豊富さ。美代子は縛られているのを忘れ、常夫の別の一面を見る思いだった。

しかし、こうした話にも飽きが来て、一段落すると、常夫は悪ふざけを始めた。もう食事は終わり、お茶になっていた。

『サカナにも、いろいろ名前が、あるだろ。たとえば、ボラはイナからボラに成長し、ヤスミになる。ところで君のは、どうなるのかな。子供の頃は、何といった。少女の頃は、いまは』

と、わざと美代子の顔を、のぞきこむ。

『バカねえ、そんなこと』

『よし、言わないなら、いわせてみせる』

と酒の酔いも手伝って、常夫は手をのばし美代子の体に刺激を加えた。

『いうわ、いうわ。だから、やめて——』

と美代子は体を、くねらせる。こうした、たあいもない、いたずらや、やりとりのあとで『どれ、食後の休憩だ。一服しよう』と手を休めた。しかし、手を休める前に、厳重に

さるぐつわをし、逆えびに縛り上げて寝台の上に、ねせつけ、バイブレーターをセットすることを忘れなかった。休み中といえども、いじめ続けるというわけだ。その上に毛布をかけると、常夫は女中を呼んだ。食事の後片付けをしている女中に声をかける。

『女中さん、ボーリング場は近くにある？』

『このホテルの横にあります』

『いまごろ、すいているだろうか』

『予約していないとダメでしょうね。聞いてみましょうか』

『まあ、いいや。残念だが、そうまでするほどでもないよ。フロは、わいているかな』

『ハイ、もう、いつでも結構です。さっそく湯舟に水を、ためましょうか』

『そうしてくれ。なにしろ、わずか一日で阿蘇山を歩き回ったのだから、二人とも、すっかり疲れているんだよ。とくに彼女は疲れきって、もうグロッキーさ』

そういうながら常夫は美代子の傍によってきて毛布の下から手を入れ、ギューッと尻をつねった。美代子は思わず大声を出すところを、やっと噛み殺した。その、せつない声を聞きながら常夫は女中を、まだ、からかい続けていた。

その女中が下がると、常夫はドアにカギをかけ、お湯の温度を確かめた。美代子の傍によってバイブレーターのスイッチを切り、『このままではお湯に入れるわけにはいかないな』

と言いながら、美代子のナワを解き、サルグツワをはずし、用意してきた金属製の手錠に、はめかえた。そして、それをハメたままいっしょに湯舟に入った。湯の中でヒザの上に美代子を抱き、乳房をもてあそびながら、『ドレイさん。阿蘇は、どうでした。今夜はいかがでしたしょう。アクロバット・ファックなど、いかがですか』

と美代子の耳に口づけしながら聞いた。

『脳天逆返りスタイル、プロレスファックなら、お気に召すかしら』

と美代子は、頬をすりよせてきた。

そんな美代子に、石鹸を塗りつけて洗うのは楽しかった。丹念に隅々まで洗う。そしてその一つ一つに、美代子の表情をうかがい、その微妙な変化に心をいやす。フロから上がると、常夫は念入りに拭いてやった。自分の家内にもしてやらないことをする。そのことに常夫は大人の浮気を自覚していた。新しい愛の芽ばえかもしれない。

二人の気があったところで、そろってベッドの上にもつれこんだ。美代子の手首から、もう鉄の枷は消えていた。だが美代子は、それにもまして、大胆にふるまった。わたしはメス犬なの、と首にロープをつけさせ、四つん這いになって、常夫の体をなめはじめた。常夫は常夫で、なめ方が悪いといっては美代子の尻をたたく。こうして明け方まで二人はくたくたになるまで愛しあった。

——(八)——

翌日は鹿児島に行く予定だったが、常夫は青島が見たいという美代子の希望を入れ、行先を変更して宮崎に回り、日南海岸を見ることにした。

『第一えびの』の指定席に坐ると、美代子は阿蘇行きと同様、すぐねむりだしたが、その姿には新妻のような、ういういしさが出ていた。シックな和服がよく似合い、白いレースの手袋が美しかった。この手袋は手首の縄の跡をかくすために、はめさせたものだが、それがアクセントになって女に何故か清潔な感じを与える。そんな姿をみているうち、常夫も、ねむけを覚えた。

常夫が目を覚ましたのは、人吉駅付近だっ

た。美代子は大畑（おこば）駅近くで目を覚ました。

『あら、ループ線ね』

『そうだ。やっと、おめざめ』

『あなたが余りいじめるので、我慢ならなかったの』

『じゃ、今夜はおとなしくしようか』

『ううん、いいのよ。もっともっと、いじめてほしいの。その方が楽よ』

『え、楽？』

『うれしいのよ』

常夫は、そこでちょっと間を置き、美代子の顔を穴のあくほど見つめた。それから口調を変えて聞いた。

『やっぱり愛しているのだネ』

『え、何。何ていったの。あら、よしてよ、そんな勘ぐり方』

『気になるか』

『気にしても、どうにもならないの。銀水園では、あと半月でしょうかって』

『退院？』

『まあね。その逆よ。肝臓病を併発して危いんですって』

『そうか、それは知らなかった』

『あなたには関係のないことよ』

『確かにね』

『だから、死にたくなつたの。死ぬことよりまだ悪いわネ。そう思うと自分が、いやらしくって……』

『そうか。でも、気に病むことはないさ。東京に帰ったら、立派な病院に移そう』

『そんな事、できるわけないでしょう』

『できるよ。平気さ。君が苦しむのも人間らしいと思う。好意は好意さ。浮気は浮気、本気は本気。いくら考えても燃え出した火は消えない。火は、ずっと燃やし続けるか、消さないことには、どうにもならない。君は消えると思う？』

『消えないと思うワ』

『それが人間の生命というもんだよ。ボクは大病して死にかけたとき、そう思った。あとは運を天にまかせるのだと』

『勝手な話ネ』

『そうだよ。そこから人間は又、活力が生まれてくる。御主人に活力を与えることだね』

『そんなこと、できるかしら』

『できるさ。たとえば阿蘇山の写真を持って行ってやれよ。カッとしてボクなら復讐を誓うね。復讐のため執念をたぎらせられるようになったら、助かること受けあいだネ』



『でも、あなた、殺されるワ』

『殺されてもいいじゃないか。亭主さえ元気になれば……』

『……』

美代子は大きな目で常夫をみつめていた。

しばらくして美代子の目から初めて涙が一条流れた。それをぬぐおうともせず、美代子はただ一言、

『常夫さんは残酷な方ね』

と言った。

(九)

その夜は宮崎のホテルに泊まった。大淀川畔を散歩すると、フェニックスの木蔭から南国の星空が美しく眺められ、エトランゼーになった気分を味わうことができた。美代子は来てよかったと思った。

常夫も、そう思ったらしい。熊本の時と違って万事に優しかった。夜、寝室に入ってから、疲れているだろうと、自らアンマをかけて出てやり、前回のように縛りもしなければ愛撫も加えなかった。

美代子は、その理由がわかりすぎるほどわかっていった。ただ、こんな気持で最後の夜を過ごしたくないと思った。裸になって哀訴し

てみてもよいと考えたが、常夫は、そんなスキを与えず、また美代子も、そんな甘え方はしなかった。このため、いっしょに枕を並べて寝はしたものの、美代子は寝つかれなかった。常夫はあっさりと寝、すぐに軽い寝息をたてはじめた。美代子が熟睡したのは明け方であった。このため、目が覚めたとき、陽は高くのぼり、となりに人かげはなかった。寝台の上に起き上がり、はじめて後ろ手に手錠をはめられていることに気付いた。付近を見回したが、着物はなかった。素っ裸で放置されていたのである。あの人のやりそうなことだと思いながら、よく見ると寝台のはじにピンで手帳の切れ端がとめてあった。

“きょうは、ひとりで旅に出ます。気がむけば夕方、帰ります。気が向かないと帰りません。ホテルのメイドさんに手錠のカギはあずけておきました。着物は記念にもらって行きます。裸で道中、下さい。残酷な人より”

と、あった。美代子は、それを見ると放心したようになり、いつまでもベッドに坐り続けていた。そのままの姿勢で、足を使い便所にたつてくると、もうすることはなかった。メイドさんと呼んで手錠はずしてもらおうかと思ったが、恥かしくて言えなかった。ゆ

っくり考えよ、ということなんだろうと思いかえしてベッドにもぐり込み、天井を見つめていると、二日間の疲れが出たのか美代子はそのまま、ねむり込んでしまった。

そんな美代子のもとに、酒に酔った常夫が帰ってきたのは、夜の十時ごろだった。

帰ってくると、いきなり美代子のシリをピシヤピシヤたたき出した。そのまま倒れるように寝て、いびきをかきだした。その常夫が正気に返ったのは翌朝で、美代子はそのでやっとまる一日ぶりに両手の自由を回復した。

旅行の日程は、もう過ぎていた。別れのときであったが、常夫は意識的に、その話をしなかった。

『きょうは子供の国に行こう。あそこで話があるんだ』

真顔とも冗談ともつかぬ顔で常夫は言う。

『いいわ、それが最後ね』

『どうだか』

常夫はフロントに電話して車を呼んでもらい、二人はメイドに送られてホテルを出た。

『また、きて下さい』

というメイドに常夫は手を振って答えた。日向カボチャの産地という赤江海岸を車は抜け、宮崎空港を眺めながら一路、青島へ向か

った。まず青島を見て、それから子供の国へ  
と行ったので、二人が子供の国に着いたのは  
もう昼近かった。

『ほら、ここに看板が出ているだろう。この  
言葉が気に入ったのだ。大人も子供になつて  
お遊び下さいという。童心にかえて、きの  
う一日、考えてみたのだ。セックスとは別に  
いまボクは何をしなればいけないかと』  
『それで』

と美代子は聞いた。竜舌蘭の林を抜け、バ  
ナナの森を通りながら、常夫は美代子の手を  
とりながら歩いた。青い空、青い海の見える  
ところに芝生があった。そこに寝ころびなが  
ら常夫は、ゆっくりと話しかけた。

『三日間、ほんとに楽しかった。あんまり、  
いじめすぎた罰と思ひ、東大付属病院の友だ  
ち讃井博士に頼んでみたよ。肝臓病の第一人  
者なのだ。そこで会うことに決めたのだ。君  
の主人のために最後の努力をしようと思つて  
ね。手みじかに病状を訴えておいたら、とも  
かく患者を見てみたいというんだ。銀永苑は  
九大系の医師が殆どだが、一人だけ、まな弟  
子もいることだし、公式に診断はできないか  
もしれないが、アドバイスはできるだろうと  
いつてくれたよ。おかげで休みを三日、延ば

した。それでもう、君も残酷な男とは言わな  
いだろう』

と破顔一笑した。

そのくつたくの顔をみていると、美代  
子はカンナの花のようにカッと胸が燃えた。  
さすがに石川常夫は、大会社の総務部長を  
勤めるだけの人ではあった。もう損得ぬきに  
この人とは離れられないと美代子は、その時  
はじめて心に決めた。

× × ×

それから三カ月後、重役会議が開かれた。  
常務取締役が退任したので、一人、社員から  
昇格させるためのもので、当然、石川と鈴木  
が比較された。まず、たたきあげの宮本常務  
が口火を切った。

『石川君は福岡出張のとき、臨時雇の花村美  
代子連れて九州旅行に行った。社内の人を  
口説くとは、もつての外だ』

これにたいし、楠田専務が石川の弁護に回  
った。

『宮本君、その話は、だれから聞いたのか。』

石川、鈴木の二人のほか、花村君しか知らな  
いはずの秘密じゃないか』

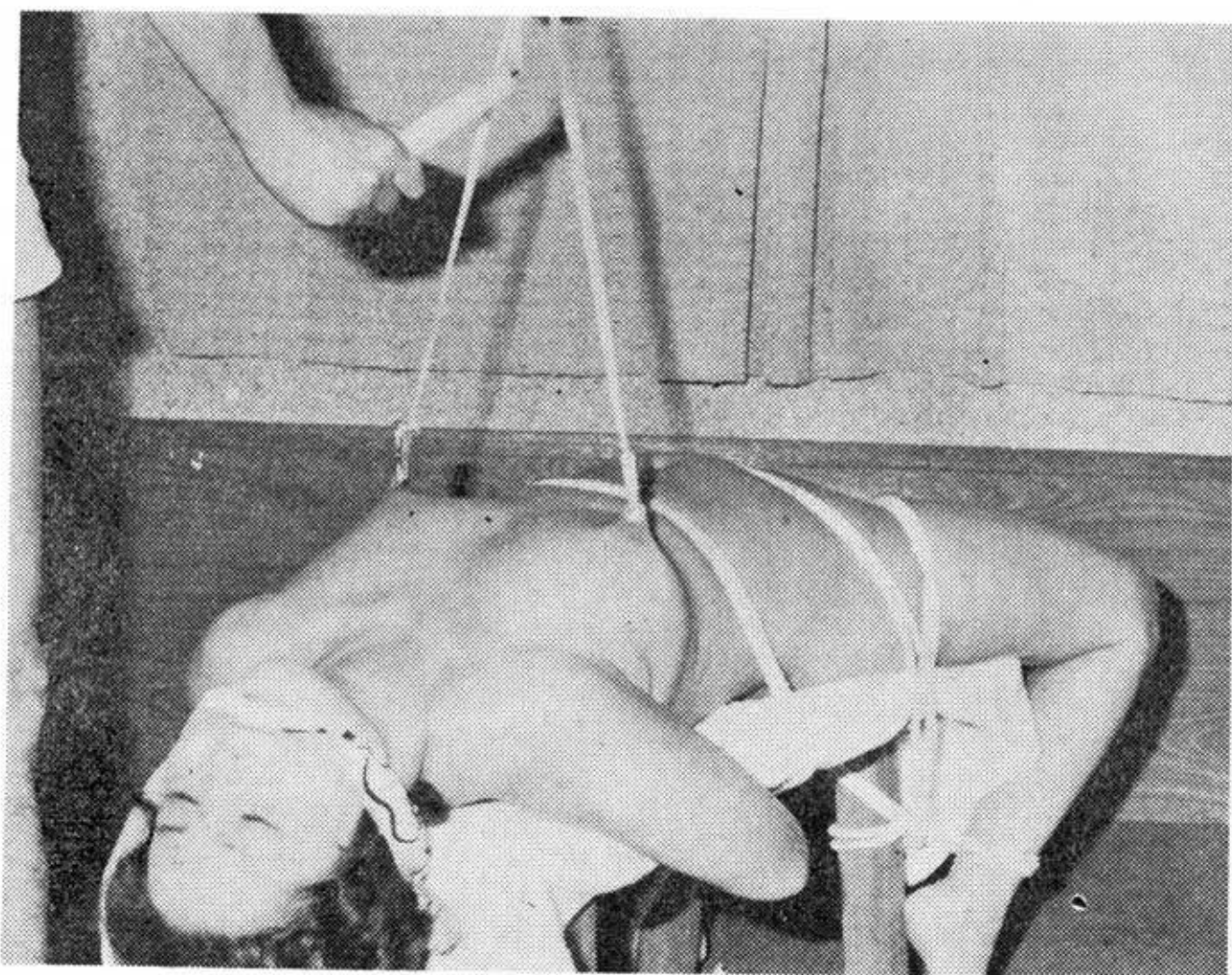
『はい、それは、それは』

『鈴木のお奥さんじゃないのか。こちらは美代

子の姉から確かめたんだが、美代子は社の金  
を使い込んでいたのだ。それで鈴木から関係  
を迫られたという。ことわったら、それでは  
というので鈴木は、SM趣味の男をつれてき  
て、さんざんいじめたそうだよ。結局、使い  
込みは鈴木が石川に頼み埋めたらしいが、そ  
のあとで美代子を石川に紹介したともいう。  
一方、石川は据え膳くわねばと、あいつも相  
当な悪だから、いただくものはいただいたら  
しいが、東京から高名な医師を連れてきて、  
金の使い込みの原因となった主人の病気をみ  
させ、その後も何くれと、めんどろを見たと  
いう。その主人は亡くなったが、美代子は今  
も石川に感謝しているそうだ。さて、この二  
人の、どちらに真実があると思うかね』  
こう楠田に開き直られては、宮本常務も返  
す言葉がなかった。大村社長が断を下した。  
『悪はやつても、人にきられるようでは、  
人の上に立てない。石川君に決めたよ』  
この一言で石川の重役昇任は決定的となっ  
た。

秋の取締役会で石川は取締役任に推され、取  
締役総務部長となり、鈴木は名古屋支店次長  
になって転任した。





愛読する奇クの誌上に、なんだかんだと、雑文と拙劣なフォトを発表させて頂いてから丁度、一年を迎えましたが、常々感じますこ

ーについての考え方や、私達二人のプレーで妻に実際に加えている責めなどを、折にふれ出来るだけ告白してまいりました。

とは、投稿される同好のファンの方々の表現や描写の豊かさには、いつも感心させられるということでした。

昨年の三月号に、始めて私の投稿を採り上げて頂きまし

て、それに勇気を得て、それ以来、私自身の夫婦交換プレ

## 愛妻への 特訓プレイ

早坂信治

★夫婦交換SMプレイに思いを馳せた★

もっと、こんなことも書きたいと思いつくままに、幾度もペンを取るのですが、いざ机に向かって書き始めてみると、自分の思っていることの何分の一も書き現わすことが出来ず、自分の無力な才能に腹立たしく思うことさえあります。

それでも、なんとか秃筆にムチ打ちながらなんとか拙い文章でも書いてまいりましたがそれというのも、同好のファンの方々の前に私の心情を披瀝して、少しでも知って頂きたく、ペンをとってきました。その都度、編集

部の方々には、加筆訂正を何かとして頂き、なんとか読めるような文章で、誌上を飾って頂きました。

今回もまた性懲りもなく、ペンをとって拙い告白を書き綴りました。

妻と結ばれた頃、一本の細いロープで、二人の心と心とが、しっかりとつながり、心の底からの嗜虐の欲びに燃え上がり、昼間からでも、妻と二人で、妖しい倒錯の楽しさを、むさぼるように求め合ったものです。

その頃のことを、今振り返って考えてみると、それはただ、感情の起伏にまかせた本能に導かれたSMプレイにしか過ぎなかったようです。

しかし、そうしたプレイも、回を重ねるに従って、いつしか妻を縛ることから責めることに欲びが強まってゆく自分を発見し、いつの間にか、はっきりと、妻を縛り責めているうちに、ぴったりと密着した夫婦和合の充実感があることを知ったのです。

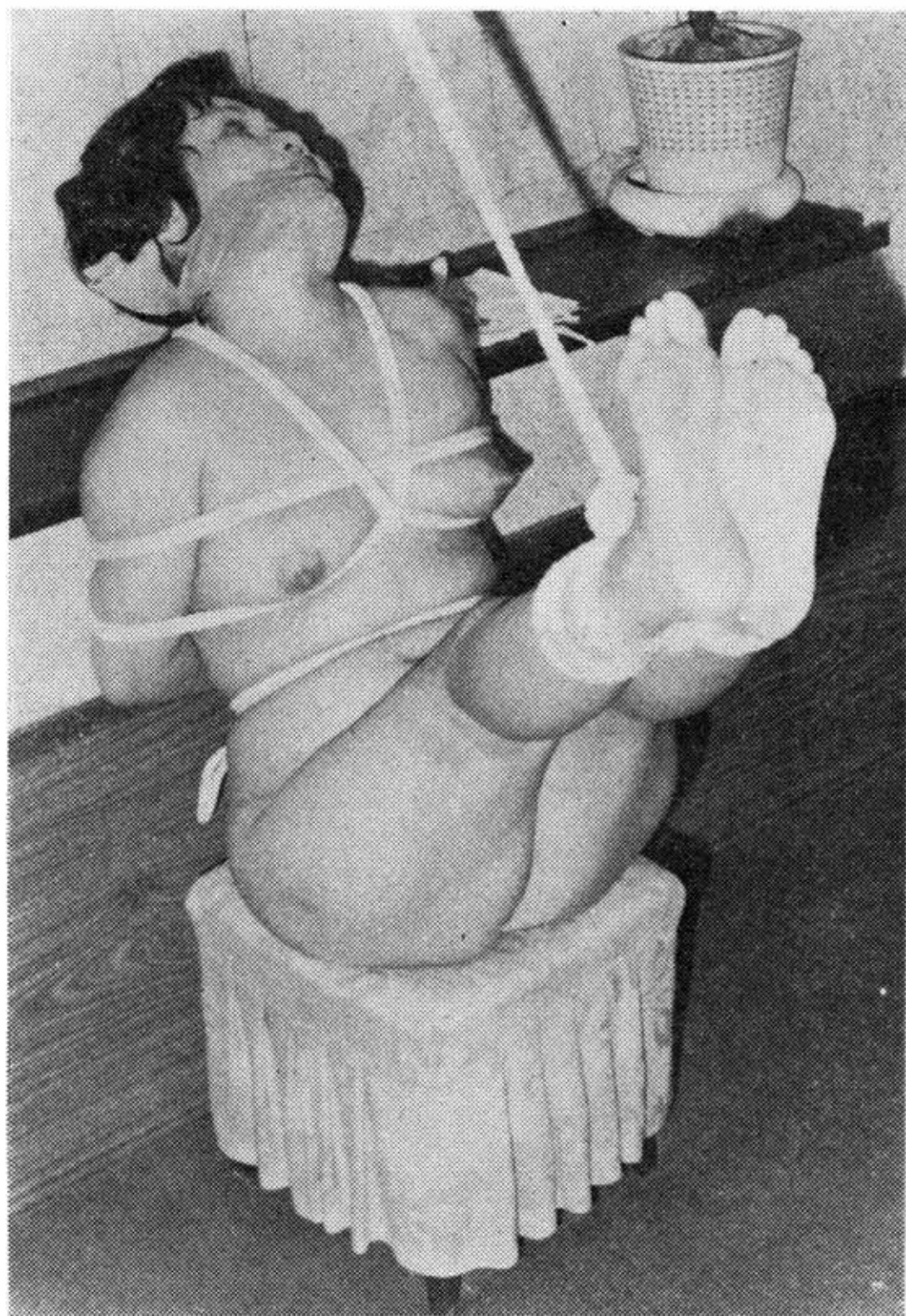
妻の心の中にも、縛られ、責められ、恥かしい思いをさせられることを望む本来の本能というものが胚胎していたのでしょうか。あるいは、妻としての務めと考えて、黙って私のそうしたSM行為を受け入れているうち、

自然と被虐に欲びを見出すようになったのでしょうか。とにかくにも、夫婦お互いに、そのSM行為によって激しい満足感を得ていたことは事実です。

幾許もせずして、私達夫婦の生活の中で、SMは欠かせないものになっていました。私達二人に、限らない欲びを与えてくれ、生甲

斐をさえ、感じさせてくれました。

どんな恥かしい行為でも、また、どんな苦しい責めを受けても、グチ一つ言わず、被虐の欲びの中から湧き出る甘美な余韻に、たっぷりと悦楽を味わいながら、夫に悦ばれるM女になろうとして、ひたすらに妻は努力してくれていました。





妻と私の夫婦愛は、こうしてSMによってしっかりと結ばれ、そして、世の荒浪の何物にも負けにくい強いものになりました。

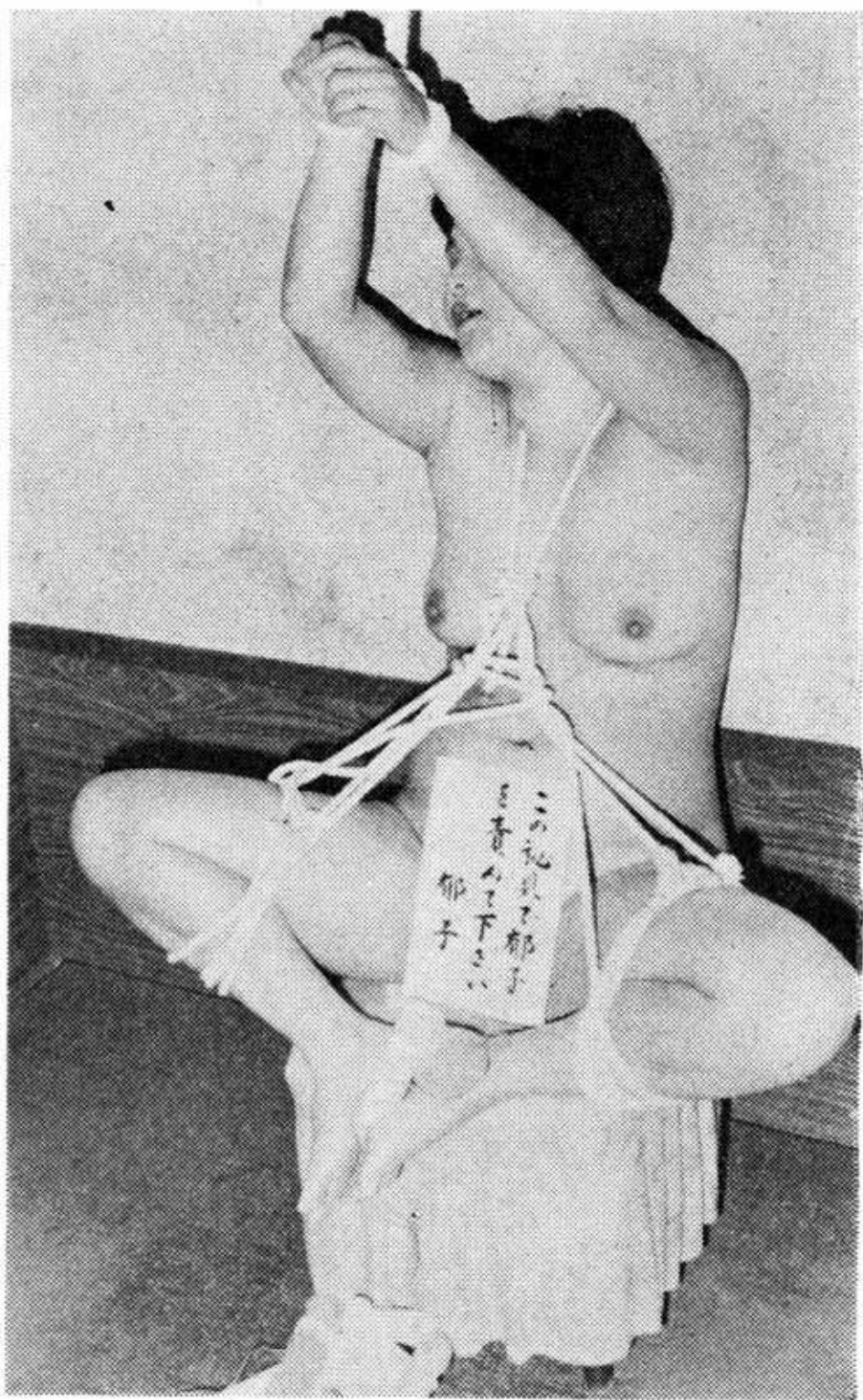
このように被虐を願う妻は、私の責めに対して、その歓びを激しく肉体に現わし、喘ぎ呻き、そして悶え抜きました。

そのように、M女として順調に育っていった妻を、いとおしみながらも、私自身、次々と求めてゆく変わった刺戟も、いつしかマネリ化して色あせてゆくのを、どう防ぎようもありませんでした。

昨日は、きらびやかに私達夫婦を歓喜させた手段も、今日は、くたびれた紙紐のように張りがなくなっていました。より新しい刺戟を求めんと焦りに焦った末、奇クに救いを求めるような願いをこめて告白したのが、丁度一年前のことでした。

激しい肉体の燃え上がり、SMによって左右される私達夫婦にとって、あの告白が誌上に取り上げられたことは、生まれ変わったように新鮮な刺戟になりました。

拙い私の告白にもかかわらず、多くの同好ファンの方々から、ご厚情に満ちたお言葉やご指導が寄せられたことは、大いに私を勇気づけました。



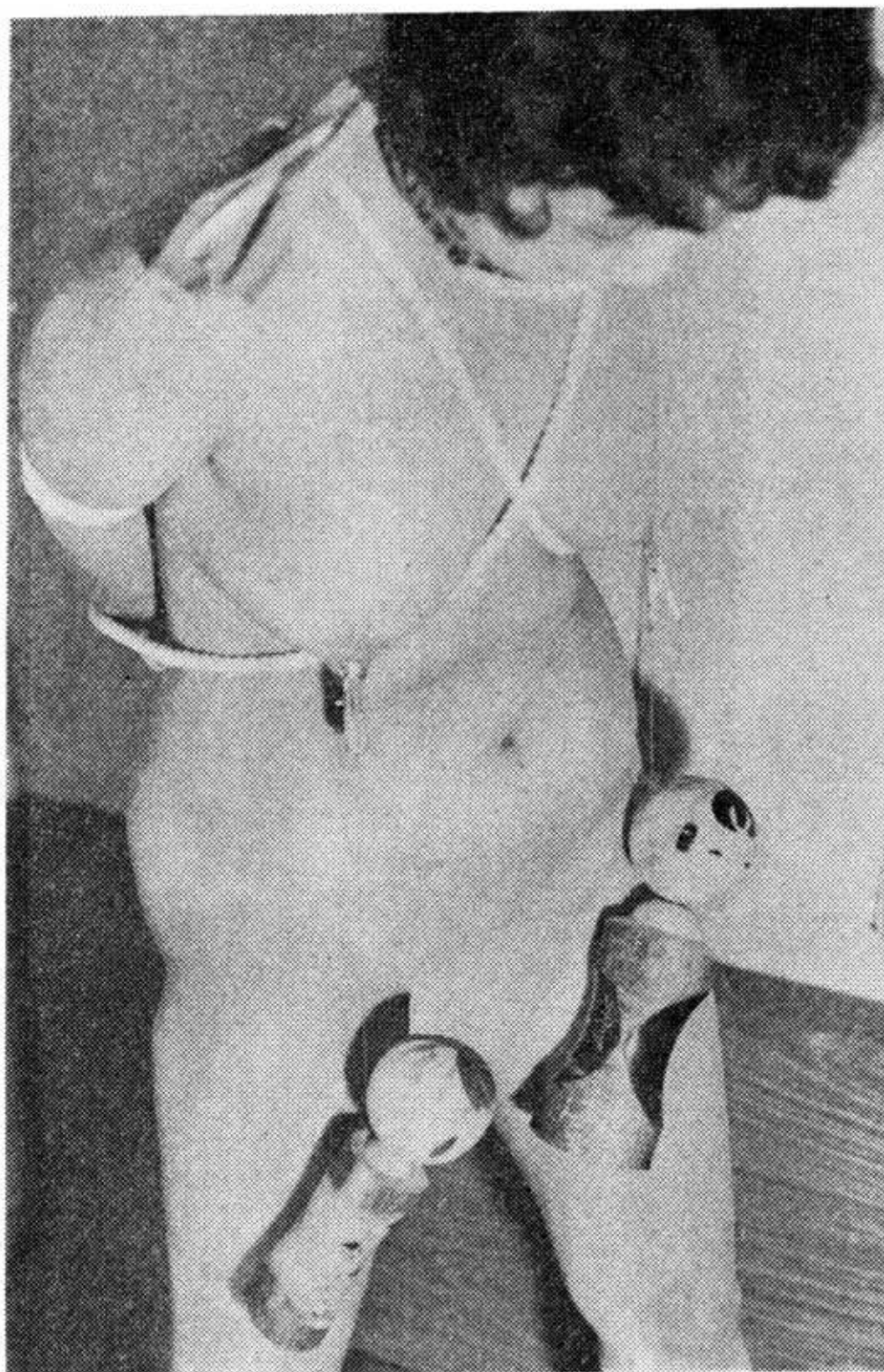
そして、私がただ空想の世界の中でのみ、ひとりで描いていた「夫婦交換プレイ」が、現実化する可能性でもって大きく私に迫ってきたことも、私の生活に対して、強烈な刺戟を与えてくれることになりました。

「夫婦交換プレイ」という、この未知のSMプレイは、私達夫婦に対して、限らない夢と希望を与えてくれました。

「夫婦交換プレイをやるのだぞ」と、妻をう

ながし、その想像の中で、SMプレイを楽しむ私達には、私はもとより、妻にも、それが新しい刺戟となつて一層の快感を味わうことが出来ました。

そして、いつしか妻も、夫婦交換プレイを強く望むようになり、それをかなえてくれるためには、どんな苦しい責め、どんな恥かしい私の要求にも、積極的に応えるようになってきました。



このように、夫婦交換プレイを切実に願う私達夫婦は、編集部のご好意によって一組のTご夫妻と文通することが出来ました。

先ず最初は、文通から始まり、次いで、お互いのフォト交換、そして電話による通話という風に進展してゆきました。電話による会話も、T氏と私の妻、T夫人と私——というように、あらゆる交流が始まりました。

私の、この異常と思えるほどの「夫婦交換プレイ」に対する執念は、T氏ご夫妻との交流によって、実現の可能性が極めて濃厚になってきたのです。夢にまで見た交換プレイがいよいよ果たされるかもしれないという悦びに沸き立ち、私の身も心も、新しい刺激が燃え上がりました。

そうした気持の中にも、フト兆す一抹の危

惧がありました。それは、若し、私よりもT氏の方が、より強いS性の持主ではないだろうか——ということでした。そういった想像が私の嗜虐癖を一層かりたて、妻の肉体に、より激しく苦しい責めを重ねるのです。

「お前は、夫婦交換プレイをやりたい、やりたいと言っているが、もしTさんが、私より強いS性の持主だったら、お前は耐えられることが出来るか。そのために、今のうちに責めのトレーニングをしておいてやる」

妻を責める、そんな口実が生まれて、私は一段と妻を、きびしく責めるのでした。

妻もまた、目の前にするT氏夫人の生々しい緊縛フォトから、空想と想像とが入り混じって、未知のものに対する憧れから、あたかも現実化したような幻覚に酔いしれて、あれもない嬌声を発し、あらわな痴態を今までになく展開するのです。

私の、ますます手のこんだ気狂いじみた苦しい責めにも、たとえようのない激しい興奮にかられて、快感と快楽に、すり交えてゆくようでした。

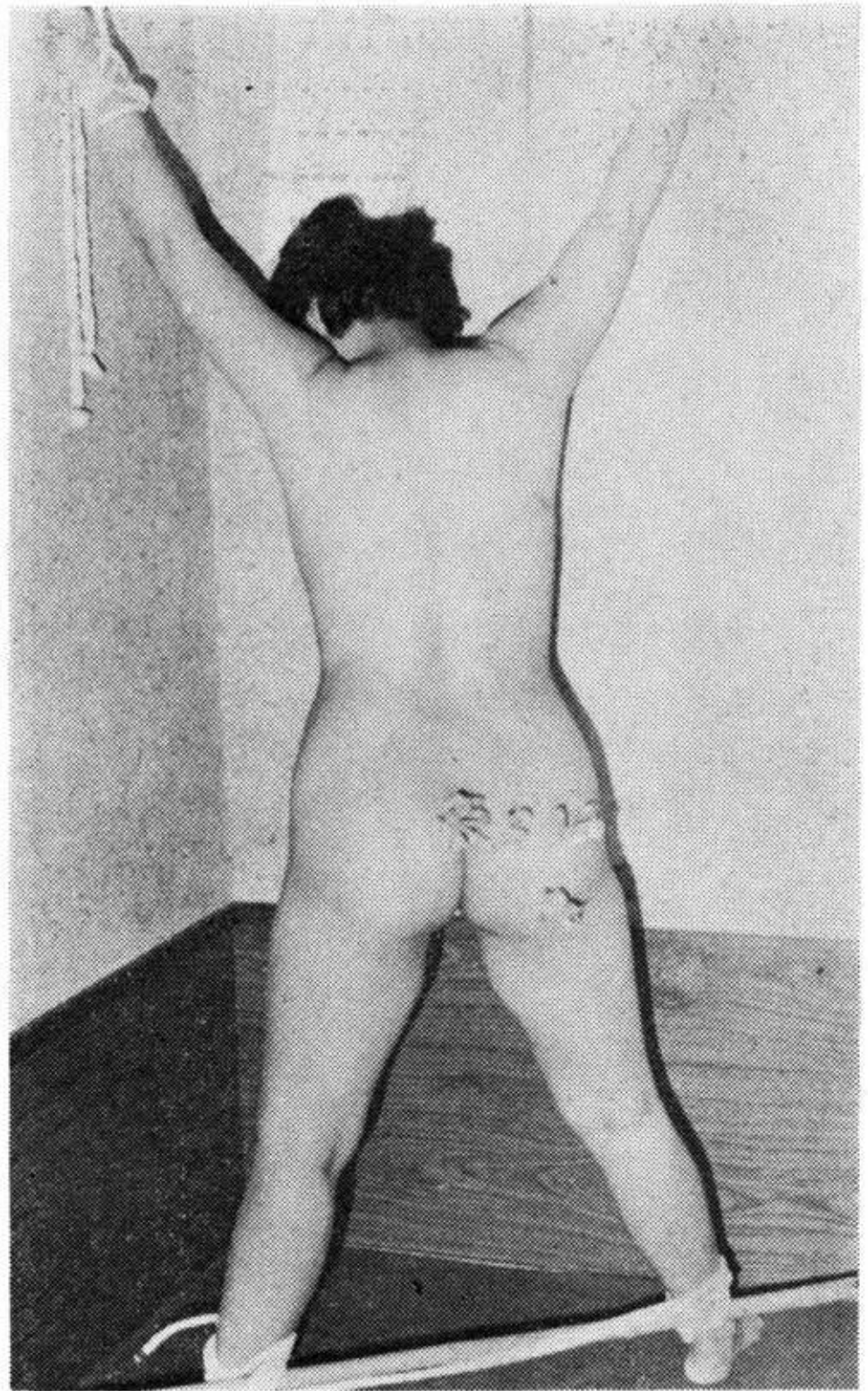
このようにして、最近の私達夫婦のSMプレイは、長い間、想像の中でだけ思いめぐらしていた「夫婦交換プレイ」が、近い日に確



実に実現化するという、はっきりした期待の中で進められてきました。

妻の前に、如何にS性の強い男性が現われたとしても、その責めに十分に耐えることのできるM女になることを、妻に申し渡しました。これは激しい嗜虐に満ち満ちた「特訓プレイ」といってよいものでした。

浣腸責めでは、これまででは、容易に作ることの出来る石鹼液や、時には飲みさしのビー



ルなどを使って行なわれることが多かったのですが、今回の「特訓プレイ」におきましては始めてグリセリン溶液を浣腸に用い、そして二〇〇CCの大型ガラス製浣腸器を購入して浣腸責めを試みました。

ドロリとしたグリセリンを洗面器にうつし等量の水を加えた液を作り、二〇〇CCの浣腸器いっぱい吸い上げ、やおら、妻の身体に嘴管を近づけてゆきました。

すでに、全裸になって注入の受けよい体位で待っている妻は、これまで幾度となく浣腸の経験は持っているとはいえ、今までとは違ったグリセリン溶液を始めて注入されるといふ不安からか、いつもよりは体が硬くなっているようでした。

浣腸液の注入を意識するように、ややこわばった表情を見せるアヌスに、クリームをたっぷり塗り込んでおいて、ガラスの冷たい感触の嘴管を、するりと入れる。途端にブルブルッと腎筋を、ふるわせます。

いつも教えているように、口を半ば開いて深く呼吸をととのえる妻の直腸内に、チュルチュル、チュルチュル……と、進むように、僅か二十秒足らずで、二〇〇CCの薬品液が吸い込まれてゆきました。

続いて、追加の二〇〇CCの浣腸液を吸い上げて、一気に注入を終えると、これまでとは違って、早くもグリセリン溶液の効果が現われたのか、腸壁にしみわたるのか、腸の蠕動が、今まさに盛んに行なわれているかのように、腹部が波うち始めました。

「始めてだから、三分間の辛抱だ」  
そう声を掛けますと、急速に効いてきた浣腸液の効果に、痛む腹部をかかえ込んで、じ

つとしゃがみ込み、大きくうなづく妻の顔に次第に苦悶の表情があらわれてきました。

少しでも動くと、更に苦しくなるのか、そのままの姿勢をくずさず、じっと我慢して持ちこたえていました。

「あと一分——」

妻の耳元でささやく私の声に、妻はうなづくのも苦しいようで、眉根に一層、力を入れぎりぎり歯を噛みならし、全身に脂汗を浮かべ、必死に耐えています。

そうした妻の極限の姿を見つめているうちに、私の脳裡に、フト、あらぬ妄想が湧き上がってくるのでした。

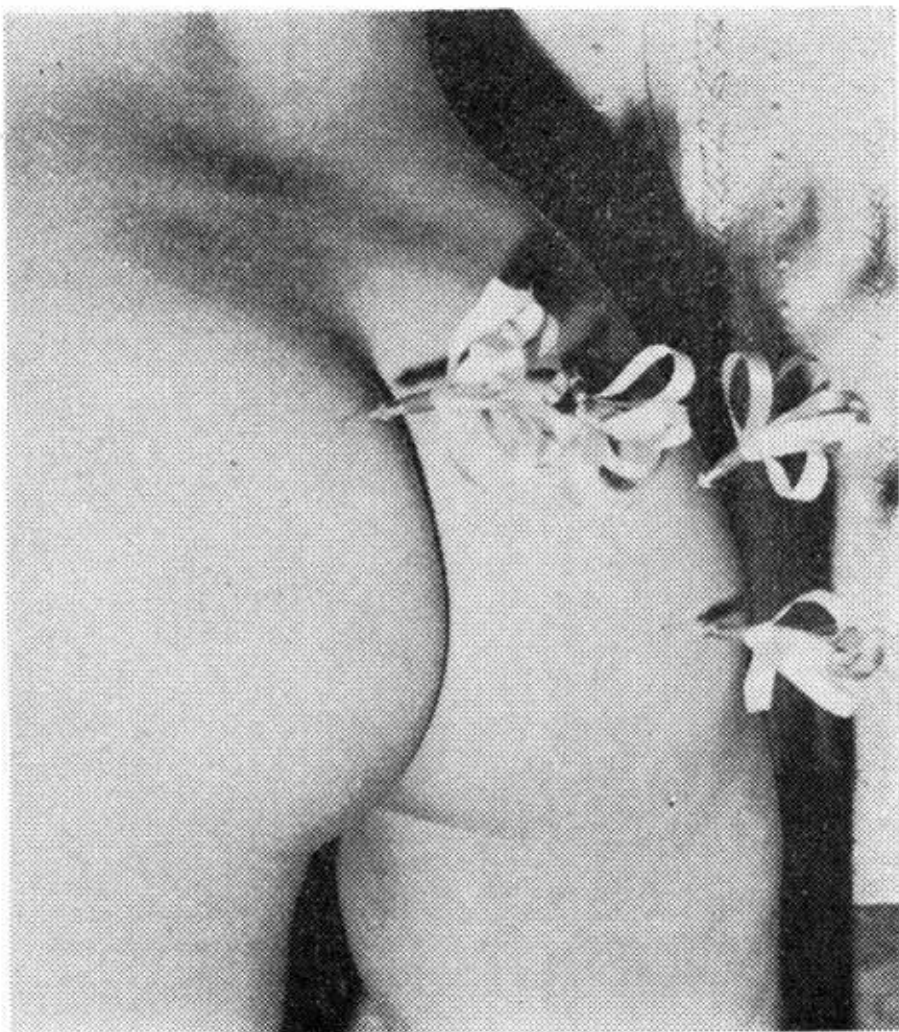
おそらく妻は、未知の刺激を想像し得る限り想像し、その苦しみに耐えながら、自己の被虐願望の炎を燃やし、そして身体の奥底から、被虐の悦楽にむせび、忘我の境地に

陶醉しきっているのではないだろうか、——と、考えるのでした。

その次に私の考えついた妻に対する責めは映画「性倒錯の世界」で渡部光雄氏が始めて見せられた投げ羽根針を思い浮かべました。

この投げ羽根針を私流に作り、特訓プレイの中に、新しく針責めを取り入れました。

先ず、妻の手足を別々に左右に大きく開き大の字の立姿



で緊縛しました。こうした格好に縛り上げただけで、これから行なわれる被虐を期待するかのよう、肌を染める妻の肉体の奥深く、リモコン式の玉子型パイプを挿入しました。パイプの微妙な振動で、きしむようにふるえつつける妻の臀部を、投げ羽根針の標的にみためました。

休みなく一定のリズムで動きつつけるパイプに、すでに恍惚として淫蕩な表情さえ浮かべる妻の身体に近づき、標的個所を示すよう



に、真白い臀部にチクチクと針を突き立てたあと、二米ばかり離れた所から、「ゆくぞ」の掛け声もろ共、妻の逞しい臀部めがけて羽根針を力一杯、投げつけました。

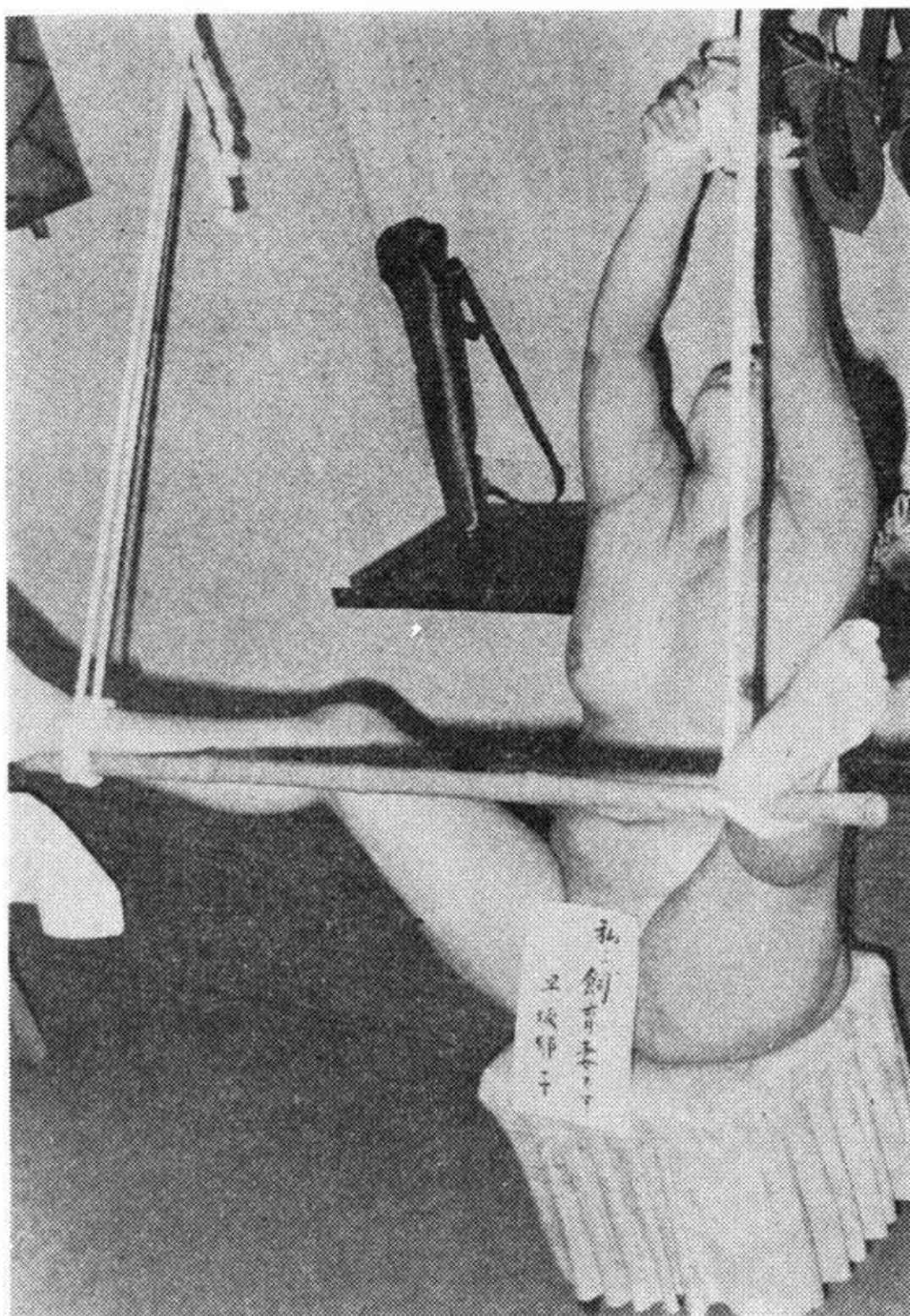
羽根針は、吸いつくように臀部の右側に、プツリと突きささった瞬間、まるで電流がかよったように、一瞬、全身をピクツとふるわせ、キュツとすぼめた臀部に、三鞭ばかりの針は、ほとんど余すところなく、ぶつとりと突き立っていました。

続いて二投目、更に三投目と、投げつけられる羽根針は、妻の臀部を美しく飾りつけ、肉体の奥深く取りつけられたパイプの振動によって、その羽根の先が細かく、ゆれ動いているのでした。

「もう一度、やるぞ」

激しいSの感情の昂まりに、私はうわずったように声を掛けました。うなずいた妻の背後へ回り、突きささった針を抜いた、そのあとから、プツと噴き出たルビーのような赤い玉が、一筋、二筋と糸を引くように流れ出ました。

再び、狙って放たれた羽根針は、見事に妻の臀部に、プツリ、プツリと突きささりました。その針責めに疼く肌の痛みからか、或は



絶間なく性感をゆさぶりつづけるパイプ責めによってか、妻の口からもれている嗚咽の聲が、次第次第に昂まり始めました。

三たび、妻の身体に近づき、突きささった針を抜き始めた私の耳に、ひときわ声高く、「ア、アッ、アー」と叫ぶ妻の吐息が入りました。はっと思う間もなく、妻はガクンと首

を落とし、全体重を両手にかけて膝を曲げ、臀部に点々と赤い血をにじませながら、悦虐の極致の中で陶醉しきったように失神してしまっただけでした。

ただ、妻の下腹部のあたりで、パイプの軽い振動音だけが、妖しい響きをリズムミカルに伝えているだけでした。

この羽根針責めと併行して、クリップ責めも、私にとっては欠かすことの出来ない楽しいプレイの一つなのです。

特訓プレイに入ってから、今までのクリップ責めに少し手を加えてみました。

先ず、コーラ瓶とか、こけしを細ヒモで縛り、そのヒモをクリップの先に結びつけるのです。普通でも、クリップを乳首に噛ませるという責めは、強い痛みを与えるものです。

それなのに、そのクリップに瓶や、こけしの重りがついているのですから、乳首に噛み

ついたクリップが、まるで乳首を噛みちぎるように引き下げるのです。

その苦痛は、さるぐつわの奥から苦し気な低い呻き声を洩らしながら、眉根に深いシワを作って、必死に耐えている妻の形相を見ただけでも、よくわかります。そんな妻の苦痛と戦っている表情を見ただけで、私の嗜虐癖は、ますます昂まり続けるのでした。

このクリップ責めに対して、蠟涙責めを加えたものが、最近の私の新しい責めのアイデアの一つなのです。

妻を卓のような台上に仰向けに寝かして、四肢を縛り、細ヒモを通したクリップを両乳首に挟み込んで左右に振り分け、吊り下げて乳首に対するクリップ責めを加えます。

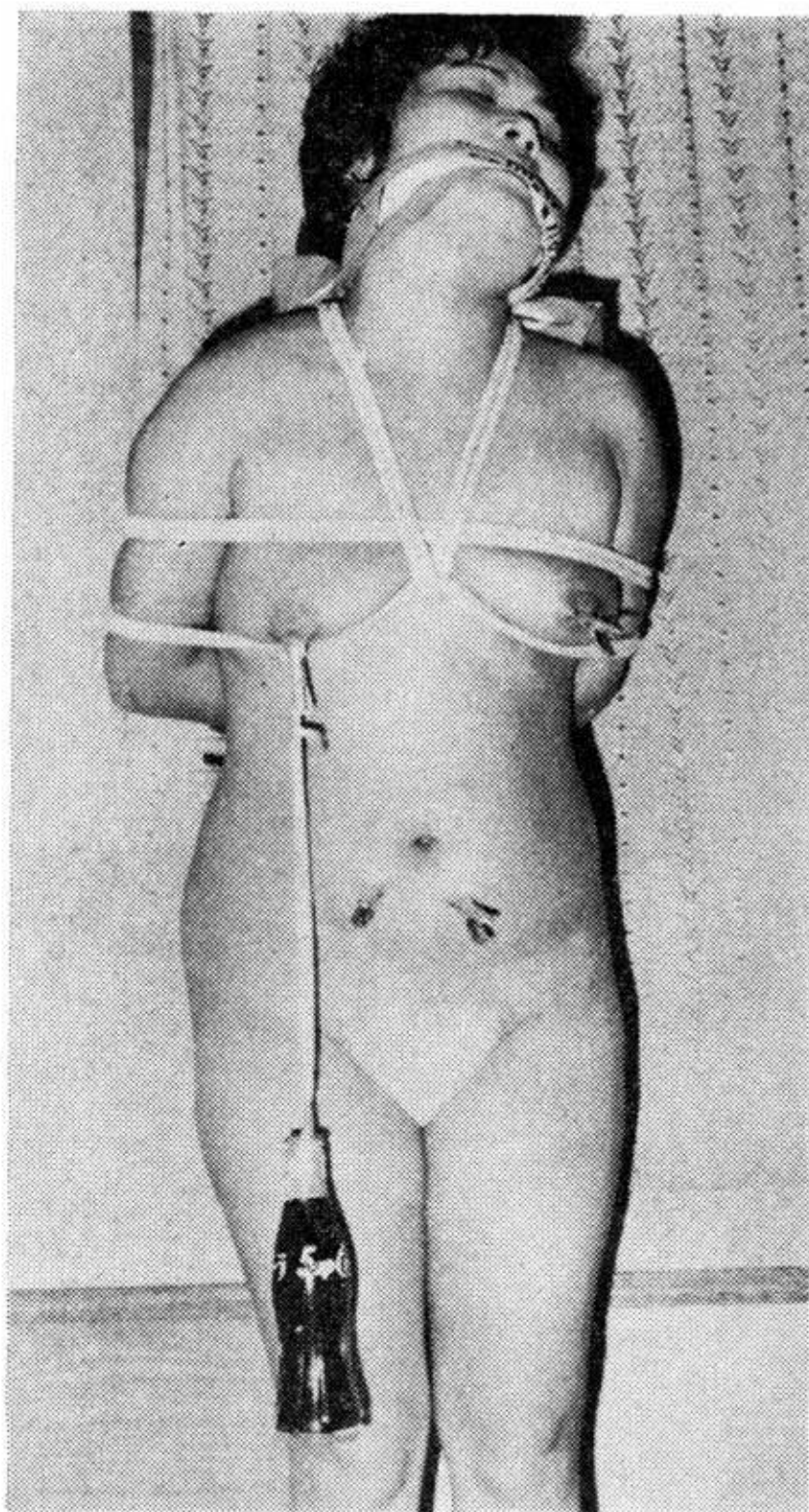
両の乳首を噛んだクリップは、引きちぎるように痛めつけています。その乳首と乳首の谷間へ、熱い蠟涙をたらすのが、私の新しい責めのアイデアなのです。

一滴、二滴と落ちる熱い蠟涙は、妻の乳房と乳房の間の肌を桜色に染めてゆきます。

四肢を縛られているので、みじろぎも出来ない仰向けの身体に襲って来る、熱い蠟涙の責めに、台をききませて、苦しさに身悶えしながらも、妻は決して、「やめて」とは言いません。口をきゅっと、真一文字に結んだ表情にも、むしろ悦虐の笑みを漂わせているかのように見えるのです。

そうした妻の態度を見ておきますと、新しく求める苦痛の世界の中から、より素晴らしい被虐の欲びを探し出そうとしているように思えます。あたかも、その苦痛の限界に、敢て挑戦している悲愴な戦士のようにも見受けられるのでした。

このようにして、妻の被虐の限界をさぐりながら、妻に対する、きびしい特訓プレイを





続けていますが、その底流にありますものは「夫婦交換プレイ」という命題でした。

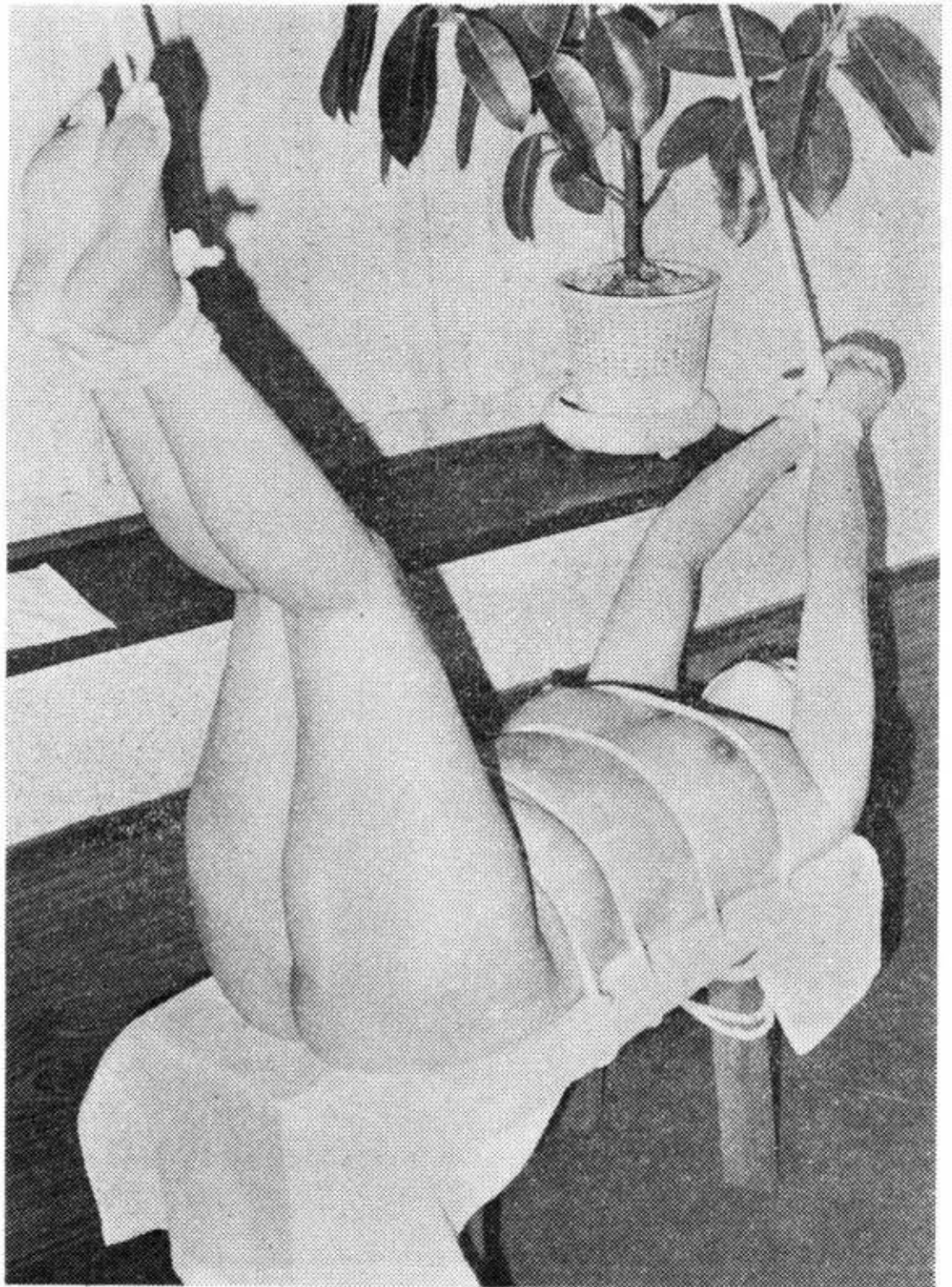
なんといっても、SMプレイの醍醐味は、「交換プレイ」「混合プレイ」それに、「三人プレイ」による羞恥責めによってこそ、最高に盛り上がるのではないのでしょうか。

我が愛する妻が、私の見ている前で、他の男性から全裸になることを命ぜられ、恥かしそうに着ているものを、一枚、また一枚と脱いでゆく……。そんなことを思っただけでも私の胸は大きく張り裂けるようです。

全裸にさせられた妻は、その男性の前で大きく思いきり開股させられ、抜毛によって、ほとんどかげりのない女体を綿密に検査された上で、そばにあるテーブルの上に大の字に寝かされ四肢を縛られるのです。

恥かしさに打ちふるえる妻の身体の奥深く仕掛けられたパイプの洗礼に、性感をゆすぶられつくして、甘い陶酔の余韻を妻は、そんな痴態を、すっかり、その男性の目にさらしてしまふのです。手の爪先から足の爪先に至るまで、すべて見られてしまふのです。

やがて、その男性の手によって行なわれる妻に対する「針責め」「クリップ責め」それに「蠟責め」が妻の肌を華やかに彩ってゆく



のです。私以外の男性の手によって責められる妻は、いやが上にも性感を昂めて、全身を海老のように曲げて悶えることでしょう。

そして、行きつくところは、オシヤブリの奉仕を命ぜられて、唯々として、それに悦びながら従う妻。それは、やがて熱いとろける

ようなセックスにと繋がっていったとしても自然のなりゆきでしょう。

そんな場面を想像しただけでも、私の胸は張り裂けんばかりに昂まりを見せるのです。

妻の心は、唯、私を信じ、私の愛に身も心も捧げつくした結果、私の好むSMの中に全



身を浸しきって、自らも被虐願望の道へと走っていったのです。

そして今、私の示す方向ならば、そこに、どんな苦しくて恥かしい惨酷な責めが待ち受けていようと、あえて、それを甘受すること、私に対する一層、強い愛情を感じとり被虐の悦楽に酔い痴れることの出来る妻にな

っております。

私も、このような妻に対して、限らない、いつくしみの心を深めつつ、飼育妻となつて誠心誠意かしづいてくれる妻の優しい心根により強い愛情を覚えてゆくのでした。

夫婦の間でくりひろげられる激しい数々のSMプレイは、どんな妙薬よりも、ずっと素

晴しい回春剤となつて、二人の心身を極度に燃え上がらせ、こよなき悦楽の淵へと導いてくれるのでした。

まさにSMプレイこそ、私達夫婦の愛情を一層、豊かにさせるための潤滑油のようなものでした。

今は、今回も奇巧の貴重な誌面をお借りして、マンネリに悩む同好者の皆様方に、心から、お呼びかけしたいと思います。このような私達と、親しく交際して頂けるご夫妻の出現を、お待ちしております。

私自身、本年の最大の目的を、「夫婦交換プレイ」の実現に置いております。

実際に行なう場合には、色々と条件や、困難な支障があることと思いますが、それらの障壁を勇敢に乗り越えてこそ、甘美な禁断の木の実を味わうことが、出来るのだと思います。

同好者の皆様におかれましても、深い信頼の念と理解の心を以て、ご交誼下さいますよう念願致します。

相互信頼と理解の心さえあれば、「夫婦交換プレイ」も、必ず良い結果となつて現われることと信じております。



カ  
ット・志  
羽利也

## — 連載・奴隷妻小説 —

## 命 預 け ま す

## — 七の章 家畜妻誕生 —

## — 柴 利 好 —

## 25 小屋と檻

盛夏も過ぎようとする頃、浩介は新吉から何回目かの楽しい便りを受け取った。その内容は春子が、かねがね欲しがっていた別棟が完成したから、その落成式に是非、参列して欲しいという事であった。

浩介には、この招待を断わる理由は更々なかった。否、仮に世間の義理の一つや二つ欠いたとしても、彼は遮二無二、出掛けたに相違ない。それ程、この招待は彼の心を弾ませたのであった。

浩介が牧山家に着いた時、春子は姿を見せなかったが、新吉が例によって上機嫌で出迎えて、開口一番

「奴隷用の別棟が出来上がりました。大分、前から春子が欲しがっていたんですが、中々都合がつかずに、延び延びになっていたんです。此処四、五日、私の身体が空きましたので、自分独りで拵えてやりました」

と元気よく、如何にも得意気に話す言葉に「お独りで？ それは大変でしたね。職人でも働かれたのかと思っていましたが……」という浩介に

「実の処は、それ程の代物じゃあないんです。が。まあ、実物を、ご覧下さい」

と新吉は先に立って庭に降りると、浩介を伴って家の東側に曲がって、指さしながら「ほうれ、あれなんですよ。奴隷専用の別棟というのは」

という。浩介が指さされた方角は風呂場の裏に当たる処で、そこに彼が見出した物は、なんと一棟の金網を張った犬小屋のような小屋であった。事の意外に、いささか驚いて、一旦、立ち止まった浩介を促して新吉は、その小屋に近づくと、南京錠の付いた片開きの網戸を開けて中に這入る。

浩介も彼に続いて這入って見ると、母屋と較べるからこそ随分、小さく見えたその小屋は、片流れの屋根で楽々と大人が立っていられるだけの寸法があった。

小屋の西方は風呂場の下見板を利用し、背面（つまり北側）と東側とは、ベニヤ合板を打ち付けてある。小屋の正面、即ち南側の部分だけが、犬小屋然とした荒目の金網張りである。その右隅の一部が片開きの網戸という設計であった。屋根も板張りだったが、この上に、やがてはトタンかビニール板を張るつもりだとの事であった。

小屋の内部は、畳が三つは楽に入れられる大きさで、その中心から少し左に片寄った、片流れの屋根の高い部分に、一本の独立柱が立っていた。床は入口の半坪弱が地面で、他は全部、三寸上りの板張りになっている。その小屋の奥に木製のベッド様の簡単な長椅子があり、その傍に布切れで覆われたテレビのキャビネット位の大きさの物が一つ、置いてあった。

以上が別棟の全容なのであって、その実体は正に犬小屋に相違なかった。つまりこの小



た。

「おいッ！ お客様の、ご到来だぞ！ 今日  
の別棟落成式を心から祝って、わざわざおい  
で下さったんだから、ご無礼のないようにお  
迎えしなさい」

二人の他には誰もいない筈の、この小屋の  
中で、一体、何をいい出したんだろうと訝っ  
て、浩介は思わず新吉の真面目くさった顔を  
見やるのを意に介せず、この家の主人は、こ  
の時、二人の前に、ある布切れをサッと取り  
払う。なんと驚いた事に、その下から現われ

屋こそ、春子のため  
に新築された奴隷専  
用の飼育室なのであ  
る。浩介は別棟落成  
という前触れから考  
えて来たイメージと  
余りにも掛け離れた  
この有り様を目のあ  
たりにして、意外さ  
に言葉もなく、ボン  
ヤリその場に佇んで  
いると、突然、新吉  
の例の命令口調が、  
その場の静寂を破っ

た物は、鉄格子の嵌まった本物の畜犬用の檻  
であった。しかも、その中には一匹の畜生と  
化した奴隷妻春子が、裸身を三つに折り曲げ  
られ、全身を鉄鎖で縛られた浅ましい姿で入  
れられていたではないか。

「おおッ！ これはなんとした事です。こん  
な処に奥さんが……」

と叫び声を上げた浩介の驚きは、無理もな  
かった。彼が全く想像もしていなかった、こ  
の場の有り様だったのだから。

浩介が最初に訪問した折の炬燵牢といい、  
今度の檻といい、新吉という男は、成る程、  
演出効果を心得た、なかなかの凝り屋であっ  
た。浩介は、一時は驚きはしたものの、新吉  
夫妻のこの悪戯っぽい欲待振りは満更でもな  
かった。ようやく落着きを取り戻して、この  
檻と春子の収檻状態を、仔細に観察する余裕  
が出来たのであった。

中型のテレビキャビネット程の大きさのこ  
の檻は、床が木製の外は、四方も天井も、径  
六ミリ前後の丸棒を組み合わせた、五センチ  
間隔の鉄格子で出来ていた。その鉄格子の巾  
広い一方全体が、左右に開く観音開きになっ  
ていて、その扉の中央で小さな南京錠が掛け  
られている。その檻の中に、全身に鎖を掛け



られた春子が入れられているのだ。が、その有様は、檻の容積が小さいので、無理矢理に詰め込まれたといった方が、当たっている。首から背から、腰から腕、足をば、限界一杯のギリギリまで屈折させて、身体中を丸めて嚴重に縛られているにも拘らず、鉄格子の方々の隙間から、彼女のムッチリした肉体が、はみ出してさえいるのである。

やがて新吉は、ポケットから小さな鍵を取り出すと、扉に掛かった南京錠を開け、鉄の格子戸を左右に全開した。しかし、それだけでは、全身を縛られている春子は、自力では檻から脱出する事は出来ない。新吉は彼女の肌に、まつわりついた鎖の数本に両手を掛けると、グイグイと邪険にも扉の外に引っ張ったから堪まらない。彼女の身体は、そのあちこちを鉄格子に絡ませながら、縛られて丸まった恰好のまま、檻から床に転がり出して来た。珍しい事に、今日は彼女の口に布製の猿ぐつわが嵌められている。荷物のように鎖で縛られて、二人の前に横倒しに転んだなりの春子を新吉は、ゆっくりと引き起こすと、素早い手捌きで、その鎖の縛しめの一部を、順次に解き放って行く。

こうして、三つ折れに身体を曲げるために

巻き付けてあった数本の鎖が、次第に彼女の素肌から脱されるに連れて、ようやく人間らしい形態に立ち戻った春子は、それでも未だ後ろ手、高手小手縛りで、両足までも縛られたまま、やっとの思いで床上に正座出来たのであった。

「ご覧下さい。これが奴隷衣三装の鎖縛りなんですよ」

と、さも自慢気に新吉が披露する。なるほど浩介が今、初めて見る奴隷衣三装は、既にお馴染みの革環による一装とは違って、それは一段と厳しい責め衣裳であった。

細頸を一巻きして下がった細い鉄鎖が、乳房を中心に上体を三カ所も巻き絞って、両脇で二の腕と肘とを強く締めつけている。背中に回した両手首は勿論一つに合わせて、両肘から下ろされた鎖で二巻きも三巻きも締めつけられ、その鎖尻が床の上に一米も余っている。既に胴鎖でキツク締め上げられているウエストには、特別の鎖縛りは施されてはいないが、その少し下の脛辺りには、骨盤に引っ掛かるようにして別鎖が喰い込んでいて、そのやや下方、ふっくらと隆起した下腹にも、同様の別鎖が走っている。これらの厳しい二本の横鎖は、身体の前も後ろも、別の補助鎖

で縦に嚴重に繋がれていた処を見ると、それら前後の補助鎖は、彼女の股間部で接続しているに違いなかった。

更にその下の高腿にまでも別鎖が丹念に巻かれて、上部のヒップを縛った横鎖に連繫している。その上、中腿、膝下、足首の三カ所をも、小緩るもしない位に固く鎖で繋がれている厳しさなので、彼女は裸体の上から下まで、まるで鎖を着ているように見えるのであった。しかも、これらの鎖から外れた柔肌の至る処には、今し方、解かれたばかりの鎖の小さな環形が一面に、赤く窪んだ無残な縞模様を描いていた。

新吉は言葉を続ける。

「何しろ今日は、我々にとって記念すべき日です。ので、奴隷衣も、この小屋に相応しく鎖を着せてやりました。始めの計画では、この奴隷衣三装も、私と貴方と二人して着せてやって、鎖尻を引き引き、この奴隷室に引き立てて来て、檻に入れるつもりでございました。それなのに、奴隷の奴、すっかり気が這入ってしまった、貴方のおいでが待ち切れないんです。かれこれ小一時間も前から鎖衣装を整えて、檻に入れて欲しいといって、せがむんです。その上、猿ぐつわまで要求したのには

びつくりさせられました。私も、それ程、氣の入った奴隷心を察して、鎖三装の上に更に別の鎖を三本も使って、ギリギリに縛り上げて、やっと檻に入れてやったのです。一旦、こうして奴隷づくると、中々昂奮が納まらないもんでしてね。それで、のっけから、この始末なんです。でも、ご覧下さい。奴隷の、さも満足気な表情を。文字通りの鎖縛りの陶醉境とでもいいでしょうか。こうなれば、こっちもこっちです。可愛さ余って、なんとやら遠来の賓客をお出迎えもしなかった罰として今日はこれから二人掛かりで、徹底的に仕置してやりましょうや」

決して怒っていつている訳ではなく、彼自身も心から楽しそうに、そういうと、可愛い奴隷妻の、何時にない陶醉状態を、さも嬉しそうに見降ろす。

その眼下には、猿ぐつわで固く口を塞がれじっと目を閉じ、俯向いて正座し続けている奴隷妻、春子の艶姿があった。縄目と違って不規則な凸凹を見せた細い鉄鎖が、春子の全身に、その滑らかな柔肌を刺し切るように、次第に深く深く埋もれて行くようにさえ、浩介には思われた。

事実、細引ならば縄自体に伸縮性があるか

ら、肉体的な抵抗も、それだけ少なくて済む場合もある。けれども、全く伸び縮みのない鎖で、このように嚴重に縛られると、緊縛の全ての力が肉体に掛かるから、その苦しさは堪えたものではない。しかも、その苦しさを、堪え、忍び続ける事の裡に、肉体と精神との限りのない悦虐を感じるのが、M性の、しからしめる残酷な業なのである。

春子は今、何を思い、何を考えているのだろうか。一匹の牝奴に、なり果てた姿で、奴隷専用の自室を与えられた事の喜びに感激し陶醉し切っているのだろうか。

二分、三分と、そのまま、そこに立ちつくして、春子を飽かず見降ろし続ける二人であった。直ちに次の行動に移るべく、一度は、つもりした彼等ではあったが、初めて味わうこの家畜小屋での異様な雰囲気、二人の男達も、すっかり酔ってしまったらしい。

先に口を切ったのは浩介であった。

「これから、どうなさるおつもりですか。私は何をすればよいのでしょうか。こんなに鎖が酷く喰い込んで来ていますよ。早く解いてあげた方が良くはありませんか？」

心配顔の浩介の言葉に、新吉も成る程というように頷いて、

「全く、これは凄い。奴隷衣三装を、こんなに厳しく施してやったのは、実は今日が初めてなんです。私としたことが、随分、昂奮して縛ったものとみえますねえ。苦しむばかりが奴隷の勤めでもありますまいから、一旦、解いてから又、改めて虐めに掛かりますか」というと、早速、春子の鎖を解きに掛かった。

縄でもそうだが、鎖の場合は尚更、解き方が、むづかしい。一寸、手荒くすると、喰い込んだ鎖の環が、肌を傷つける恐れがあるからだ。ここが本当の仕置とプレイとの心遣いの違いである。今の場合は、鎖の環が肌に喰い込んでいるというより、逆に肉の方が鎖の環の隙間に埋もれ込んでいるといった方が適切かも知れなかった。それだから鎖は入念に、ゆっくりと、一本一本、肌から離すような手加減をしながら解かなければならない。決して鎖を引っ張っては、いけないのだ。

苦心惨胆の思いで、ようやく彼女の全身から鎖を解き終わった時、新吉の額は、汗びっしょりであった。

奴隷衣三装を解かれて、やっと猿ぐつわと胴鎖だけになった春子の肉体の要所には、無残な鎖の締め跡が深々と、くびれた鮮かな真紅の染色を残している。



イメージギャラリー

『宇宙のどこかで』

飯田ひろくに



「美しい！なんて美しいんだろう。野口さん、見てやって下さい。いや、褒めてやって下さい、この美しさを！これこそ、真の残酷美というんでしょうねえ。暫くこのまま、晒しものにして、奴隷の体調をしましょう」

よ。それにしても春子！よくやったぞ！立派なもんだぞ！」

新吉は、感きわまった風情でこう叫んだ。一方、春子は、ようやく自由を許されたが麻痺して思いのままにならない両手を、ソロ

ソロと自身の背後から前に戻すと、膝の上に静かに置いて、じっと見つめた。

その両の首にも、両手を置いた豊かな太腿にも、いつもの、お縄縛りでは見る事出来ない、肌深く鑄込まれたような鎖の環型が無数に連結して、深い条痕を美しく形作っているものであった。

## 26 四ツ這い悲惨

やや暫く経ってから、新吉は

「良い考えが浮かびましたよ。奴隷が、この小屋にいる時は、両足で真直ぐに立ってはならないという規定を作ってみては、どうでしょう。つまり、ここに居る間は犬畜生と同じ態度と心持ちを持たせるんです。いわば、奴隷妻より一段と程度の低い、家畜妻に落とされて暮らす事になる訳です」

と、さも大発明でもしたように、目を輝かせて提案した。

「中々面白そうですねえ。つまり始終、四ツ這いで動き廻らなければならぬんですね。確かに、この小屋に、ふさわしい生き方でしょうが、奥さんが同意なさるでしょうか？」と浩介は一応、賛同しながらも、尚、一抹

の疑懼を表明した。これに対して新吉は、まるで頭ごなしに

「その、ご懸念には及びません。これは別段一命に関わる事でもありますまい？ 自由妻なら、いざ知らず、奴隷妻に、とやこう、いわれる筋は、毛頭ありやしません。全く私の一存で決まる事柄です。私が奴隷妻の持ち主としての専制的權威にかけて否応なく服従させますよ。さてそこで、この一件はこれで決定された事として、形式的にでも奴隷に承服宣誓をさせた方が良いでしょう。それから鎖付きの首輪も着けさせないと気分が出ませんから、それも一緒に誓わせましょう」

と、春子に向かって

「おい、奴隷妻、春子！ 聞いての通りに決まったぞ！ たった今から、直ちに実行するから、宣誓するんだ！」

と命令口調で、たたみ掛ける。それを聞いた春子は、それまで、おとなしく膝に置いていた両手を、直ぐさま、後ろに回して、腰の辺りに組み合わせながら、頭を、殆ど床に着かんばかりに低く垂れるのみであった。普段でも、奴隷時間中の発言は禁止同然なのに、猿ぐつわを嵌められている今の彼女にとって、は、こうする事の外に宣誓応諾の意志を表わ

す術は、ないのである。

この様子に、満足気な新吉は、

「よろしい。良い態度だ。これからも家畜妻として、その根性を發揮して貰いたい。苦しみも、悲しみも、家畜一筋の生活が、この小屋で待っているんだから、今後とも、決して主人の期待を裏切らないように。お前も心から満足の行く暮しを楽しんでくれ」

と一席、ぶち上げた。即席だが、もっともらしい新吉の台詞は堂に入ったものだった。

「首輪を取って来ますから、その間、牝犬の奴が勝手をしないように、よく見張っていて下さい。そうだ。一寸の間だけど、檻の中に入れて置きますか。その方が牝犬も嬉しいでしょうから」

新吉は、そう独り決めすると、開け放しのままになっていた傍の檻に、春子を追うようにして再び押し入れる。そして直ぐさまピタリと扉を左右から合わせて錠を降ろしてから小躍りするように、母屋目掛けて馳けて行った。

後に残された浩介は、流石に春子に対する不憫さが募って来て、檻に近づくと、その前に、しゃがみ込んで覗き込みながら、  
「奥さん！ ご免なさいよ。ご主人は、あん

な風に邪険にいられますけれど、心から奥さんを愛しておられますし、このぼくだって同じ事なんです。まさか、今日、奥さんを、こんなにして犬畜生に仕立てようなんて、思いも掛けませんでした。成り行きで、こうなってしまったんです。許して下さい」

と謝まる。これは全く彼の偽りのない、真心からの言葉であった。

春子は、身体こそ縛られてはいないけれども、小さな檻の中に、如何にも不自由そうに全身を丸めて坐りながら、両手で膝頭を抱え低くかがめた頭を僅かに縦に振って見せた。

顔を上げた時に、じっと浩介を見つめる、猿ぐつわの上にパッチリ見開かれた、彼女の両目の妖しい輝きから、浩介は春子が、この新しく彼女に賦課された呵責を、喜びこそすれ、決して悲んではない事を明白に推察出来た時、内心、少なからず安堵の胸を撫で下ろしたのであった。

その時、せわしない庭下駄の音がして、新吉が首輪と革鞭一本を持って戻って来た。

「如何でしたか？ 犬めは、おとなしくしていましたか？」

と浩介に笑い掛けながら、彼は春子を檻から引き出すと、早速、使い慣れた首輪を彼女



の細やかな頸根に嵌めた。そして、さっきまで彼女を縛りつけていた、長い鉄鎖の一本を取り上げると、それについている茄子環を、首輪の止め金具に繋いでしまった。

「狭い小屋の中に長い間いると健康上、良くありません。牝犬を少し散歩させましょう。さあ、おいで」

新吉は、そういうと、まるで本物の畜犬でも曳き連れるように、鎖を左手に持ち右手に革鞭を取って、さっさと小屋から出て行く。鎖を引かれた春子は否応なく、その後について行かなければならない。

彼女にとって、こういう事が初めての経験かどうかは分からないけれども、少なくとも浩介の見る最初の四ツ這い姿で、彼女は小屋から出るには出た。が、庭の土に手と膝をついたとたん、ピタリと、その動きを止めてしまった。従って新吉に引かれた鎖が、彼女の瞬の動作停止でピンと張り切って、新吉は急に、その前進を遮られた。

「こら、どうした？ そのまま四ツ這いを続けるんだ。四ツ這いは小屋の中にいる時だけじゃなくて、家畜でいる間中、そうしていいくっちゃならない事位、分かってるだろ？ お前は牝犬なんだぞ！ 分かっているな」

新吉は、こういう棄てると、尚も鎖を強く引き引き、歩を進める。春子は致し方なく、四ツ這いを続けて、彼の後を追う。それは首を鎖で引かれ、両手を前に突き出し、両足は膝を折って、膝頭と足の甲で地面を擦るような恰好で、お尻を高く上げている、ぶざまな畜生の姿であった。

浩介は、その哀れな彼女の後を追う気にもならず、母屋の向こうに曲がって見えなくなった二人の、否、一人と一匹の後を見送って独り小屋の中央部に戻ると、春子に対する憐情が無性に募って来るのであった。

この感情は、彼女が奴隷妻でいる間には、決して感じられなかった気持であった。仮に彼女が、どんなに惨たらしく縛り上げられ、吊るし上げられていても、これまででは、そこに少なくとも一人の人間として、新吉という男の妻としての人格が立派に存在していた。しかし今、一匹の牝犬と化した彼女は、最早人間としての地位も誇りも、全て奪い去られた家畜でしかないのであった。それが、ある一定時間を限ったプレイであるにしても、この人を人として遇しない取り扱いが、夫婦の仲睦まじい交渉の一方法として、果たして適当かどうか、浩介には疑問に思われてなら

ないのであった。

ややあって、新吉は鞭を片手に独りで小屋に戻って来るなり、

「どうしました。一緒に見にいっちゃればよかったのに。良い見物みものですよ！ 牝犬は矢張り良い素質がありますねえ。これからが楽しみですというものです。良い奴隷妻であると同時に、きっと良い家畜妻になってくれるでしょう。否、必ず、そうして見せます。今日は初めての経験ですので、余り無理させたくありませんから、一回り庭を回って、桜の木の下の杭の根方に、繋いだまま休ませて来ました」

と一息に元気良く喋ってから、尚続ける。「ところで、この小屋ですが、内張りやら、屋根葺きも、しなければなりませんし、雨に備えて、金網の処も、なんとか雨じまいが必要ですよ。いやはや大変な大仕事を請負わされたもんです。春子の被虐性向は、もう被虐妄想にまで進んで来ているんでしょうか。今なんかも、犬畜生になった気分、すっかり浸り切っている様子ですから、全く驚かされます。本人は、これで楽しみが又、一つ増えた訳でしょうが、私の方は、前より以上、仕事が増えるし、その上、春子の身体からだの事、健

康の維持や外傷の防止とかに気を使って、大変な苦勞を背負わされてしまいました」

と、いささか悄気々味で話した後、彼は急に口調を改め、

「私が、春子に心から惚れ切っている気持はお分かりでしょう。一度だって、愛おしく思わない時はありませんもの。それが証拠に、一緒になってから他の女には一切、見向きもしていません。本当の話ですよ。それなのに私はどうしてこんな風に春子を虐め抜かなければならないか、正直、自分でも理解出来ないのです。まあ、立ち話もなんですから、この台にでも、お掛け下さい」

と浩介を促してから、自分は、さも疲れたという様子でドサリと檻の上に腰を降ろすと更に話し続ける。

「男が女を愛する方法には、人により、色々あります。が、私は今までも敢えて春子の望むがままに、縄の力を借りて愛し続けて来ました。私にも、そうする事が一般常識から外れた行為である事位、充分、分かっています。しかし特殊な性向を持つ二人の愛の絆を強める手段としては、已むを得なかったものと今でも思っています。しかも、その縄による愛撫にも限界が来てしまっている事を、

ようやく近頃、考えさせられるようになっていました。その矢先、春子の方から今度は、この小屋の事を発案して来ました。自分から進んで犬畜生にまで身を落として暮してみたといえ、いい出したんです。小説なんかでは読んだ事もあります、実際に愛する妻にまさか、そんな暮しを、させようなどとは私は一度だって考えた事はありませんでした。ですから、この件については、私も随分、迷いもしましたし、二人して散々議論もしました。けれど春子は、全く頑固に自分の主張をいい張って譲らないんです。M女の執念とでも、いうのでしょうか。事自分のS・M生活に関する限り、絶対に自己主張を通そうとするんです。結局、二人して、あれこれ談合した揚句、実行に決まって、計画も一緒に練りました。その結果、別室は、ご覧のように、家畜小屋であると同時に、奴隷妻の仕置室をも兼ねた物になったのです。ここで一寸、お断わりして置きますが、四ツ這いにさせたりその恰好で外に連れ出したりする事も、私独りで考えたのではなく、二人掛かりで前もって決めてあった事だったのです。それを芝居気を出して演技したという訳なんです。小道具も、まだまだ色々取り揃えなければな

りません。今、貴方が掛けてらっしゃる変な台は、春子が考案した仕置台です。寝台じゃありませんよ。真中一枚の細い板ですが、両端は細枝を二枚並べて蝶番で止め、夫々左右に割れる仕掛けになってるんです。この長い方が足を乗せる方、反対側は頭や上体が来ます。これに春子を寝かせて、縛りつけるのですが、横にして置くばかりでなく、両端の部分を開いて立てればX型に近い磔柱にもなるんです。そのために台の裏側には、縄の滑り止め用に、切り込みをつけてあります。今私の掛けているこの檻は、私がデパートの家畜売場で見つけて来た物です。まるで春子の身体に合わせて眺えたようにキッチリ寸法が合って、中に這入ると殆ど身動き一つ出来ない位です。これが春子の氣に入って、買ってから今日で十日目だというのに、昨日までにもう三回も入れてやりました。いつか、お目に掛けた金網の方も、奴隷妻用として引き続き今でも使っていますが、この檻は、さしずめ家畜妻用の懲戒具とでも、いうのでしょうか。

それから、この立ち柱は、普通のより、幾らか細目の物を選びました。柱の背後に腕を回わして縛った場合、この方が腕に無理がな



く縛れるからです。板壁の内張りが終わった  
ら、方々に太目の鉄の丸環を埋め込んで、床  
にも、そうして鎖繋ぎを、してやるつもりで  
す。戸外運動で汚れた身体を始末するため  
にこの風呂場との境の下見板を一部、削りぬ  
いて、潜り戸を付ける事も考えています。そ  
うすれば、この小屋へも外を回らずに連絡出  
来て便利になります。欲をいえば限りがあり  
ませんから、設備の方は一先ず、この位にし  
て置いて、問題は奴隷妻の家畜化を、これか  
ら、どういう風にして実行するか頭の痛いこ  
ろです。おやっ、雨が降り出していますね。  
道理で急に暗くなったと思った。まだ、そん  
な時間じゃないですものねえ。奴隷の奴、否  
違った、牝犬の奴、どうしてやがるかなあ。  
まあ今日は、この小屋使用の、めでたい初日  
なんですから、折檻は程々にして、部屋に戻  
って、そろそろ、お祝いでもしましょうや」  
と、彼は気を取り直すようにいうと、元氣  
よく立ち上がった。

浩介と新吉とが、急いで庭に回って見ると  
家畜妻春子は、新吉の先の言葉の通り、庭の  
西側の桜の根方に打ち込まれた一米足らずの  
棒杭に、首輪の鎖を繋がれたまま、地べたに  
キチンと坐って、悄然と項垂れていた。そも

そも、この棒杭は、この家の元の住人が、そ  
の飼犬のために立てた本当の犬繋ぎ用の杭と  
いう、曰く付きの代物なのであった。

何時から降り出したのか分からない小粒の  
雨足に、全身は濡れそぼち、水気を含んだ地  
面に、ピタリと両足を揃えて正座している  
彼女。その肌には依然として鎖の鋳型が、何  
時消えるとも知れない、紅い縞目を見せてい  
る。固く嚙まされた猿ぐつわのため、いつも  
使用を許されている奴隷語「ご主人様、お許  
しを！」と叫ぶ術をも奪われた悲しい家畜妻  
春子。双肩を落とし、両手を、おとなしく膝  
に置いて、只、黙然と犬繋ぎの責めを甘受し  
ている彼女の姿は、雨中に佇ち尽し、陶然と  
した面持ちで眺める二人の男達にとって、い  
つももの凄まじい折檻の時とは違って格別な、  
美しさに満ち、堪まらない程、可憐に思われ  
たのであった。

## 27 嗚呼！ 鎖下着

それから一カ月近く経った時、浩介は新吉  
から部厚い手紙を受け取った。いつもは葉書  
一枚に招待の日時を記しただけの簡単なところを、  
珍しく念入りに、数枚の絵まで添えて

あるのだった。

その内容は、奴隷室と風呂場の境の潜り戸  
が完成した事。そして、その潜り戸が出来て  
以来、春子は少しの暇でも、すぐこの小屋に  
這入り込んで、独りで物思いに耽ったりする  
事。更に時には、自分で裸になって首輪を嵌  
め、鎖で責め柱に繋いだり、犬檻に這入って  
楽しんだりしている様子が、事細かに記して  
あった。添えられた絵は、彼女の家畜妻姿の  
スケッチで、その筆致は流石にプロらしく生  
き生きと、その光景を捕えていた。

彼女はその上、夜は夜で裸の首輪姿のまま  
コッソリと小屋を脱け出しては庭中を四ツ這  
いで這い回ったりする凄まじい近頃で、自ら  
求めた畜生道ではあっても、そんなにまでし  
て自分を虐めつけなくてもよさそうに思う、  
と新吉は述べた後、これから先、彼女は一体  
どうなるのだろうか。何処まで彼女のM性向  
が進行して行くものか、心配で堪まらない旨  
付け加えてあった。

こうして新吉が長文の手紙をくれた事自体  
が、いつもと変わっているところへ、その内  
容から異様なものを感じ取った浩介は、居て  
も立ってもいられない気持で、再度、案内な  
しに牧山家に出掛けて行った。

相変わらずの無用心さで、玄関の戸は錠が掛かっていなかった。勝手知った浩介は直ぐ開けて中に這入り込んだ。この時、その気配を察したらしい様子で玄関先に現われたのは、春子であった。

彼女は珍しく割烹着姿で、如何にも甲斐甲斐しく見えたのに、浩介はホッとした思いであった。というのは、今度の新吉からの便りの内容も、さる事ながら、例のいつかの、柱に縛り付けられていた時の彼女の印象が、未



イメージギャラリー

『火花散る悦虐』

岡

たかし

だに目先に、ちらついていたからであった。折柄、春子は台所仕事の最中であつたらしく、濡れた手を割烹着の前で拭きながら浩介を出迎えた。

春子という女は、殆ど一日として縛り目を受けない日はない。それも、その一日の内、縛られている時間の方が、自由でいる時間よりも長い奴隷妻の生活であるにも拘らず、日常の家事一切を、実に小まめに鮮かな手腕で独りで切り回しているものであった。これは、かねがね浩介が心から感心している事柄であった。夫婦の衣類は、いつも小ざっぱりと良く手入れが行き届いていたし、狭くはあるが家の中の掃除や整理整頓も完全だった。庭の隅々までも綺麗に清掃されていた。これ等は一家の主婦として、当然、負わなければならぬ家事の一端に相違なかったが、彼女の置かれた特殊な環境からすれば、並々ならぬ努力の結実である事が、浩介には思い知られるのであった。

「お仕事中だったんですね。突然お邪魔して済みません」

悪い予感ばかりが頭にあったことを照れながら、浩介が、そう切り出したのに対して、相手の春子は、いつになくソワソワした様子



で、何故か尻込みする素振りを示す。それを訝って、浩介が訳を訊ねようとするのを逸早く察した春子は、機先を制した風で

「お訪ね下さる事が分かっていましたら、もう少しは、ましな身なりをして、お待ち致しましたのに。いつもいつも、失礼な恰好ばかり、お目に掛けて、申し訳ございませんわ」と詫げる。

「何をいうんですか。一家の主婦が割烹着で働いて、何がいけないもんですか」

と浩介が取り繕うと、彼女は、すかさず

「なにもかも白状致します。……私、この下に何も着ておりませんのよ」

「ということは、全然肌着なし……?」

念を押す浩介に向かって、春子は静かに、

「はい。お察しの通りです。私、今日一日、こうした態のまま過すように、主人から申し渡されていますの」

と、しおれて見せた。

「しかし、おかしいなあ。今の奥さんは自由妻の時間とは違うんですか?」

と、この夫婦限りの合言葉も、今はすっかり板についた感じの浩介の質問である。

「まあ、野口様ったら、自由妻だなんておっしゃって。反って私、恥かしゅうございます

わ。実は私、現在は自由妻どころか奴隷妻より、もっと低い家畜妻に落とされているんですもの」

「そういわれても私には、よく意味が分かりませんが。その割烹着が、家畜妻の制服という訳でもありますまい?」

と、至極もつともな浩介の質問に答えて「おっしゃる通りですわ。割烹着だから、どうこういう訳ではございません。野口様には何一つ、秘密には致しませんわ。何もかも包み隠さず申し上げます」

そうキツパリと言いつつ切った春子は、それまでのオズオズした態度を一変して、いつもの明るい様子に戻った。そして後ろ手で、まさぐりながら、背中の上下の紐を解くと、件の割烹着をスッパリと、その場に脱ぎ棄てた。

その春子の姿を見て、浩介が又しても度肝を抜かれたのも無理はなかった。彼女の上半身は丁度ブラジャーを着けているべき部分一面を、細い鎖で縛られており、パンティーを穿いているべきヒップ全体にも、上体と同様、細い鎖が嚴重に施されていたからである。

一瞬、たじろいだ浩介だったが、直ぐ様、気を取り直して、彼は無遠慮に春子に近寄って、仔細に観察し始めた。

『奴隷調べ』や『お縄改め』で、彼からの、こうした観察を受ける事に慣れた春子は、悪びれた様子もなく、黙って佇立しながら、いつも、し慣れた、後ろ手の奴隷妻の姿勢をとると、相手の視線を受け止める。

両の乳房の付け根を、それぞれ円形に鎖が取り巻き、それを基本として、上下左右に延びた鎖が、肩、背中、鳩尾の辺りを厳しく締め上げている。それらの幾筋もの鎖の小さな環の一つ一つは、肌に、めり込む程、ギリギリに強く縛られている。下腹や臀部に掛けても、臍下から高腿近くまでの骨盤全体を、幾筋もの鎖が、縦に横に、或は斜めに、鎖が肌深く没する程、キツク締め上げている。その内でも、腹の中心から降ろした二本の鎖が背後に回り、その鎖尻が臀の辺りで決るように結束されてあるのが印象的だった。しかも、この胴体の上下を締め上げた、鎖衣裳の中間に残された胴中には、別の胴鎖が、只でさえ細々と、くびれている彼女の細腰を絞り切るかのように、それだけが上下の鎖とは別箇に単独で、飽くまでも版しく、相交わらず、嵌め込まれているのだった。

「随分キツイ、鎖縛りですねえ。さぞ苦しいでしょう、奥さん! 奴隷衣三装とも、少し

違うようですが、どういう、性質のものですか？」

との質問に答えて、

「主人は、これを鎖下着と呼んでいます。上下を別々にいえば、鎖ブラジャー、鎖パンティ―とでも、いうのでしょうかしら」

と意外に嬉しそうな春子の様子に、幾らか気の休まった浩介だが、余りに酷い鎖の様子に心配しながら、肌の手を触れて入念に調べて見る。それ等の鎖の一本一本は、全て肌深くビッシリと締め込まれていて、何処にも少しの締め緩みを発見出来なかった。鎖は全てペンチで丹念に工作されていたので、鎖同志を紐のように結び合わせた箇所は見当たらない。それらが、どういう順序で、どういう具合に締め込まれているのかも、浩介には勿論見当がつかないのであった。

一通りの『鎖改め』が終わった頃を見図って春子は、

「此処で、いつまでも立ち話でもございませんわねえ。どうぞ奥へお通り下さいましな。丁度、ここも一段落したところですから」

というと、台所の床に落とした割烹着を拾い上げ、それを再び着ようとはせず、裸のまま、それでも玄関の戸締まりだけは済ませ

ると、彼を促して炬燵部屋に導いた。

「奥さん。無様な質問で恐縮ですが、この鎖縛りは、ご主人の発案ですか？ それとも奥さんの？……。又、どういう理由で、こうした縛りを受けているんですか？」

席に着くや否や、半ば訊問に近い調子で迫る浩介の氣勢に、春子は宛も、それを予期していたかのようにニツコリ笑みを浮かべると再び奴隷妻の姿勢をとりながら

「勿論、発案は私奴にございます！ 家畜妻に落ちぶれ果てた私に、一番ふさわしい衣裳として、この私奴が、ご主人様に特におねだり致しました」

と、さも得意然と胸を張って見せると、更に言葉を続ける。

「私は、専用のお仕置部屋を兼ねた奴隷室を作って戴きましたし、家畜になるための檻まで用意して戴きました。初めの計画では、檻に入られる時だけ、鎖で縛られるつもりで何回か、やってみましたけれど、檻から出されて四ツ這いで、お庭を歩かされたり致しますには、やはり奴隷妻のままでいるよりは家畜妻でいた方が自然らしく思われました。それで奴隷室へは鎖付きで引かれるように決めたんです。が、鎖は縄と違って解いたり縛つ

たりが、とても面倒なんです。それで、いっその事、いつでも家畜妻になれるように、こうして素肌に鎖の衣裳を着けていた方が、第一、便利ですし、それに気持の上からも、その方が良いように思ひまして、こうしていつも着せて戴く事に致しましたの。同じ鎖縛りでも、さっきおっしゃった奴隷衣三装とは違って、一つ一つ巻いて縛るのじゃなくて、初めから鎖の長さを身体に合わせて止め合わせであります。ですから見た目の複雑さの割には、簡単に着けられますわ。背中と腰の処で小さなノット・リングで締め込むんです。この鎖下着も、胴鎖同様、自分勝手に脱げないよう、錠を掛けて戴くように、お願いしてあります。奴隷妻の分際ですもの、ご主人様のお許しなしに勝手する気持は、毛頭ございませんから、一旦こうして着せられました上は錠が掛かっていなくても、自分で脱ごうなんて気は更々起こしはしません。ですけど、気持の上では、やはり本当に錠を掛けられた方が、身も心も引き締まって一層、楽しい思いが致しますもの。実は、この鎖下着は今朝、初めて着けて戴いたばかりなんです。その記念に今日一日、他の物は一切、着る事を許されずに、割烹着だけで暮すように命令された



ばかりでしたのよ。ですから私、驚きましたわ。何故って、突然、野口様が、お見えになりましたでしょう。てっきり貴方様へ、お知らせが届いていて、何もかも、ご存知だったんじゃないかと思いましたわ。そうじゃありませんでしたのねえ。外出の時は、この上に着物を何か着させて戴ける筈ですけど、他の下着類は、きつと、お許しが出ないと思いますわ。こうして今のように、この家の中に居る間は、とにかく自由妻なんです。それをご主人様の、ご意向次第で、奴隷妻にされたり、家畜妻にされたり、ご奉仕の方法が変わって来るわけです。その変身の準備として、何時でも身も心も捧げられるように、奴隷妻の証としてこの胴鎖は随分、前から、こうして細腰に嵌められておりますし、今日からはこのように家畜妻の証を全身に限なく、お受けして暮らせるようになりましたの」と、さも嬉しくて堪まらない素振りで、春子は軽やかな口調で話すのであった。

## 28 牝奴の恋は悲し

彼女の告白を通じて、そのM性の進行振りが、浩介にも良く呑み込めたし、成る程、新

吉が心配するのも、もっともと理解された。そこで彼は、その新吉の意向を代弁するかのよう、声を励まして彼女の暴走を、なだめに掛かった。

「それにしても、なんですねえ。別段ご主人が強制されている訳でもないのですしたら、何もそんなにまでして、ご自分を虐げなければならぬ理由は、ないじゃありませんか。立ち入った事を申しますが、貴女のような性向の方は、一般に、その傾向が止めどなく進行して行くように聞いていますから、これから先、貴女も余程お気をお付けになって適当なところで、といっても、どの程度が適当だといえるのか分かりませんが、要するに、良い加減で止めて置かれなないと、取り返しのつかない事になりますませんか。なんたって貴女も生身なんだから、お身体に障りますよ。勿論、ぼく自身も、こんな説教がましい話をする資格のない事は分かっています。あの浅草のショー以来、貴女が縛られたり、責められたりするところを拝見するだけなら、まだしも、この頃じゃあ、ご主人と一緒にあって乱暴の限りを働いているんですものねえ。思えば身勝手な男ですよ。このぼくは。でも、貴女の身体を案じて申し上げている事だけは諒

解して下さいよ。ご主人だって、貴女を愛すればこそ、色々の折檻の内にも苦心を重ね、気を配って下さっているのでしょう。私だって同じです。貴方の美しさにひかれればこそこうして、お邪魔しているんですから、何は措いても、身体だけは大切になさって下さる事を、お願いしますよ」

条理の通った浩介の言葉に、心を動かされたのか、春子は、しみじみとした調子で「ありがとうございます。奴隷妻に過ぎない私のような者に、そんなにまで、お気を使っ

て下さいまして、ご好意は心から感謝致します」

と礼を述べた後、ややしばらく押し黙っていた春子だったが、意を決した風で、急に改まった語調で語り掛けて来た。「私、今此处で、はっきりと申し上げます。野口様！ あの浅草の舞台裏の楽屋で、初めて貴方様にお会いした時から、貴方様は私にとって、忘れる事の出来ないお方になったのです。あれ以来、私はいつも、お会いしたい。お目に掛かりたいと願ひ続けました。残酷ショーが何処かに掛かって、牧ハルカという名が、お目に止まったなら、貴方様は必ず又、私を見にいらして下さるに違いないとも

思ったものでした。けれ共、その願いが実現する機会には、なかなか、恵まれませんでした。それで私は女の浅智慧で私に対する複数責めを主人に提案してみたのです。そして私の意中の方が、必ず来て下さるに違いな

いという、この計画は見事、成功しました。それから後の事は、今更お話するまでもございませう。野口様は、連絡を差し上げる度に、必ず足をお運び下さいました。優しいお人柄は初めから、よく承知しており



イメージギャラリー

『起きあがり小法師?』

三鷹 I・C

ました。永年、多くの男性に接して来た女の経験とカンでございましょう。主人も、すっかり野口様を、ご信用申し上げ、いいえ、ご尊敬致している様子です。私はこの様にして二人の好きな男性から、我が身を責め苛まれる幸福感に、浸れる事になったのでございます。しかも、お二人共、私を心から愛して下さっている。その意味で私の幸福は、今が絶頂かも知れません。でも私には、私なりの不満もあるにはあったのです。贅沢な申し分ですけれど、貴方様と二人切りで過ごしたいと思う時にも、貴方様のお傍には、いつも主人が連れ添っておりまして。複数責めを要求したのですから、これは当たり前で、致し方ない事でもあります。それが私には不満だったのです。ああ! 忘れもしませんわ。野口様が二度目のお出での日。偶然にも私は貴方様と、たった二人切りでお話する機会に巡り合いました。覚えていて下さいますでしょう。私は、あの時、その玄関脇の柱に裸で雁字搦めに縛りつけられて、まる一日、お仕置を受けている最中でしたわ。そして、そのあられもない態のまま、長い時間二人で過ごす事が出来たのです。あの時はとても嬉しゅうございました。そして本当に



貴方様が、どんなに、ご立派なお方かを、はつきり知る事が出来たのでした。大抵の男性ならば、裸で縛られた女を見れば、そこで何をするか知れた事でしょう？ それなのに貴方様は何もなさいませんでしたわねえ。正直に申しますと、私はあの時、貴方様の唇をお受けしたいと、心待ちに望んでおりましたのよ。私って本当に馬鹿な女、いいえ馬鹿な牝犬なんですわ。きつと貴方様は軽蔑なさるに決まっています。でも、いいの。私は野口様が好き。好きで好きで堪まりませんの！」

一気に気持を吐き出した春子の両睫に、急に光る物が溢れて来た。その刹那まで、炬燵の傍で浩介と対座して、つつましくかに話しかけていた彼女は、俄に感情のバランスを失ったように思われた。いきなり浩介の膝元にいざり寄ると、上体を投げ出すように、露わな裸身を持たせ掛けた。初めて見せた春子のこの狂態に途惑った浩介は、鎖でキラキラ光る彼女の肉体の重圧を、やや持て余し気味に両腕で押し止めると、

「一寸、待って下さい、奥さん。そう昂奮なさらずに。私だって木の股から生まれて来た訳じゃない。貴女が好きだからこそ、貴女を虐めに何度となくやって来ているのです。軽

蔑だなんて、誤解なさらないで下さい。私は貴女を愛する気持では、ご主人に、ひけを取らないつもりですが、だからといって、決して貴女とご主人との睦まじい恋中を割こうなんて大それた量見は微塵もありはしません。

もし、こんな処を、ご主人が、ご覧になったら、貴女、どうなると思います？ ここは冷静に考えなければ、いけませんよ。殊に貴女には、現在のご主人に対して、何一つ不満はお持ちじゃない筈でしょう。お話を伺って貴女のお心は、よく分かりました。お礼は私の方から申さなければならぬ筋のものです。よ。現在の私の立場は、貴女と、ご主人との三人して複数責めという、少し変わった趣向かも知れないけど、そのプレイを大いに楽しんでいれば満足なんです。これは男らしくない卑怯なやり方と、お考えかも知れない。しかし私も、ご主人の私に対する、絶対といって良い程の信頼を裏切る事は出来ません。貴方のお心は嬉しく思いますよ。とはいえ、この事だけは、はっきりお答えして置かなければなりません。よろしいですね？」

そうキツパリと云いはしたけれども、浩介は、さすがに春子を想う恋心を偽れず、遂に堪え切れなくなった。恋情を掻き立てられた

彼は、あられもなく裸身を投げ出して迫る春子の upper body を、いきなり力一杯、抱き締めると彼女の柔らかな黒髪から項に掛けて、激しい接吻の雨を降らすのであった。

## 29 畜生の首輪繋ぎ

一匹の牝犬に堕ちてからの春子の生活は、表面は以前と、さして変わりはないように見えた。しかし着衣の下には、昼夜の別なく、鎖下着が残酷な程、厳しく、肉体の要所を無残に締めつけていた。この緊縛の苦しさは、彼女にとって、従来の胴鎖一本だけだった時分とは比較にならなかつたけれども、彼女はその苦しさを一言も、新吉に訴えはしなかつた。勿論、それは鍛えぬかれ、縛り慣らされた春子なればこそ、出来た事であつた。

鎖下着を着用し始めて数日後から、彼女は寝る間も首輪を着けて、鎖に繋がれて床に入る事に決め、直ぐ様、それを実行した。彼等夫婦の寝所は六畳間であつた。この部屋での就寝の方角は、南の廊下側を上として、台所側を下として考えるのが常識的で、二人は従来、この常識に従って就寝していたのであつた。ところが、春子が首輪をつけて寝るよう

になったその夜からは、彼女だけが北枕で、つまり彼女の頭部が、新吉の足元に来るような、互い違いの方角を取る事になった。

何故こんな奇妙な寝方を、し始めたかといえば、それには彼女なりの理由があった。仮に彼等の寝室が洋式のベッド生活だったら、

一匹の牝犬春子は、恐らくベッドの下に首輪を足にでも繋がれて、その場に踞って寝るところだろう。が彼等にはベッドがない。そこで、せめて主人の足元に踞まって寝たいというのが、彼女の家畜妻としての決意なのである。それでは首輪を何処に繋いだかといえば六畳と玄関と台所とを区切る、例の柱に繋ぐ事にした。この柱なら台所にも、トイレにも近かったから、極力、短い鎖の長さで、狭い行動範囲内で、何かと用足しも出来る利点があったからである。しかし、若しも夫婦間の愛撫の時のように、色々な奉仕を要求される場合は、その時に限って例外的に鎖を柱から解かれるようにした。

柱繋ぎのまま就寝するようになった春子はやがて、その上に手足の自由さえ奪われて寝る事をせがんで、それも許可された。もっとも、これには新吉の奇矯な潔癖性にも原因がないとはいえないかも知れない。というのは

かつて新宿で、縛られたままの春子を愛するのを好んだように、彼は、しどけなく寝乱れた女の姿を厭わしがる習性があったようだ。それ故、春子は寝る間も両手首を後ろ手に縄や鎖で縛られ両足首も同様に酷い時は膝頭さえも固く括り合わされ横向きに寝かされた。

春子の日課の内で、この首輪の鎖が柱から解かれるのは、朝の仕度が出来上がり、奥の間で夫婦差し向かいで朝餉の膳に着く時である。それ故、彼女は前夜、就寝した時から、そのまま引き続いて数時間、首輪で柱に繋がれ通しているのである。若しも新吉が、わざと意地悪くて、朝その鎖を解く事を許さなければ、彼女は自分の食事を、台所の板の間に坐って独りで摂らなければならなかった。そんな時、新吉は当然、自分の膳をセルフサービスで奥の間まで運ばなければならぬ。とにかく新吉の許しがあるまでは鎖の長さの範囲内だけが彼女の生活領域の限界になった。このような牝犬としての厳しい生活が始められてからも、春子は生来の綺麗好きと几帳面さから、自由妻として与えられた僅かな時間の全てを、家事に専念した。従って、夫である新吉の實際生活には全く支障なく、万事を遣り終えたのは立派であった。

新吉から浩介に宛てられた手紙にもあったように、風呂場と犬小屋との境が自由に通れるようになってからは、春子は寸暇を割いて小屋に入り浸るようになった。漫画描きの仕事に疲れて一服しながら、何か用事をいい付けようと新吉が妻を呼んでも、従前なら、隣室か台所の方から、必ず愛らしく答える春子の優しい声が返って来たものであった。それが近頃は、と絶えたように新吉には思われて寂しかった。そんな時、風呂場の潜り戸から小屋を覗いて見ると、彼は何時も、そこに牝犬と化した妻の姿を発見した。

犬小屋南側の金網部分の雨じまいは、未だに処理が出来ていなかった。それ故、雨が降ると、荒い金網越しに、容赦なく雨滴が小屋に降り込んで、床一面を濡らした。そんな時でさえも、一度牝犬づいたが最後、家畜妻春子は、鎖下着だけの裸身を、責め柱や責め台に鎖で縛り付けては、寒さに打ち震えながら家畜の試練に堪え続けているのであった。そうした時の春子の顔は、全く血の気が失せたように青白く変わり、空ろに見開かれた、特徴のある大きな目だけが、鋭く輝きを増し、まるで人間離れのした、変貌振りを示していた。こうした只事とは思われない彼女の狂態



が、余りに頻繁になって来たので、新吉は彼女の小屋行きを制御する必要を感じた。

小屋への逃避といったところで、その事が春子の新吉への愛情の変化を意味するものではなかった。彼女が本当に、いじらしいまでに夫に尽し仕える真情を、新吉は心から愛しく思い、寧ろ哀れに感じる事さえ屢々であった。従って彼には彼女の小屋への逃避が、彼に対する反抗とか、夫婦生活の倦怠からではないらしいと判断していた。それでは何故？なんのために？という点になると、新吉には全く思い当たる節がなく、その真因を図り兼ねた。しかし、とにかく彼女が発案したこの小屋が、すっかり気に入って、喜んで利用しているには間違いない位に簡単に考えていた。只その小屋行きの度数が余りに多過ぎるのが彼にとって当面心配の種なのであった。

ある一宵。その日の家事が一段落して、春子が、ようやく落着いた頃を見計って、新吉は彼女を呼んだ。彼女は鎖下着の上に普段着のワンピース姿で、その場に小さく坐ると、首項垂れて畏まる。

「春子！ 俺はこれまで、お前がして欲しいと望んだ事は、出来るだけしてやって来た。

その鎖下着もそうだし、小屋だってお前を思

えばこそ拵えてやりもした。お前が、そういう物を喜んで使っていてくれるのは、俺だって嬉しい。現にこの俺だって、それ等の物で色々と楽しませて貰っている事も事実さ。だが、どんな事にも限度というものが必要だと思ふんだ。それを近頃のお前ときたら、どうだろう。まるで物に憑かれたように小屋に入り浸っているようだが、一体どういう了見なんだい？ もうそろそろ冬も近いというのにあれじゃあ身体の方が参っちゃうんじゃないか？ 病気にでもなったら大変だよ。俺だって何もお前が、そんなにまで好きでする事を邪魔立てする気はないさ。だが、今みたいに小屋に、のべつ入り浸る事は、いい加減にしてもらえないかなあ。鎖で繋がれたければ、いつでも繋いでやろう。縄で縛られたければ縛りもしようよ。それに大分、上達した鞭打ちだって、して欲しければ、いつでも撲ってあげるよ。お前の好きなだけ、思う存分、責めてあげよう。だから小屋の利用だけは、これから寒さに向かうことでもあるし、程々にしてもらいたいと思う訳だ。分かるかい？ それにしてもお前、この頃どことなく変わったなあ！ どことはっきりいえないけれど、身体付きだって、生気がないような気がして

ならないんだが。身体の具合が悪いとか、それとも何か別に理由でもあるの？」

心から心配気に労わる新吉の言葉に、春子にも思い当たる節もある事故、只首を竦め、申し訳なさを、その姿勢に現わしながら、

「済みません。家畜妻の私としたことが。我が儘ばかりして申し訳ございません。牝犬をそれ程までに思っ下さるお氣持を嬉しく存じます。毎度申しますように、貴方のお蔭で今日の私があるのです。貴方の愛情に縋ってそのお心を、家畜妻の一身で受け容れたかったのです。只それだけです。他に何もありません。宣誓の中で述べさせて戴いています通り、貴方にお預けした私の命ですもの、総て貴方任せに、なさりたいようになさって下さい。お氣持は、よく分かりました。有り難くお受け致します。小屋へは決して独りでは行かないことに致します。これからは必ず貴方のお縄かお鎖を受けて、引かれて参ります。いいえ、反抗心から申している訳では決してありません。貴方がそうとお思いでしたら、夜中とはいわず、一日中でも、このお部屋の柱に繋がれていても構いません。いいえ、別段お仕置という意味を持たなくてもよろしうございます。それが貴方の、お心

でしたら、一日でも二日でも、たとえ一週間が十日でも牝犬は喜んで繋がれて暮します。どうぞ奴隷妻春子を愛して下さいませ。家畜妻春子を、いつまでもいつまでも、可愛がってやって下さいませ。私は私に出来る総てを尽して、お勤めさせて戴きたいのです。これまでの勝手をお許し下さい。ご主人様！」

畳に顔を押し付けて、ひれ伏す春子に

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	四〇〇円(送32円)
三月分	3冊	一二〇〇円(送共)
半年分	6冊	二四〇〇円(送共)
一年分	12冊	四八〇〇円(送共)

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらいいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上のお申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎のお申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。」

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「良いんだよ。分かってくればそれで良いんだ。俺が気掛かりなのは、要するにお前の健康の事だけなんだ。今までも、随分、無茶なお仕置を幾年も繰り返して来て、今更、身体に気を付けろのなんのというのは、おこがましく思うだろうが、実際問題として、このまま寒空に向かって小屋に這入り続けていたら、どうなると思うね? どうか良い子になって、聞き分けてくれ。今まで二人は万事旨くやって来たじゃないか。これからだってお互いに愛し合って、たまには、身も心も自由妻の生活に戻りたい気持ちにはならないものかねえ。お前という女は全く不思議な女だ。いつかもお前がいったが、縛られるために生まれて来た女が仮にあったとしたら、お前のような女をいうんだろうなあ、可愛い奴」

いきなり新吉は春子を抱き締めた。この主人の突然の愛撫を受けて、春子は夫の逞しい腕の中で鎖下着も千切れよとばかり身を揉んでいたが新吉にしがみ付くと子供のようにならなげに泣き出したのであった。その心の奥底では、夫の他に別の男性を恋し続けている罪の意識に苛まれながら、それを自供できずに胸深く包み隠している我が心の切なさを、絶えず思い悩む春子なのであった。(未完)



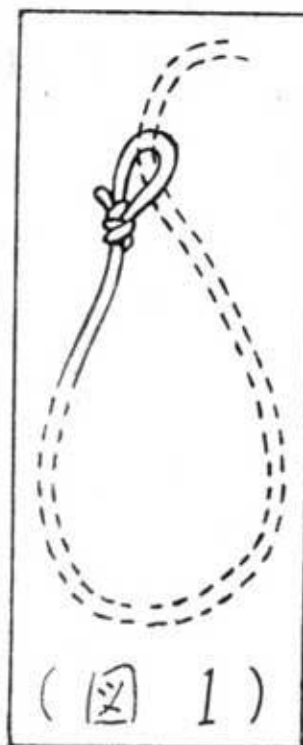
## 二月号の「とき子の自縛教室」を読んで

## 私の高もも自縛法 岩井たけ子

二月号で「とき子の自縛教室」を読ませて  
 いただいて、矢も楯もたまらぬ気持になり、  
 早速ペンをとった次第です。

広い世の中でも、いろいろの人が居ら  
 れることは当たりまえでしょうが、山口とき  
 子さんのようなお方が、いらっしゃることを  
 知った時ぐらい、私の心がドキッとなったこ  
 とは、今までにありませんでした。

実は私も、山口さんと同じように、よく自  
 縄自縛をして楽しんでるからなのです。で  
 も私の自縛は、山口さんとは少し違いまして  
 ほとんど全裸に近い姿で、肌に直接、細引を  
 かけますし、また、全身をきつく縛っており



(図 1)

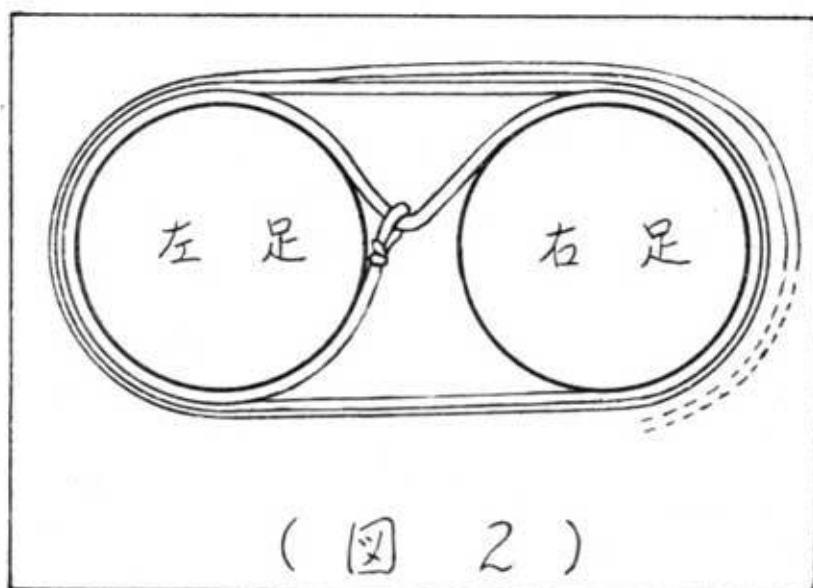
ます。山口さんと同じなのは、自分で自分の  
 体を縛ることだけで十分、満足しているとい  
 うことです。

あれこれと苛められる事を空想しながら自

分で自分を縛っている間が

私の一番楽しい時間なので  
 すが、山口さんも「肢のう  
 ちで、もっとも気持が良い  
 のは太ももの部分、それも  
 ヒップに近い足のつけねの  
 部分を思いきり縛ること」  
 だと書かれていますように  
 私も太もも縛りが大好きで  
 して、必ずといっていい  
 程に致します。

私は、太もも縛りについ  
 て、ずっと以前に柴利好先  
 生が書いておられました8



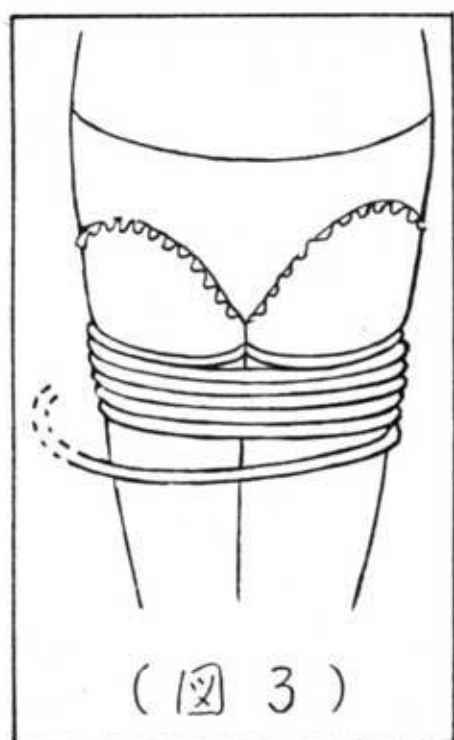
(図 2)

の字縛りを参考にさせていただき、私なりの  
 考えを加えて楽しんでおりますが、この縛り  
 かたですと、いくらきつく締めましても、歩  
 行には、あまり苦しみませんので、山口さん

にお知らせしたいと思うの  
 です。

私の行なっている方法で  
 は、まず五メートルぐらい  
 に切った細引の片端に小さ  
 な輪をつくります(図1)  
 本当は、船員さんなどがさ  
 れるような綱結びのやりか  
 たで、この細引の輪をあむ  
 と余計にいいのでしようが  
 私は、そのあみ方を知りま  
 せんので、簡単な結び輪に  
 しております。

その輪の中へ、反対側の



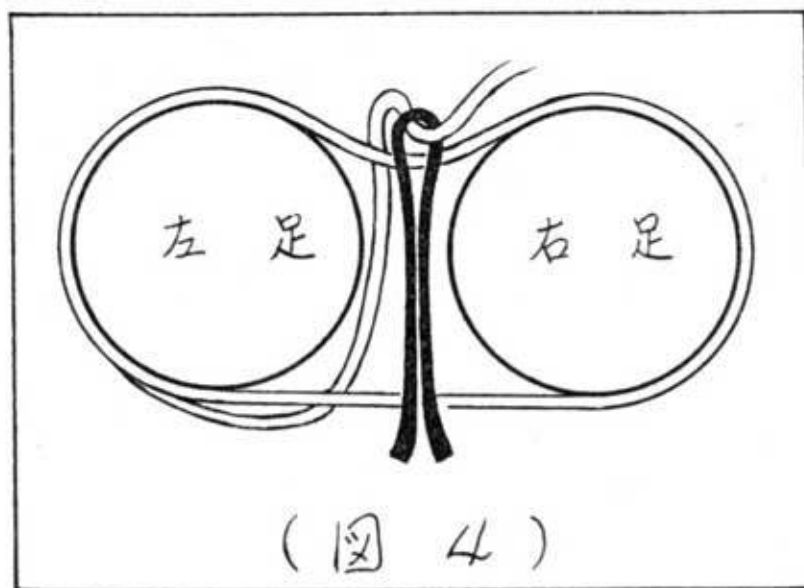
切り端を通しますと、また一つ大きな輪が出来ますので、その中に片足を入れて締めるわけですが、その時には(図2)のように、先の小さな輪が必ず、ももの内側にくるようにしておかないと、後で緊縛感を味おうとしても締まらないのです。私は、いつも左足から始めますので、図もそのように描いてしまいました。これは、どちらからでも良いのだらうと思います。

こうして左足を締めつけますと、次は細引を右足のを走らせて左足へ戻し、先に締めつけた輪の下に重ねて軽く締めながら、又、右足へというようにして細引の残りが五十センチぐらいになるまで、ぐるぐる巻き(図3)にするわけです。でも私は一度、あまり強く巻いて後で痛くて困ったことがありましたの

で、以後は軽く巻きつけるだけにしておりま

す。こうして、細引の残りが五十センチ程になりますと、それを両足の間に通して、グルグル巻の細引を締めつけるわけですが、ぴったり合わさった両足の間を、細引の先端を通すのですから、針に糸を通すような具合にはま

いりません。それで私はヘアピンのお化けのようなものを作ってありまして、それを両足の間にこじ入れて、(図4)のように細引の先端をその頭に通してから一緒に反対側に引き抜いて細引束の上下、又はその間というふうに繰り返して通すようにしています。自分で縛るのでから締め具合は適当に加減できますし好きなところを縛ることも自由に出来るわけです。私は、高ももを四段にくびらせて締める縛りかたが好きなので、グルグル巻きの細引の重なりを四つに分けてそれぞれを別々に締めつけ



るようにしているのですが、高ももの四段縛りでは、歩くのに、多少の不便はあっても、足が、全然、動かないということはありま

せん。山口さん、ご参考にはならないでしょうか？ 自縛は、あなたも云われるとおり、自分の好きなところを好きなように縛るのですから楽しいお遊びですわね。それに、縛りながら想い描く空想では、お姫様にでも奴隷にでもなれて、夢がありますもの。

私も勿論、高もも縛りだけではなく、最初に書きましたように、腰や上半身の自縛も行なっていますが、いずれも両手が自由な間に他のところを縛り、両手はいつも、一番最後になります。

またそのうちに、私の腰の縛りかたなんかも、お知らせしたいと思いますが、今回は、これだけで失礼します。

—(おわり)—



「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

縄なわで縛しばればMエムの感度かんど拔群ばっぐんの娘こ

△西条紀代さいじょうきよの巻▽

塚つか

本もと

鉄てつ

三ぞう



忘却の彼方から

十二月一日。あの冷たい季節風の吹き荒れた日、私は初対面の西条紀代を縛って、写真を撮った。その詳しい顛末は、奇クの三月号に、「別嬪じゃないけど凄く可愛い娘」と題して写真と共に提供しておいた。

さて、その日の別れ際ぎわに、紀代が、

「私、十五日が定休日なんですけど、来てもいいかしら?」

そういう風は無邪気に問いかけてきた時、私は、紀代がもう一度、縛られてみたいとい

う意欲を持っていることについて、それを高く評価はしたけれど、十二月十五日という年末の一番忙しい日に、手がすくかどうか、全く自信がなかった。

「そうだね、十五日に僕の方の暇がとれるかどうか、わからないが、紀代が休みなんだったら、一応、その日に予定しておこうか」

そう返事しておくより仕方なかった。まあ第一回の縛りで、もう懲々した、こんなことは二度と御免だ——と言われるよりは、いくらましかもしれない。

柔らかい縄を使い、縛り方に工夫を加えて一回で懲りてしまわないように苦心したことは事実だが、こうも、すぐに縛られることが好きになって貰えるとは思わなかった。

「うれしい。だったら、十五日に、また来ます。その時は、迎えに来て下さいネ」

「うん、時間なんかのこともあるし、一度、十日前後に電話して呉れないかな」

私は電話番号を刷り込んだ名刺を、紀代の手に握らせた。

あれから旬日——。

年の瀬のあわただしさは、あつという間に日が経ってしまったように私には思えた。

それでいて、あの西条紀代という可愛い娘

を初めて縛ったのも、遠い遠い昔の出来事だったような気がするから不思議である。

十五年も二十年も前にあった事が、ほんの昨日の出来事のように思えたり、また逆に、一週間か十日前にあった事が、遙か遠い忘却の彼方に追いやられてしまう事のある昨今はこれはまた、なんとした事だろうか。

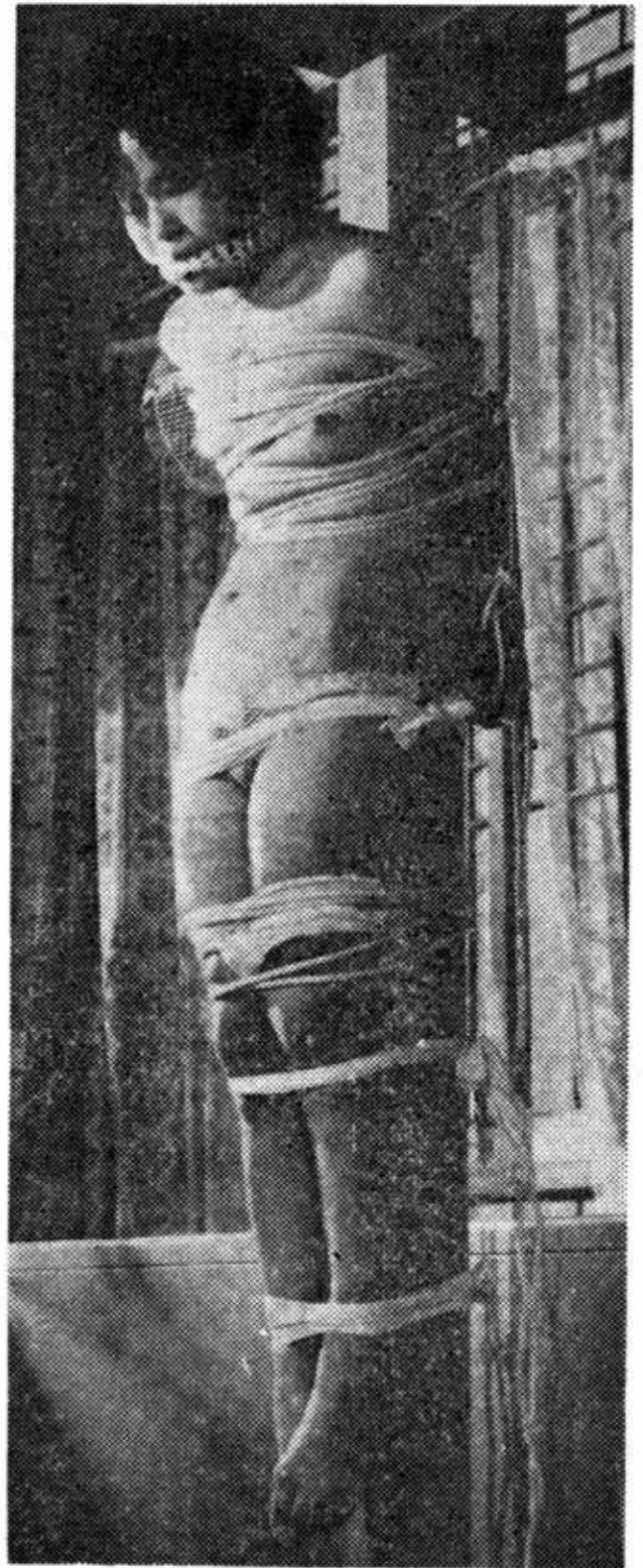
そんな時、私は福井桃子からの電話を取りつがれたのであった。

「キヨがね、十五日に、そちらへ行くって、張りきってるのよ。なんでも、飛行機を見せてもらえるって喜んでいたけど、何時ごろ、新大阪へ着いたら、いいかしらね」

「ええ？ 飛行機って？ ああ、あのこと、







僕がね、外国へ行く時ばかりじゃなく、国内の旅行でも航空機を利用する事が多いって話したら、紀代がね、飛行機なんて乗ったところか、近くで見た事もないって言うからそれだったら、次に来た時、大阪国際空港を案内してやろうって約束したんだよ。でも、実はね、十五日は一寸、都合が悪いんだよ。どうしても手が放せなくて……」

「そうお。だって、キヨが、あれほど楽しみにしてるんだから、すっぱ抜かすのは可哀さうヨ。だったら、十五日以外で、日がとれないの？ 一日ぐらいだったら、休暇はとれるって言ってたから——」

「ええと、来年の一月だったら、いけないか

ね。一月の中頃だったら……」

「キヨはね、今月の十五日と思い込んでるのよ。だから、とても来年だなんて言えないわよ。そんな悠長な事言わないで、二十日頃までに、きめてしまいなさいよ」

「よし、わかった。それだったら十九日にしておこう。空港で食事するとして、十一時に新大阪に着くよう伝えて貰おうか」

用件が終わったところでマダム芙美代の近況を何かと聞いてから私は受話器を置いた。

## まさに感度抜群

十二月十九日——。

先日、初めて西条紀代と逢った一日とは違って、今日は穏やかに晴れ、風もなくて暖かい日であった。上衣を脱いでシャツ一枚になっていても、車内は汗ばむくらいに暖い。

この前は、あれほど私が運転席の横に坐るようすすめたのに、恥かしがって後の座席に身体をすばめるようにして坐っていた紀代であったが、今日は最初から助手席へ、すうっと坐った。あたかも、それが当然のように。

「紀代」

「ハイ」

「紀代は、この前、初めて縛られて、どんな気持だった？」

「いやッ、そんなこと聞くの。なんでも、ご存じのくせに——」

「でも、僕は紀代の口からは、まだなんにも聞いていないよ。ねえ、どんな気持だった。言ってごらん」

「そんなこと……自分の口から言えないわ。あなたの、ごらんになった通りよ」

私は、ゆくりなくも、先日、第一回目のS Mプレイでの最後の場面を思い浮かべた。

私が縄を握ると、紀代は両腕を背後へ回して、両手首を組んだ。X字に交叉した手首がよく上へあがるのを賞めてやると、紀代は、

もっとももっと、と、自分で手首をあげようと努力する。そして、自然と頭を前に垂れて、うつ向き加減となってしまうのである。

両手首の交叉した個所に縄を掛けていた私は、「そんなに前かがみになったら、縛りにくいじゃないか」と、注意した。

「ハイ」と返事した紀代が、今度は逆に、背を反らして、手首を縛り終わった私の手元の方へ、もたせかけてきた。

私は紀代の手首から手を放して、仰向けに倒れかかってきた身体を抱えた。そのまま、その場に腰を落とすと、紀代の唇が丁度、私の口の前にあった。

堅くつむった紀代の小さな口は、私が唇を

寄せても一向に開こうとしなかった。舌の先で唇を舐めておいて、唇と唇とを合わせても、上下の歯をカチカチ言わせるだけで、口を開けようとはしない。

唇を合わせただけで、口を大きく開いて、こちらの舌が根本から抜けそうになるくらい強く吸って離さない女。どこから、こんなにツバが出てくるかと思うほど、次から次から唾液を舌の奥から出してきて飲まそうとする女。舌で舌を、からみあうようにくるんで、口中をかき回す女――。

そうした女に比べて、この紀代は、また、なんと初心<sup>うぶ</sup>なのだろうか。彼女の言っているように、本当に、まだキッスなんて、したこ

とがないのであろう。唇と唇とを合わせていても一向に口を開こうとしない。

私は唇を離して頬ずりをして、両腕の中に紀代の裸身を、ぎゅっと力一杯抱きしめた。

紀代は私に抱かれたまま、仰向けになって両足を長々と伸ばしていた。

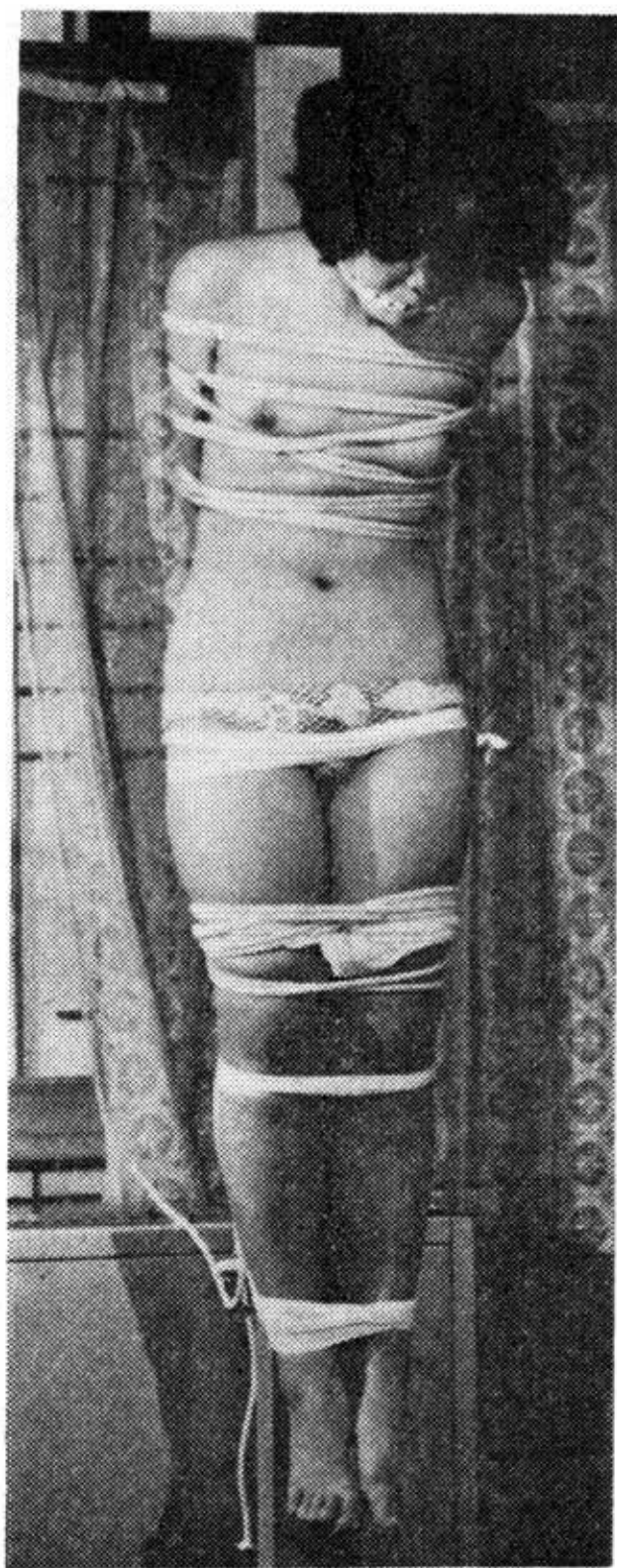
両手首だけ背後で括られていたが、胸には縄は掛かっていない。私は左手で、その手首の縄を持って首筋の方へ引き上げる。二の腕と脇とが密着して、胸乳が幾分、盛りあがったように見えた。ピンク色の稚い乳首が、ライトに照らされて、その頂点が琥珀のように輝いているのが可愛い。

「紀代の、この乳房は、まだ誰にも、さわられたことはないのだね」

紀代は無言のまま、うなずいて顔を赤くした。私は、紀代のお臍のまわりから脇腹へかけて、右手の掌でさすり、まさぐり、やがて再び胸乳の丘へと戻ってきた。

「この乳房が、もう少し大きかったらナ」揉みあげるように両の乳房を交互に盛りあげてみる。紀代は、仰向けになったまま、私のするがままに、まかせていた。

再び、掌はお臍のまわりから脇腹へ、そして胸乳へと帰ってくる。軽くさするだけで、





決して操り責めというようなつもりはなかった。それなのに、見ていると、紀代の下半身に徐々に微妙な変化が起こってきた。

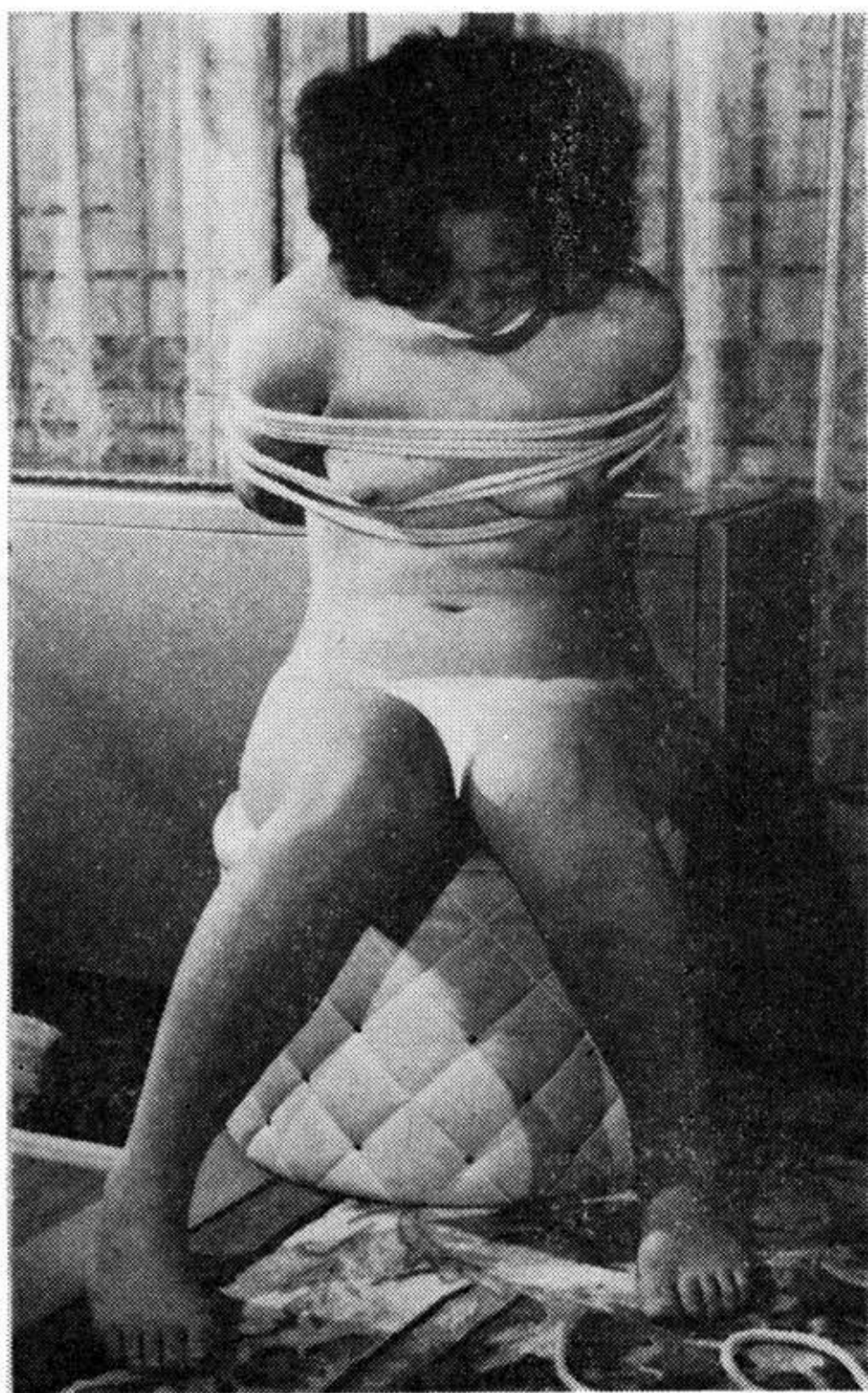
今まで、だらんと伸ばしていた両足に力が入ってきたのだ。足の拇指が上にピンと反り返り、他の四本の指が、きゅっと内側に曲げられている。そして、ぴんと力を込めて伸ばしきった、しなやかな脚全体が、数センチあまりも、ぐっと長くなったような感じがするほど、伸ばされているのである。

足の爪先が伸ばされているばかりではなく足の甲や脛や太股にも、ぐっと力がこめられて、筋肉が盛り上がりを見せているのが、私の目にも、はっきりと、わかった。

そんな紀代の下半身に対する力の入れようを眺めると、脇腹、お臍、そして太股、内股へと移ってゆく私の指先にも、一段と力がかもってきた。

脇腹を掌で、さらさらと撫でさすっておいで、お腹の横を這うように下がり、太股の傍から内側へ、まさぐってゆくと、紀代の背中にピクピクと痙攣が起こって、抱えている私の手に、その動きが伝わってくる。

膝小僧のところまで下がった私の触手は再び虫の這うようにして、内股の皮膚のやわら



かいところを、そろそろと微妙なタッチで蠕動を、くりかえしていた。

私の右手が益々いそがしく紀代の柔肌の上を這いずりまわるにつれて、ピンと思いきり伸ばしきっていた紀代の両脚が、静かに徐々に、開かれてゆくではないか。

そればかりではない。そうした変化は敢て下半身ばかりではなかった。紀代の息づかいが、次第次第に荒くなってきたのである。

鼻で息をする荒い呼吸が、もうかくし切れなくなつて、紀代は胸を大きく上下させた。

私は、ふと紀代の顔に視線をやった。

私の視線を感じた紀代は、顔を真赤に染めて、羞かしげに、私の腕の中でかくすようにして埋めるのであった。

いつの間にか、紀代の左右の足は八の字に大きく開かれて、力いっぱい伸ばされていた。私の手も、いつしか、それが当然である



かのように、その自然と開かれた花園の中へと導かれていった。

甘い眠りを誘う快適な気温のなかで、春の花園には馥郁として芳香が漂いはじめたように思えた。

「少し痛いワ」

控え目な、そんな言葉を待つまでもなく、

ぬめりの中は、僅か指一本をも許容しそうにはなかった。

「セックスをしようなんて、思わないから、紀代は安心していいよ」

「なぜなの？」

「なぜって、紀代は、まだ男を知らないんだろう？ だからさ」

あの時の、ぎゅっと抱きしめた紀代の裸身のこりこりとした感触。それが今、いきいきと私の腕の中に蘇ってきたようだ。

そんな私の回想も知らぬげに、紀代は今、膝の上で手を組んで私の傍に坐っている。

「紀代は、飛行場や飛行機を見たいって、言ってたそうだね」

「ええ、空港へは一度も行ったこと、ありませんの。連れて行って下さる？」

「ホラ、そこがもう大阪国際空港だよ」

車は、いつしか、空港駐車場のゲイトに差しかかっていた。

## 大阪国際空港にて

駐車場へ車を置いたところで、紀代のスナップ写真を二枚撮る。やはり外へ出ると外気は冷たい。横断歩道を渡って、国内線の入口で三度シャッターを切った。エスカレーターで塔乗者待合室へ出て、レストランへ。

師走の十九日。今は一番空いている時だ。帰省客やレジャー客の姿も見えない。空港の全貌を目の下に見ることが出来るレストランのスカイラウンジも、昼食時だというのに、がらがらに空いている。いつもだったら、席を見つけるのにさえ一苦労するのに、窓際の





席も全部、すいている。

私は紀代の椅子を引いてやって、その向い側に向い合って坐った。と、何を思ったのか紀代は、立ち上がった私の横の席へぴたりと寄り添うように坐る。この間の時と、彼女の様子が大分、違うようである。

一機の727が、機首を上げて黒煙を吐き

ながら離陸していった。一枚硝子の大きな窓を透して空港の様子は手にとるように眺めることは出来るが、ぴたりと密閉されているので、爆音は、ちよっとも聞こえない。

今、飛び上がった飛行機が大きく旋回して目の前の白雲の彼方に、一点となってキラキラと陽に銀翼を輝かせている。

「ホラ、今、飛び立ったのが、あんな所に飛んでいるヨ」

私の指さす方向で、紀代は目ざとく見つけて、「アラ、ほんと。きれいだわ」と、感嘆の言葉を吐く。と、思う間もなく、着陸する飛行機が滑走路へ入ってくる。

「あれが送迎デッキと言ってね、あそこから見送りするわけなんだよ。あとで行ってみようかね」

「ええ、是非、行ってみたいわ」

紀代はサラダだけでよいというのを、サラダと海老フライとビフテキを注文した。朝食も食べていないというのに、ライスもパンもいらないと断わる。何故かという、肥るから——と言うのだが、たしか笠井奈保子も、そんなことを言っていた。

若い女性の間で流行している肥満恐怖症というのであろうか。それはともかくとして、今の場合は、彼女に空腹のままでおってもらっては困るのである。満腹でなくても少なくともスタミナ源になる栄養物だけは摂取しておいてもらわないと、これからのSMプレイに差支えるのである。

硝子越しに差し込んでくる陽を浴びていると、上衣を脱ぎたくなるくらいの暖かさであ

る。私は、背抜きの下は、シャツ一枚という薄着だから、いいようなものの、黒のスーツの紀代は、肩から背に陽を受けて頬を紅潮させている。

運ばれてきた食事をペロリと平らげると、そうそうにレストランを出て、送迎デッキの入口で入場券を買う。一名五十円也。

外へ出てみて、構内全体が暖房されていたことが始めてわかった。十二月末の吹きさらしの外気の冷たさは、まあ相当なものであるが、もともとオーバーもマフラーも持ってきていない私は、その冷たさを、じかに肌に感じながら、どんどん先に立って送迎デッキの階段を上っていった。

人影は更にはない。私達たった二人きりである。この寒空、しかも、十二月十九日という一年中で一番忙しい時期に、のんびりと、こんな処へ遊びに来る人もいないわけだ。

目の前に大きく横たわる巨大な四発のジェット機。蛇腹式の乗降口。いそがしげに走り回る給油車。そんな風景を眺めながら、私は紀代のスナップを四枚、五枚と撮ってゆく。

展望台への階段を上って、遊園地になっている花壇へ行っても人影は更にはない。売店や食堂、遊具もすべて休んでいて、ひっそり閑

としている。吹きさらしの冷たい風に吹き抜かれていても、馴れてしまえば、寒さも耐えられない程でもない。

目の前の箱庭のように見える飛行場。そこに並んでいるジェット機も、まるで模型のようには可愛いく見える。目を転じると、北摂の山脈が、青いうねりを見せているのが雄大な気分させられる。私はベンチに腰を下ろし

て肩にしていたカメラを傍に置いた。

年末の目のまわるような忙しさを逃がれてこんな人っ子一人いない展望台に避難してきているのも、一種の風流かもしれない。今、流行の脱都会というのも、こんな心境でもあらうか。

「おい、紀代。もう帰ろうか」  
「はい」







階段の手摺につかまって滑ったり、敷きつめたタイルの上を走りまわったりしていた紀代は、元気よく返事をして戻ってきた。

青い空には、白い雲が静かに流れていた。

「ここは大阪なの？」

「いいや、伊丹市だよ」

「でも、ここは大阪国際空港なんですよ」

「名前は大阪国際空港だけど、大阪市じゃないんだよ。兵庫県の伊丹市というわけだ」

塔乗者の受付カウンターを紀代は、じろじろと眺めながら、不思議そうに聞く。

「紀代って、なんでも珍しいんだナ」

「そりゃそうよ。テレビで見るだけで、実物は何も見てないんだもん」

「それじゃ、実物をよく見ておくんだね」  
私達は揃って構内を出た。  
まだまだ案内したい所は沢山あるのだが、私は早くSMプレイを展開して、紀代の緊縛フォトを撮影する必要があった。余り晚くならないうちに彼女を新幹線で名古屋まで帰さなくてはならないのだ。

## 緊縛行快調

第一回目の時は、紀代が一体どんな娘なのか、私にはさっぱりわからなかったし、紀代にしても、縛られるということが、どんなことか、身にしてみても、わからなかったろう。それが、この第二回目になってからは、お互いに、ぴったりと息の合ったものを最初から感じ合っていた。

今日は本格的に責められてみるんだ——という紀代のやる気充分の気魄のようなものが全身から、にじみ出ているような気がした。  
あれから、二十日足らずの間に、紀代の身体の中に、どのような変化が起こったのであろうか。私は掌のなかの珠をころがすように紀代を責めるための構想を、あれこれと練っていた。構想を頭で描いている間は、如何なる奇想天外な責めも可能であったし、強烈な

責めに対しても対象は耐えることが出来たばかりか、歓喜にむせぶのだった。

だが、一たび実際にSMプレイを行なってみると、頭の中でだけ考えていた構想は、その甘さを忽ちに曝露してしまい、現実の厳しさを噛みしめるのがオチであった。

そういうことを、よく知っていたにも拘らず、やはり私は紀代をモデルとして、いくつかの責めの構想を練っていた。それが蜃気楼のような、はかない空想に過ぎないものになってしまいかもしれない。ノートの一枚を破って細かい文字で、心覚えに責めのアイデアを書き綴っておいた。

西条紀代は、黒のスーツを脱いでたたみ、その上にシュミーズを重ねて置いた。ブラジャーとパンティだけになって、覚悟をきめたように私の前に立った。すでに暖房がよくきいてきたので寒くはないのに、両腕を胸のところで組むように重ねている。

「どうせ取られるのに、こんなものを、はきやがって——」と、私は白いパンティに手をかけて下へ、ずり下げた。

「あら、まだ穿いていやがる」  
その下に、まだ花模様のスキャンティを、ぴっちりと着けているのだ。

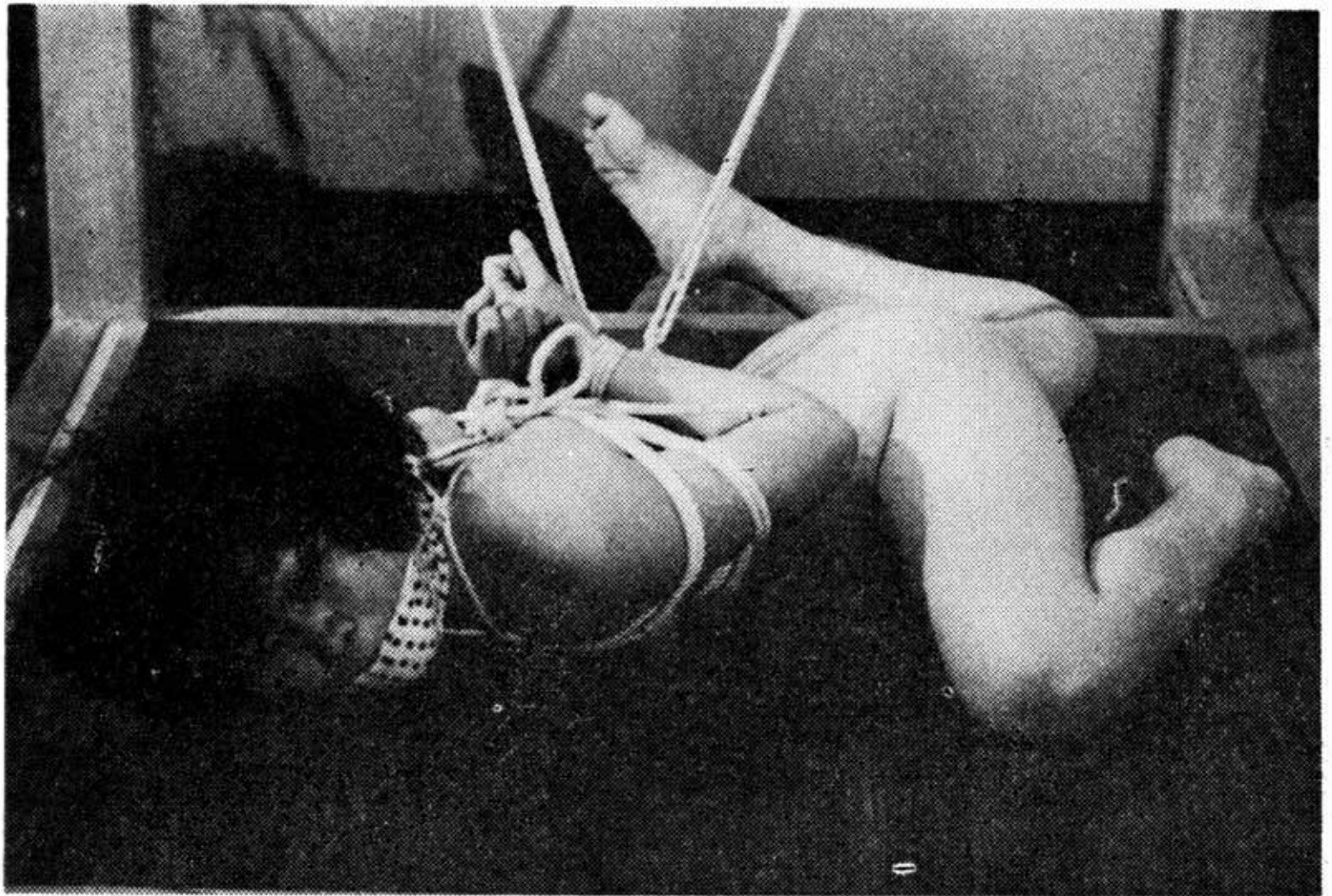
「まあ、いいや、これだけは許してやろう」  
私はブラジャーを手荒く剥ぎとる。

空港の近くで看板を見て飛び込んだホテルなので、どんな部屋があるのか皆目わからず幸いにして、お客がなくて、全部あいているというので、洋間、和洋室、和室と、三通りの部屋を全部見せてもらったが、結局のところ

和室にきめた。ドアを開けたら五平方メートルのタイル貼りがあって左右にトイレとバスがついている。その先が廊下になっていて、両側がそれぞれ八帖の畳の間である。廊下の突き当り、即ち両方の部屋のつなぎ目は板の間になっている。襖をはずしてみると、案外広くなったし、剥きだしの柱が二本、三本と







あらわれてきた。

畳の上じゃなくて、この板の間で、紀代を海老責めや逆海老にして責めてやろうか、と私の嗜虐心は益々高まってきた。ドアにロックしたこの密室の中も、次第次第に、気温が高くなってきて、まさに紀代に対する責め劇の開幕が告げられようとしている。

あの、第一回目の時のように、手加減する気持は、さらさらなかった。思うままに、思いきり責めまくって、西条紀代という女性の被虐の限界を見きわめたいと思った。いや、実際は、若々しい紀代の肉体の責めに対する身体的変化を眺めたいというのが、偽りのない気持であったかもしれない。

西条紀代という女性は一見どこにでも見かけることの出来る平凡なタイプである。街の片隅の小さな純喫茶店

で、ウェイトレスをしている、目立たない存在である、この紀代が、僅か二回、それも数時間に亘るSMプレイで、一体、どのような反応と変化を示すというのであろうか。

縛りと責めとで飼育されてゆく過程で、初心な紀代が、どのように変わってゆくかは、私にとっても、大きな興味であった。

責めれば責めるほど、噛みしめるスルメの味のような、女体の色香の味が、ほのぼのと匂ってくる女なのか。それとも、貝のように固く蓋をしてしまつて、砂を噛むような味気なさを味あわせる女なのか――。

三面鏡の前に置いてあったスツールを、柱の前に据えて、紀代に、その上に立つように命じた。私の意図するところが判らないので「何をするの? どうするの?」

紀代は不安がつて、盛んに訊ねる。

「別に、どうもしないさ」

紀代を柱に背を向けさせておいて、両腕を柱の背後へ回わさせ、縄を身体中に、ぐるぐると掛けていった。縄は情容赦なく、紀代の裸身を柱に、はりつけていった。

縛り終わったところで紀代の全体重を支えているスツールの端を持ち上げた。スツールが斜めになって、その支えを失った紀代の足

の指が、あたりをまさぐるように空を蹴ったが、その時は、すでに支えのスツールは、完全に、とり去られていた。

「ああ、あー、それ、とってしまおうの？」

紀代が悲鳴を挙げて叫んだとき、全体重を支えるのは、ただ縄だけになってしまった。その縄が、ぐくぐーと、肌に深く喰い込んでゆくのが、私の目に鮮かに映った。

「く、くるしい——胸が、胸が……」

「辛抱するんだ。もう少しの辛抱だ」

「辛抱する。でも、胸が、胸が、締まって、く、くるしいの。辛抱するから、早く……」

足の拇指がピンと下を向いて、床を探ろうとする。とても床には届かない。肩から上の頭部が前に倒れそうに、かがんでいる。

足首から胸まで、身体中に喰い込んでいる縄目の緊縛感は、まことに素晴らしい。

「く、くるしいッ。胸が、胸が……あ、ああッ、おろして……。お願い——」

私は悶える紀代の姿を、じっと冷ややかに眺めていた。いつの間に、こんな惨酷な気持になってしまったのだろう。苦しがる女体の中に、美しさを発見しようという意欲が、紀代の苦痛のことを忘れ去っていたのか。

「どうだ。もっと、辛抱できるか？」

「辛抱してるわ。でも、胸が締まって、くるしいのよ。いわ、辛抱する。だから早く早く撮ってよ。お願い……」

肩口から足の爪先までジーンと緊張して必死になって苦しさを耐えている風だった。

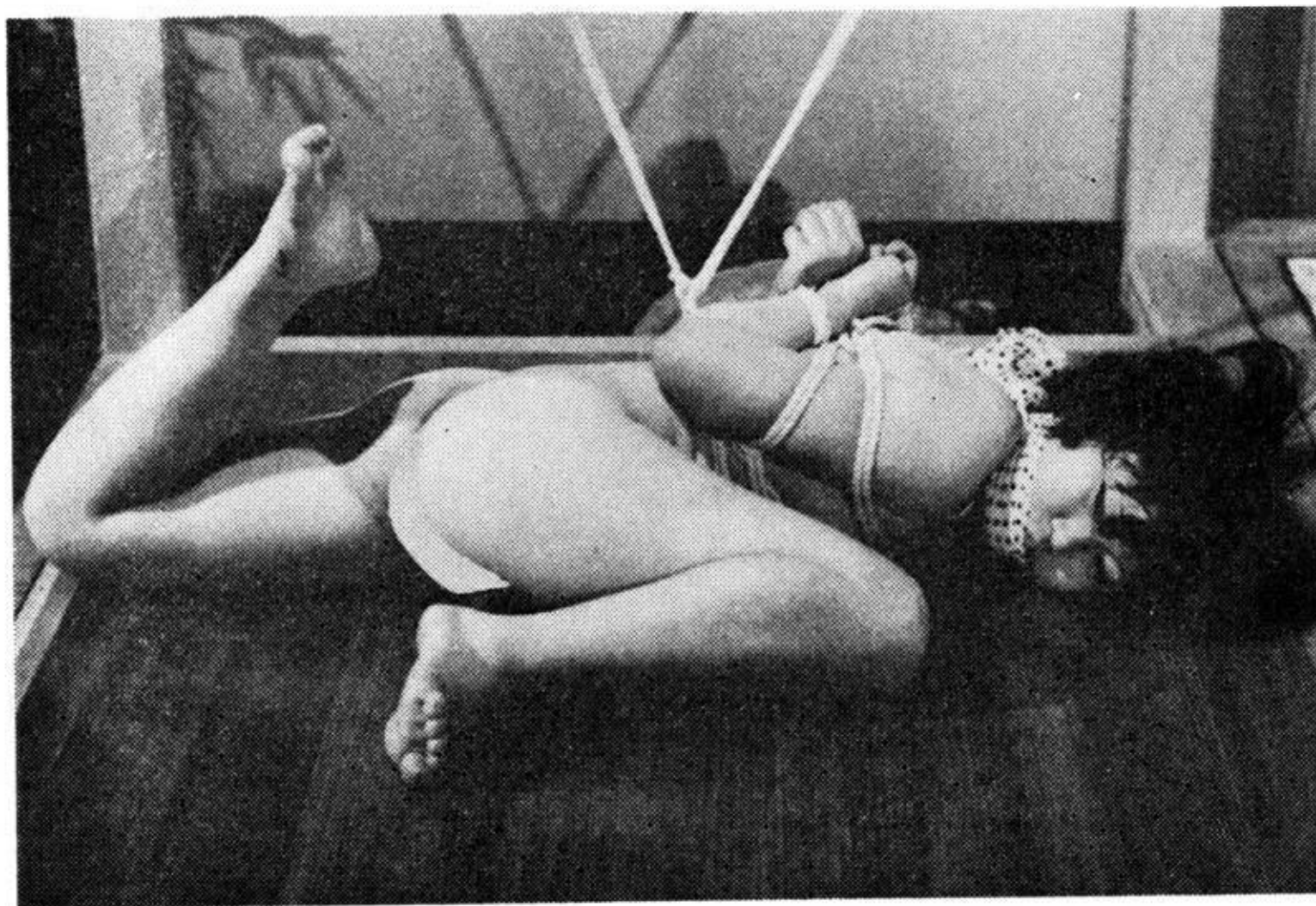
私は正面から、側面から、紀代の一本の棒のようになっただ緊縛姿態を、つくづくと眺めまわした。ピンと床に向けて伸ばされていた足の指が、ピクピクと無意識に動いているのは、いよいよ苦しさが増してきたのだろう。

「もう下ろして……。く、くるしいから……。胸が、胸がしまって、くるしい」

「よしよし、写真を撮ったら解いてやる」

「だったら、早く撮ってエ」  
「うん、早く撮ってやるから辛抱するんだよ。苦しくってもナ、頑張るんだ」

私は、ゆっくりとカメラの







位置へ戻った。わざと時間をかけてファインダーを覗きながらピントを合わせた。

「ああ、縄が締まって胸が、く、くるしいの。ねえ、早く、早く、ああ、あ……」

「待って、待って。まだだよ。紀代の見事なポーズを写真にしてやるからナ、あわててはいかんよ。ゆっくり落着いて——」

「まだなの？　ねえ、まだなの。早くして。お願い。手がしびれてきたわ」

私は紀代の顎に手をかけて起こした。

「そんなことを言ったら、よい写真は撮れないよ。紀代は、自分の縛られて苦しんでる写真を撮ってほしいんだろ？」

「いや、いやッ。そんなこと。早く解いて、

おろして。お願いしたら——」

「そうそう、そのベソをかいたところの顔がなんともいえないんだよ」

「あら、不思議。苦しいの、大分、楽になってきたわ。なんだか、身体が、ふわっと浮いてるみたいで、気持よくなってきたわ」

「そうだろう。身体が柱に縛られて、宙に浮いてるんだからナ。そら、解いてやるゾ」

私はスツールを紀代の足の下へ持っていたが、固く縛ったとはいえ、幾分ずり下がっている。足裏へは入らない。私はスツールで支えるのを諦めて、片手で紀代の身体を抱えておいて、片手で縄を解いていった。

縄が緩むと、ずるずると、紀代の身体がくずれてきて、私の両腕の中に、ぐったりと倒れ込んできた。

「どうだ、紀代。苦しかったか？」

「ええ、最初は苦しかったの、この胸のところに縄がかかっていたから。でも、おしまいは、なんだか、ぽうとして、気持がよかったみたい。余り痛みは感じなかったわ」

紀代の全身は、くらげのように力がなかった。未だに恍惚境を彷徨しているといった虚脱の状態である。私は、紀代の穿いているスキャンティを薄皮を剥ぐように、くるりと脱

がしてしまった。

柱を使つての責めは、構想の上で、いろいろと思いをめぐらしていた。それなのに、そういうした華麗な構想は、私の頭の中から、すべて忘れ去られていた。

今、私の目の前に、長々と横たわっている紀代の新鮮な女体の魅力は、私の目をいたく楽しませてくれた。

乳房の上下、脇腹、お臍のまわり、太股、胫、足首——と、深く喰い込んだ縄目のあとが、赤い痕を見せて如何にも痛々しい。

すべすべとしたお腹についた幾筋もの縄のあとに囲まれて、お臍のくぼみが、ライトの斜光線を受けて、ぽこんと大きな穴目をさらしているのが如何にもセクシーである。乳房から足先に至るまでの、なだらかな起伏が途中の下腹部のアクセントを除いては、若い女の肌特有の、すべすべとした艶やかさを見せている。

この若々しい肌の輝きは、年をとった女性では、とても見られない。

「若さというものは、いいものだねえ」

私は紀代の肌をさすりながら呟いた。

最初から余りにも嗜虐心にかられて、強烈な責めを敢行してしまったので、自然とこ

で休息しなくてはならなくなった。

## 愈々羞恥責めへ

新大阪駅五時五十五分発のひかりに乗車すると、名古屋へは七時十分に着することになる。ここから新大阪駅まで三十分かかるとして、午後五時頃までプレイをやることが出

来る計算になる。

その間、ぶっ続けて責め続けるとして、果して、私の描いた構想のなかの何ポーズくらい撮れるであろうか。

先日、第一回緊縛の始めの頃、あれほどブラジャーやパンティを脱ぐことを羞かしがって拒んでいた紀代が、一転して今日は羞恥責





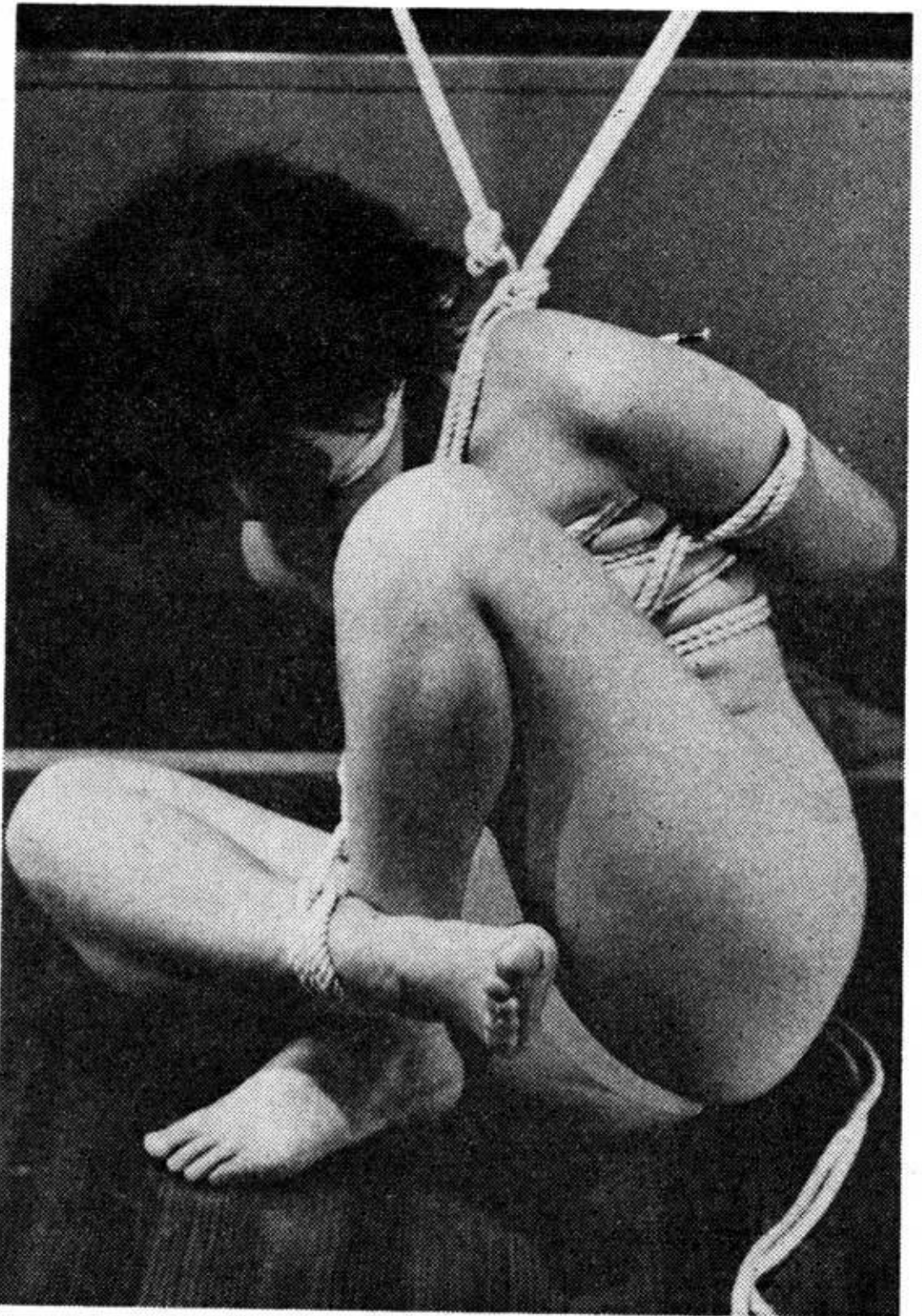
めの祭壇の上で、どのように呻き悶えることであろうか。

先程の紀代の、あの柱に縛られた被虐の姿態であふれた嗜虐心の余燼のさめやらぬ私は、紀代をせきたてて柱の前に連れてきて、スツールの上へ腰を下ろさせた。

後手縛り、そして胸にも縄を掛けて、その縄尻を、しっかりと柱に結えつけた。口の間で手拭いをかまして首筋で思いきり力をこめて括る。こうしておく、呻くことは出来ても声を出すことは出来ない。といって、クッションの柔らかいスツールに坐っているだけであるから、この縛り自体、大して苦痛の伴うものではないのだが、自由になっている両足に縄を掛けることによって、面白いように羞恥責めを展開させることが出来るのだ。

両方の足首に、別々に縄を掛けて、その縄の端を鴨居にとりつけた滑車に通した。もともと、その滑車の位置が一つは真上に、もう一つは自由に位置を変えられるように取り付けておいたので、私の操る指先によって、紀代の両足は、上にも横にも、思いのままに動かすことが出来るのである。

先ず、両方の足首を同時に、ぐぐぐと上へ引き上げる。なにしろ上に滑車があるので



少しの力で軽く足が上がるのだ。足首が顔よりも上へ上がっていった、お尻がスツールを前へ押し出すようにあらわな格好になった。「うう、ううう……」

紀代は猿ぐつわの手拭いの奥から、しばらく出すような呻き声を洩らした。お尻が前へ突き出るような格好になったので不安感を持つ

たのだろうか。なにしろ猿ぐつわを噛ましているので何を言おうとしているのか、さっぱり判らない。でも、後手首のところで、かっちりと柱に括りつけて固定してあるので、ころげ落ちてしまうというようなことは決してない。

それからあとは、もう思うままに縄を操っ



て、左右の足を自由自在に、上へ上げたり開いたり、紀代の羞恥心を無視して操り人形の足芸が続けられていった。

お尻を支えているスツールを取りはずしてしまおうと、「ううう、うーうー」と、一きわ激しい呻き声を洩らしたかと思うと紀代の身体は柱を伝って、ずるずると、ずり落ち、吊られた足だけが上に残って、

八の字に、もうこれ以上開けないと思うほど、大きく足を正面に向って、おっ払げるのであった。

私は、そんな羞恥地獄のなかに沈潜している紀代の姿を見ていると、もっともっと、意地悪くいじめてやりたいという嗜虐心が盛り上がってくるのを、どうすることも出来なかった。紀代が羞かしがれば羞かしがるほど、もっと凄い責めを加えたいという意欲にかられてくるのだった。ポーカーフェイスの紀代が泣きべそをかいて悶え狂うまで責めてみたいと思った。

西条紀代という女は、そんな一種いじめたくなるような女性のタイプであった。

「お一人で、縛るのと写すのでは、さぞ大変でしょうね」

私に対して、同情するような口ぶりで話しかける紀代は、まだまだ余裕たっぷりで、これからの責めに対して、ある種の秘かな期待を持っているようにも見受けられた。

紀代の裸の肌にも、ようやく熱を帯びだしほんのりとピンク色に染まってきた。責め行の滑りだしは愈々好調、まさに本調子となってきたのだ。これから——というときに、痛いとか、肌に縄のあとが残るから嫌だとか、言い出したら、興味をそがれること夥しいのだが、紀代は、もう、とっぷりと悦虐の旨酒のなかに首まで没りきり、全身全霊で、これを身体ごと受け入れようと健気にも覚悟しているように見受けられた。

そんな紀代の縛られた姿は、まことにみじめな格好であった。若い女性として、こんな姿で放置されているということは、耐えられないだろうと思った。何故、こんな目に遭わなければならないのか——と、思うかも知れないと、私は、いささか反省させられた。

足の指、膝頭、そして胫と、紀代の身体の



一部を切り離して眺めていると、私の心に憐憫の情が、ひしひしと湧いてきた。私は無言で縄を素早く解いていた。だが、縄を解くやいなや、私は手馴れた白いロープをたぐり寄せて、紀代の裸身に、するする縄を打っていった。忽ちにして、紀代の全身が紅潮し、自分の肌のなかに、縄をすっかり受け入れてしまった。

例の通り、後手首はX字に背後できっちり交叉し、縄を掛けられるにつれて、握り拳が一層、上へと上がっていった。二の腕から胸へとロープは執拗にからんでゆく。そしてここで私は、両足首を組ませて、そこへも縄を絡ませていった。そして、その足首を縛った縄を肩越しに後手首の縄に連絡させて、ぐっ、ぐっ、締めつけていった。

両足首が、じりじりと上がり、膝頭が胸に近くなってくる。若い女性にとっては最も恥かしいポーズが徐々に展開されてゆくのだ。

いわゆる海老責めという、この縛り方は、身体が二つ折りになっているので、時が経つにつれて、益々苦痛は増してくる責め方なのであるが、全裸で、この縛り方をされた女性にとっては、どのような方向にころがされても一番かくしておきたい部分が、いみ割れた

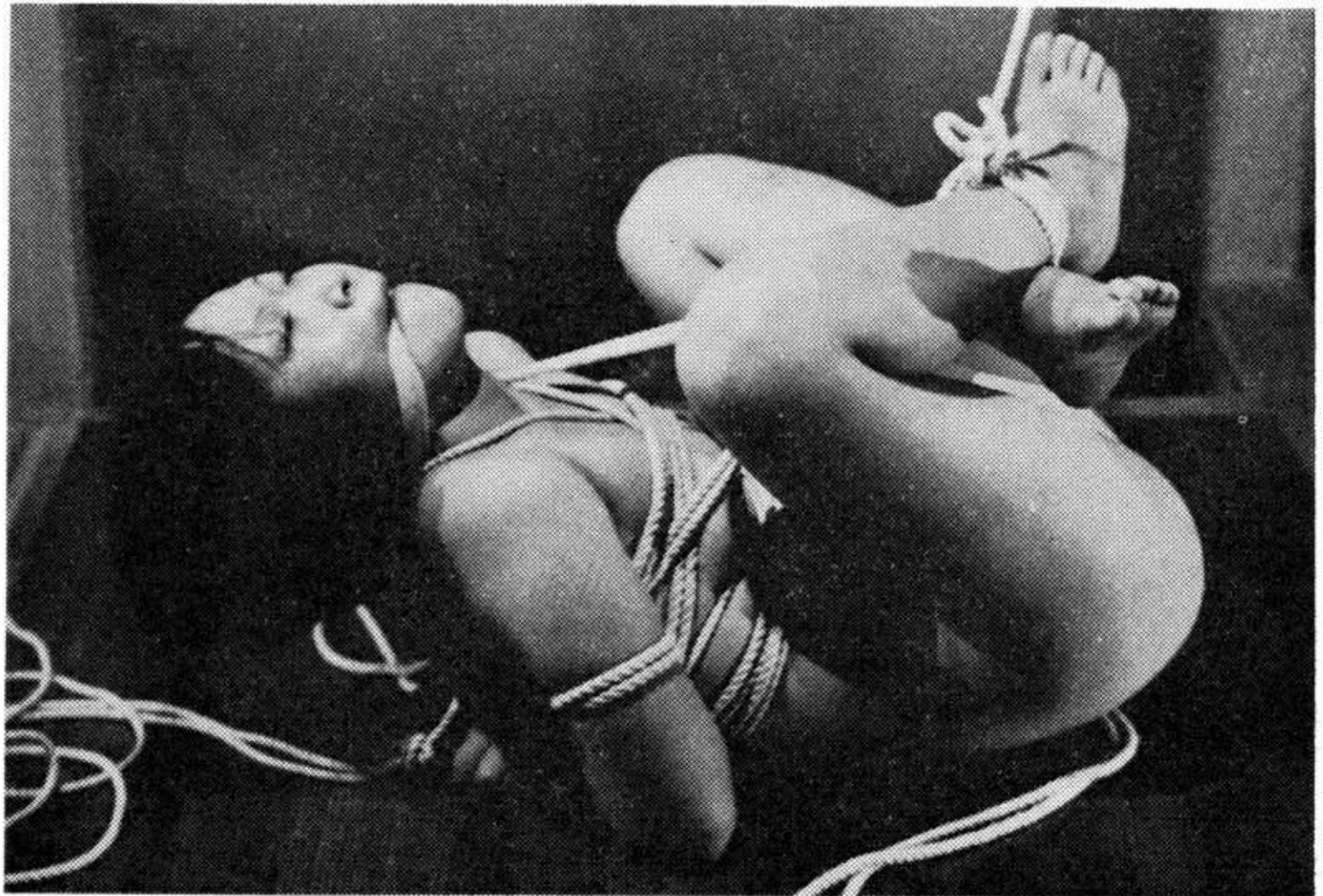
ように、すっかり露わになってしまう縛り方なのである。苦しさもさることながら、その羞かしさは、たまらないものがある。

足首を引きつけられれば、引きつけられるほど、いやでも両股を、ぐっと開かねばならなくなるのである。

板の間にころがされた紀代の女体は、厳しい縄目の痛さに加えて、板の間との接点に位置する肘や膝の部位に激痛を感じているのに違いない。しかし、その肉体的な激痛もぱっくりと口を開いた羞恥の噴火口に対する粘っこい視線を意識すると、忽ちのうちに甘美な快感に、すり変わってしまうことだろう。

私は横に転がし、仰向けにして、その間、紀代の身体の変化を具に観察した。

呻くなら、呻くだけ呻け。その上で、泣くなら、泣き喚





いてもよいぞ——。

そんな気持で私は、じっと紀代の様子を眺めていた。だが、猿ぐつわを、きつく噛まされてる紀代は、ただ「く、くくく、く」と鼻を鳴らしているだけで声はなかった。

三分、五分——。

時が経つにつれて、やはり紀代の、鮮かな

身体的変化は私の目に、はっきりと映った。

責めは、なんといっても、縛って放っておくに限る。何も喋らない紀代の心情は、語らずとも、自然と外部に現われているのだ。

西条紀代に、何か告白を、書いてみよ。と言っても、これは無理な相談だろう。また、私がいろいろときいても、うまくその気持を

話すことは出来ないだろう。しかし、その身体だけは、正直に、何もかも、私の前にあらわに語りかけてくれる。でも、そんなことを紀代に、あからさまに言ったら、恥かしがつて、二度と私の前に姿を現わさなくなるかもしれない。

## やる気充分の紀代

ここで私は、西条紀代に対して、一応の休息を与えなければならぬのだが、柔軟な肢体の持主である彼女は、海老責めの放置に対しても、一向にこたえた風はなかった。これが、年は若くとも身体の固い女性であつたらとても、こうはゆかない。

「紀代、ここで一休みするか？」

「私だったら、いいんです。このまま続けて下さっても……」

やる気充分の紀代の返事に励まされて一旦解いた縄を、また、たぐり寄せて手にした。

「どうだ、紀代。さっきの海老責めは苦しかったか？」

「ハイ、少しは……。でも、辛抱できんことはありませんわ。仰向けになったとき、肘が床に当たって痛かったですけど……」

「下が板の間だったからナ、痛いのも無理は



ないさ。でも、あれが辛抱できたら、一人前だよ。じゃ、今度は逆海老責めというのをやってみようかな」

「ハイ、どのようなことでも……」

「だったら、紀代は、どんな凄い責めでも受けようというのか？」

「ええ、私には、どんなのが、どんなにか、さっぱりわかりませんから、好きなようになさって下さったら……」

「そうか、わからんから、どんな責めでも、甘受するって覚悟なんだナ」

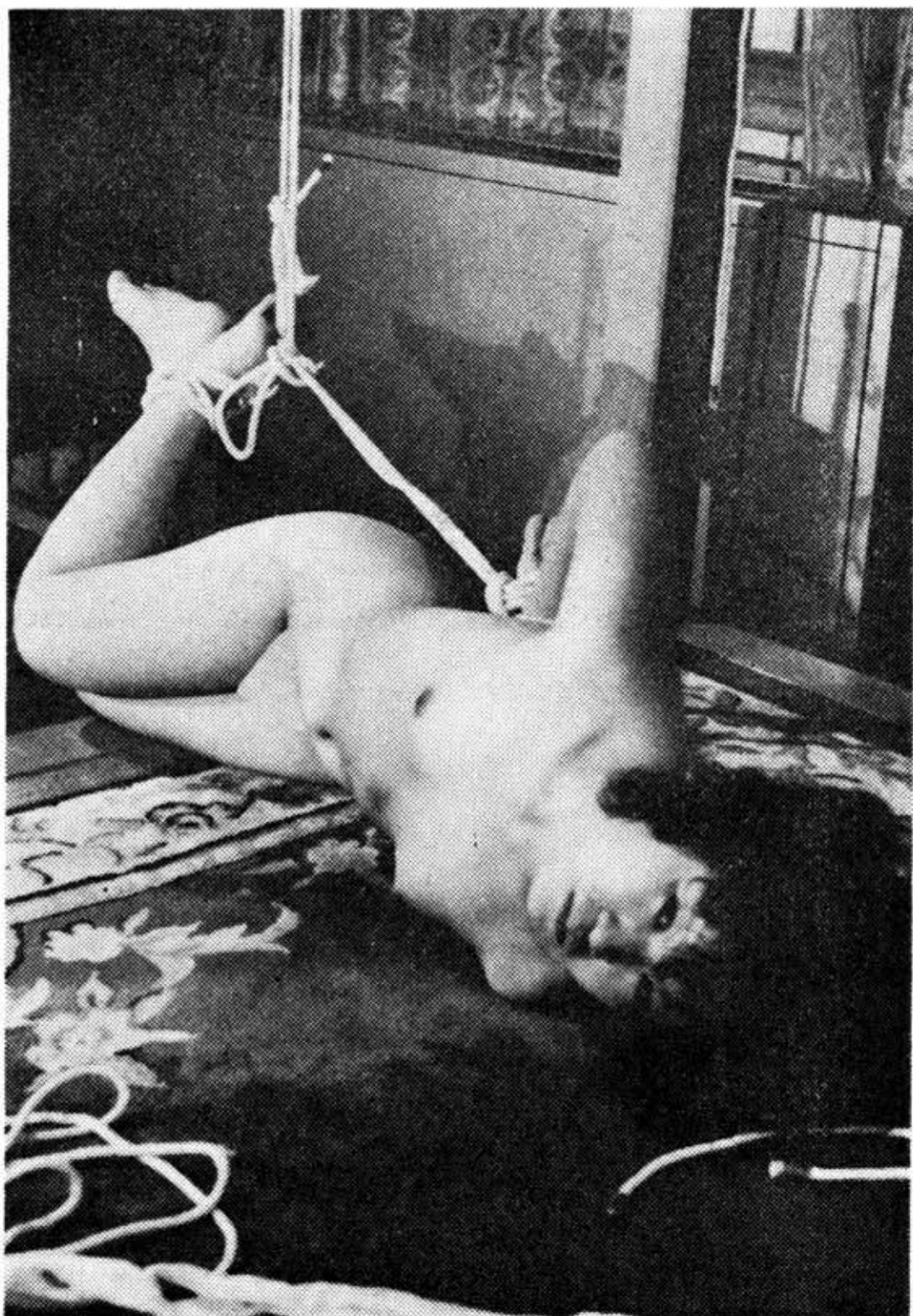
「まあ、覚悟だなんて……。そんな……」

語尾を濁すところを襲いかかるようにして後手を捻じあげて縄を掛けてゆく。

縄尻を上る滑車に通して引っぱると紀代の裸身が弓のように反って、「うーん」と呻き声が豆絞りの猿ぐつわの奥から洩れる。

でも、流石に一本のロープでだけ、紀代の全体重を宙に浮かしきってしまうほどの力はない。中途で縄止めておいて、カメラのシャッターを切るのが関の山である。

活いきのよい鯉のように、肢体のすみずみまでピンと張りきっているのは、責めていて気持ちのよいものである。だらりと、だらけきった女体の持主なんかは、被写体としても価値の



少ないものである。

ここで私は、両足だけを自由にさせた活のよい紀代のうつ伏せの肢体の種々相を、いろいろにカメラに収めてみた。縛られた後手首を高々と挙げて、板の間で、のたうち回る紀代の姿態は、いたく私の気に入った。

これほど肩口まで高々とよく上がった後手

縛りつて、今までにあったらうか。お尻を盛りあげさせて、両足を曲げ、伸ばし、バタバタと、もがく有様を、私は台上から俯瞰しながら幾枚となくシャッターを切った。

板の間を這いずりまわるようにして、もがいている紀代の後手首を縛った縄を、鴨居の滑車に通して縄止めてあったのを、徐々に

引っぱってみた。

と、板の間に、ぺったりと胸を合わせてつけていた紀代の全裸の肢体に、少し宛変化が起こってきた。胸が起き上がり、腰が浮き、上半身が、うつ伏せの格好になってきて、膝は坐り直され、縄を引けば引くほど、後手が上へあがり、つれて腰が伸びてきた。



柱を前にした板の間での責めを一段落してライトの配置換えのため、休憩することにした。本日の前半のSMプレイは、これで終わったことになる。

いつか、高村浩子が『御主人様と女奴隷』という設定で、自分の希望を私に対する手紙で書いてきたことがあって、それを元にして

浣腸責めを含むSMプレイを展開したことがあったが、今の西条紀代では、まだまだ、そんなところまでは無理であろう。第一、奇譚クラブにしたって、そう何冊も読んでいないだろうし、それにSMに対する理解度だって高村浩子の比ではないだろう。

だが、しかし私は本日の後半の部に於いては、幾分、そうしたニュアンスのある責めをやりたいものだと思っていた。といって、私の紀代に対するMの嗜好も、特別にこれといって掴んだものはなかった。ただ、操り責めに関しては弱いのではないかと、感じているくらいのものだった。

カーペットの敷いてある部屋へ舞台を移して、少し縛り方を変えてみた。冷たい感じの板の間と違って、こちらは、なんとなく密室ムードの甘い羞恥責めが適しているような温い雰囲気を持った環境である。

紀代の頸の両側を通ってきたロープを、胸の部分で絡ませてから左右に振り分け、お臍

## 密室ムードの責め



のところでコブを作って、そのまま下へ走って股間縛りにした。更に両足を膝のところで背後から右と左に引き離すように縄を掛け、その縄を後手首に固定した。

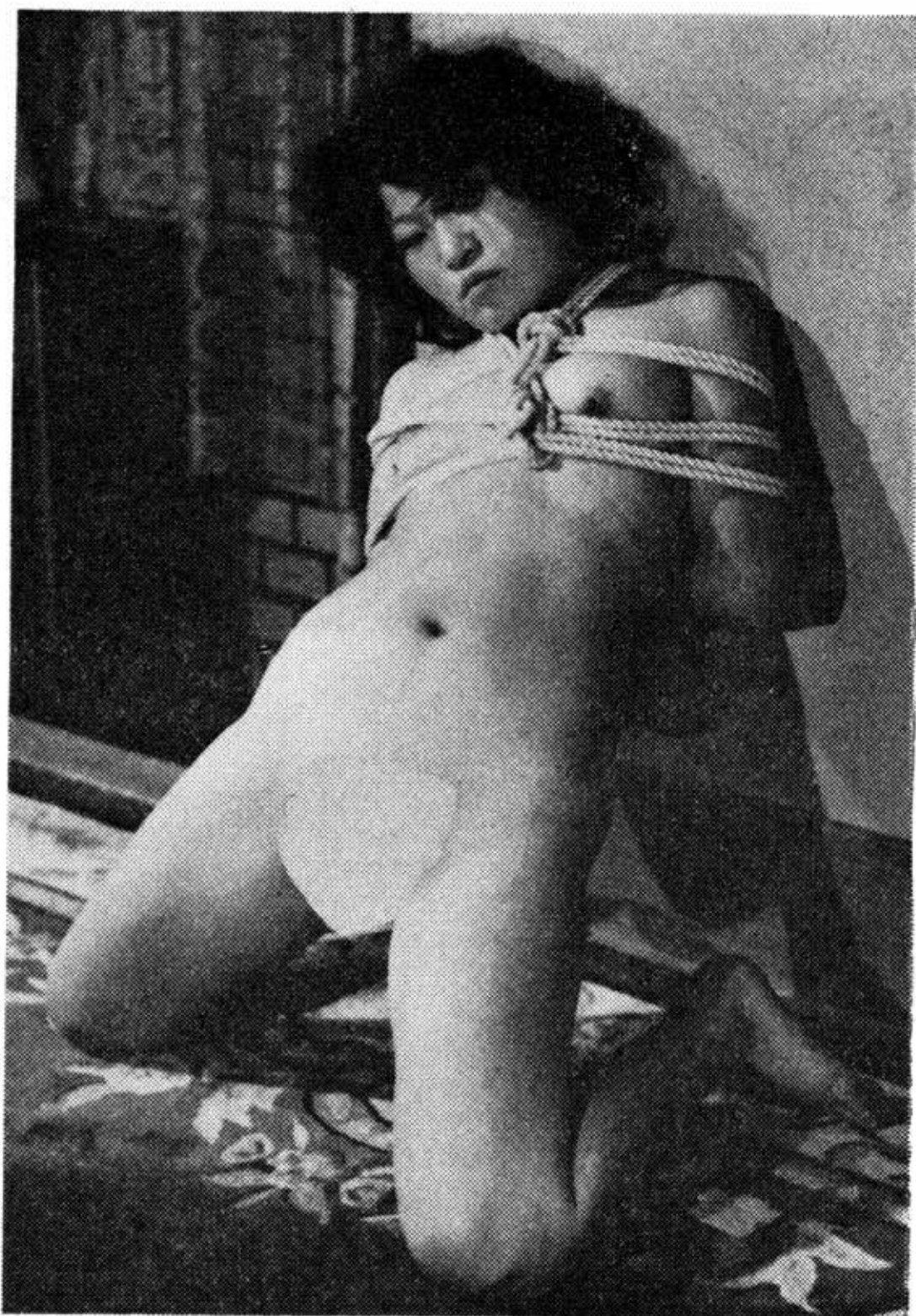
この縛り自体、大して変わりばえのあるものではないのだが、一たび女体をころりと床の上へ転がしてみたら、あらあら不思議、この縛り方の効果が、テキ面に現われてくるから妙である。転がされることによって、いやでも縄に引きつけられて、両方の脚が、膝頭の縄で右と左に大きく開いてしまうのだ。

私は坐っていた紀代の肩とお尻に手をかけて、抱えあげるようにして、転がしてしまっただ。予想したように脚が大きく開いた。

「痛い、痛い。こんなの、いやだわ。起こして。ねえ、起こして。ねえ、ねえ……」

思いもかけぬ、あられもない開脚縛りになってしまったので、あわてた紀代は、猿ぐつわをされていなかったから、腹の底から絞っただすような声を出した。

私は、そんなセリフは一切、意に介せず、ころりころりと、まるで焼いている煎餅を返すように、縛られた紀代の身体を、ひっくり返した。そのたびに、ロープが、ぐぐつと二の腕の肌に喰い込んで、如何にも、きつそう



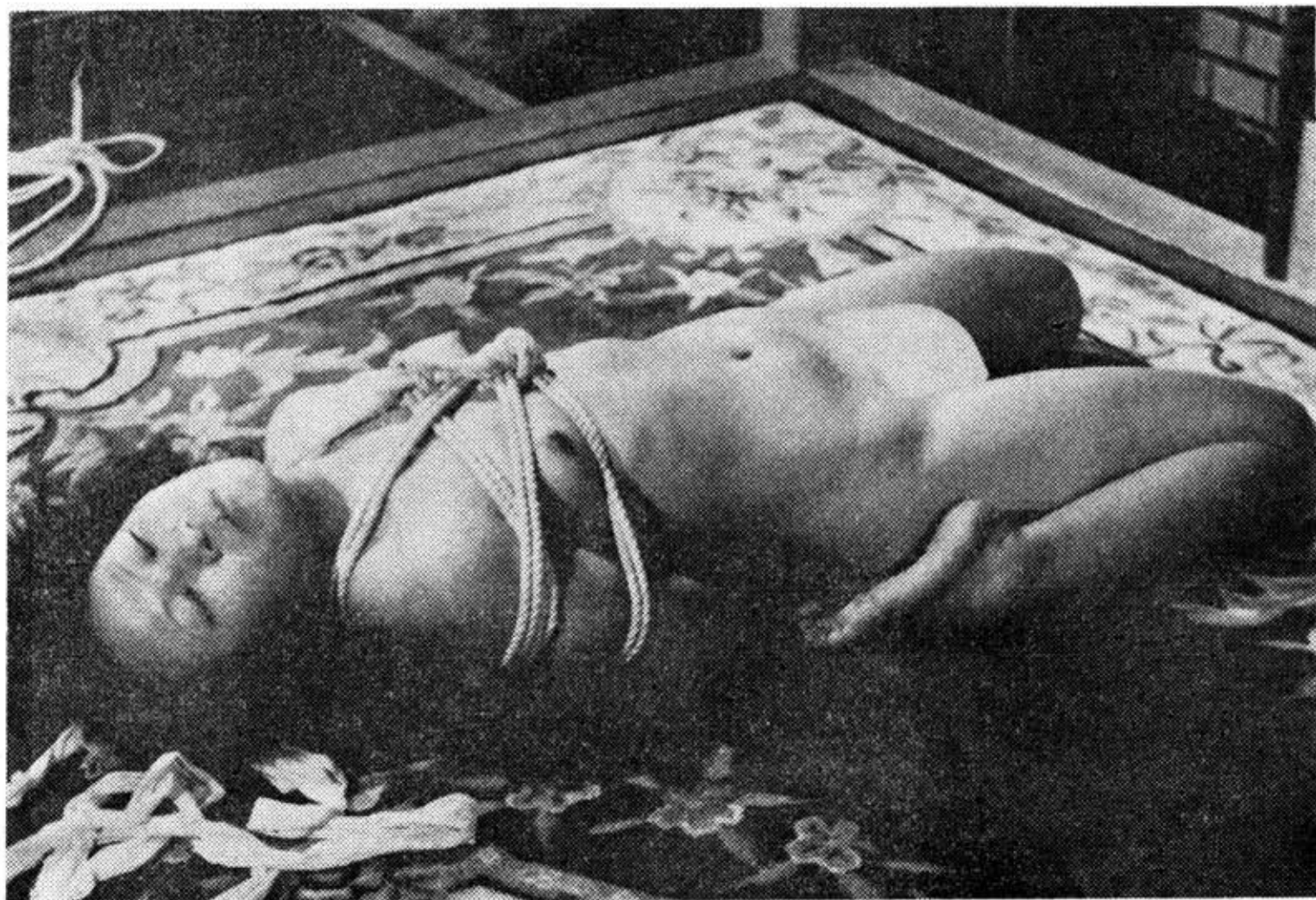
である。いや、それよりも股間縛りの縄の締まっているのを見られる方が堪まらないだろう。いやでも、見て下さい——といわんばかり、両足が開いてしまうのである。

私は紀代を転がしては覗き込み、覗き込みでは転がした挙句、一番よい眺めのポーズになったところで、静止させた。

意地悪く、そんなポーズで放置しておいて私は、ゆっくりとした動作でライトを集中させ、カメラを構えてファインダーを覗いたがなかなか、シャッターは切らなかった。

「いや、いや、いや……」

紀代は駄々をこねているが、動けば動くほど、縄が柔肌に喰い込んでくるので、そんな



不本意な姿のままで、じっとしているより、仕方がなかった。これは一体、なんという責めに属するのだろうか。開股股間縛りとでも名付けるべきだろうか。

私は、あられもなく足を上げきったままの紀代の姿態をファインダーから覗いて幾枚となくシャッターを切ったけれど、そのまま、ずっと放置したままで、スツールに腰を下ろして次の責めの構想を考えていた。

「早く解いテエー。解イ、テエー」

紀代の叫び声は、私の耳には、遠い遠い夢幻の彼方から叫びかけているようで、むしろ楽しい子守唄のようでもあった。

私は暫く眠っていたのかも知れない。

五分か、十分か？

それは一炊の夢にも足りない

い須臾に過ぎなかったろうか。ふと、気がついた時は、私の頭は冴えわたり、身体には元気が漲っているのを覚えた。五分か、十分、まどろんだ間に一生の夢を見ることも可能である。だが、私の見た夢は、紀代を操り責めにするだけであって、時間的には、そう長いものではなかった。気がついてみると、紀代は、さっきのままのポーズで、じっとしていた。

私は、す早く縄を解いて、紀代を自由にしたが、解いてしまうなり、再び後手高手小手首縄に縛りあげてしまった。次は、この縛りで——と思いついたあとの縄の捌きは早かった。もともと紀代は、縛っていて痛いとか、縄のあとがつくなんて言わない女だから、私も縛っていても気が楽であった。

思った通りに、力いっぱい締めつけながら縄を掛けることが出来たから、従って、自然と縄捌きのスピードも、ここになって出てきたわけである。

## 操り責めに悶える紀代

今度こそ「操り責めにしてやろう」という下心があったから、後手首を思いきり上げさせておいて、乳房の膨らみを強調しつつ、主



として上半身にまとめて縄掛けをやった。

敏感な紀代の肌を、この指先で擦りまくったならば、一体、どのような反応を示すことだろうか。擦ったければ、笑うがよい。耐えられなければ、ころげまわって狂うがよい。カーペットの上だから、どのようにころげまわっても、痛いことはない筈だ。

擦り責めは、まことにソフトタッチの責めだ。身体に傷あとを残すこともないし、また血を流すような惨酷さもない。女性に対する責めとしては、これほど効果的で面白いものはないだろう。ただ、写真にした場合、果して絶妙のシャッターチャンスを狙めるか、どうかが、いささか疑問ではあるが――。

過去に於いて私は幾人もの女性に擦り責めを加えた経験がある。その際の梨花悠紀子と東浦ひかるの発声の凄さは、未だに耳に残っているし、余りの美声を聞き流すのが惜しくてテープに採ったこともあった。

擦り責めも反応のない場合は、一人相撲に終わってしまったって、まことに興味索然たるものになってしまうのだが、激しい反応を示す女性に遭遇すると、お互いに忘れることの出来ない共通のシークレットを持つことになって、離れ難くなってしまうものである。

「紀代、そのまま立ってごらん」

後手首を逆手にして、背中で背負っているような格好で縛られている紀代が立つと、一段と手首が高く上がって見える。だらりと下がった後手首は、まことにしまらないものであるが、紀代の後手縛りは実に素晴らしい。

立て、と言われて、次に私に、何をされるのか――と思ったのか紀代はスツールに腰を下ろしている私の方へ歩み寄ってきた。年が若くて、胸のふくらみなど、まだ十分の紀代ではあるが、あるべきところのものだけは房々としていて至って濃密である。

縄でいためつけられて、ひしゃげたようにいじけた乳房が私の目の前にあった。私は縄目の間から乳房をひっぱり出し盛り上がらせ



「大きくなれ、大きくなれ……」  
平べったいお皿を伏せたような乳房を、小型のお椀ぐらいにしたいと思って、たぐり寄



せるのだが、大体が肉づきがよくないので、こりこりとするポインにはなっていない。

丁度、私の口の高さに位置するピンク色の乳首を、チロチロ、チロチロと舌の先で舐めてみる。両方の乳首を交互に、舌の先でころがすようにしておいてから、唇をすばめて、

ちゅっと吸ってみると、忽ちにして、紀代の上半身が、ぐらぐらと大きく揺れて、私の膝の上に倒れかかってきた。

私は両腕で紀代を受けとめ、膝の上に仰向けになるように抱えあげた。

唇を合わすと、おずおずと、小さく口を開

いて、舌の先だけをちょ

っと出してきた。そのおちよぽ口をこじあけるようにして、私の舌は紀代の口中で暴れまわった。

はじめのうちは、私の為すがままに、じっとしていた紀代であったが、私が唇を離れたのを機会に私の膝に当たった自分のお尻を支点として、ぐーっと弓のように、反っていった。

縄は、二の腕、胸に喰い込むように締められ後手首を縛った縄目は、石のように固くなっている。素晴らしい緊縛感である。

縄目の締め具合を確

めた私の掌が、紀代の脇腹から、お臍のまわりを、まさぐり始めると、紀代の両足に徐々に力が加わって、ピンと一直線に伸ばされてゆく。私の手が次第に広範囲に紀代の肌をマッサージし始めると、きゅっと伸ばしていた足の爪先が、反ったり曲げられたり、ピクピクと動きだした。

私は、そんな紀代の肢体の微妙な変化を、一つも見逃がすまいと、鋭く観察していた。伸ばされた両足に、力が入るたびに拡がって、八の字に開ききったとき、私の腕に紀代の上半身の重みが急に加わったかと思うと、紀代の口から、荒い吐息が洩れだした。

紀代自身、無意識だろうが、押えようとしても押えきれない荒い呼吸が徐々に激しくなってきた、私の耳にも、はっきりと聞きとれた。ピンと伸ばした右足が、小刻みにふるえて痙攣しはじめたかと思うと、それが今度は左足に移ってきた。

左足がぶるぶると痙攣している間は、右足のふるえが止まり、右足が痙攣している間は左足のふるえは止まっていた。

そのうち、両方の足に同時に激しい痙攣が起こったかを見ると、今まで下へ向かって伸ばしていた脚が、ぐぐぐうと、思いきり左



右に開きながら、上へ向かってあがってきた。

「う、うーん、うーん」

吐息が呻き声に変わり、抱えている私の手に紀代の女体の振動が明らかな手応えとなって伝わってくる。途端に後へ反らしていた紀代の顔が、がっくりと私の腕の中へ埋める様にもたせかけてきた。

ぐったりと力の抜けた紀代の身体を抱え起こして、その場へ立たせた。フラフラと足元の定まらない紀代は稍、両足を開き気味にして、ぼんやりと突っ立っている。

「さあ、壁のところで歩いていて——」

私の命令に、紀代は物頼く歩いて行く。その時の紀代のお尻の動きに目をやりながら、私はスツールに腰を下ろしたままでカメラを構えてシャッターを切った。

「壁の前で、こちらを向いて膝で立って」「上半身を反らすんだ。頭を壁にもたせてもよいから充分に反って、反って——」  
「今度は腰を下ろしたら、こちらを向いて、



両股を思いきり開くんだ」

紀代は、私の命ずる通り、素直にポーズを取っていった。私の意図する所と違っていても私は敢てそれを訂正せず、紀代のとったポーズに対してカメラを向けた。

私は口先だけで紀代を動かし、立っていた彼女を結局、指一本触れずに、カーペットの

上に転がしてしまった。

「仰向けに寝るんだッ」

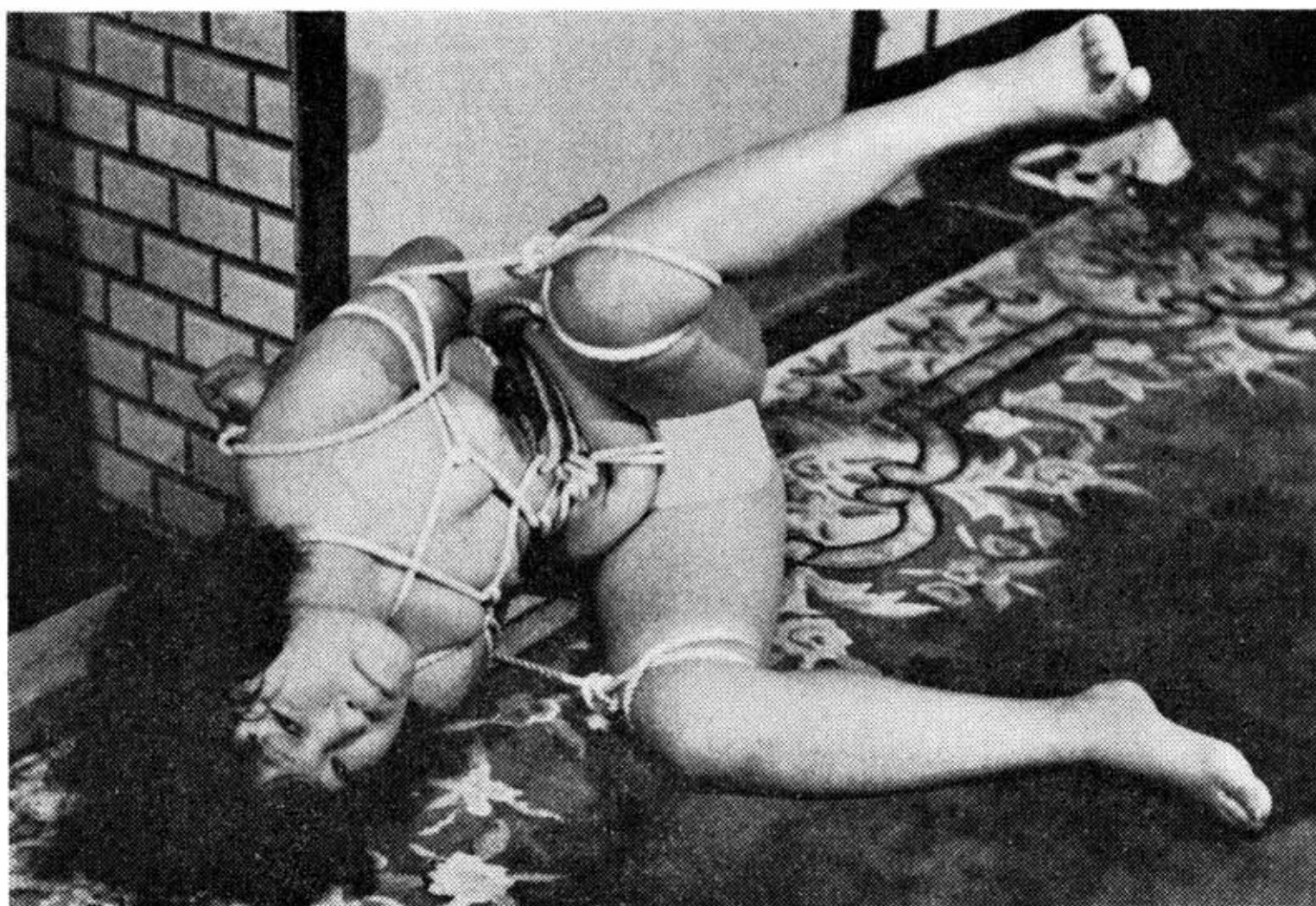
私の命令を忠実に守ろうとして必死に、もがく紀代だが、如何に身体が柔軟だといっても両手首を背後できつく縛られているため、足で空を蹴って、言われた通りのポーズをしようとしても、中々思うようにならない。徒らに顔を持ち上げて、足をバタバタさせているばかりである。

近寄った私は、足を伸ばして足先で、介添えをしてやったので、紀代は、やっと始めて膝を折って仰向けになることが出来た。

「紀代ッ」

「ハイ」

「紀代にはね、初めての責めかもしれないけど、操り責めというのをやってみるよ。口はふさがないから、思いきり、声を出しても構わないよ。まあ、いわば、紀代の触覚に対する感度のテストというようなものだ」



「まあなんだか怖いみたい。キヨ、辛抱しますけど、余りきつくしないで下さいネ」  
 「きつくするか、しないかは紀代の反応を見てからだよ。だから、責められた時の気持ちを、素直に口に出して言うんだナ」  
 「ひゃー、そんなこと、恥かしいわ」  
 そんなことを言っているうちに、私が紀代の脇腹に手をやって擦りはじめると、開いていた眼をつむるなり、両足をパツと伸ばした。

「まあ、ああー、く、くすぐったい。やめて、やめて。たまらない——。やめてエ……」  
 私は紀代の足の裏から手を放して、胫から腰を浮かした。紀代はすかさず膝を曲げて、足を引き寄せた。足の裏に対する擦り責めにあった紀代の足の指は、五本とも、ぐっと内

「ひゃー、か、かんにんして……」  
 紀代の脚が、私の尻の下で、ぐぐぐと蠢いているのが、よくわかる。それにつれて、足の拇指が、まるで指人形のように、ピクピクピクと、いそがしく動いている。  
 私は面白くなって、右と左と交互に擦り続ける。余りじかに触るよりも、少し間をあけて、触れるか触れないくらいの距離で、そろりそろりとやる方が擦ったいらしい。足の裏全体に、刷くように、さっと指先を這わしたとき、紀代の口から、思わず絶叫のような悲鳴が洩れた。



側に強く曲げられている。

私の執拗な指先は、膝小僧の裏側の柔らかい皮膚を狙って再び擦りを開始するが、紀代の足が、ぱっと伸びて私の触手を立ちどころに、はずしてしまふ。すると、そのはずされた指先は、次にお尻の横を目標にして、もぞもぞと気味悪く、這いずりまわる。

ころげて逃げ回っても、擦る場所には事欠かない。太股のツケ根からお尻の割れ目、脇腹からお臍のまわりと、私はそれらの感度を試すように、指先を這わせていった。

汗まみれになった額に、べったりと黒髪をへばりつけて、紀代はカーペットの上を輾転と、ころげまわった。

私も、唇をきゅっと噛んで、せわしく動く紀代の肌を求めて指を這わせる。全身をエビのように曲げたり伸ばしたりして、もがけばもがくほど、私の指にも力が籠っていった。「もう、かんにんして。こんな擦ったいの、辛抱できないワ。やめて、やめてーエ」

口では、やめて、と言いながらも、紀代の身体の方は、万更でもなさそうである。膝をぐっと伸ばして足の甲を立てていたかと思うと、急に膝を、くの字に曲げて、脛に力こぶが出来るほど、踵をお尻に引きつけている。

擦りの指先を逃がれようと

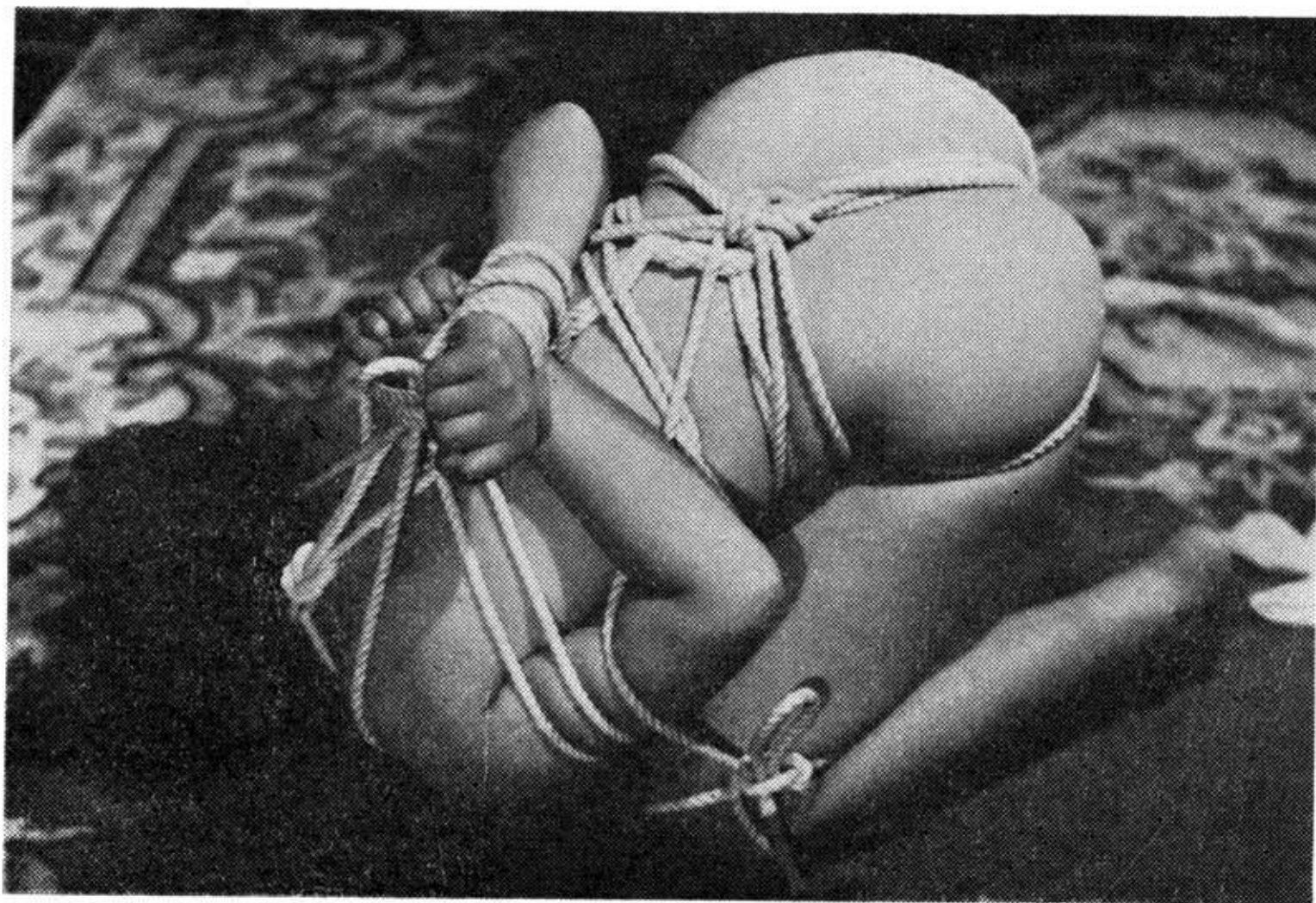
して、もぞもぞと、もがき回る真白いお臀も一寸、触手を休むと、いかにも次の責めを待っているかのように淫らな蠢動を見せているのである。

「ああ、あああ、そんなところ擦っては、たまらない。かんにん、かんにん……」

執拗に、つかず離れず、柔らかい肌を求めて這いまわる私の指先の擦り責めにあって紀代は、身も世もあらず悶えぬいていた。

果して、この西条紀代という女性は、M女性なのだろうか。だが、今のところ、二回に亘るSMプレイだけでは、この西条紀代が、マゾに生長してゆくのか否かは、私には判らない。ただ、私はこれ以上、紀代を責めつづけてMに飼育してゆくつもりはない。

もし、紀代自身が希望するならば、適当なS人士に、私





からバトンタッチして飼育して貰ったらよいと思う。紀代の身体の中に、マゾの芽があるものならば、適当な飼育とSMプレイの連続によって、華やかに開花するのではないかと思う。ルポライターとしての私は、また新しい明日の女性を求めて、そのM性の探查に憂身をやつすことになるだろう。女性の身体の中に巣喰う神秘性は、まだ見極められていない永遠の謎ではないだろうか。私のお尻の下敷きになって蠢いていた紀代も、私の擦り触手が止むとおとなしくなってくる。疲れ果てたのか、ぐったりカーペットの上に身体を伸ばして、ひとときの安らぎを求めている。空港建物の屋上で、無邪気に走りまわっていた紀代と、擦り責めにあって悶え抜いていた紀代と、そのどちらが、本当の西条紀代なのであろうか。

紀代の動きが平静に戻ってしまおうと、私の嗜虐心も、急速に冷却していった。

## エピソード

さらば、西条紀代よ。

私の予め練っていた君に対する責めの構想は、今日も、その十分の一も実施することは出来なかった。だが、今日半日で、百数十枚の緊縛写真は撮影することが出来た。

初心な君に対して、僅か二回だけのSMプレイで、これほどまでに進歩してくれたのはやはり君に、その素質があったのだろう。

それに、新幹線で、わざわざ大阪まで出て来てくれた君が、忠実で、素直に、誠心誠意つとめてくれたお蔭だと思う。

腕が柔らかくて縛った後手首のよく上がるのには、実に感心した。他人の介添えなしに君のように、自分で背後の両手首をX字に交叉させることの出来る人は、珍しい。これらの飼育如何では、きっと素晴らしい、マゾ女性になることだろう。君の前に、君にふさわしいS男性が現われることを祈っている。

お正月には、故郷へ帰るそうだが、自由に翼を伸ばして、思いきり雪原を滑って、SMの英気を養ってきてほしい。



## 五 番 役

この国を支配するエネルギー源は主として電力であり、これは潮汐、又は潮流によって調達されている。食糧も小型潜水艇による海中漁業で、豊富に供給される魚類その他を加工精製し、それに必要な栄養素を加えることで数千の生命を維持するには余りがある。

つまり、この国での自給自足態勢は完全で必ずしも、地上からの補給を必要としていない。したがって原潜ネプチューン号が出勤し

地上との連絡に当たるのは、捕獲した美女たちを収容するという主任務の他は、有明の管理器材、その地、機械器具の補給、又、王宮の要求する様々の贅沢品、生鮮食料等を持ち帰ることだけでよいことになる。それでも、その種類、数量は莫大なものであり、大体、毎月一回は殆ど定例のように運航されなければならない。

大規模な捕獲作戦に際しては、マスターの有明が直率するのが常であった。一九六八年パリはマロニエの花とともに始まったこの物語の展開につれて、読者の愛読をいただいた

Fオペレーション（この作戦で蒐集された美女たちの肉体番号は、すべてFで表示されている）が、有明によって、多角的に指導されたことでも、よくわかりのことと思う。

しかし、一般の補給航海には必ずしも同行せず、むしろ、星恵美子や、サラ・ロスタンのような貴妃に指揮権を委任することの方が多。ガボン共和国に本拠を置く有明のコンゴマリットが巧みに企図を秘匿してモリチアス沖の海底に遺留した補給物資のコンテナを収容するだけなら、一週間足らずで充分なことであった。



第五十五回

しばらく星エミー司令が姿を見せなかったのは、年末の補給作戦に出かけていたからに他ならない。

百五十トン程の物資と機械が陸揚げされたけれども、そればかりでなく約二十名の捕獲女囚および若干の男奴用囚人も収容された。これはF作戦の、いわば積み残しであって、或事情から、青帮の組織で逐次とりまとめてあった者たちを、今回の航海で南支那海へ回って受領してきたのである。

前号まで「秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集した数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。最高の位は天位で、これは大后である貴和にだけしか許されていない。地位といっても、準后であるサラと星との二人だけである。更に幹部女官、武官によって構成される人位でも一品から五品まで合わせて凡そ二百名程であろうかこれ等は最低位の者でも、一応、人間らしく暮すことが出来、自由が与えられているといつてよい。その何十倍かになる銅位、鉄位の女囚、畜人から見れば、矢張り目を瞠る程にうらやましい地位であった。

一糸まわず素裸に引き剥かれ、哀哭の限り、もたえ苦しむ「レセプション」の悲惨さは重複するので省く。その結果、二十余名の美女たちは、それぞれの材質によって五段階の評点が定められ、服従度によって或は懲治檻に、或は拷問檻に泣き叫びながら渡されて行った。

それに押し出されたかのように、拷問檻で悲痛な日々を送っていた清水由香、張恵華その他、四名の女囚が懲治檻に移送されることに決まった。

拷問檻が禁固された孤独の責め苦であったとすれば、懲治檻は集団によって人格を踏みにじられる人間臭い責め苦の場所でもあるだけ、まだ、ましだといえよう。

帰国報告をエミー司令から受けた有明は、F作戦が成功裡に完了したことを宣言した。翌年の作戦は、あらたにGオペレーションとして発動されるであろう。

有明には今度の航海を待つ理由が一つ、あった。特に有明が注文して取り寄せた——といっても、これはこの国の表現で、実は万難を排して掠奪してきたわけであるが——その一人の男を有明は、どうしても手に入れたか

ったのである。その男とは健気な周小姐（月鏡）に憎むべき身体変工を施術し、自殺死体を送り返してきた、麻葉組織の組長、葉発彩であった。（第13回、参照）

麻葉組織は複雑に、からみ合っていて、誰もその一部分しか窺い知ることができない。したがって、葉発彩が林美玉を日本における彼のシンジケートの女ボスとして送り込もうとした時でも、呂親分たちはそれを全然、知らされていなかった。偶然にも、呂が美玉を拷問にかけていたところに来合わせた有明はマンマと引っかけってしまったのである。それが、有明にどんな傷手をもたらしたかは、この物語の最初に記した通りである。（第11回以降、参照）

葉発彩を捕えたのは青帮組織の大手柄だった。香港に潜入してきたのをキャッチしたところによる。その報告を聞いた有明は、直ちにネプチューン号を南支那海へ廻航させることを命じたのである。

インド人を父とし、日本人を母とする混血の美少女イーラ・ラジャンにおいて、その量り知れない受難の末に、適々運命の軌跡が合致した国際捜査官、新津謙介への思慕は死を



もっても、とどめ得ない程、確乎として根付いてしまっていた。

ところが、その熾烈な愛故に、新津を救う代償として、彼女が支払わねばならなかったのは、恋しい新津と別れ、マスターに全身全霊を捧げるという誓いだった。イーラは、自ら人身御供となることを承諾した。その代り有明が新津に危害を加えないと約束したからであった。(第32回、参照)

さて、懲治檻でのイーラは、次第にその人柄が、鬼のような上役たちにも判って貰えるようになってきていた。特に牢名主が最真にしたから、トントン拍子に席次も進んで、今はもう畳一枚をあずかる五番役となった。役付きともなれば新入り時代とはちがって、それこそ上げ膳、据え膳なのだから余程、楽になったといえよう。

牢内のシステムは、昔のしきたり通り、上役程、畳をとって独占し、新入りなどは一畳に13人と、ギューギューのすし詰めになって起居しなければならぬのである。(第33回参照)だから、畳の一枚分を自分一人だけで使えるということは、ここでは大変な権力を意味することになる。

天性のつつましき、やさしさは変わらなか

ったのであるが、表面だけでもイジイジしていることの許されぬ世界だったから、イーラも、ご多聞に洩れず、随分と違ってはきていた。

違って来たといえ、イーラの役割は牢名主の命令を受けて、所謂「新入りいじめ」をしなければならぬのだが、彼女が、これに新しい奇手を考えだしたのだから、その変化の激しさが、わがらうというものである。

「どう？ まだ出ないのかい」

ここだけは明るく照らし出されている。落ち間(手洗いのこと)の石棺のような便槽に三人の裸女がかがんで、ベソをかいている。

三人とも、F号追加作戦で収容された日本娘で万国博のムード作りに、ヨーロッパに派遣されたミス大阪、準ミス二人が、揃いも揃って香港で蒸発してマスコミを大騒ぎさせた当人達であった。万国博のため大勢の候補者の中から選り抜かれただけあって、三人が三人とも、単に美しいというばかりでなく、恵まれた才能と豊かな教養にあふれた良家のお嬢さんたちばかりなのだ。それが楽しいヨーロッパ旅行を中断させられたばかりか、天国と地獄ほど懸絶した有明の独裁王国に拐かさ

れ幽囚されるという運命の激変に見舞われたのであった。

ここに来てからの、一糸すら許されぬ赤裸の生活は如何にも恥かしく、又、頼りなかった。その上、つぎつぎと迫ってくる数々の凌辱は、いっそのこと、ひと思いに舌を嚙んで死んでしまいたい程であった。それも出来ず彼女等は泣く泣く、吹き荒れる運命の嵐に翻弄される他はなかったのである。戦意を喪失していた三人は、例の魔女審判も無我夢中で受け容れてしまったので、あの怖ろしい拷問檻送りだけは免除され、ここ懲治檻に渡されてきたのである。懲治檻は、一等扱い以外は誰でも、どうしても通過しなければならぬ関門なのだった。

新入りのキメを受けた三人は、早速、ここでは、あらゆる種類の自尊心を剝奪され、ひとカケラの羞恥も許されないのだということをも身をもって体験させられた。

一昼夜ずつ、便槽の底に縛りつけられて、先輩女囚たちの糞尿に漬け込まれる苦しみ。横になることも出来ず素肌を組み合わせて、やっとうとうとする毎晩。立っても坐っても何につけてインネンをつけられる煩わしさ。

これらが凄まじい勢いで三人に襲いかかってきたのである。

「まだ、出ないの？」

もう一度、イーラが聞いた。普通の調子なのに、三人は顔色をかえて、必死にイキみはじめた。

同じことを二度、三度、いわれて出来ないときは、必ずといってよい位、次に懲罰が待っているからだ。便意もないのに、出せ、出せと強要される。しかも、その一部始終を大勢に見守られてのことであった。わずかの間だったけれど、三人はそれを恥辱と感じる余裕すら、なくしてしまっていた。それ程、無態な要求は、あとからあとから出されていたし、それ以上に命令通りのことが出来なかった場合の処罰が怖ろしかったので、なりふり構わず、絶望的な猪突を試みる以外になかったからであった。

「で、できました」

ホッとしたような、うれしそうな大声でミス大阪が叫んだ。

これも小さい声では罰せられるから、アリったけの声を、ふり絞って言うのだった。「そうかい。それはよかったねえ。じゃあ、



おまえだけ、降りていいよ」石棺をおりると、両手をあげて落ち間に張ってある注連縄を、跨がらせられる。手を

使って拭うことは御法度だった。縄にコスリつけて、ふかなければならない。これも新入りにとって惨めな屈辱だった。

(第33回、参照)

しかし今日は、その上をゆく、辱かしめが用意されていたのだ。

「サ、早く四つん這いになって、ダメダメ、尻を明りの方に向けるのよ」

パシッと平手が、その臀部に鳴った。痛みよりも、みじめさでミス大阪はククッと声をつまらせた。

「でた、でた。ホントにでてきたじゃない。ホホホホ……」

覗き込んだイーラが、そのグロテスクな役割とは、ひどくコントラストを感じさせる上品な笑い声をあげた。

ギョッと締まった尻の中心から白いナイロン糸が、こぼれ出して、その先に直径5ミリばかり、長さ10ミリ程の小さなプラスチック製カプセルが、ぶらさがって、ゆらゆらと揺れていたのである。

イーラは、かつて、麻薬シンジケートの運び屋と、一緒になった事がある。(第12回参照) その時、ダイヤモンドを胃の中に入れて



密輸させるテクニックを目撃していた。この体験が、彼女に奇妙なアイデアを与えたといえよう。牢名主を経て、看守長に願い出てテグス糸を巻き込んだカプセルを、作って貰った。一端を首輪に結びつけて呑み込ませる。消化器官の内部をカプセルが動いて行くにつれて、糸は次第に、ほぐれて行くであろう。こうしてミス大阪は口から肛門まで一本のナイロン糸を通してしまったことになる。

ドツと洪笑が起った。

多少の時間差があったけれど準ミスの一人は、やっとのことで目的を果たした。しかしもう一人の準ミスは便秘症だったのか、どうしても出せない。とうとうホースを押し込まれて冷水で浣腸されてしまった。(浣腸器などは牢内にない) 水と一緒に石のように硬いカタマリが噴き出したかと思うと、それが下へ落ちずに、ブランブランと揺れた。カプセルが包み込まれていたのである。それが、おかしかったので、今まで固唾を呑んでいた大勢が、フキ出したというわけだった。

三人は落ち間で、四つ這いになることを命じられ、互いに顔を相手の尻の方に向け、三角形にかたまらせられる。首輪に結びつけた糸が解かれ、目の前の臀にブラ下がっている

カプセルに結びつけられる。その上で、イーラが冷たく言い放った。

「サア、みんな、もう一度、カプセルを呑み込むのよ」

ミス大阪の排出したカプセルは準ミスの口に、その準ミスが絞り出したカプセルを、もう一人の準ミスが、嫌々ながらも微罰を恐れて口に含む。そして、その臀には、もうミス大阪が、ひたと顔を寄せてグイッとカプセルを呑み込んでしまっていた。

こうして、三人の美女たちは、その体内を通してナイロン糸で結び合わされてしまったことになる。

## 歯には歯を

ミス大阪と準ミス二人をナイロン糸で文字通りジュズつなぎにしてしまった経緯は、宮殿でも話題となった。

呵々と嗤いながら、有明はイーラに断根式を許すように命じ、彼女に切断されるイケニエとして、新しく捕獲したばかりの葉発彩を指定した。

当初、有明はイーラが切断するのは、その恋人である新津謙介のものであるべきだと考

えていた。しかし、例の約束があるのと、急いで葉発彩を去勢する必要にも迫られていたので、幸にイーラは、愛する新津のものをチョン切るといふ悲劇から免れることが出来たのである。もちろん、白布で覆われ、一部分だけを丸く切り抜いた穴から出ているだけの状態だから、イーラとしては自分が切った相手が、どんな人間かは想像できる筈もなかった。

とに角、葉発彩は、かつて彼の祖先が施された宮刑という罰の結果と同じこと、つまり男でもなく女でもない宦官という特殊人間と化してしまったのである。(第36回参照)

断根式に先立ってイーラが受けた忠誠修行静・動二行の成績も拔群だったから、彼女が躊躇なく切除するであろうことが当事者に確信されたところだった。そしてイーラは、その期待を裏切らなかったのである。

断根式に立ち会った親授官、このときは加藤かつ代、つまり夕霧の局だったのだけれども、彼女は予め有明の内意を含んでいるので「F・七五四号(イーラのこと)」。これからおまえが切りとろうとしているのが、もしも新津謙介のものだったとしたら、おまえは、

「いったいどうする？」

と聞いた。

一瞬、彼女はハッとした様子で目を伏せたが、やがてキッと顔をあげて涼しくも、こう言い切ったものだ。

「わたくしは、新津さんには危害を加えないとおっしゃって下さった、マスターのお言葉を信じます」

やや皮肉まじりに、夕霧が切り返した。

「マスターは、それは新津に危害を加えるようなことはなさらないでしょう。そのお約束は信じて大丈夫です。でも、今はおまえ自身が、おまえの意思でチョン切ろうとしているのですよ」

あきらかに彼女は狼狽していた。前夜一晩かかって晴れの儀式に粗相のないよう、模型まで使って、繰り返し繰り返し教え込まれたことであつた。

「たとえば、これが……」

「たとえば？」

ニヤリと夕霧の局が嗤った。

「二、新津さんの、モノ、だった、として

も……」

「だったら、どうなのさ」

ますます、追求が急になる。

「かまいません、わたくしは。どうせ、わたくしはマスターに永遠の愛をお誓いしたので。新津さんとは、新津さんとは、おお、もう何もかも、駄目、駄目になってしまったんですわ」

哀れむべしいーらは、絶望に顔をクシャクシャに歪めながら、まっしぐらに断崖を、とび降りて行くのだった。

それからあとは、もう無我夢中であつた。そうなれば、何回となく叩きこまれた練習がモノをいうことになる。無意識でも、手は正確に動いて切りとろうとする。そのモノを憎悪する本能が潜んでいたのかも知れない。

例によって、跨いでいる純白のシーツの上に、夥しい血潮が迸り出てきた。断根式が終わつたのである。

巨根を喪った葉発彩は、すぐにポートエリアに運び出された。そして、キツカリ三週間後に、再びパレスエリアに運ばれることになった。その三週間に奇妙な身体変工が施されたのである。簡単にいえば、葉発彩において男と女が完全に入れ換えられてしまったのである。微妙な稜線さえホンモノそっくりに整

形される。もちろん、このためには、彼と血液型の全く同じな一人の女性が、犠牲を支払っていたのである。

前にも記したように、ウィリー博士は、その豊富な生体実験の当然の結果として、地上の外科医術を遥かに凌駕する未来的、外科医術を打ち建てていた。この国では、心臓移植さえ、かなりの確率で成功していたし、その上、博士の飽くことのない野心は、脳移植に向けられていたのである。

もし、これに成功したならば、老朽化した肉体を棄てて、あたらしい若い肉体に移転することが出来る。有限なのは肉体であつて、「いのち」は無限に生きることになる筈であつた。ただし、若い肉体を提供する若者の生命は犠牲とされるであろう。ここにも、地上的なモラルとのギャップがあつた。この国では、マスターの必要とする生命だけが、生きることが許されるにすぎない。

閑話休題。そんなわけで、発達したこの国の医術によれば、心臓などより遥かに原始的な器官である生殖器の移植などは、お茶の子さいさいだったのである。

葉発彩は、もう男とはいえなくなつてしま



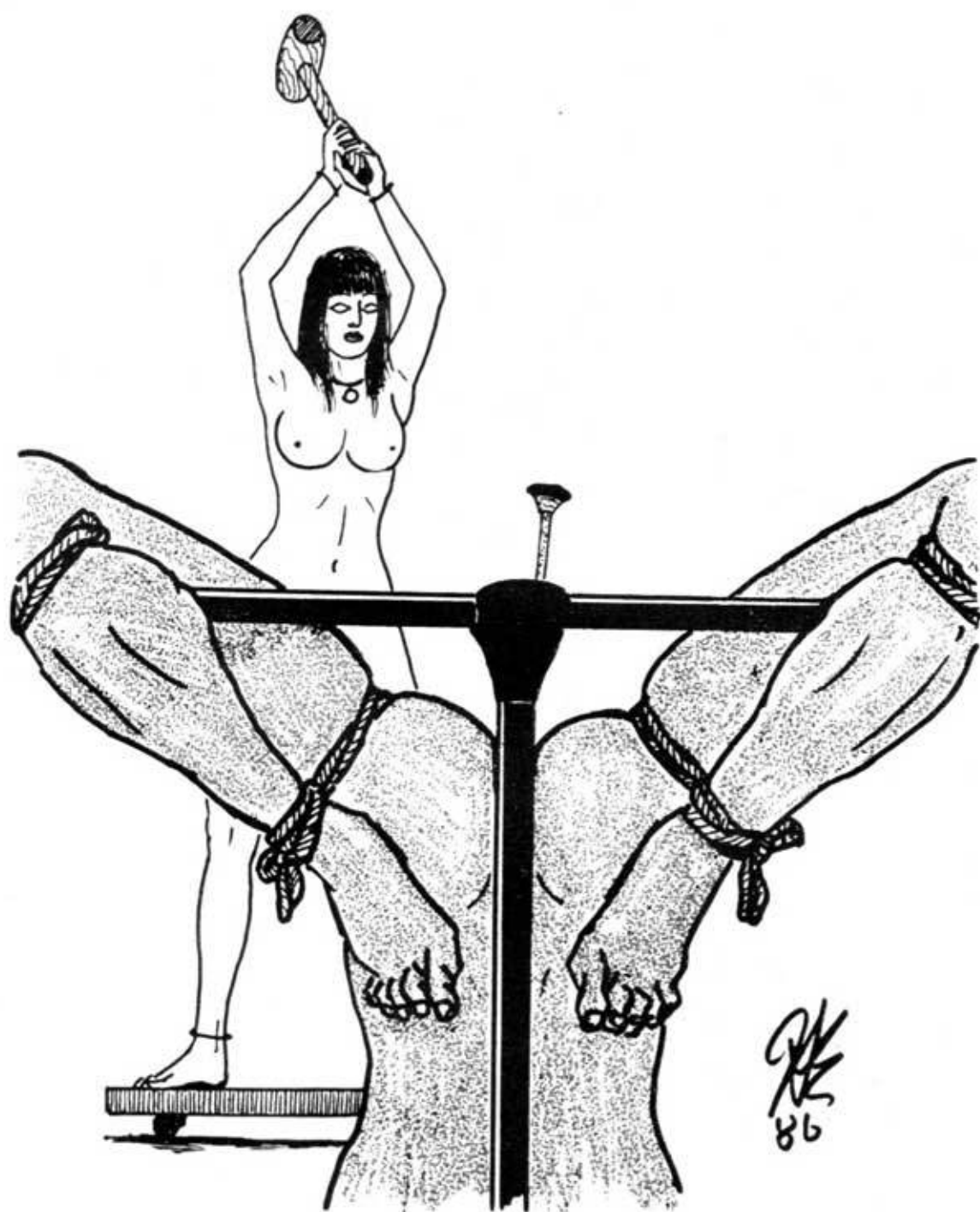
っていたけれども、それでも男を運ぶ時のように、嚴重に施錠された木棺に入れられて、直接、訓練連隊の屍体処理場に運搬されてきた。

ジャンヌこと、小林敏子が、姉そっくりの生き人形、剥製人間に対面したアノ場所であった。

棺から引き出された葉は、たちまちアマゾン女兵たちの手によって、特別に作られた刑架に逆磔されてしまった。T字型に組んだパイプに膝うらをひっかけて、膝立てのまま逆立ちをしたような姿勢で、固定されたのである。ただし、太腿は思いきり開かされて、あたかもパイプのT字と同じような肉体文字を形作っていた。したがって、無残に変工された部分が、これでもかというようにムキ出し

になる。

パイプ刑架の根元から、床上を真っ直に延びたレールが敷設してあって、その一方の端五、六メートル位、離れたところに、白布で嵌われた等身大の彫像のようなものが置かれてあった。



エミー司令、高橋待従などを伴った有明が入ってきた。貴位だけが使用を許された高価な香水の匂いが部屋一ぱいに漂いはじめる。殺風景な処刑室も何となく華やいだムードになるから不思議である。いや、この国では少しも不思議なことではなかった。丁度、着飾

ったスペインの貴婦人達が牛殺しを楽しんだように、有明や、それに随順する貴妃たちには、地上的なモラルにより殺人を罪悪視する習慣が全くなくなっていた。罪悪感のないところに陰惨な雰囲気生まれるわけがなかったのである。

エミー司令が白布を、とり除いた。わかってる彼女ですら、心の中で舌を巻く思いだった。

「周小姐（シャオチエ）」  
思わず、その名前を、口ずさんだ。

「どうだよく出来ただろう」  
有明がエミー司令と言いか

けて、すぐ逆さになった葉発彩の顔のところへ、しゃがみこんだ。

「葉。さかさでは、よく見分けもつくまいがおまえが辱かしめ、殺した周月鏡が生きかえったのだ。よく、見ろ」

「ゲェッ」

葉が奇妙な声を出した。

実際、その裸身は生きてるように息づいていた。そして、ほっそりした肢体には不釣り合いな程、盛り上がった双の乳房も、つややかな柔毛に嵌われたあたりも、あらわにかくそうともせず仁王立ちとなり、振りあげた両手に大きな木槌を握っていたのである。

高橋待従（淑恵）が、直径2センチもある檜の木串を、葉発彩のあたらしく埋め込まれた部分に押し込んだ。

「助けてくれ」

弱々しく葉発彩が叫んだ。彼も臆気ながら自分を襲うであろう運命を察知したにちがいない。

「葉発彩」

さながら閻王に化身したかのような冷厳そのものの声音で有明、すなわち青帮の盟主、蔡樹理が宣告した。

「おまえは、わが同志、周見鏡を誘拐し、器官移植という凌辱を彼女に加えた。哀れにも彼女は男女両性を兼備するカタワにされてしまったのだ。なる程、彼女は舌を嚙んで自殺したものであろう。しかし、殺したのは、おまえたちだ。これは斗いだから、私等も、おまえたちを殺す。だから、勝敗も時の運で、私等とて、おまえたちに殺されたことを免や角、言おうとは思わない。しかし、今度の場合は、ちがう。私は周小姐の辛い心を思うと哀れでならないのだ。私は決心した。彼女がされたのと同じことを、おまえにしてやろうと。そして、周小姐——自身——の手で、おまえに復讐させてろうと……」

有明は、われとわが声に昂奮して絶句してしまった。居並ぶ貴妃たちや、アマゾン女兵たちも肅然として、うつむいてしまった。

「今、ようやく、その時がきた。葉発彩よ、覚悟するがよい。おまえが恥辱を与え、おまえが殺した周見鏡の手で、おまえを地獄へ送ってやるのだ」

有明が目くばせをすると、アマゾン女兵の一人が、持っていたリモコン装置のスイッチを押した。

周月鏡の裸像が、レールの上を台ごとスルスル動いて、葉発彩に近づく。

高々と振りあげられた木槌が、突き出していた木串をパシッと打つ。

「ギャーッ」

裸像の足もとで、葉の絶叫が奔った。

無心の裸像は、無表情のまま再び木槌を振りあげ、ズシンと、又もやそれを落とした。拘束された腰をよじって、多少でも木串の位置をかえようとする葉の努力も、無駄であった。

内臓されているコンピューターが、左右に動く木串の頭をねらって、それに木槌が正確に当たるように調整していたからである。

ドクドクと鮮血が、あふれ出てきた。木串は体腔内に侵入して行く。頭がかくれそうになると、口金をつけた、もう一本の木串が継ぎ足された。

串刺しにされた葉発彩の断末魔の苦悶が始まる。

それでも、木槌は非情な打ち込みを続けていた。

——（未完）——



カット・マエダヒオミ



## 秋山夫妻

## 「新残酷ショー」

## 見聞記

香川ミノル

奇ク48年1月号、『サロン楽我記』欄にて秋山夫妻の消息に接し、すっかり懐旧病の虜となっておりましてところへ、続いて2月号ハSMカメラハントVに登場して、「新残酷ショー」の趣向は、秘密であるが乞御期待」などと、あふられては、ダイコームュージックでの秋山夫妻の正月特別興行に、何を措いても駆けつけずにはおられぬ心境になられたのであります。

愈々、予定の1月4日とは相成ったもの早く出かけねばと、心は弥猛にはやれども、仕事始めの日ともなれば、中々思い通りにはならず、やっと劇場に辿り着いたのは、11時の開演直後であった。

ダイコームュージックには、同じく秋山夫妻の『残酷ショー』を目当てに見に来た44年10月以来、3年3カ月振りになります。(このことは、45年1月号のハ奇クサロンVに、『秋山夫妻残酷ショー見聞記』として書きました) 前回は確か入場料は千円でしたが、池田元首相が亡くなっても、こちらは3年余でかつきり倍増の2千円でした。

他の劇場の入場料、或は正月興行で値上げすることの多い映画館等の例を考慮すれば、秋山夫妻のショーに、この値段は安すぎると思えますが、他のストリップは、1日4回公演で、夫妻の出番は、2時、5時半、9時の3回。残酷ショーの密度からは、当然とも

言えますが、その間、代り映えもしない○○○のパチンコに付き合うのは、そう楽なものではないから、彼は加減乗除した解としてはまず妥当な線でしょうか。

閑話休題——場内に入れば、既に特等席は満席です。ダイコームュージックに行かれた方は御存知の通り、同劇場はキャバレームードを惹句としているように、四角な室の中央に2本の柱があり、夫々を中心として大小2個の円形部分と、それを繋ぐ巾狭の長方形部分とで、いわば、高さ30センチ程の瓢箪形になっており、瓢箪の口から踊り子が登場してくるのです。従って、この大円部と繋部の隅角の部分が特等席なのです。

止むなく秋山夫妻の残酷ショーが始まったならば、特等席の間の隙間に、遮二無二、割り込む心算で、空席の中隅角部に最も近い後方の空席に腰を下ろしました。

時がたつにつれて始業式帰りか、お神酒の入った顔が増えてきて所謂「プン」の度にドツと前方の客の上に積み重なり、終わっても幾分余波が残って完全には元に戻りません。

このままでは、秋山夫妻の出演の時には、後方の陰に入ってしまうと思い、意を決して脱いだ外套をシッカと小脇にかかえて、大波動の仲間入りをすることにしました。

ムンムンする熱気に、額に噴き出す汗の玉を手で拭っては振り落としていく中に、や々と夫妻の出演時間となりました。既に見物席は正に、その名の通り、見物客の人垣が、ぎっしり組まれてしまい、前方の大円部が僅かに視野に入るのみです。

固唾をのんで待つ中に、瓢箪の口部で、鞭音がしたかと思いきと、悲鳴と共に、ローズ夫人が右肩からストラップで吊った豹の斑点模様のボトムレスの衣裳で、長い黒髪をなびかせながら駆け込んで来ます。続いて青色のショーツ姿の秋山氏が鞭をかざして追って来ました。

大円部の柱を1回りした西側で秋山氏に追い付かれた夫人は、思わず氏の足にしがみつきますが、すぐつき放されて、俯伏せに倒れ込みます。その夫人の背に、鞭が4回、5回と矢つぎ早やに鳴ります。

夫人の全身から力が抜けて、ぐったりとなつたところで、鞭を置いた氏は、二重に折つた縄をしいて、夫人の右手首に絡ませると手早く夫人を立たせざまに後手に絞りあげ、その上に左手首を重ねて固定すると乳房の上を一巻きして縄止めします。

夫人の衣裳の右肩のストラップを前後に外し、夫人を背後から抱くと、夫人の右の首筋から前胸部へと唇が這うにつれて、思わず夫人の喉から嬌声が洩れます。

縄の下に隠れた乳首をあらわそうと、衣裳を下に引っ張ると、夫人の腰が割れます。すかさず、谷間を通して前方へと共に抜けた2条の縄をデルタの両側に振り分けて締めあげると、一入、嘆声が高くなります。それに構わず絞りあげて手首の所で縄止めし、夫人を押し倒すと、右足首を縄尻に固定しました。

左足の付根から爪先へと、唇による愛撫が再開され、氏の顔が下腹部のデルタの間に隠れると、アッ、アッという夫人の声が次第に

高まり、脇腹に痙攣が走り、縛られた不自由な全身が激しく、わななき始めます。

夫人の右足首を固定した縄が解かれると、夫人は突然、身を起こして小円部へと後手のまま逃げ出します。如何なる演技が行なわれているのか、時折、鞭音の伴奏で、夫人の声が、悲鳴か、嬌声か、途絶えては、又聞こえて来ますが、残念ながら厚い人壁に遮られて全く見えません。

その間に、大円部の柱の北側に、南北に白いカバーのかかった煎餅蒲団が敷かれ、70センチ位の塩ビ管の両端近くに短い縄をテープで固定したものと、紫色の風呂敷包が、柱の前に置かれました。

再び夫人の姿が大円部に現われ、激しい吐息と共に、蒲団の上に、よろよろと倒れ込んで来たときには、身を被うものとは、後手に縛しめられた縄のみでした。

蒲団の上に横臥した夫人の後手の縄を解くと、まず夫人の右手首を塩ビ管の片側の縄で縛り付け、その外側に大きく上方に持ち上げた右足を固定しました。続いて、他端に夫人の左手首、左足首を同様に固定しますと、そこに、SMカメラハンドの表現を借りれば、「最も恰好のポーズが現出された」のです。



(SMカメラハント、45年5月号221頁、230頁、及び48年2月号235頁の写真よりポーズを御想像下さい)

残念ながら、公開の舞台では、SMカメラハントと同じには、進行しませんが、紫色の風呂敷包を解くと、太い水筆を取り出し、塩ビ管の中程を左手で、しっかり握って固定しつつ、右手の水筆を腋窩、乳房、そしてデルタへと這わしますと、夫人の噛みしめた歯と歯の間から、思わず呻きが洩れ、軽やかな筆の動きにつれて、高く或は低く、妙なる音楽が奏でられました。

遂に夫人のピンクの蕾が、楽の音に合わせて開花を始めるや、筆は捨てられ直径15ミリ余りの蠟燭3本を束ねたものにマッチで点火されました。炎が真っ直に立つとみるや、傾けられた蠟燭の先端から、先ず乳量に蠟涙がポトリポトリと滴下します。

一転して蠟燭は下方に移動し、2つの白い臀球の間に、夕立の如く蠟滴は降り、煤煙で或は薄黒く或は濃く彩るにつれて、夫人の喉より洩れる「アッ、アッ、アッ」という声の間隔は次第に狭ばまり、「アタタ……」と代り、やがて、「ヤメテ」「ユルシテ」の叫び声と共に、臀球は激しく前後に揺れ、蠟

涙は円丘を糸を引いて下がり、涙の滴りの形に固まります。

デルタから乳房へ、乳房からデルタへ、蠟雨が近付けば高く、遠ざかれば喘ぎに代っていた悲鳴も、次第に薄れて来ます。

直径20センチ余りの、より太目の一本の蠟燭に火を移しますと、蠟燭の根元でVの周辺を優しく、2度3度と撫でます。火のついた蠟燭は女体の中心に屹立しています。蠟燭の白い肌が伸縮を繰り返すにつれて、炎は妖しく、はためき、殺しても、殺しても洩れる呻きが徐々に甘く高まってゆきます。

蠟根がUに接吻しますと、声にならぬ呻きと共に、夫人は天外に飛翔するのでしょうか。吹き消された蠟燭が壺から放されました。

優しく夫人の手足を解放すると、人字形に仰臥させ、肌を染めた蠟滴を剥がします。

「丁寧に取っておかんと晩、使うとき困る」

3年前は、夫人の花芯は大きく開花したままであったが、今回は人差指が挿入されるとぴったりとまつわりつき、抜かれると、再びひそと凋む。

「見えたか。見えたと言う迄は、絶対に見せるぞ」「見えた」蒲団に横たわった夫人の脚部を観客の方に向けて、大円部を一周します

と、愛液の付いた人差指を口に、思わず目を細めて、「うまい」の聲が洩れます。

夫人の上半身を抱き起こしますと「おい、おい」と呼びながら、両頬を代る代る軽く叩きます。稍あって、夫人の大きく見開かれた両眼に生氣が戻って来ると、身体の両側に力なく垂れていた両腕が、しっかりと氏の両肩に回され、深い抱擁が交わされます。

夫人の首筋から胸許へと散歩した唇が、再び夫人の唇と合わされますと、夫人の両腋に手を差し入れ、エイと気合と共に夫人を立たせますと、観客に感謝の辞と共に敬礼して秋山夫妻の演技は終わりました。

あの奔放な艶技を見せてくれたローズ夫人が、紫色の風呂敷を拾うと、みっしりと一入肉の着いた腰部の前に拡げて退場していった仕草が、他のストリッパー諸嬢に比べて一際新鮮に感じられました。

秋山夫妻の人氣が高まるにつれて人山の下積み耐えねばならない見物人もまた、一種の残酷ショーといえます。お添えものなしの夫妻のSMカメラハント並みのショーが奇クの肝煎りでも、実現せぬものかと考えますが、世の中、思い通りには行かぬものです。

私は本年六十五才になり、性的な欲望も、殆ど枯れ果ててしまった感があります。妻とは先年、死に別れ、ひとりさびしい思いにふける夜もあるのですが、ただ私が十五才のときを目撃した、飯場の女の被虐場面を思い浮かべるときだけ、若者のような血の騒ぎをおぼえ、男としての動物的な衝動を得られるのです。当時、私の家はS県のS岳を背後にのぞんだ寒村にありました。村の北方約十キロほどの湖畔で、ダム工事の大規模な作業が始まっていて、たくさんの労務者が集まり、飯場小屋に寝泊まりしていました。



ある老人のつぶやき

## 月光の中の女

白鳥大蔵

カット・マエダヒオミ

その飯場で、炊事係に雇われたお光という村の娘が、なにかを盗んだ疑いで、荒くれ男たちに責められているのを、私は偶然に見ることができたのです。

お光は裸にされ、無残にも太い荒縄でがんじがらめに縛りあげられ、林の中の赤土の上に仰向けにされていました。

その夜は早くから大きな月が出て、木の葉のあいだから洩れる月光が、地面を神秘的までに青白く照らしていました。

両足を裂けるほどひろく無慈悲に押しひらかれ、お光は悶え泣いておりました。着物の

上のほうは全部ぬがされているのに、足は左右とも黒い脚絆を巻いたままです。その木綿の黒い素朴な脚絆と、むっちりした太腿の白さが、おそろしいほど対照的な残酷さを表現していて、私は歯をカチカチ鳴らし、木の幹にかじりついて見ていました。

お光は、そのとき十六か十七才ぐらいだったと思います。若い娘らしく、ころころと、よく肥えていて、腿のいちばん太いところなんかは、十五才の私の目にも、思わず生唾をのみこむほどの色っぽさでした。

「小さいもんだからな、隠そうと思えば、ど



ここにだって隠せるんだ」

と、顔じゅう、ひげだらけの男が、どなるように言いました。

その男の顔には、私も見覚えがあります。

人夫頭で、いつも威張りくさっていて、左手のくすり指にはめたプラチナの指輪をみせびらかしている嫌な奴なのでした。

「すると、やっぱりこのへんに隠しているのかな。それにしても、この娘、餓鬼だとばかり思っていたら、ずいぶん色っぽい体をしてやがるじゃねえかよ」

と、地下足袋をはいた男の足が、お光の太腿や、下腹や、股間をぐいぐい乱暴に蹴りつけるのです。

「この村のやつらは貧乏人ばかりで、どういつもいつも、みんな手癖が悪いからなあ」

といいながら、べつの若い男が、お光の乳房を両手で揉んでいるのです。

発育のいいお光の乳房は、荒縄にむごたらしく締めあげられて、いっそう大きく盛りあがり、揉まれるたびに男の指のあいだから、白いやわらかそうな肉が、むちむちとお餅のように、はみでるほどのです。

「痛いよう、痛いよう。あたしは、なにも知らないよう。かんにんしておくれよう」

お光は股間を踏みこまれ、乳房を揉まれて、泣き叫んでいます。

「よし、やっぱり、ここしかねえ」

ひげだらけの男がいった、お光の股間に手をのばしました。お光は悲鳴をあげて必死に腿をとじようとしたが、荒くれ男が三人もおさえつけているのですから、抵抗できるはずはありません。

ひげの男は指の先を、さんざん、もぞもぞ動かした末に、一個の指輪をつまみだしたのです。それは、ひげの男がいつも左手の薬指に、はめているプラチナの指輪でした。

指輪は光っていました。

「あった、あった。やっぱり、この餓鬼が盗みやがったんだ。しかも、こんなところに隠すなんて、ひでえ悪知恵の働く小娘だ。あきれたもんだぜ」

ひげ男は、そんなことを言って、なおも、ぐいぐいと指で、お光を責めるのでした。

「痛い、痛い。やめて、やめてよう」

お光は泣きながら暴れましたが、後ろ手に縛られている上に、人夫どもが力いっぱい足をひろげておさえつけているので、ひげ男のいやらしい指に、なぶられるままです。

「餓鬼のくせに一人前に、こんなものを生や

しやがって生意気だ。かまわねえから、むしってやれ」

ひげ男はそういうと、脅しではなく本当に指でひきぬいてしまったのです。

お光は悲鳴をあげ、気がいのようになっ

て暴れました。男の一人が、はねとばされた

ほどです。

それからのお光への折檻は残酷なものでした。男たちは汚い泥だらけのズボンをぬぐとお光ひとりに襲いかかったのです。やはり、ひげ男が真ッ先にお光を凌辱しました。

私は男のものが、あんなにも巨大だったとは自分も男のくせに知りませんでした。

「痛いよう、痛いよう。助けてよう」

お光は泣き叫びましたが、男はその声をきくと、よけいに興奮したように猛り狂って、一人がお光の乳房に噛みつく、一人は唇を吸い、もうめちやくちやでした。

ひげ男が、お光の肉体に密着したままで、ほかの男たちの頭をボカボカなぐりつけ、

「ばかやろう、あわてるな。おれがすむまで待っている！」

と、どなりつけました。

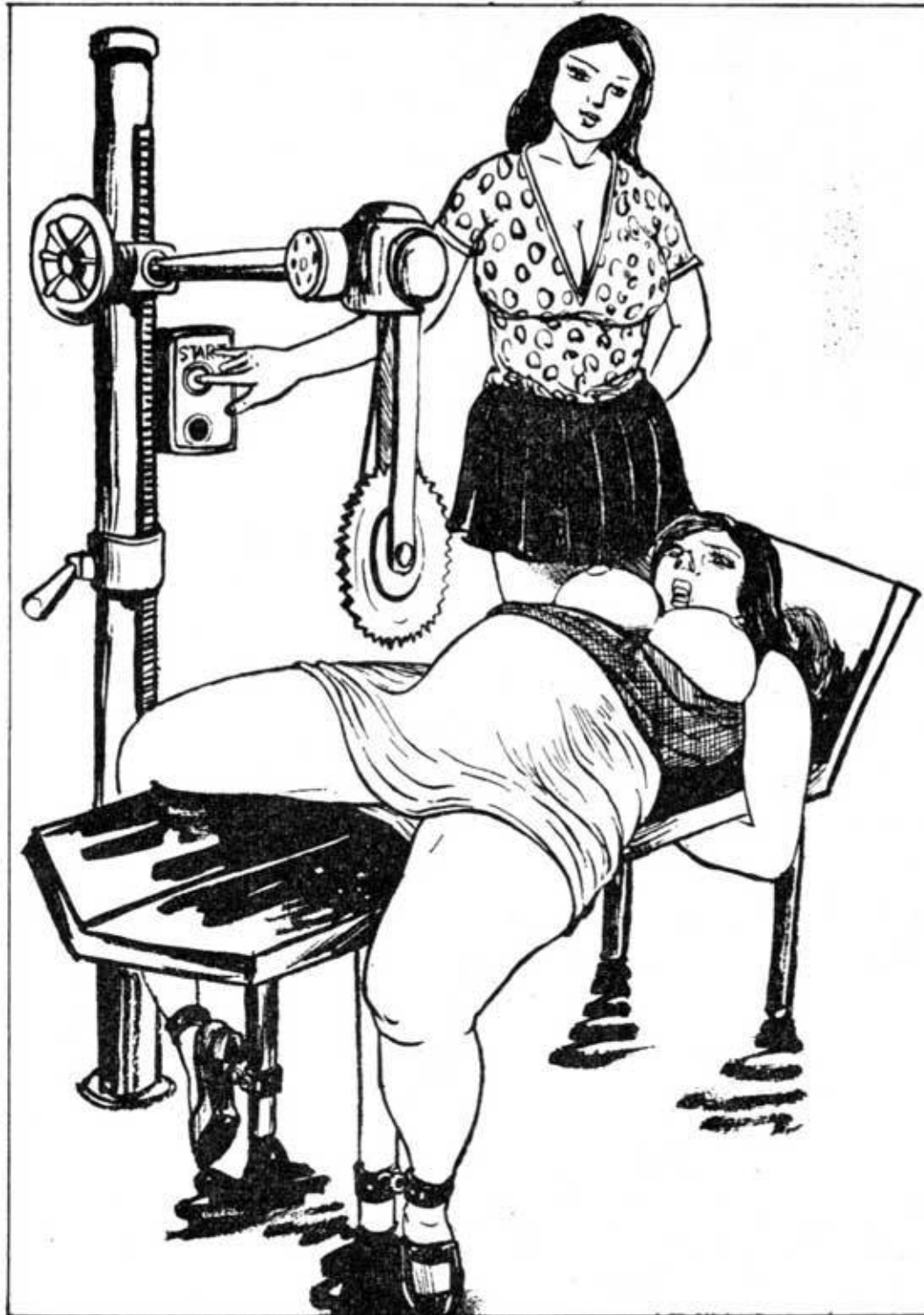
ひげ男が立ち上がると、男たちはつぎつぎに交替してお光を凌辱しました。

私は恐怖にふるえながら、それを見ていたのですが、私自身も逆流した血が一点に固まったようで、痛いほどでした。

最後の男が離れると、お光はようやく縄を解かれました。手足が自由になっても、お光

は、ぐったりしていて、まるで死んでしまったようです。

いや、私は、てっきりお光が死んだものと思い、膝をガクガクふるわせて家へ逃げ帰り布団をかぶって寝てしまいました。なんだか



イメージギャラリー

『妊婦の悪夢』

仲乃 ハルミ

私も共犯者だったかのように錯覚していました。

その翌日の夕方、学校の帰りに飯場小屋の横の道を通ったとき、私は働いているお光の姿を見ました。

小屋の軒下で何か歌を歌いながら米を磨いでいるお光の明るい無邪気な表情をみたとき私は自分の目が信じられませんでした。

女というものの魔性を、私はそのとき初めてみたのでした。

真昼のように明るい月光の中で、後ろ手に縛りあげられ、三人の男に凌辱されて悶えているお光の白い裸体が、まぼろしのように妖しく美しく私の脳裏にのみがえりました。

昨夜むごたしく下半身をさらけだされていたお光と、いま歌を歌いながら米を磨いているお光と同じ女なのだろうか？

私は夢をみていたのだろうか？

少年の私は、頭が混乱してしまったのでした。あれは夢でも幻でもなく、やはり実際の出来事だったのだと確信できたのは、それから十数年たってからです。

あのときの月光の中の白い女体を思いだすと、私はいまでも十五才の少年のような気持になるのですから、不思議なものです。





＜手記＞

# 「実験動物」としての私

△花田一郎様のお便りにお答えして▽

大塚 啓子

私が最近の住所を編集部へ連絡しておいたおかげで花田一郎さんからのお手紙を転送していただきました。

花田一郎さんの奇クに載せられた三部作の「ふるーい奇ク」「SMはメルヘンの世界」それに二月号に載る予定の題未定の一文の原稿料は、すべて私に下さるとの文面で、本当に有難うございました。

便箋七枚にわたる長いお便りは、はじめからおしまいまで、何度も繰り返し読ませていただきました。数ならぬ身の私に、これほどまで熱心に目をかけて下さる方のおられることは、ほんとうに有難く思いました。

私なんか、もう過去の人間だと思っておりますのに、これほどまでに詳しく私のことを書いて下さって忘れずにいて下さるという

ことは感激でした。そのお礼のしるしにでも  
 と思ってお返事を書いてみました。

花田一郎様、有難うございました。

二月号に載る予定だったという貴方様のお  
 文章は、その後、二月号を入手して拝見いた  
 しました。「残酷の中の甘美な世界」という  
 題の三頁の活字を読ませて頂きました。この

文章には、私のことは書かれ  
 てはおりませんでした。が、お  
 便りによりますと、「ふるー  
 い奇ク」の三部作は「拷問」  
 「処刑」「輪姦」のテーマを  
 扱っていて、すべて啓子をイ  
 メージにして生まれた文章だ  
 そうですね。

「この数年間に現われた誌面  
 の変化」というと数年前には、  
 モデルさんには、とても耐え  
 られなかった開股のポーズが  
 どしどし、要求され、モデル  
 さんたちも、それを受け入れ  
 ていることです。啓子さんも  
 再登場に当たって、どんどん  
 それを要求されるでしょう。  
 楽しみにしています。今日は

一ファンとして、つたないながら、道しるべ  
 のようなものを、ながながと書いてみます。

以前に、切腹のシーンによく出演していた  
 ようですが、飽くまでマゾの精神は受身であ  
 るべきで、その精神に反する要素があるよう  
 に思えてなりません。少数のマニアの支持を  
 得る引きかえに、大多数の読者の支持を、多

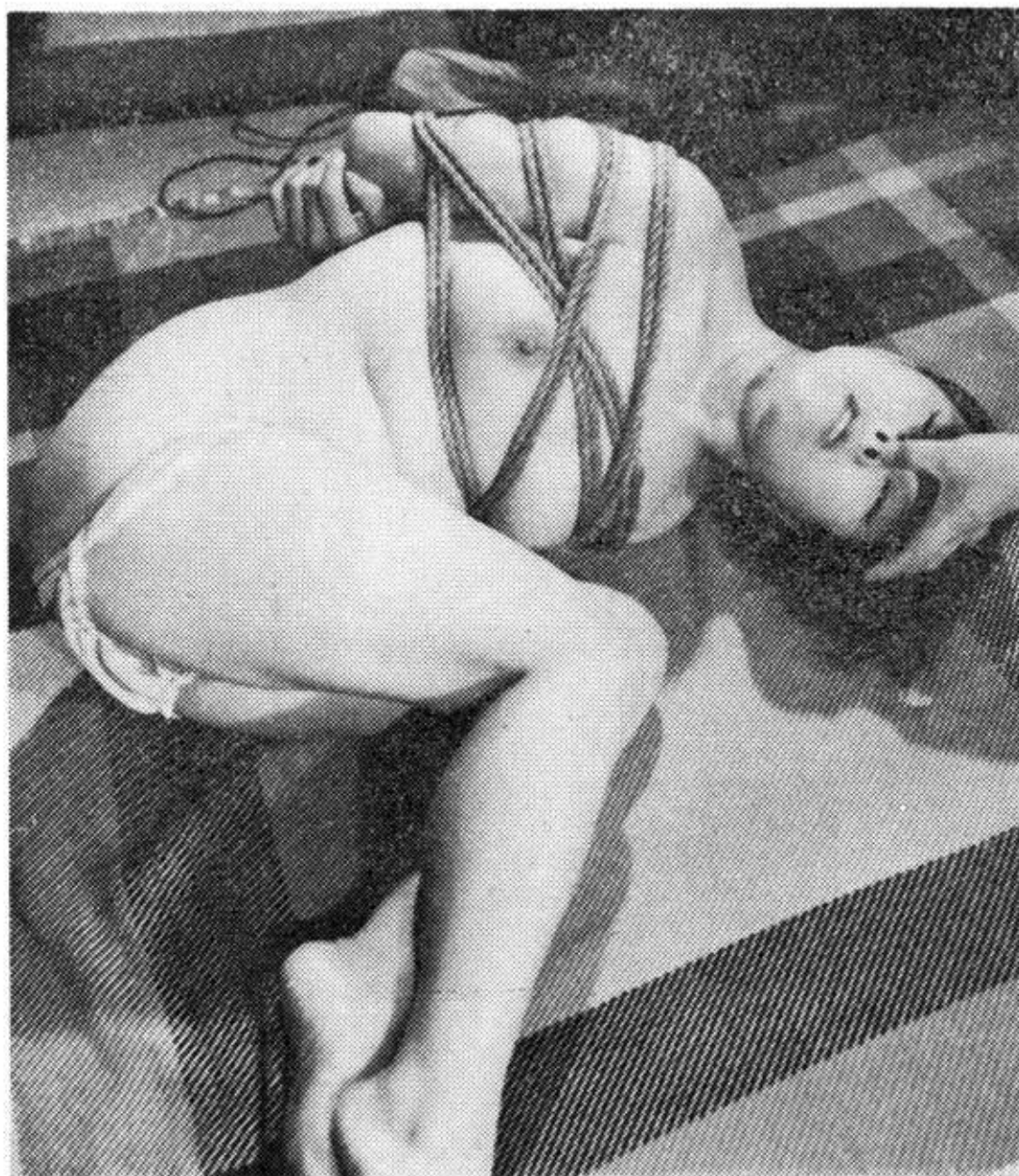
少なりとも失うという損失があるように思わ  
 れます。

これは編集部企画それ自身にかかわる問  
 題であると思います。ひとりのモデルを追求  
 しても、考えられるポーズは無数にあるわけ  
 ではなく、行きづまりの結果、切腹などに血  
 路を拓くといった面が多分にあるような気が

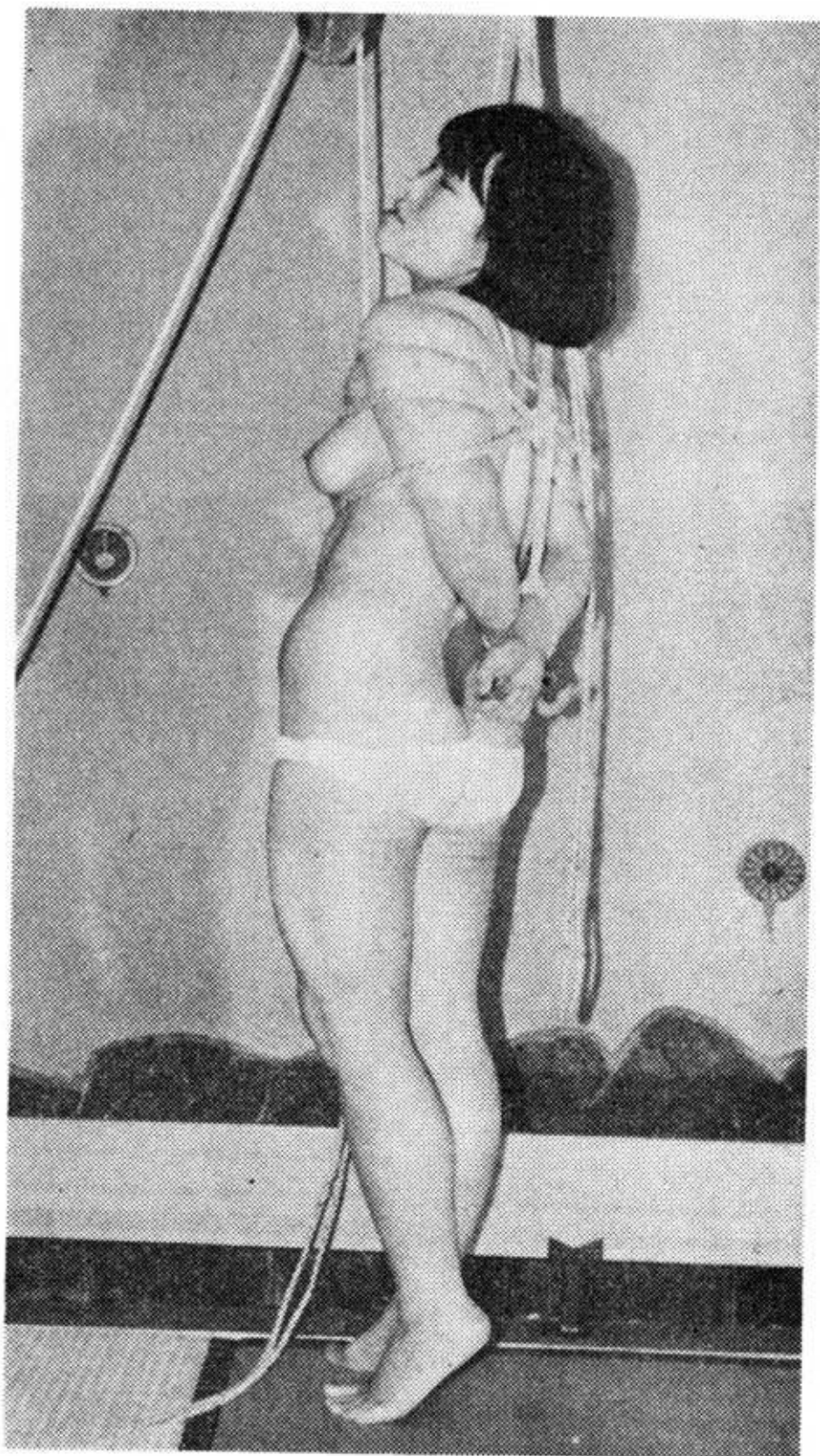
します。それで「切腹をやらない  
 か？」とすすめられたときに、そ  
 れにかわるべきメニューを、四つ  
 ばかり啓子さんのために思い描い  
 てみました。こうしたプログラム  
 は、なまじ編集部に送るよりもモ  
 デルさんに直接、送ったほうが、  
 実現の可能性は濃いように思いま  
 す。」

このように、お便りで花田一郎  
 様は啓子のために、お書き下さい  
 ました。

以前に、啓子がゴルフ場のキャ  
 デイをしておりました頃に、一人  
 の読者のファンの方と文通したこ  
 とがございました。四国の徳島県  
 にお住いの方で、なんでも、ゴル  
 フ場なんかで使う芝生の芝の販売







をしておられるとかでした。三日にあげずお便りを下さり、啓子もまた、熱心にお返事を書きましたので、約三カ月ばかり、この文通が続きました。

実際に、幾度となく自分が縛られていながら、SMのことについては、かいくく知識のなかった私ですのに、この方との文通によって、啓子は大変に生長したように思います。

私の手紙の文字が大変美しいといって、ほめて頂いたことを覚えております。

何十通という手紙の交換をしながら大阪と

四国と海をへだてていたこともあって、お逢いすることもなく、その年の暮れ、お友達の誘いで上京し、そのお友達のすすめでアルバイトのホステスを新宿のお店でしているうちいつとはなしに一年半ほどを過ごし、その文通の方とは音信不通になってしまいました。

東京におります頃、一回きりでしたが、東京の雑誌社の緊縛モデルをつとめたことがありますし、あの有名な「花と蛇」の作者であ

る団鬼六先生とお知り合いにもなりました。

一緒に上京しましたお友達は、東京でのホステス稼業から結婚へと進みましたが、私は再び大阪へ帰ってまいりました。

「二寸、東京へ遊びに行ってみない」と誘われて一緒に行った啓子ですが、小遣い稼ぎのアルバイトで三軒ばかりお店を変わって二十カ月ばかりの無駄足を踏んでしまいました。

花田一郎様――。

貴方様が、啓子のために、お与え下さった責めのプログラムは、大変興味を持って拝見いたしました。以前に、四馬孝様と塚本鉄三様のお二人から、人里離れた淋しい温泉宿で一日中、朝から晩まで責められたことがありましたが、ゆくりなくも、そのときのことを思い出しました。

折角、啓子のために、お考え下さった案ですので、ここに引用させて頂いて、出来れば私をモデルとして実現してほしいものだと思っております。

(A)

『車中』――。道具は、セドリック、クラウン型の車一台。乳房の締め具一つ。人員は、「モデル」「運転手一人」「撮影者一人」、「責め手二人」(責め手の一人は男であるこ

とが望ましい)

「情景」——運転台に運転手。助手席に撮影者。後部座席の中央に、手錠をはめられたモデル。左右に責め手。

モデルは乳房をあらわにさせられ、それを乳房の締め具で徹底的に責める。

車が交差点や車輛混雑地点に来て、車内をのぞかれそうになると、手首はハンカチで、胸はショールかなにかで、かくす。車が快適に走っている時は、左右の責め手が、締め具で徹底的に責める。そのくり返し。あぶら汗の表情などの、乙なものも撮影できることでしょう。

なお、このプログラムのつけ足しとして、車が無人の山野についたら、髪をつかんで車からひきずり出されるモデル。森の中で、隣り合った樹立の一本一本に、四肢を大の字に地面にはられたヌードモデルというシーンも加えられるでしょう。そのヌードをふみにじる鞭(責め手は、なるべく画面に現われないのが、いいでしょう)などという、スリリングなシーンも得られるでしょう。

(B)

『野晒し』——これは(A)と同じ日に撮影できるかもしれません。

田舎の野道での野晒し。衣裳は腰巻一つ。髪は結髪。先ず「野晒し——朝」無人の野道に晒されたモデル。正座した前の地面には、盗んだ大根一本と、さつまいも二個を、見せしめとして置いておく。

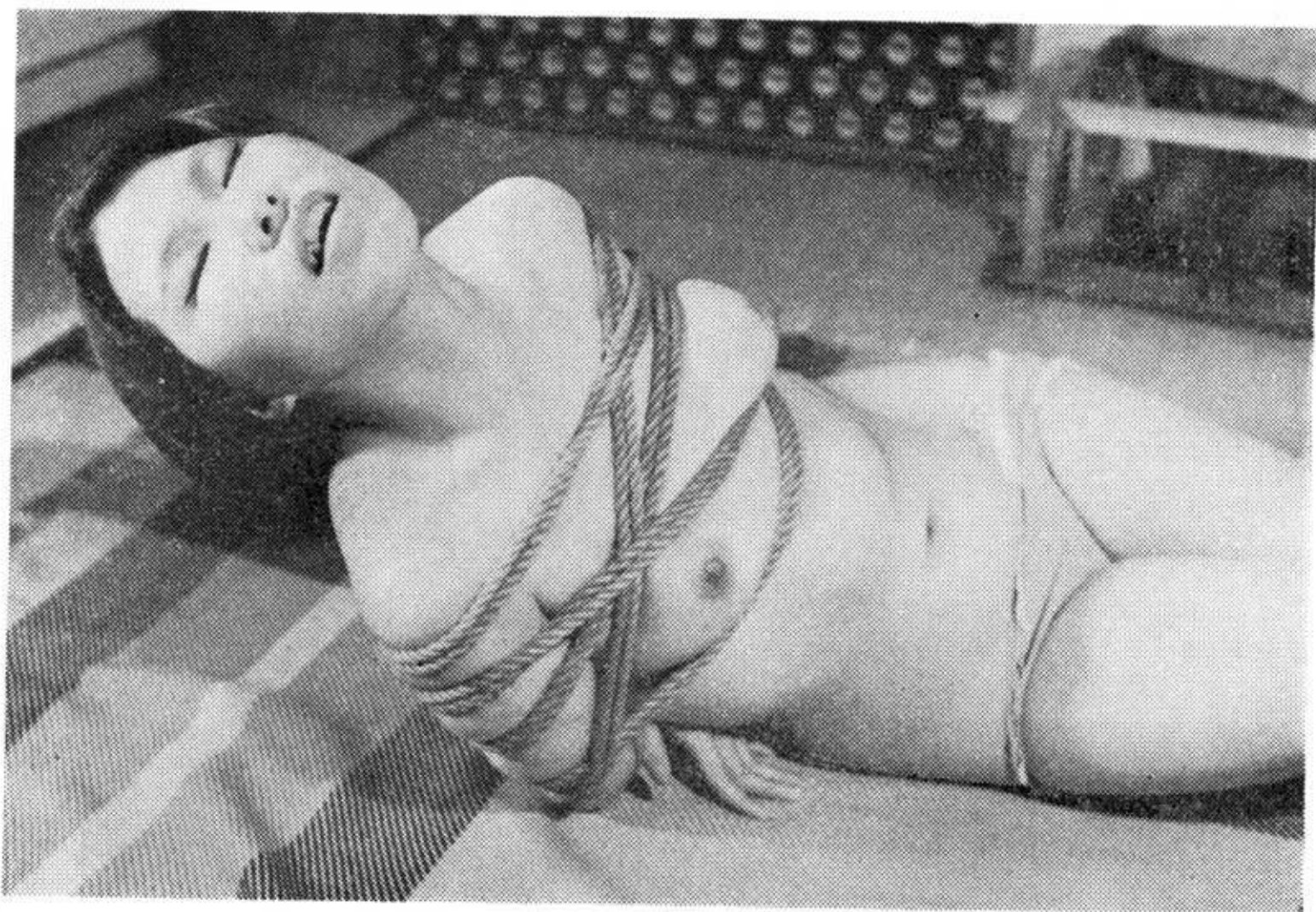
次に「野晒し——昼」顔面や胸部に、生卵を五個ぐらい、ぶつけて貰う。結髪は、やや

乱れ気味。ウエストに荒縄を巻きつけ、左右から綱引きをして貰う。これは、かなり力をこめて貰い、苦しげな表情を出す。責め手は(農夫の演出は無理ですから)なるべく画面に現われない。

「野晒し——夕暮れ」さらに生卵を五個ぐらい、ぶつけて貰う。髪はザンバラ髪。腰巻の







紐が切れ、腰巻は水びたし。農夫の泥だらけの手で責められた名残りの泥だらけの手形が乳房、太股、胸部、首、顔面にベタベタと残っている。

ウエストの綱引きは、首についても行なわれたしるしの首に巻きついた縄の切れ端。もう正座する体力も残っていないことを示すために、倒れ伏した写真も加える。

### (C)

『へさき』——。昔の海賊は生け捕りの美姫を、船のへさきに縛りつけ勝利の船の船飾りとしました。そのポーズ。

船がエンジンつきなら、へさが上げる水しぶきで、呼吸困難になるまで、船を走らせて貰う。また、同じ日に、魚網と縛られた女という、絶妙のコントラストのシーンも撮影できるでしょう。

### (D)

『女スパイ』——。今日のお

便りの最大のテーマです。

昔、日本軍の憲兵に捕えられた中国の女スパイで、どんな拷問にかけても口を割らなかったのが、かなり、いました。

これに対して、水の入った洗面器一つ。習字用の筆三本が用意されました。女スパイは椅子に股を広げて縛りつけられました。まず二本の筆に水をふくませては、ちょうど塗りつぶすように、両の乳首が丹念に時間をかけて、こすられました。水分がなくなると、筆に、また水を、ふくませては——。

三本のうち、あとの一本の筆が、どこをこすっているか、御想像できるでしょう。この拷問にかけられると、（恐らく、まず女スパイは恍惚の境地となり）二時間もつづくと、シクシク泣き出し、数時間もつづくと「気が狂ったように泣き出し」必ず白状したそうです。

アルジェリアの女スパイにも、水責め、電気責めに屈しなかったものがいたそうです。フランス空軍は、これに対して、似たような拷問を加えました。ただ習字用の筆でなく、ハブラシが用いられたそうです。

そして（恐らく「気が狂ったように泣き出した女」に対して、責め手は、本能的に残虐

になるものと思われませんが）割れたビールびんが、突っこまれるというようなことさえ行なわれました。あまりに人道に外れているとして、フランスの女流の文豪のボーボワールが救済にのり出し、その女スパイは釈放されたと伝えられています。

最後のビールびんの件をのぞけば、この拷問は、モデルの体に傷跡を残さないという条件をみたし、しかも、女が受ける拷問としてこれ以上、むごたらしいものはありません。どうでしょう。啓子さんは、この拷問にかかってみませんか？ モデル冥利を通りこして、女冥利につきることでは、ないでしょうか？ 女に生まれきて——いちどは。

この演出について、いろいろのことを考えてみました。まず防音の地下室かなにかが必要ですよ。どうしても手に入らなければ、猿ぐつわでもやむを得ません。

根気の要る拷問なので、責め手に、代打要員として、二人ぐらいの女性モデルを頼むということも、いっそう責めを深刻にするでしょう。

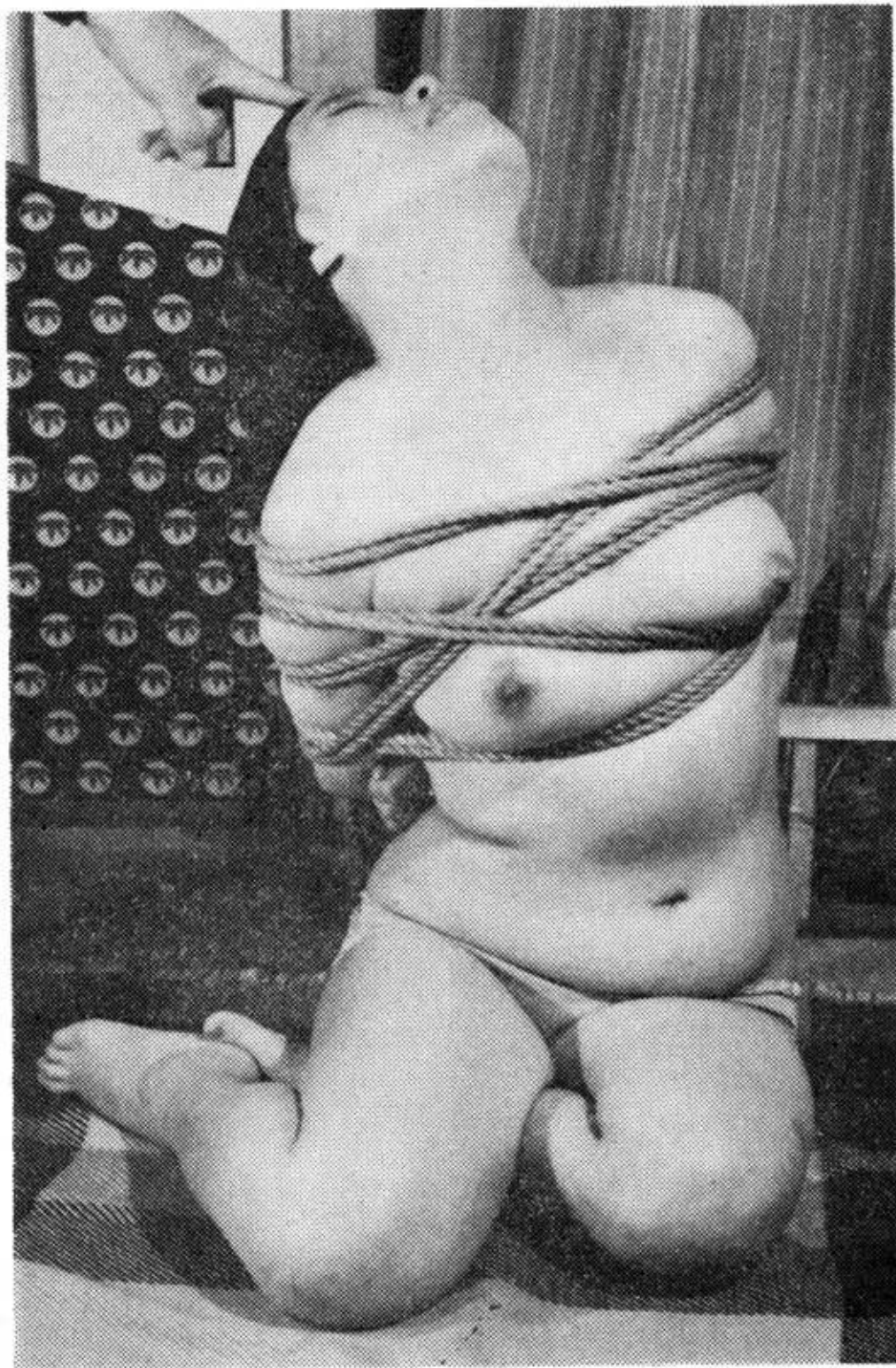
撮影は誌上に公開するものとしては、上半身くらいしか撮れないかもしれません。三十分おきか、二十分おきくらいに——。

ただ覚悟すべきは、この責めは、御紹介した女スパイのケースよりも、もっと悲劇的だということです。彼女たちは、「白状」すれば、その責めは中断されたのですが、啓子さんのケースは、いくら哀願しても、決して許されないということです。

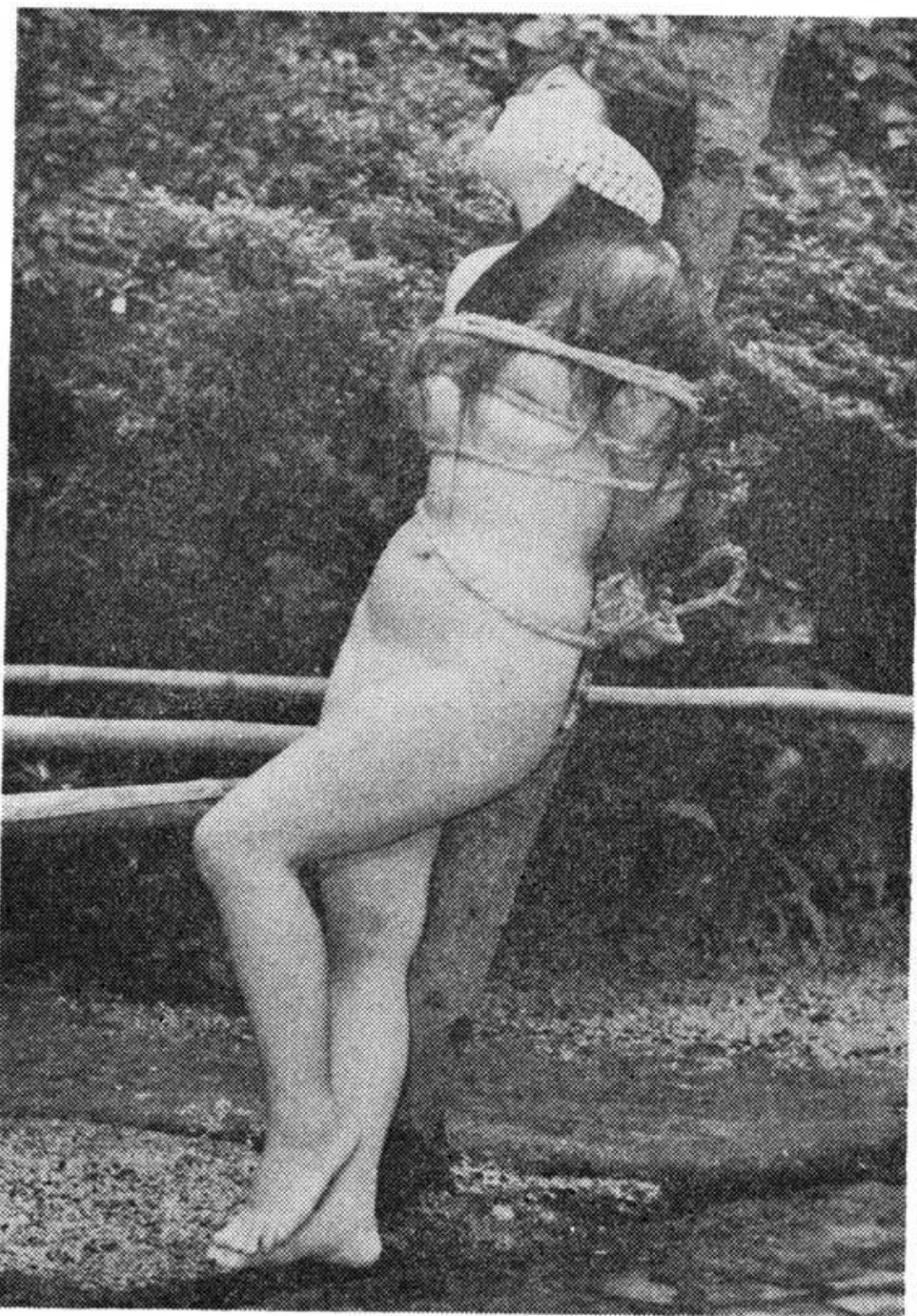
撮影が終わって、椅子から解かれたあと、床に泣き伏すか、あるいは息もたえだえに、

うつ伏すかどうか？ しかし、「気が狂ったように泣き出した」モデルに、もう演出の責任はありません。

実験動物として、カメラの追跡を、無作為に待てばよいのです。そしてカメラが追跡した、この実験動物（啓子さんのことですが）の反応というものに、私は、たいへん興味を抱いています。







これからの奇クを楽しみにしつつ、ペンをおきます。

大塚 啓子様

花田 一郎

☆  
花田一郎様の私に対するお便りは、これで終わっています。

私は、このお便りを拝見して是非、実験動物になりたくまりました。

今、日本は冬で寒いので、とても裸で、野ざらしを受けたり、森の中で、ヌードで樹に縛りつけられたりすることは耐えられないかと思いますが、同じ日本でも、徳之島とか、沖縄では暖くて裸になれると思います。

花田様を含めて、四人か五人ぐらいの人数で旅行しながら、啓子を責めて下さったら、どうでしょうか。一週間か十日ぐらいでしたら、啓子もお仕事を休んで参加させて頂けると思います。

このSMの旅のあいだ、啓子は、ずっと、花田様のプログラムによって、責められつつけても、よいと思います。

最後の筆の拷問は、一度もこんな責めは受けたことはございませんが、読んでいるだけでも、なんだか身体中が、ぞくぞくするような気がいたします。

この拷問でしたら、なにも防音の地下室でなくても、普通のホテルの洋間なんかで出来るのではないのでしょうか。

もし啓子の泣き声が、あまりにも激しいようでしたら、なにも猿ぐつわなんかなさなくとも、ステレオかテレビのポリウムを上げて下さればよいと思います。

でも、実験動物として実験台に上る啓子としましては、取り乱して大声を挙げて泣き叫ぶような責めに、一度でもいいから合ってみたいものだと言真剣に願っております。

——（おわり）——

# 〔M女26〕 玉木章子を、こうして責めてほしい

西 村 真

奇ク編集部の皆様ならびに全国の奇ク読者諸君！ あけまして、おめでとうございます。今年も昨年同様「奇ク」は、もちろん、この西村真を、お忘れなく、お願いいたします。

玉木章子（以後、彼女をM女26と称することにする）なる新しいMモデルが、奇ク誌上に登場してきたことは、全国奇ク読者の一人として、大へんうれしい。M女26、着衣のフェイスもなかなかいけるし、なによりも、M女26に興味をそえられるのは、M女26が、19の時より現在に至るまでの7年間、S主人の下で、立派なM女性になるための飼育を受けていたという、この一点である。

○  
しかし残念なことに、2月号では、M女26を、まるで初心者と同じ扱い方で処理していたので、M女26の持っている長い飼育

経験を軽視しているのではないかと思い、少し腹が立った。

M女26ほどのMに対する素質を持っているM女ならば、Mアニマルの谷山久美子や山本氏所有の奴隷妻よりも、もっともっと身分の低い畜生に飼育可能だと思われるし、その飼育方法も出来ることなら、奇ク読者の一部が参加して、M女26のM女性としての将来を決めて行く公開飼育方式をとってみてはと、思っています。いかがでしょうか。  
下記は、私が考えたM女26に対する責めです。

○  
一、猿轡は前もってM女26の小水で、ぬらしておき、歯と歯の間にかませるか、その布を口の中にふくませる。（綿やガーゼ類に行なってもよい）  
二、金属製クリップによる、鼻、乳房、耳の責め。

三、犬と同じ四つ這い姿で小水の排泄。  
四、鼻の穴のタバコ責め。口、アヌスへのキャンドル責め（鼻孔開孔器によるM女26のアップも是非、ほしい）。

五、猪吊り、両足逆さ吊り（できるだけ野外での希望）。

六、鼻輪をつける（但し、これは、あくまで希望です）。

色々と私の責めの希望を書いてみました。が、「奇ク所有の奴隷妻」というのが、私のM女26に対する今の私の希望です。私の思ったこと、私の考えついたことを、ただ並べたにすぎませんが、M女26を今後、塚本鉄三先生や他の先生方が責める時の一つの参考にでもなればと思います。

鉄鑲（胸にある）を使って行なえる責めも工夫してみてもいいと思います。

M女26のM性が一〇〇％引き出せるような責めであり、M女26の泣顔をアップで見たい気持ちもあります。できることなら、ロープとM女26以外は使わない単純さを希望します。最後に、昭和48年が奇クにとって良い年であることを願ってペンを置きます。



## 連載・S大河小説

パ  
ロ  
デ  
イ

花

と

蛇

(16)

カット・洲崎三郎

女<sup>じよ</sup>  
拓<sup>たく</sup>

美津子の長く伸ばした髪は、紺色のヘアバンドで留められて肩先にて、ゆるく垂れている。

まるで脂肪ののった肩の線には、シミの跡もなくツルリとして、ごく柔らかそうだ。

彼女は太あぐらをかいた清次の膝の上に抱えあげられ、尻の双丘を、しきりにモジモジさせる。

双臀を、ぴったりと包みこむパンツの布地一枚を、へだてたきりの清次の体温が、おぞましい感触で、まつわりついている。今にも、無体なことを仕掛けられそうな予感が、十八才の乙女の頬を燃えるように熱くしているのだ。

その妹のすぐ目の前に正座させられている

山  
光

純

京子は、もうチンピラどもが言い募る、聞くに耐えない下卑な冗談も、耳に入ってこないらしい。

もう、ここまで追いつめられ手も足も出なくなつたからには、身を売春婦に落としても美津子を守りぬくことに生甲斐を見出そうとするかのようである。

かつての誇りを踏みにじられた彼女は打って変わった濡れ濡れした瞳を、ぼうっと開き臆病そうな媚とも悲しみともとれる、微かな頬笑みを浮かべている。

その長い睫毛の明眸の視線は、全裸の無防備の妹に注がれ、その背後にいる清次を、くるみこみ、そして、ずっと遠い、例えば霞に

かすんでいる高山の頂を、見はるかしているように、頼りなげだった。

ああ、こんな地獄の中で、うごめいているより、ずっとずっと遠い所にある純白の雪の中で、眠るように死んでしまいたい——と、流石の京子も生身の悲しさを嘆いているのだろうか。きっと、その遠くには美しさだけがあり、たぶん不思議な音色で歌う鳥たちが舞い、たぶん若く美しい彼女が胸をふくらませて生きている歓びを、しみじみ味わえる所なのに、ちがいない——。

「なんだよ、京子。お前、オレの言ってることを聴いていねえのかッ！」

「え、ええ。五郎さん、ごめん、ごめんね。京子、少しだけ、ぼんやりしていたの。許してね、おねがい」

急激に現実に戻される彼女は、あふれるばかりの媚態を全身に浮かべて、鼻にかかった声を出し、大胆な挑みかかるような流し目を五郎に向けるのである。

「じゃ、オレ様に、もう一汗、かかせて貰いてえんだな」

「ウッフン、いやな五郎さん。もう、じつくりと、お楽しみになったくせにエッチな人。でも、まだお望みでしたら……。京子だって

五郎さんとなら……」

「だが、妹の目の前でだぜ。お前も、いい加減、好きな女だな」

と五郎が畳みかけて、からかうと、京子はチラと羞恥に染まった眼元をうごかせ、かすかに語尾を憐れながら、

「だ、だって、あなたが、そうおっしゃるんだから。京子、美津ちゃんの前で浅ましいポーズを取るの……やっぱり、イヤなの。だから、あちらへいってから。ねえ、いいでしょ、五郎さんったら……」

すぐにも、そんな破廉恥な行為をさせたがる五郎と、こうしたやり取りをするのは、まるで剣の刃渡りのように危ういのだが、今の京子は、ともかく剣の刃を渡ってみなくてはならない窮地にいるのだ。

うすぎたない不精ヒゲが、まばらに伸びかかり、不潔なニキビが、いっぱい吹きでている未成年のチンピラに、男嫌いの勝気な近代女性が、言葉を慎重に選びながら、ご機嫌をとり結ぶのである。その麗わしい裸女が潜伏した有様は、五郎にとって得意以外のなにものでもない。

先にいったように、五郎は、小便臭い艶歌歌手のアツちゃんの大ファンである。

五郎をからかう時、兄弟たちは二言目には彼がアツちゃんにプレゼントとして贈ったパントリーのことを持ちだす。

赤いリボンで結んで包装された色とりどりのパントリーを如何にも大事そうに開いてみせ「これからプレゼントしにゆくんだ」と、得意の鼻を、うごめかしたとき、さすがの兄弟たちも、二の句が継げなかったものである。

長兄の義雄が、マジマジと五郎の顔をのぞきこんだが、その目は輝き、如何にも幸福そうだった。いずれ、実演の舞台のかぶりつきに陣取って、花束なんぞと一緒に贈るのだろうが、五郎が至極、真面目なのだから、始末が悪い。

ついでだが、アツちゃんはテレビなどのお呼びもかからない、精々ドサ廻り専門の三文歌手といったところらしい。五郎が懸命に血道をあげている理由を強いてさがせば、彼女も同じように一杯のニキビ面だということぐらいだろうか。颯爽とした八等身の美貌の京子とは、月とスッポンほどの違いである。似ている点は、まったくない。

しかし、もっとも大きな違いが一つある。それは、アツちゃんが五郎にウインク一つすら、しないのに対し、この邸にいる京子は朝



昼を問わず五郎の好むままに、いつでもベッドを共にすることである。

「おい、京子。五郎を、そうお下劣に焚きつけるんじゃない——」

と三郎が、京子のご機嫌とりを真にうけてまたしてもカッとのぼせあがりかける五郎を押しとどめるようにする。

「五郎は俺のたった一人の弟なんだ。手前みたいな売女の手練手管に、はまったりさせるものか。それだけの体をしており、おまけに底なしの好き者づくりや、五郎みたいな一本気の男の将来をあやまらせかねえ。そんな大それたことを考えるなんと、とんでもねえ女だ……」

などといいながら、小山のようにムッチリと剥きだしになった双乳をブルブルんと、掌で上へ押しあげるのだ。

五郎の直線的な行動か、清次の見せかけの貫録、法界のあらゆる毛髪への劣等感を、それぞれの特徴とすれば、三郎の場合は陰質な性格と、いえるまいだろう。パンツ一丁をつけたきりの肉体は自堕落な生活のせい、まるで栄養失調のようだ。こすからそうな、キョトキョトと落ちつきのない視線も、みるからに軽薄な感じがする。

「お前が何と言おうが、泣いて羞かしがろうが、俺達は一度きめたことは、絶対にお前にさせるんだから諦めな。さあ、妹にも、じつくりと姉が体の押し印を取られる有様を見物させてやるぜ。はは……」

と本題に入ってくる。

金石文の好事家の間で、拓本というのがある。魚釣りの際には、同じように魚拓をとって保存することが多い。力士の場合は手形であり、役者の隈取り化粧を柔らかい紙に写すのもある。法界の提案したのは、京子の女拓といったところである。

丁寧に揉んだ和紙に、華やかな彩りで奔放な熱帯魚のように、くねる京子のイメージは酒で濁った加虐者たちにとって、正に珍奇なことなく滑稽な、それでいて興味津々たる代物であった。

すでに幾度も、彼女の深く秘められた羞恥に見入っていたにもかかわらず、新しく考案された、そのやり方は、まったく尽きることのない津々たる興味を、男どもに抱かせるのである。

「へへ……まあ、あんまり嬉しくもねえだろうが、はじめることにするぜ。言っとくが、目を閉じたりすれば、どんな罰があるかを考

えといった方が、いいぜ。これからは客からもこんな注文があるだろうから、その時には、これから教えてやる通りにして差し上げるんだ。いいな？」

「ああ、さ、三郎さん。ひ、ひどい方ね、あなったら……」

恨めしそうに明眸を伏せる京子を、からかい続けながら、三郎は以前の京子のハンドバッグの中から取ってきた口紅を目の前につきつける。斬首される罪人の前に白刃を見せるあのやり方である。

ローマンピンクの口紅は、それは、いい色をしていた。

彼は、

「さてと、ではまず手始めに、唇からゆくことにしようぜ」

と骨ばった手を、ゆるい曲線を描いているなどらかな肩に置く。充分に脂ののった丸い肩は恥辱のため、血の気も、うせ、白磁のように光っている。

否応なく迫ってくる男たちの強制に、身体一つで立ち向かうほかはない京子は、意志を失ったように、おとなしく唇を、ややつきだすようにする。

「なんでい、そりゃあ。鳥のくちばしじゃあ

るめえしよ。そんなんじゃ、ねえや。もっとお色気たっぷり、嬉しそうに、やって貰いてえもんだ。そうだな——チーズとでもいってみな」

「ごめんなさい。三郎さん、お願いするわ。チーズ……」

形よく整った真っ白い歯並びが、香ぐわしい息吹きとともに、こぼれる。濡れた女の半開きにした唇は、ゾクツとするほど肉感的だった。

男たちは、三郎と京子を交互に見ながら、その同じ唇が、どこまでも柔らかく、しつとりと包みこんできた時の、あの陶酔感を思いださずにはおれない。

三郎の好みは、玄人女と同じように濃厚なやつだ。こつてりと塗られてゆく口紅の濃さは、シャワーを浴びて化粧気のない京子の近代的な丸顔に、一きわ強いアクセントを与える役目を果たすようだ。

たっぷり時間をかけて、自分の好み通りの毒々しいまでに仕上げた三郎は、そのまま周囲もかまわず、ぐっと手元に引き上げディープキスに入る。

妙な口臭のある三郎の口は、爬虫類のようにゾツと鳥肌が立つ、おぞましきだ。こつて

りと舌で舌を、こそぎ上げられながら、京子は薄目をひらいて、すぐ前の美津子の方を、うかがわずにはおられない。

なまぬるい唾液を、たっぷりと流しこまれながら、京子は一瞬、死を考える。——この接吻が好ましいと思えるようになるまで、わたしは生きていけることができるだろうか……彼女がクラクラと目眩いがした。

ようやく、息も詰まる接吻から解放されると、京子は中腰にのびあがっていた尻を落とし、正座に戻る。耳朵が、すっかり赤くなっている。

「へへへ……役得という奴だな。さて、次は順序に従って乳首とゆくか」

と照れるでもなく掌で唇を拭いながら、尻を下げる。

後手に縛られたままの京子は、真っ白い、こんもりした腹部を妖しくうごめかしながら必死に耐えている。半月形の眉を、わずかにひそめ、長い睫毛がフルフルと、そよぐ。

このまま消えてしまいたいような屈辱感と絶体絶命の今の境地が、狂おしくその麗しの体内を駆けめぐっているのだらう。哀れな犠牲<sup>にえ</sup>の勝気な娘は、息も詰まる憤怒を被虐の美に代えようと、ただひたすらに忍従するので

あった。

ねっとりとした冷たい感触を乳首に感じ、京子はもう言いようのない羞恥にヒクヒクと慄える。

「へへへ……見ねえ。こいつ、固くなってきたやがった」

あろうことか、隆盛の頂上でポツチリと花ひらいている、うす紅色の蕾は、京子の意志の如何にかかわらず、触れられ刺戟されることによって固くしこり、まごうこともない上向きの見事なピンクの木の芽の媚態を明瞭に示すのである。

「い、いわないで、三郎さん。京子、はずかしい……」

「ふふん、口先では強そうなことを言っているが、カラダは期待で、わくわくしているって、とこじゃねえか。何より、こいつが、はつきりと白状してるぜ」

伏目になって細かく肌を、そよがせている裸女は、ただ切ないメスの匂いを、ふりまいてるのだ。

九〇センチの乳房は、とにかく、迫力がある。それが何の惜しげもなく男たちの前に剥きだしになり、彼らの行為を甘受しているのを目のあたりにすると、逆に男たちは嗜虐心



を昂ぶらせ、京子などを歯牙にもかけないような振りを、よそおいたがるのだった。

たわわに張りだした脹らみがムクムクと動くのを感じながら、桜色の乳暈までを丹念に塗り終わった三郎は、左側に移る。

右側に加えられたタッチが、あまりにも淫靡だったので、左側の乳首も硬首し、まるでセックスのときのように、つき出している。引きこまれて、より一層、入念に紅棒を使う三郎の手に逆らって、グミはヌルヌルと押さえこまれるそばから、ツンと高慢ちきにもみえる首を、もたげるのだった。

それから三十分ばかり後、京子は、みじめにも両肢を広く割りさかれて、天井のフックに繋がれていた。

尻を僅かに床につけたきりの、みじめなポーズは、男たちが何度、見ても見倦まない姿態である。両手首も同じように縄をかけ、フックで天井に留められている。

上に向けて受ける位置で、ぐいとばかり左右に拡げられているため、生々しいふくらみが、のぞいているのだ。

かつて、このような、さげすみに合った時狂乱の果てに必死の抵抗をみせた彼女であっ

たが、今はもう長時間に及ぶチンピラ共との斗いに完敗し、内股の滑らかな皮膚をヒクヒクと痙攣させるだけだ。

三郎は、すっかり、この場面での主役になったつもりらしく、京子の用意が整ったのを見ると、したり顔で紅棒を取りだす。

「待ってくれ。今度は、俺にやらせて貰いたい」

と、喉にからまったような声を上げて飛びついてきたのは、五郎である。

うるんだような粘っこい目付きをし、喉仏をゴクリゴクリとさせているのだ。

「なにを言ってるんだ。こんなのは子供の前には毒だ。まあ、側でじっくり見物してる方がタメになるんだぜ」

と、言い争いをするところへ、法界も、

「じゃ、俺が一肌ぬごうじゃねえか」

法界は、ナメクジのようなヌルヌルする上半身がむきだしで、パンツのふくらみが滑稽なほど、露わである。

「法界の兄貴——これは、こっちでやることなんだ。そこで酒でも飲みながら、ゆっくり目の保養をしていてくれ。まあ、俺にまかせろよ」

と、三郎は彼にも、むざむざ譲りたくない

下心をみせる。

それでも、言いだした二人は簡単に引き下がろうとはせず、はては三郎の持っている口紅を奪いとうと、小競合いさえ、し始めていたらくだった。

その浅間しいとしかいえない有様を前にして、アクロバチックなまでに吊り上げられている京子の心中は、察するに余りがある。よしんば誰の手に掛かることになろうとも、悲劇的な犠牲者が彼女であることは間違いないことなのだから。

その哀れな女主人公の悲しみは、この中でまったく黙殺されている。それは鳥肌が立つほどに彼女には、おどましかった。その憤りが、紅い唇を噛む京子の丸顔を、いま凄絶なまでに美しくした。

「まあまあ、お前たち。いったい、そんなこと位で、なんという騒ぎだ。誰がやったってどだい大したことじゃねえじゃねえか。もしどうしてもやっつけたいのなら、一通り予定通りのことを済ましちまったあとで、差しになるなりして、たっぷり楽しみゃいいんだ。京子は、絶体に嫌だなんて言わねえんだぜ」

と、やや声を荒らげて清次が割って入る。

「五郎にやらせてやれよ。面白い盛りなんだ

から。法界さんは、この場は引っ込んでもら  
いやしよう。これは後で別の相談に乗らせて  
もらったらいい」

そう言う清次自身は、片腕で美津子のウエ  
ストを、がっちり一卷きして、身動きもで

きぬようにしており、空いた手で白桃のよう  
に、ふくよかな乳房を丸く揉みほぐし、その  
得もいわれない手応えを楽しんでいるのだ。

京子のトロリとした瞳は、見るともなくチ  
ンピラ共の方に向けられるが、必ず清次の膝



イメージギャラリー

『調教開始一分前』

飯田ひろくに

の上の美津子の方に戻ってくるのだった。清  
次がクスクス笑いをしながら、美津子の耳元  
に何かを囁きかけるたびに、京子は絶望的な  
しかし哀願をくり返して止まない目元で、清  
次に微笑して見せるのだった。

五郎は待つてましたとばかり三郎の手から  
紅棒を奪いとり、見事な曲線を描いてスラリ  
と天井に向かって伸びているいけにえを近々  
と、のぞきこんだ。そして、調子はずれの鼻  
歌を歌いながら、不器用な手を彼女に伸ばす  
のである。

幾重にも重なった不思議で妙なる部分は、  
……にも似て、ごく柔らかな新芽のように、  
のぞいている。

五郎は、周囲から始めた。

シドロモドロの京子は「アアッアッ……」  
と舌足らずの含み声を上げ、覚悟していると  
はいえ、あまりの事に、必死でピンと張られ  
た縄を少しでも引き寄せようと力を入れるの  
だ。その全く、たるんだところのない小麦色  
の肌は、たちまち湯のような油汗にまみれる  
のである。

懊悩の果て、切なさ沈みきっている、は  
ずの京子の声が、この時まるで蓮葉な笑い  
を含んだ嬌声に変わっていることに、男たち



は迂闊にも気づかなかったのだ。

「ああ、あっ、ご、五郎さん。許してちょうだい。く、くすぐったいのよ！ 五郎さんったら……ウフフフ」

■そして、絨氈にべったり落としている豊満な臀部を揺り動かし、全身を魚のようにくねらせる。それは丁度、安サーカスでみるアラビア・ダンスのようで、近々と寄り添い、なおも紅を塗る五郎のテンポに合わせて、いっそう激しくなるのだった。

チンピラ共は女の肉体のあまりの愚かしさに、ここぞとばかり腹を抱えて大笑いする。

「じっとするんだ。うまく塗れねえじゃねえか。痛くされるのは嫌なんだろう。くすぐったいくらい我慢するこった。アハハ……」

と五郎は嵩にかかり、殊更クナクナした手付きで微妙に、彩色を続けるのであった。

予期しない京子の弱点である。

これこそは女体の造化の妙とでもいうべきだろうか。

一度、ズキンと脳天まで抜けるような痒搔感を感じてしまえば、京子は、もうその呪縛から逃がれることはできなかった。

おどろおどろに乱れて突き上がってくる、息も詰まるような、くすぐったさは、白刃の

上を渡っている彼女を決定的にかき乱した。

「ご、五郎さん……もうカンニンしてえ……お願い、おねがい。ウフフフ……フフフ」

京子は、もう何を言っているのか、何をどうされているのかも分からなかった。笑うどころではない、このような絶望的な状況にありながら、白い喉をふくらませて、どうしても突き上げてくる含み笑いの止めようがないのだ。

男勝りの、やけにツンツンした、この美貌の娘のどこを押せば、こんな黄色い声がでてくるのだろうか。

「そうだな。こんな手があったんだな」

と半ば、あっけにとられていた三郎が、目を輝かしながら呟いたのは、チンピラたちの意見を代表していた。

そして、彼らは改めて、この二十才を越えたばかりの豊満な肉体の女の使用方法を考え直してみる気になった。

まるで果てしない繰り言をいっている女郎のように、京子は間断なくシャクリを上げつつ、必死に五郎に哀願している。両手がフリーで、どこまでも攻めてくる男の執拗なくすぐりを避けきれぬポーズではない。

その時、

「やめて、もうやめて！ お姉さんを、許してあげて。ねえ貴方。皆さんに言って」

清次のネチネチした罵りかたに、クナクナになって細かく慄えていた美津子が、とうとう、せっぱつまった悲痛な顔付きで、彼の顔を仰ぎ見、耳元で言った。

清次は妙に京子の悶え方に感心し、同じように操り責めに使える個所を考えている。京子のムダ毛のない白々とした腋の下を責めるのも面白いな――。

京子は白い喉をのけぞらせ、弾力にみちた全身を揉みながら五郎の攻撃をモロに受けている。

「ヒイ……ウフフフ。もう許して。フフフフ……ご、五郎さん、お願い。ウフフフ、あっ……フフフフ」

男たちは、彼女の示す反応のすさまじさにただ瞠目して凝視するばかりである。

京子のムクムクする肉塊を見ると、清次は、こみあげてくる劣情を、とうとう抑えかねて、美津子を脇に押しやったのだ。

そして一言、唸るような声をあげたかと思うと、五郎とは別に高々と吊られた白い腋の下を指先で操りはじめた。

「オッ、ホホホ……フフフ、ひ、ひどい……」

もう勘忍して」

息を詰まらせ、大浪のように揺れる京子の美肌に、みるみる大粒の脂汗が浮かび出す。むっと鼻をつく、メスの匂い。

清次を追って美津子が哀訴しつづける。

と、ひっきりなしに起こるシャックリのよな発作は止まりそうもない。

ピクピクと魚のように痙攣し続ける裸女に構わず、全員がのしかかるようにして五郎の仕事の成果を覗きこむ。

「おい、何をボヤボヤしているんだ。出来上がり具合を披露しないか！」

などと、京子の狂乱状態などに構わず、頭ごなしに、どやしつけるのだ。

綿のように疲れきった彼女には、すぐに意志も戻ってこない。法界は得たりとばかり、餅のように熱い内腿を、さらに押し拡げるようにする。

その出来ばえはといえば、やはり京子の必死の忍従にもかかわらず、軀が言うことをきかなかったため、五郎の仕事が旨くゆかず、所々、紅がはみだして、忠実になぞっているとは言えないようだ。

清次は、あくまで無情に美津子に顎を、しやくる。

「おい、姉の化粧直しを、してやんな。京子の評判を、これ以上、妹として落としたくねえだろう」

と薄桃色の、ちり紙をボンと投げてやるのだった。

美津子は、ちり紙を取ったものの姉の受けた責めの恐ろしさを目のあたりにして身慄いし、途方に暮れて呟くだけだ。

「あ、あたしたち、姉妹なのよ」

「ごめんね。美津ちゃん。お姉さんは、これでも、できる限り我慢したつもりなのよ」

まだ、トロリとした瞳のままの京子が、か細く言いだした。

「姉さんを蔑んだりしないでちょうだいね。

……お願い、美津ちゃん。京子は、こんな恰好をしているけれど、皆さんが、こうさせるのが好きだから、仕方がないのヨ。それというのも、もともと、皆さんに無礼なことをしてしまった、あたしが、いけないの。さあ清治さんのおっしゃる通りに、してちょうだい。さあ、美津ちゃん」

一糸も許されない奴隷姉妹は、卑猥な興味だけの視線を浴びながら言葉を、かわす。

「だって、お姉さん！」

「美津ちゃん。お姉さんも、女なのよ。どん

なに負けん気が強いっていったって、女ですもの——男の人には、とても、かないっこ、ないのヨ」

そのあとを続けようとするが、言葉にならず、ヒクヒクと濃くルージュの引かれた艶っぽい唇を慄わせるだけだ。幼い頃から仲良く育った姉妹だが、これほど、あからさまなスタイルのままで言葉を交すことになるなど、夢にも思わなかったにちがいない。

「ようし、中々いい事を言うじゃねえか。気に入ったぜ。ついでに、ケツのほうの化粧も妹にやって貰うぜ」

「そうおっしゃるのだと思っていたわ。だから京子、いま清次さんに、そうお願いしようと思っていたの……」

そうまで言いきった京子は、熟した女の匂いをムーンと、ふりまいたまま、含羞のあまり目を伏せる。まるで甘い麻酔にかかったような女体は官能の焰をあげている。

「おい、京子。美津子に言うのは、たったそれきりかい。もっと、はっきり教えてやらねえと、ウブな美津子には、何のことか分かりやしねえぜ。それとも何か、俺たちが美津子に教えてやるのかい？」

「い、いいえ、美津ちゃん。お姉さんの言っ



てるのはね、……お姉さんのお尻に……ルー  
ジュを……さあ、皆さんは、あなたまでを、  
このお遊びに引きずりこまないと約束してく  
ださっているのよ」

そして、酔い痴れたように半ば錯乱した美  
貌を周囲に振り向け、

「さあ、清次さん。この姿なら美津子も、や  
りにくいでしょうから、京子のお尻が、すっ  
かり開かれるように、縛り直してちょうだい  
清次さん」

「お、お姉さん！ 美津子を許して……」

部屋の中央に京子の一メートル近い双臀が  
盛り上がっている。

優美に伸びた両肢は、少しの、たるみもな  
い、その巨大な双球を支えている。

美津子によって、尻の一点に口紅を塗られ  
た彼女は、もうすっかり意志を失って、男た  
ちの次の命令を待つ風情である。

ポロリと紅棒をとり落とす美津子を片隅に  
追いやり、

「いつまで、そんなスタイルを続けてやがん  
だ。あんまり若いムスメが、そんな恰好をし  
ねえ方がいいぜ。ヒヒ……第一、百年の恋も  
さめちまわあ。もっとも、手前みたいな売女<sup>すべた</sup>

に惚れる物好きは、いねえと思うがな。さあ  
次は、こっちへ来な」

見事に成熟した胸の隆起の上に咲いた赤い  
乳首。同じ色濃く、あでやかな形のいい唇。  
幼女のように翳りのない下腹部のあたりから  
も塗られた紅色が覗いている。これだけ息つ  
く暇もなくチンピラ共の好餌になりながら、  
依然として若さと健康美を失わない京子の肉  
体には、ただ驚嘆するほかはない。

といっても、ネトネトするようにまつわり  
ついてくる男共の淫らな揶揄を受けとめる気  
力を残していない彼女があった。

部屋の隅に片付けてあったソファアのそこ  
ろで、何かやっていた三郎と法界が、呼びつ  
ける。

立ち上がろうとして、一寸よろめく。やは  
り用心深く後手縛りにされているため、もし  
不作法なことでもすれば、どのような叱責が  
飛んでくるかも分からないのだ。肉体は疲れ  
きっていても、気は張りつめている。

京子は失敗を押しかくすように、思わず縋  
りつくような微笑を浮かべる。あの鉄火娘が  
クズのようなチンピラに媚態をみせるのだ。

清次は、わざとパイと脇を向く。  
今度は、法界の出番のようだ。まだ、白い

歯をみせて愛嬌をふりまいている京子に向か  
って宣言する。

「さあ、人気女優さん。化粧が終わったばか  
りの水々しいカラダで、このソファアの背に  
馬乗りになったり、なったり」

ソファアの背は柔らかく、先端が上細りに  
なっている。海坊主のような法界は、ニヤニ  
ヤしている三郎から受け取った厚目の和紙を  
ふんわりと背もたれの頂上に掛ける。

法界は自分が出したアイデアに酔って、ま  
るで上機嫌である。

「まず、尻<sup>けつ</sup>をびったりと紙にあてがう。動い  
たりして、ずらすんじゃねえぞ。その気にな  
って、心持ち、開き加減にすれば、ぐっと真  
に迫ったヤツが取れるかも知れねえ。まあ、  
自分で工夫しな。ヒヒ……いや、跨がりにく  
けりや、俺が手伝ってやるさ」

「で、でも、法界さん。京子、うまくやれる  
かしら……」

京子を決定的に一撃したのは、先の操り責  
めと、美津子を道具に使ったことだろうか。  
それとも、如何に驕慢であっても、所詮は男  
の淫虐の前には崩壊せざるを得ない女の弱さ  
なのだろうか。清次は、鼻をならすばかりの  
ジャジャ馬娘の媚態を眺めながら、この時、

より一層の嗜虐を、むさぼってやるのだと決意するのだ。

「そうら、エロ娘。うんと股を、おっぴろげて乗っかるんだよ。うまくやれば、又あとでお前の好物の長イモをあげるからね」

「まあ、法界さんったら……バカ、バカ。これで、いいの……」

京子は、木馬に乗る要領で上体を心持ち、そらせた姿勢で跨がる。

こうすれば、明確に写した菊座の拓本が取れるわけである。

京子を手玉に取っている法界は、

「さあ、次にゆっくりと軀を前に倒してゆくんのだ。ゆっくりと丁寧にやるんだぞ。そうではないと、何度だってやり直させるからな」  
女の軀に巢喰っている魔風と、淫微なやぐざの手練手管にあふられ、敗北感の余り、と

# 四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。  
略号「花」 定価五〇〇円(送共)

ことんまで、こんなになってしまった自分を嘲笑するかのよう、従順な京子は白く冴えた頬をゆるめて、

「ああ、法界さん。こんな恥かしいことをさせる、京子が、またおねだりしたって知らないから。こちらは、どうなの？ もっと開くようにするの、それとも締めるようにするの。ねえ皆さんのご意見はどうなのかしら」

口吻りまでが変わってきていた。まるで、フィルタをかぶせたように柔らかな言い方で、男たちを見る。美しい眉毛のあたりが滲んだように上気している。優美な肉体は限りなく柔らかく盛り上がってくる感じだ。

「そうだわ、三郎さん。軀を前に倒すとき、オッパイにも紙を当ててちょうだい。そうすれば、お乳のかたちも一緒に取れるんじゃないかしら。いいえ、揉んだりしてはダメよ」

とつぷりと女の弱さに惑溺しきった京子は心の支えを、すべて失ったらしく、後悔も苦悩も忘れ去って、陰花植物のように笑ってみせるのだった。こうなってしまった自らを嘲笑し、売春婦そのものになりきることだけがこの瞬間々々の汚辱を忘れさせるのだと言いかせているのであろうか。男たちを満足させるには、彼女自身も今、変質性を毒々しく

花開かせる以外に方法は、ありそうもないのだ。

「そうだな、三郎。ああいつてるんだから、ついでに、やっちまおうか。これでキスマークを取って、サインをさせれば女拓の出来上がりということだぜ」

と法界はテラテラ光った坊主頭を振り立て「さあ京子。できる限り、ぐっと開くんのだ。もう何回も練習は、やったじゃねえか。ずっと、忘れちゃいけない。さあ、そのまま体を倒して、ぴったりと押しつけるんだぜ」

「ええ、わかったワ」

徐々に慎重に、きらめくような白磁の上半身を前に倒してゆく京子の裸身は、すっかり男たちの前に、ひれ伏してしまった。どうにもならない弱い女の化身である。

綺麗な瞳は濡れていたが、上気したその丸顔の美貌からは、もはや、どのような恐怖も憤りも見出すことはできない。片隅に蹴倒されたきりで静かに嚙り泣いている美津子のことも知らぬげに、京子は痴呆のような表情でこう言うのだ。

「オッパイの方は、上手に取ってね。京子、下の方は旨くやるから……」





編集長様。

初めて、お便り致します。

多忙なあなた様に、このような私事のみを書きつらねた、手紙を出す失礼、お許し下さい。暇な折り、お仕事の合間にも、お読み頂ければ幸いです。

○

私は徳島に住む一読者です。書店で貴誌を初めて手にしたのが中学三年の夏。早いもので、もう八年余りにもなります。貴誌から逃げよう、逃げようとして、結局できなかった八年間でした。

編集長に対する手紙

## 長いトンネルの彼方

四 国 三 郎

○  
貴誌を読む度、いつも自分のS的性向を意識させられ、ひどい自己嫌悪に陥るのが常でした。親、兄弟、親友にも話することができずこの八年間、一人で夜道を歩き続けてきたような気がします。

『所詮、人間なんて、皆、孤独だ』ってことは、人一倍よく知っているつもりですが、少し疲れました。

○

私が性を意識したのは、中学一年の晩秋の頃で、学校の裏山に捨ててあった一冊の週刊誌のヌード写真を見た時でした。但し、その女は縛られていたのです。

私のS的性向は、この瞬間、芽ばえ、中学三年の夏、奇クを本屋で発見した時、決定づ

けられたようです。高校に入学してからは、いろんなSM雑誌を買うようになり、たまと隠し場所に困って捨てに行くという繰り返しでした。

そんな自分を見つめるのが嫌で、ことさらに勉強に打ち込もうとしたりしましたが、長続きするわけはありませんでした。だんだん無口になり、性格は内向的で、どうしても『日陰者の意識』から逃がれることはできませんでした。今はもう、死ぬまで逃がられないだろうと思っています。

鏡に映った自分の眼が、ドンヨリと陰気に濁り、妙に粘っこい光を持っているのに気付いた時、音もなく地の底に落ちてゆくような絶望感が体中に拡がっていったのを忘れられません。

○  
大学に入学した後も、その絶望感は消えることなく、周期的に私を襲いました。そのころ、すでに、自分では意識していなくても、自ら周囲に壁を作っていて、どんなことがあっても自分以外の他人には、一定の距離をもって接する——そういう術が身についていたようです。

友人は、みんな離れてしまいました。自分を理解してもらえない。そして、どんなに親しい友人にさえ言うことができない部分が、自分にあることを思うと、やけくそと、あきらめの混ざった、どうしようもない気持ちにならずにはいられませんでした。

ひとり、ボロアパートの部屋で過ごす時間が多くなり、毎日の生活が怠惰になるのに、時間がかかりませんでした。すべての事柄に自信をなくし、酒を飲めば泥酔するまでやめられず、留置場で泊まることも、たびたびのことでした。

田舎の両親に、そのことが知れて、半強制的に徳島に連れ戻されたのは、三年生の冬休み前でした。

何ひとつ解決しないまま、学校も将来の希望も、数少ない友人、好きだった女性とも、みな途中で別れたわけです。それから、ほぼ一年間、父の仕事を手伝いながら、現在に至っております。

○  
悩み続けたというと、大げさに聞こえるでしょうか。

○  
長かったような短かったような、この八年間を顧みた今、こう思うんです。『俺は無理だと心の底で知りながら、奇ク（自分のS的性向）から逃げて来たけど、奇クこそは、自分にとって、なくてはならないものだった』と。

奇クの愛読者の大多数は、私のような苦しみを過去に経験したり、今現在、味わっていることでしょう。だからこそ、奇クは種々の困難に負けることなく、今日までの長い歴史を誇っているのでしょう。

もちろん、多くの先輩や、出版なさっている方々の努力なくては、できなかったことなのは申すまでもないことと思います。

奇クは避けるべきものではなくて、積極的に参加すべきものであり、これまでの私、これからの私にとって、唯一の日の射す窓のように思えるのです。

私のS的性向は忌わしいものではあるけれど、治すのが不可能なものである以上は、死ぬまで背負って生きて行くしか他に方法はない——。素直な気持で、そう考えられるようになりました。

そして、こんな自分に合ってる女性だって少なからず、いる筈だと信じているのです。これ以上、自分を、人生を、暗い方向に進めたくないのです。

お願いします。

私に奇ク誌上で、読者通信欄の一隅から、『少なからず、いる筈』のM女性に呼びかけさせて下さい。お願いです。それだけが、今の私にできる、M女性に巡り逢える唯一の方法なのです。

最後になりましたが、お体にお気を付け下さるよう祈りつつペンを置きます。

編集長様

徳島市 四国三郎

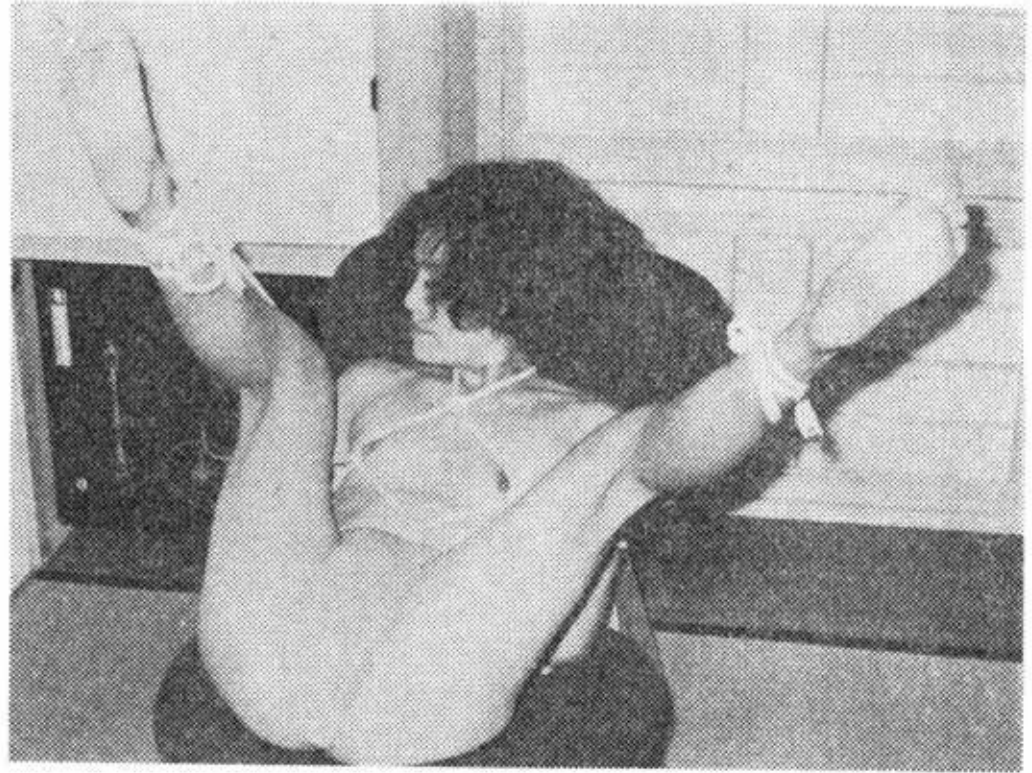




序にかえて

SM女性を紹介するコーナーとして、先鞭をつけた、SMカメラ・ハントと称する、ペンとカメラのルポも、八年有余の長き歳月に亘って、延々と書き続けてくると、いつかは飽かれてくるのも、自明の理というもの。

辛苦の抄撰を続け、馴れぬ手にカメラを握



SM抄撰のあれこれ

耽<sup>たん</sup>奇<sup>き</sup>房<sup>ぼう</sup>我<sup>が</sup>楽<sup>らく</sup>多<sup>た</sup>控<sup>ひかえ</sup>

(第一回)

耽奇房洞人 辻 村 隆

り、同工異曲のルポの推移を、さまざまにSMの味つけして売り出してみても、所詮もここらが限界とさとり、同好仲間の惜しむ声きけば、未練心<sup>まさ</sup>弥勝<sup>ひとたび</sup>って、今一度とも思えどど、いやいや、惜しまれてやめる今が花と、決心固くピリオドをうつことにきめ、この際いさぎよく、老兵は去らん哉と、奇クを始めSMの世界からオサラバをする決心を固めたのもホンの束の間。義理ある箕田大人や、悪戦苦斗の鬼六大王より「頼んまっせ」と電話がかかると、忽ち心もいそいそと、その一大決心も、春の淡雪の如く、うたかたと消え去

り、又ぞろ、何やら書かんとする、助平ごころ、ニヨキリ、ニヨロ、ニヨロと頭をもたげて、枯渴の脳味噌ふりしぼり、おどろおどろ気な、怪しきことを考える始末。

洞人いつもいう如く、この弥次馬的助平のSM根性、雀百までの譬えどおり、死ぬまでなおらぬワイと、腹をきめると、心も軽く、気も軽く、さらば、筆すさびの間に間に、筐底の恥垢のかずかず引きずり出して、あれやこれやを、書きたい放題、見せたい放題に開陳して、恍惚にうつつをぬかさんと、糖尿のゲンナリ、だらりの軀に鞭うっての、年頭の

新たな覚悟こそ、勇ましき限り。

日頃より、貯めに貯め、蓄えに蓄えし、子孫に譲れぬ、あられもなき三十年間の恥の上積み。三帖の独房、ところ狭しとひしめいて雑然と積みあげし、SMの珍品、稀品、駄品のかずかず、みずから名づけて耽奇房と称するこそ笑止の極み——。

三文の値打ちなきガラクタも、洞人にとっては、宝物にも等しき「我楽多」の品々、さてさて、ほこりを払い、ススを拭って、耽奇房のゴッド・ファーザー気取りも烏<sup>おこ</sup>澁がまし、又ぞろ罷り出ました次第。

他愛もなく、何を書くやら、心定めもなければども、見聞、体験とり混ぜて、告白めいたものやらエッセイやら「我楽多」めいたことなどを、心むく俣、気のむく俣に書き殴ってこれも奇ク草分けの我俣とお許し願ひ、知るも知らぬも逢坂の、心にもあらで浮世に長らえた、恍惚近き、うつけ者のたわけ言と、お笑い下されば幸甚の到り。

駄文、迷文は、いつものこと乍ら、世のウラのウラのこと、包み隠さず白状致しますれば、御笑読のほど、隅から隅までズズーイ、ズイとお願い、頼んまっせでござります。

## SMカメラ・ハントは、ペンとカメラのどちらが本命なのか？

こんなことを、仲間達からよく訊ねられ、当の私自身、ハテ、どちらが本命なのかと、自分でも判らないのだから、頼りないハナシである。

SMカメラ・ハントの本文だけで、フォトがないとなると、この本文は全然その役をなさない片輪ものである。

さりとて、フォトだけを羅列してみても、その撮影状況なり、女性の性向など不明で、やはり物足りない。

こうした状態を考慮して、産み出したのがSMカメラ・ハントであった。

しかし、他誌を始め、奇クの塚本氏にしてみても、現在、私の創り出したカメラ・ハント式なルポの踏襲で、いずれは、作られるべくして作り出されるスタイルであったのかも知れない。

昭和三十九年十一月号に第一回を書き、昭和四十七年三月号で終止符をうった、カメラハントの変遷は、一つの小さな、SMの歴史でもある。

私はプロのカメラマンではない。所詮は、

好きに輪をかけた程度のマニアに過ぎない。

書く方というと、これもプロの作家ではない。本職の片手間に、好きなSMの道を、我流に書き散らしているだけである。

私のよく謂う「小人閑居して不善を為す」のたぐいで、本職で生活の方が安定しているから、趣味が嵩じて、今日の私を作り出したといえそうである。

私の趣味は読書（特に歴史は好きである）とカメラ。この二つがマッチしてSMカメラ・ハントをつくり出したので、カメラとて素人撮りだから、アングルもまずく、現像処理も、しばしばしくじっている。唯、ナマのものを発表してみたい——と、そんな意欲にかられて撮りに撮りまくった一時期もあった。フォトに対する説明程度か紹介のつもりで、文が、女性達のプライバシーの点もあって、已むなく若干のフィクションが混じり、それが追々延長していったようである。

最初は精々、四〇枚程度の本文が、いつしか、六〇枚ぐらいいになり、興乗れば百枚を超え、茲二、三年、殆ど七〇枚から八〇枚書く程に、長く伸びている。

同工異曲の、緊縛の描写は、正直いって苦手である。つい、ハント女性との対話、性向



などに重点がかかり、SMのプレイになってくると、俄然、力が、こもり始める。

そんな繰り返しだが、飽きもせず八年有余、続いたとは、自分でも驚きである。

その間、青木順子、ローズ秋山等のプロシヨ一女性。谷ナオミ、辰巳典子、渚マリ等のピンクスター。一連の東映々画の紹介も含まれ、私としては、一応のSMの流れに沿って今日のブームをつくる素地をつくって来たと自負している。

ブームが到来して、私の役目は終わってしまった。きらびやかな美女の緊縛が、店頭各誌を占める時代になっては、本文に刷り込まれた不鮮明なハントのフォトなど、その価値は下落する一方である。況してや、緊縛に飽き、フォトに飽いてきた私の気持を反映するように、ハントのフォトも迫力に乏しくなってきたは尚更である。

SMフォトの窮極は、現在の状勢をもってしても発表は不可である。所詮は、隔靴搔痒の感を、まぬがれない。

感慨ある連中は、妻や、愛人や、M女性を発掘してきては、自ら撮り、プレイし、フォトをつくって、愉しみ始める。

奇クサロン欄の同好者仲間の投稿フォトの

嶄新さが、それをあきらかに物語っている。

SMに“急々”の同好者の撮るフォトと、“緩々”気味の私のフォトとでは、優劣は判つきり、きまつている。

SMの緊縛とプレイに、ロマンを求め、夢と幻想の世界を現実に追い求めて、既に三十年。今や、SMのプレイは、夢でも幻想でもなく、生々しく現代で、現実に息づいているのである。

かつては、制約につぐ制約を受け、オッパイは、いけない。尻の割れめはダメだ。アブノーマルなポーズは都合悪いと、ダメージが多く、十数枚送っても、僅か、数枚しか掲載されなかった初期の頃に較べたら、正に隔世の感がある。

フォトにしてみても、緊縛一辺倒から、バィブを使い、浣腸へと進み、今では、十センチ平方の個所さえ、蔽っていれば、如何ようなフォトも、罷り通る世の中で、情勢にに応じて、私のフォトも、SM的なセックスプレイにまで進展しても、読者は一向に驚かなくなってきた。

かなりドギつく書いたつもりでも、東京発行の、もろもろのSM雑誌を拾い読みしてみると、私の書いたものなど、如何にもおとな

しく、しかも、なんとなく古めかしい倫理めいたものが文中に流れていて、面白くもなんともない。

最早、SMブームの激しい流れの中に、私のような古い嗜虐の同好者は、ついてゆけない感すらある。

フォトが半人前、本文も半人前、両者相俟って一人前のSMカメラ・ハントを書かないとなると、このガラクタ控えなど、所詮は、半人前の値打ちもない。

老いたる者には郷愁を呼ぶ懐かしのうた声めいた、そんな点だけが取柄でもあろうか。

## カメラ・ハントのフォト

### 制約の変遷について

茲に、SMカメラハントのタイトルと、掲載のフォト枚数を列挙してみる。そこに、諸賢はありありと、フォトの制約を見られるに違いない。

昭和三十九年

十一月号 マゾ願望の人気者、青木順子を

縛る(五枚) 青木順子の巻

十二月号 めぐりあった謎の女

(二枚) 山原清子の巻

昭和四十年

一月号 鼻責めの記 M七〇生の巻

(三枚)

二月号 おしめカバーとレインコート

(二枚)

竹野ひろ子の巻

三月号 映画『日本拷問刑罰史』とS子

(四枚)

S子の巻

四月号 耳責めに微笑む娘

(六枚)

刑部典子の巻

五月号 拷問にのたうつ女体

(六枚)

美木乃々子の巻

六月号 しなやかな女獣

(四枚)

志村善子の巻

七月号 鼻責め版「夫婦善哉」

(五枚)

増田夫妻の巻

八月号・九月号 欠

十月号 息詰まる刹那に酔う女

(二枚)

山本阿津子の巻

十一月号 黒の幻想

(六枚)

井沢南海子の巻

十二月号 クリス・ラブソディ

(六枚)

続美木乃々子の巻

昭和四十一年

一月号 讃岐の蛇娘

(八枚)

蛇娘の巻

二月号 みゆきのバースデイ

(五枚) 増田みゆきの巻

三月号 断層の女―そして梨花悠紀子の

こと(二枚) 伊吹真砂子の巻

四月号 可愛い小悪魔の群れ

(四枚)

小原真澄の巻

五月号 恍惚抄

(三枚)

沖村レイ子の巻

六月号 夜は乱れる

(八枚)

佐伯あけみの巻  
牧野 雅子

七月号 妻こそわが命

(一四枚) 新宮明夫・洋子の巻

八月号 続・可愛い小悪魔の群れ

(七枚) 一宮百合子の巻

九月号 黒髪長き柔肌に

(三枚) 菊田アツ子の巻

十月号 岩壁の裸女

(四枚) 続・小原真澄の巻

十一月号 妖精のたわむれ

(七枚) 飯塚千鶴子の巻

十二月号 蠟涙のしたたり

(一〇枚) 続・一宮百合子の巻

昭和四十二年

一月号 可愛い悪女

(六枚) 山田チヨコの巻

二月号 華麗なるシューズへの憧憬

(十一枚) 須磨松男・由美の巻

三月号 第三の小悪魔

(四枚) 桐山英子の巻

四月号 燃ゆる想いにあけぬるを

(六枚)

水野弘・香代の巻

五月号 縄は知っている

(五枚)

笹原八千子の巻

六月号 甘い鞭

(六枚)

関谷富佐子の巻

七月号 陶醉の乳房

(五枚)

河森真理子の巻

八月号 真夜中の宴

(十四枚)

秋山夫妻の巻

九月号 黒の拘束帯

(五枚)

青柳千紗の巻

十月号 甘い羞恥

(七枚)

大島照代の巻

十一月号 快楽の紋章

(五枚)

芝 梨枝子の巻

十二月号 妻よ薔薇に似て

(十八枚) 田宮恭介・寿子の巻

昭和四十三年

一月号 野猿と戯れる少女(夫婦プレイ  
旅行同伴記) 三浦一美の巻



- 昭和四十四年
- 二月号 (八枚) 安井邦臣・喜久子の巻  
甘美なる羞らい
- 三月号 (九枚) 三好留美の巻  
優子の涙
- 四月号 (十枚) 浅井優子の巻  
陶酔をよぶひとの名は
- 五月号 (二十枚) 辰巳典子の巻  
真白き柔肌の甘き香り
- 六月号 (十四枚) 谷ナオミの巻  
ケメ子早春譜
- 七月号 (十一枚) 佐々木真弓の巻  
連縛無残像
- 八月号 (六枚) 増田みゆきの巻  
魔子の呻く夜
- 九月号 (十三枚) 木村 洋子の巻  
悦虐のカルテ
- 十月号 (十三枚) 続・三好留美の巻  
美汲恵子
- 十一月号 (九枚) 木戸悦子の巻  
胎児の喘ぐとき
- 十二月号 (十枚) 続・佐々木真弓の巻  
悦痴な季節
- 十二月号 (二十四枚) 徳川女刑罰史 〓銘々伝  
(二十四枚)
- 昭和四十五年
- 一月号 (十二枚) 川口有里子の巻  
その悦虐が失神をよぶ
- 二月号 (十四枚) 志摩桜子の巻  
〓元禄女系図〓の悦虐と耽美の構成 (四十一枚)
- 三月号 (十四枚) 牝豹のたわむれ
- 四月号 (二十四枚) 渚 マリの巻  
ハレンチ・イレブン・ナイト
- 五月号 (十六枚) 飯田カオルの巻  
肉塊の蠢き
- 六月号 (十六枚) 滑川幾代の巻  
乱倫の生態
- 七月号 (十七枚) 左近麻里子の巻  
女の肌の燃えるとき
- 八月号 (五十四枚) 残酷美の集大成  
童女受胎譜
- 九月号 (二十四枚) 金原奈加子の巻  
飼育の愉しみ
- 十月号 (十三枚) 小池美喜の巻  
お気に召すまま
- 十一月号 (十四枚) 岡本嬰子の巻  
悦虐の昼と夜
- 十二月号 (十四枚) 村田キヨ子の巻  
娘十八素肌が疼く
- 一月号 (十九枚) 長井葉津子の巻  
ミキとマキの華麗なる戯れ
- 二月号 (二十一枚) 小池 美喜の巻  
あっとおどろく人妻の豹変
- 三月号 (十七枚) 川路叢子の巻  
悦虐に憑かれて
- 四月号 (十三枚) 佐倉絹子の巻  
童女浣腸譜
- 五月号 (十六枚) 続・金原奈加子の巻  
深夜の舞踏会
- 六月号 (十八枚) 続秋山夫妻の巻  
孤独より遁れて
- 七月号 (二十四枚) 伊藤圭子の巻  
ひたむきの夜
- 八月号 (十四枚) 続・佐々木真弓の巻  
むら子恋狂い
- 九月号 (二十一枚) 続・川路叢子の巻  
マゾヒスチックアニマル——その悦虐の履歴書
- 十月号 (二十五枚) 谷山久美子の巻

十月号 悦虐の甘き戯れ

(十九枚) 渡部好美の巻

十一月号 豊満女体猥ら書き

(十七枚) 村上喜美の巻

十二月号 夫婦愛虐図絵

(十七枚) 三浦敬一・純子の巻

昭和四十六年

一月号 両手に花のプレイ旅行

(二十五枚) 続渡部好美の巻

続川路叢子

二月号 凄絶! 片足逆さ吊り

(十九枚) 続山谷久美子の巻

三月号 乳房に咲くほりもの桜

(十六枚) 和泉弥栄の巻

四月号 魔子の甘く泣く夜

(十八枚) 続・薊 魔子の巻

五月号 あどけなきニンフ

(二十二枚) 富田由美子の巻

六月号 台北小姐很好 (台北紀行)

(二十一枚) 范 恵栄の巻

七月号 華麗なる衝撃

(十六枚) 高村浩子の巻

八月号 交歓

(二十二枚) 越路智之の巻

小松景子

九月号 化身

(十三枚) 龍 珠子の巻

十月号 悦虐の生態

(十八枚) 三浦純子の巻

十一月号 甘受

(二十一枚) 江口淑子の巻

十二月号 快楽のスーベニア

(二十枚) 森川美紗の巻

昭和四十七年

一月号 知りたい年頃

(十六枚) 大沢妙子の巻

二月号 緊縛妊婦第一号今昔

(十枚) 田中美佐子の巻

三月号 陶醉への誘い

(二十五枚) 野村信子の巻

四月号 悦楽の倫理

(二十枚) 喜多知子の巻

五月号 官能のたわむれ

(十七枚) 石田敦子の巻

六月号 快楽夢幻

(二十枚) 続野村信子の巻

七月号 Mアニメルの華麗なる対決

(二十三枚) 山谷久美子の巻

渡部 好美

八月号 矢も楯もたまらぬとき

(二十五枚) 奥村 マリ

岸 悠子の巻

篠原レイ子

九月号 吊りの醍醐味

(二十一枚) 渡部好美の巻

十月号 羞恥責めの実態

(十四枚) 深田菊子の巻

十一月号 浣腸志願

(十七枚) 鬼頭達世の巻

十二月号 特訓プレイ妻

(二十四枚) 佐野みさ子の巻

昭和四十八年

一月号 豊満女体猥ら責め

(十六枚) 村上喜美の巻

二月号 放浪の旅が教えた快楽の味

(二十七枚) 秋山夫妻の巻

三月号 悦虐の遍歴

(二十三枚) 続・佐野みさ子の巻

以上で分かる通り、掲載フォトの枚数は、後半から、漸増的に量を況している。

八年五カ月(二回、欠号しているから、実質的には八年三カ月)間のフォトの総掲載量は、一、三九四枚の多きに及んでいるが、実際にその場で撮影した量は、その何倍かであり、ハントの分だけでも、相当量である。



カメラ・ハントの推移をみる意味で、各年別に、フォト枚数を列挙してみると、左記のようになる。

昭和三十九、四十年	五一枚
昭和四十一年	七五枚
昭和四十二年	九二枚
昭和四十三年	一四七枚
昭和四十四年	二七八枚
昭和四十五年	二二二枚
昭和四十六年	二三一枚
昭和四十七年	二三二枚
昭和四十八年	六六枚

昭和四十三年から四十四年にかけて、フォトが、一挙に倍増しているのは、東映の「元禄女系図」「責め地獄」の二篇で、九五枚を占めていて、これは純然たるハント用フォトとは、いい難い。しかし、渚マリの二四枚。金原奈加子の二四枚と、この年は、私としても脂の乗り切った、カメラ・ハント大活躍の年であった。

各号の枚数の中には、単なるスナップも含まれていて、純然たる緊縛フォトばかりでもないが、それにしても、我々ら、よく撮ってきたものだと感心する。

最高は東映映画「責め地獄」の五十四枚。

最低は山原清子、竹野ひろ子、山本阿津子、伊吹真砂子の各二枚宛で、奇クサロン欄なみの、ひどいものであった。

当初のフォトは、着衣か下半身をフォトでカットした、あっけないもので、今改めて見て直してみたが、よくこんなフォトで満足していただけたものと、つくづく隔世の感を覚えるのであった。

ボツボツながら、隠蔽した全身が掲載されるようになり、フォトに始めて斜線を入れて隠蔽したのは、昭和四十三年三月号の「優子の涙」浅井優子の巻からであった。これはハント用のフォトにとって、画期的な思いつきであった。

ついで、昭和四十六年二月号「凄絶！片足逆さ吊り」谷山久美子の巻で、それまでの斜線を一挙に縮小し、現在のフォトの如き、限界のみを隠すというやり方を試みてみた。

四囲の状況を判断し乍らの手段であったが箕田編集長もこの手段に踏み切り、フォトは一挙に迫力を況してくる。

私の撮るフォトも、昭和四十五年あたりから、強烈に急傾斜していった。しかし、誌面での限られたスペースで掲載されるフォトは小さく、大きくても、せいぜい名刺程度であ

った。折角の、迫力あるフォトも、小さければ、訴える力が弱い。

フォトが、手札から、小型キャビネぐらいまでに大きく掲載されだしたのは、昭和四十六年十月号「悦虐の生態」三浦純子の巻からで、同時に塚本鉄三氏のフォトも誌面を賑わし、私のハント用フォトも、大いに陽のめを見出したのであるが、この半年ぐらい前から俄にSMブームが盛り上がり、群小SM雑誌が割拠し始めたためにとられた、対抗手段のようでもあった。

私のハントは、初期の頃は、確かにペンの方に、かなりのウェイトがおかれ、謂わば本命のようでもあったが、それは、奇譚三十九夜物語を書いていた気分の、幾分の延長のようでもあった。唯、枚数が少なく、せいぜい三〇枚から、四〇枚ぐらいで、掲載フォトに比例していた。

本文が伸びるに従って、フォトも漸増している。東映ルポや、ピンクスターのものが多

いのは、安全なものが多いせいもあった。折角いいのを撮り乍ら、安全性ばかりに気を使って、五、六枚程度しか掲載出来なかった、昭和四十一年、四十二年頃のハントに、強烈な素晴らしいフォトが多かったことは、今

にして惜しまれるのであるが、安全性第一の方針に従っていたので、当時としては已むを得なかったようである。これからは、機会あるごとに、こうした埋もれた過去のハント女性の、強烈なフォトを発掘して、各位に紹介してみたいと思っている。

その他、カメラハント以前の女性で、“奇譚三十九夜物語”中に挿入した女性、単発で紹介した、梨花悠紀子、東浦ひかる、水本茂美、宇治さゆり外。ハントしてフォトを撮ったが、当人の意向で発表しなかったものなど数えると、数万枚の膨大な物量である。

嘗て、壮年の頃、伊藤晴雨老に、激しい憧憬と敬愛を覚えて、努めて、晴雨式の古典的な緊縛に走ったことがあったが、当時のものは、殆ど筐底に秘めて、未発表の尽である。

SMプレイから、ともすればセックスに走って、緊縛も又、プレイの一環と感ずるようになった、昨今の緊縛フォトにくらべ、その頃のもの、緊縛という行為自体に、嗜虐を覚え、丹念、丁寧、縛り続けただけに、純粹であり、被虐ポーズの美しいものも多々温存している。

緊縛の原点に戻った時、昔を懐かしんで、フトとり出してみる、それらのフォトにハッ

と息を嚥むような、素晴らしい傑作が、玉石混濁の中のダイヤのように、時偶、キラリと光彩を放っていたりする。

既に読者層は年々歳々、時の流れのように推移していつている。過去を知らない人々のために、私にも、こんな純粋な時代もあったことを、今の人々に発表してみたい意欲にかられることも、しばしばである。

近い将来、私が筆を折って、書かなくなつたとしても、偶に、素晴らしい女性にでも遭遇し、プレイのチャンスがあったら、矢張りフォトは、必ずや撮りたくなることだろう。

とすれば、結論として、今の私の本命の方は、どうやら、下手の横好きの、カメラの方にあるであろう。

耽奇房のフォト、絵画、珍品は、年々歳々その量をまして行く一方であるが、墓場までは持ってゆけないと知りつつも、奇を好む私の性癖は、懼らく恍惚の時まで、それらの蒐集を続けてゆくことであろう。

## カメラ・ハント女性のプライバシーと、その周辺について

過去に登場したハント女性と私の交遊について、仲間から、その消息を、しばしば聞か

れることがある。

本当に一ペンコッキリの女性もあれば、ハントには登場しないが、その後も、しばしば出会って、プレイしている女性もあり、それは、当の女性のフィーリングや性向の問題もあり、私の好みもあるので、一概には判別しにくい。

公開の誌上に、一人の女性を刎上へのせ、その性向やプレイの状態を書く以上、私はこれらの女性達に、出来得る限り、迷惑をかけないよう努力してきたつもりである。

幸い、SMカメラ・ハントに登場した女性で、このハント記事の為、身に支障のなかったことは何よりであった。

広いようで狭く、狭いようで広いのが、世間である。奇クが風俗的な特殊雑誌なので、読者層も限定されていて、これだけの女性を登場させ乍ら、何事もなかったのは、やはり世間は広いということであろうか。

カメラ・ハント女性の氏名は、すべて仮名であることは勿論であるが、この名前のつけ方にも仲々苦心させられたのであった。

登場のハント女性の仮名にも四種類あって一、本人自らが名乗った仮名。読者通信などの女性がそうである。



一、奇ク紹介の女性で、既に編集部で名づけられた女性。

一、私自身のハントによって、私の名づけた女性。これは、本名をその傍、他の字におきかえてみたり、姓を、苗字と名前に切り離してみたり、まるで関係のない氏名を、つくり出してみたりで、さまざまであるが、私の意志による。

一、女性に意向をきいて、本人の意志によって命名した名前。女性にとって、それが仮名でも、幾らかのイメージがあるらしく、自らその氏名を使いたいということがある。

女性達の住居にしてみても、大半は配置転換をして、好奇心の強い同好者の為に、迷惑のかからない配慮はしてある。

「耳責めに微笑む娘」の刑部典子が、三の宮界隈の中華料理店勤務と書いたため、物好きな人が、一週間がかりで、三の宮あたりの、すべての中華料理店をしらべて廻ったという笑えぬ例もあるし、「ミキとマキの華麗なる戯れ」の、小池美喜、松山真樹子が、大阪キタの理髪店の娘達だと書いたので、キタの理髪店を順番に回って、散髪して回った人もいた。又、「あどけなきニンフ」の富田由美子が、近鉄沿線学園前の、鶴舞団地の中にした

ので、セールスをする同好の人が、セールスにかこつけて、団地をしらみつぶしに、暇と根に任せて歩き回ったとか聞かされては、何か、気の毒やら、可笑しいやらで、SMカメラ、ハントの記事、いよいよ、真実をかけば迷惑になるぞと、思いを新たにしたものである。

今なら真実を書いても、当の女性達に迷惑がかからないので、真実を述べるが、三の宮の中華料理店に勤めたことになっていた刑部典子は、あの当時、尼ガ崎市の喫茶店に勤めていたウェイトレスであったし、ミキとマキは、何を隠そう、歴きとした女子短大生で二人は同じアパートに寄宿していて、春休みの期間、京都駅前の丸物百貨店に、パートタイムでアルバイトしていたのを、画家のA氏が紹介してくれたのであった。在学中でもあるし、万一、ハント記事が曝露して、大学の方がおかしくなるとはとの配慮から、理容師として書き換えたのである。二人とも無事卒業して、小池美喜は岡山市へ、松山真樹子は山口県防府市へ帰ったが、今頃は、もう結婚していることであろう。

富田由美子は、団地は団地でも、マンモス的な、万博会場に近い香里団地である。出産

後、子供も少し手が離せるようになって、もう一度ぐらいいいってき乍ら、遂に実現出来ずじまいであった。

ハント女性も、夫婦の場合、夫がすべて諒解済の人は、現在も消息が続いているが、独身女性や、若い娘となると、その住所が一旦変わってしまうと、もう連絡してこず、そこでプツリと音信が途切れてしまう。

ハント女性の動機にしても、若干のモデル料欲しさの場合、夫に強要される場合、女性自身が、真の被虐願望である場合、欲求不満が嵩じて、SM的要素を含んだ浮気をしてみたい場合など、さまざまであるが、金銭目的の場合の女性は、撮ったり、プレイしていても、正直いって、余り面白くない。

勿論、いつの場合も、無報酬ということは無いが、女性が、被虐願望を秘めている場合が、私にとっても、一番やり甲斐があるということは当然である。すべてはフィーリングの問題であって、目的は金銭にあっても、プレイの雰囲気にとけ込み、ハントのひとつときを、すべてを忘れて耽溺する女性こそ、私の琴線を震わして、いつ迄も記憶に残る女性といえよう。

嘗て、赤線華やかなりしころ、私とて、悪

友と共に、飛田や松島の、赤線境に繰り込んだことがあった。

金銭で性の切り売りをする彼女達の中にも義理か厄介のように、偽声を使って、早くすませようという女には、興味索漠だし、まるで愛人の様に迎えてくれて、精一杯のサービスをしてくれる女性には、又、もう一度遊んでみようかなと思うのは、人情として当然の事であろう。

元来がフェミニストの私であるから、カメラ・ハントの女性は、よくよくのことがない限り、滅多に悪くは書かない。当の女性が、読むかも知れないということも念頭にいれ、一つは、読者の方のイメージも、彼女によかれと願って書くから、皆、それ相当にプレイし、結構愉しんでいるように思えるが、一回きりの女性と、度々出会う女性との差は、プレイした私が一番よく知っていることで、そこには、赤線に例えた様な事実が、ある程度は介在していると思つて頂いて間違いない。

しかし、中には、私の方がすごく気に入つていても、相手の女性が、吃驚して、二度と姿を見せなかったという、苦い例もあるから一概には、いえない。要するに、私という人間の、アブノーマル性に驚いて、姿をくらま

す女性もあるということ、正直いって、そこまで、うぬぼれていない。判っきりいえば、一度でフラれたということになるが、えてして若い娘に多い。プレイに年の差なんて思うが、若い娘のM性は、そこまで熟してはおらず、ついてゆけないというところであろうか。

カメラ・ハントというタイトルで書くことは一応終止符をうって、潜行するハント活動は、これからも続いてゆくことであろう。

素晴らしい女性に遭遇したら、この欄で、紹介したい意欲は、決して失つてはいない。

毎月、毎月、欠かさず、続けてゆくということが、どれ程苦痛であり、難行であるかはこれをやった者にしか分からないと思うが、羨望と憧憬でみられる、SMカメラ・ハントが、私の寿命を、何年か縮めたことは確かである。

幾度か、もうやめよう、やめようと思いつつ、奇クから催促され、仲間から尻を叩かれると、つい重い腰もあげざるを得ない。

同一の女性を、二、三度、登場させると、もうマンネリズムだと叩かれる。

疲れ果て、寿命を縮めても、不特定の読者は、別段誰一人、責任をとってくれるわけ

なし、それも飽きれば、弊履の如く顧みなくなってしまう。

時代の物価高と共に、追々と、高くなる報酬を払い、ホテル代、食事代、交通費と、計算すれば、一篇のカメラ・ハントは、決して安いものではなく、若干頂戴する稿料を、時にはオーバーすることすらある。

告白や小説のように、唯、原稿紙と送料だけが、経費のすべてなら、その原稿料とて、丸々そっくり頂戴も出来ようが、宿命的に、フォトを必要とする、カメラ・ハントは、それらの、書くものにくらべて、根本的に出費が違ってくる。

自分自身、女性を撮り、プレイすることを愉しんでいる時期は、それとても苦にならないが、ノルマ化されて、本職の多忙な時に、時間を割いて、ハントに走り、出費して、しかも、自家DPEの上、更に原稿を書くとなつては、もう苦痛以外の、何ものでもない時すらある。

今、こうして、遂に踏み切つて、プレイしたい時にプレイし、書きたい時に書くという自由を得て、私の緊縛は、再び原点に戻り、今後は、おそらく、幾分は目新しく、ハツとするようなものも発表出来るのではないかと



自負している。やはり私とても人並みに、長生きはしたいのだから――。

**責め絵をフォトでは実現出来ないしかし、その可能性に挑戦して**

私の同好者仲間に、絵画を描く人が三人いる。Aは、プロの絵描きさんで、個展も開いていて、特異な画風で、画もかなり売れている油絵派である。

Bは、高校の教師で、絵を教えているからその面ではプロといえそうだが、彼は絵画は売らない。教えるためのものである。

Cは、好きで器用に描く方で、描くものは専ら女体猥ら責め専門の、ペンと鉛筆の我流のものである。

Aの描いた油絵に、梨花悠紀子と桜井葉子の、それぞれ緊縛絵があるが、私の提供したフォトによって描いたので、顔はよく似ているし、絵も上手いが、独創性がない。

Bが送ってくれたデッサンは、女学生や、ごく若い娘達が、襲われて、今正に落花狼藉という、きわどいところを描いている。

娘達の表情、むき出しの下半身、柔らかい女体のナイーブな線など、絵は上手いが縛りが、いつも一定した胸縛りか股縛りで、雑誌

のグラビヤへでも出せそうな、模範的なもので、上手に描いても面白味に乏しい。いつも一定している美少女の顔は、彼の思い出につながる女性なのだろうか。

Cの絵は、緊縛と、奇抜な責めに終始している。男性や、責められる女の顔は、お世辞にもうまいとはいえない。それでいて、奇抜卓越した、緊縛やプレイ方法に、思わずニヤリとし、よくまあ、こんなことを考えついたものだ、いつも感心させられるのであった。

Cは固疾に悩まされ、殆ど仰臥の生活で、医師も見離しているらしい。背椎カリエスのようなもので、奥さん一人の細腕で生計を支え、彼は寝たきりである。

無聊の妄想が、Cを逞しい嗜虐者にかり立ててゆき、不自由の身で、床に腹ばって、描いているという。

去年の大三十日（大晦日）、彼は時を合わせたように、速達、書留を送ってきた。

大判の画用紙に、二Bの鉛筆書きの絵が四枚――。

正月を控えて、働きもならず、奥さんによって細々と辛うじて生計を立て乍ら、これを描くCに、鬼哭啾々たる思いにかられた。

一枚は、除夜の鐘風景で“撞き納め”とある。

撞木に代って、両手足を一束に縛られた裸女が、ぶら下がり、双臀の谷間に、鐘をうちならす丸太がさし込まれていて、その部分が誇張してある。

坊主の一人が、女の黒髪を綱代りに握って引っ張っている。大釣鐘を囲んで、三人の坊主が、下半身をむき出しにして猥らに、はやし立てている。女体鐘つきという図で、撞けば撞く程に、めり込んでゆくという趣好――

次の一枚は、“餅搗き”である。

禪一本の男が杵をとり、首輪をはめられ、鎖でつながれた裸女がかいどりをしている。

前にある大俎に、大の字に裸女が縛りつけられ、女の腹の上で、男が餅をこね乍ら、鏡餅をつくっている図である。

遠くの家門柱の両側に、太竹に縛りつけられた娘の、胸のあたりに梅、両足を縛ってその縄目に松をさし込んだ、女体門松が二体立っている。その前で、子供が羽根つきをしているという凝った絵である。

三枚目は“風上げ”――。

大風、嵌口具をはめられた美女が、大の字に縛りつけられ、股間から風糸が地上へと

伸びている。

この大風を中心に、添景的に小さく描かれた二つの風にも、それぞれ、美女の風責めが描かれ、一つは、風の紙足代りに、両手を拡げて縛られた美女が風にぶら下がっているしもう一つは、これも紙足代りに、風の両端に二人の裸女が、両足を縛られて吊り下がっている。風のみで、地上は描かれていない。

最後の一枚は「初詣で」

観音様風の裸女が、両手を前で縛られて、指を丸めて印を結び、両膝を立てて露出的な御開帳で頭、肩、膝など、あちこちにローソクが立てられて、蓮のうてなに坐っている。

鐘を叩く、太い摺古木のような撞木が、深々と突き立てられ、(御祈禱料一万円、御祈禱の方は、撞木を御自由にお使い下さい。み仏は、法悦に咽び泣きます)と立札してある。

緻密な堂宇の背景。左端に、頭だけニュツと突き出している坊主。抹香の煙、蓮華など細かく描いてある。

正月前に、日を合わせて、これを送ってきたCのやり方は、心憎いばかりに、私の胸に突きささる。

末法の寺の諷刺と、正月の懐古の幻想であろうか。

人並みな正月を過ごせそうもない彼にとつて、責めの幻想の世界に遊ぶことが、唯一の救いでもあるようであった。その大傑作を誰かにみせたい。その当面の白羽の矢が、いつも私なのであった。

その描く女性の顔は、いつもY子である。同好者仲間には、Y子の存在を、何人か知っている人もいる。私とY子との関係——。それは、一口でいうなればプレイ妻であった。

どんな被虐でも甘受するY子。そう若くもないが、独り暮しで美しく、細身の体は柔軟で、撓やかに屈曲し、不可能の体位を可能にしていた。

私は、病床に臥して、治癒の見込みのないCを憐れみ、Y子を連れて、Cの古びたアパートを訪れ、彼の前で、ささやかな緊縛を試みたことがある。彼はそれ以後、Y子に憑かれ、心奪われ、彼の描く女性のすべてはY子の顔であり、Y子の肉体であり、Y子の秘められた翳りの縮図であった。

私は嘗て、Y子のフォトを発表したことがない。Y子に愛情を感じているからであろうか——。私独りのものにしておきたい、独占欲にかられてかも知れない。

私から連絡しない限り、Y子の方からは、家内に遠慮してか、ついで連絡のあったことはなかった。そのつつましさ、控えめな態度が、大正生まれの私にとっては、たまらない魅力であった。

それでいて、私の気が向いて、唐突に連絡しても、断わったことがなく、例えその時が彼女の生理期間中であろうとも、そのことを淑かに告げるだけで、私を避けようとはしなかったのである。

一方的に受身の女——。その被虐のタイプは、S男性にとっては理想像である。

家内はY子の存在を知っていて、敢えて諍めようとしない。嗜虐めいた想念にかられてY子を自宅に呼んでも、Y子は家内に気を使ひ、いつも何がしの音物をかかさず、妻もY子を、まるで身内か、自分の代替者のような気持で迎えるのであった。

耽奇房のある離れ家で、Y子とプレイする時もある。家内は努めて、平静に振舞っていた。女心が、時にはチラリと妬心めかしたことを口走らせても、Y子の人柄が、それ以上の思いを家内に抱かせなかったようである。

華道と茶道を教えるY子は、独り暮らしのせいもあって生活は豊かで、私に一切、負担は



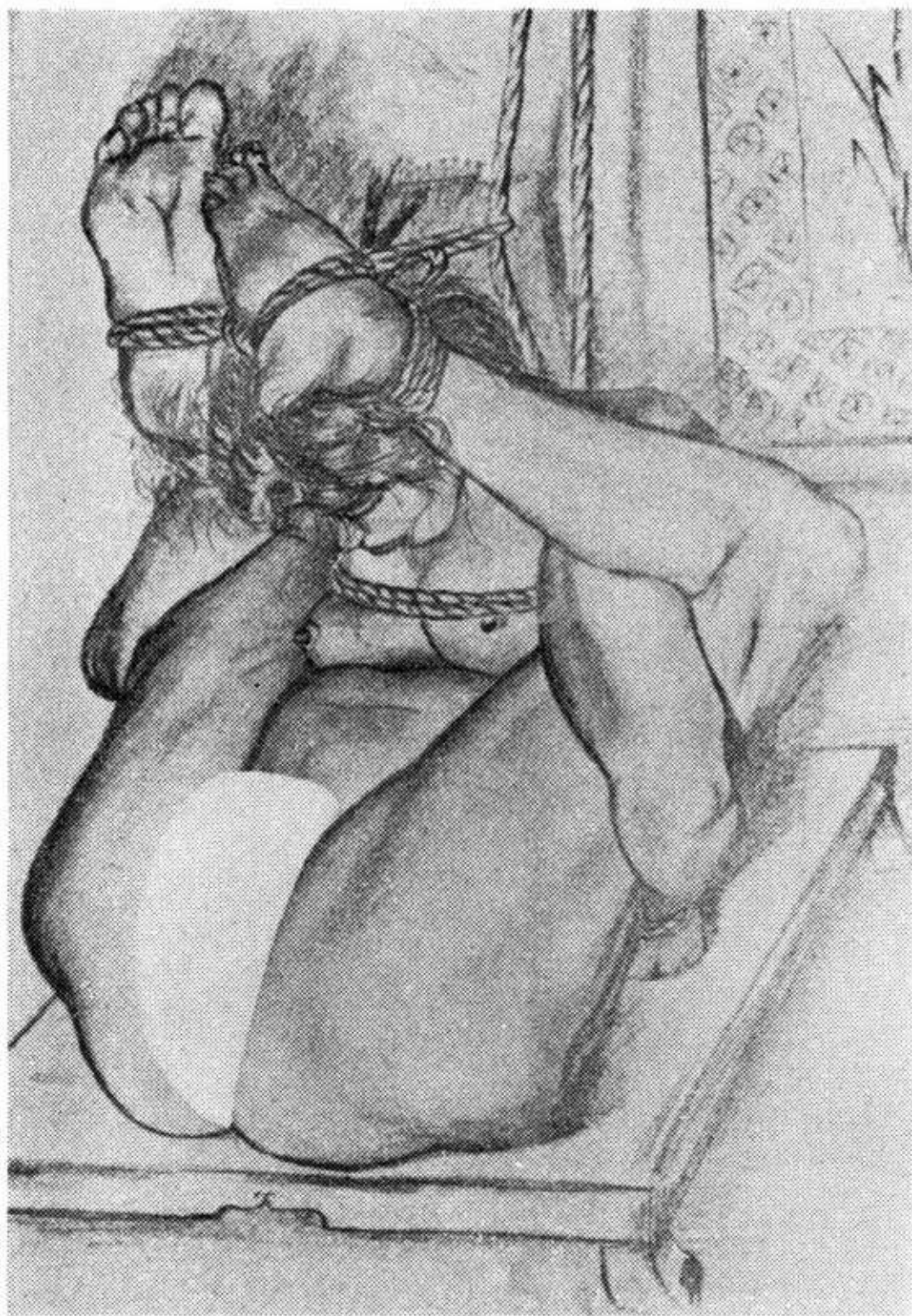
かけない。女体遍歴の過去の実績の中で掘んだ、それは得難い女性である。

Y子にとっても、私の存在は、秘めたる被虐の願望を燃焼させる、唯一の心の拠りどころにしていた。

多忙で数カ月近く、一片の便りも送らなくても、彼女は、じっと侘しき、淋しさを独り

こらえる女性である。

Y子と私のつながりは、確かに私の我儘と専制の上に成立している。自分勝手だと分かりつつ、精神面でも、そうした被虐感情を味わあせてやりたいと思う私の心自体が、サド的なのだろう。時には家内が、たまりかねて偶には呼んであげたら——と、言い出す時も



ある。私を真中にして、家内とY子と三人でプレイ旅行でもしてみたい。

そんな願望を抱いても、今の処、実現しそうにもないが、可能性はありそうである。

実現したとしても、誌上にフォトを発表することは滅多にあるまいと思うが、筐底の奥深く、思い出のよすがとして、残ることもあるだろう。

Cの描く責め絵が、いつもY子の、苦悶の中に悦楽を泛かべた表情であることに、Y子自身、Cに対して、身近な親近感を覚えていたことは確かであった。

幻想の責め絵の中で、可能性のありそうなものをフォトにして、私はCに示す。

Cは、そのフォトを基にして、責め絵を描く。

責絵と、強烈なる責めのフォトの距離は、こうして近づいてゆく。

ここに二枚のフォトがある。

一枚はY子のナマの責めのフォトであり、もう一枚は、Cの描いた、責め絵の複写フォトである。

腰の線、歪曲せる肉体の隅々まで、Cの描いた絵は、Y子そのものを創り出していた。

両足を、後頭部にて縛り、両腿を抱えるよ

うにして、両手を背後で縛る。

果たして、この窮極のポーズ、アクロバットダンサーならいざしらず、可能なりや否や一度お試しなさるのも一興であろう。

私は、Cの描く、窮極の責め縛りに歩一歩と、Y子と共に、近づこうとし、Cは、Y子に、憧憬と恋慕をこめて、幻想の世界の責め



絵を、現実の可能の視野にみて、狂喜する。

これは義務づけられたような恰好で、延々と続いた、カメラ・ハントにはない、ナマの秘められた愉しさであった。

始めて発表するに当たって、Y子に承諾を求めたら、素直にハイと、うなずいた。

書くためのハントをやめた私は、ここ当分

は、楚々たるY子の、柔軟な裸身に魅入られそうである。

Cの描く責め絵は、逐次、幻想の中に可能性を見出そうとしている。

荒唐無稽を描いても、不可能と知って、努めて可能性に近づこうとし、その中に過去の緊縛にない、奇抜さを求めようとしていた。

謂わば、年末に送って来た、Cの正月向きの責め絵は、彼の遊びであった。不可能承知で描いた初笑いのお年玉の絵なのであろう。

それも又楽しい。責め絵のすべての女性の表情が、Y子一辺倒だからである。

正月五日、息子と娘が、夜まで帰らぬ遊びに出たのを確かめて、Y子を家に呼び、家内と三人で、ホームゴタツを囲んで水炊きを喰べる。酔うほどに、プレイ心に逸ったが、フト一策を案じ、家内にY子を和服の上から簡単に縛らせてみた。Y子は素直に縛られ、家内も顔をほてらせ、心ありげに私の顔を、じっとみつめた。以心伝心、シンプルに両手を背後で縛ってやると倒れかかってきた。Y子の眸が、遺瀨なげに、うるんでいるのを私は見逃がさなかった。

鬱勃たる被虐の願望を心に秘めて、Y子は眼をそらさず、彼女の前で、始めてみせる夫



婦の戯れを、凝っとみつめている。

家内の頬は、いつになく熱っぽかった。

嘗ては、SMのプレイに耽溺した、一昔も二昔も前の、あの頃の感慨が蘇ってきたのかも知れない。

私は妻の体を、そっと離し立ち上がると、ホームゴタツの向かい側に坐るY子の体を抱えて、元の位置に坐った。

静かな正月過ぎの午下がりを――。

酒に快く頬をはてらせて、私は二人の女を左右に均等に抱きしめる。

妻は、しなだれかかり、Y子は心持ち、身体を強ばらせていた。

思い切ってハレンチになってみたい。チラリ、そんな想念にかられ乍らも、現実の私は抱きしめていた二人を離すと、手早く、細縄をといていったのであった。

## 東映ドキュメント映画

### 『プロセクサー』余聞

一月二十七日頃から『忘八武士道』と併映のこの映画、宣伝部のクレームで、「エロスの女王」と変更、二月三日封切りと決定されたそうだ。東映の企画で、苦心の結果、考えた新造語であるが、プロセクサーという

耳なれぬ言葉は、確かにピンとこない。プロの性の探究者という名目も、アッピールしなければ何にもならない。

映画プロセクサーは、数人の追跡ドキュメントから構成されている。

私は企画の面で提案した、秋山夫妻の追跡プロの担当である。

おみそ 大三十日より、大阪ダイコミュージック

で再起第一回公演する彼等のショーが、いわば山場であるが、二十七日頃、来阪した彼等夫妻を、SMスナック「レイ」に案内して、SM心を昂揚させ、待機する港区の天保山ホテルに訪れては、あれこれアドバイスしたのであるが、正直いって、私は失望と落胆を禁じ得なかったのである。

秋山夫妻は、私の書くカメラ・ハントの中では、数少ないプロであった。しかし、プロである彼等が、私宅を訪問した時は、身も心も裸になりきって、ナマのSMの世界に耽溺し、それなればこそ私も、又と得がたき知己と感じて、彼等の栄光の為には、全面的な協力を惜しまなかったのである。

私は、そうした、ハダカの秋山夫妻を期待して、東映に推薦したのであるが、その期待は見事、裏切られたといってよかった。

一旦、東映から交渉を受けてからの秋山夫妻は、判っきりプロセクサーとして、割り切った行動をとり出したからである。勿論、プロとしての制約もあり、社会的な名声や、毀誉褒貶も、つき纏うに違いなかったが、彼等は、憶病な迄に警戒し、カメラを意識し出したのである。そこにはもう、私の這入り込む余地はなかった。かつて同じ中島カントクの下で『性倒錯の世界』に協力したが、あの奔放、大胆なSMシーンは、遂に最後まで実現出来なかったのであった。

彼の九州男児、熊本県人の根性が、いい意味でも、悪い意味でも剥き出しにされ、自分が一旦こうだと思ひ込むと、もう私のアドバイスの声は耳に入らず、ひたむきに、我が道をゆくのが慨で、自分の思い通りに突っ走ってしまった。

全裸になって、ムキ出しのプレイをしても制約のある映画のことだから、そのシーンはトリミングするか、カットするにきまっている。にもかかわらず、秋山夫妻は、天保山ホテルでの稽古シーン、スナックレイでの、SMプレイシーンなど、すべて蔽っており、秋山氏にいたっては、シャツにズボン下と、いう、SMプレイとは凡そかけ離れたスタイル

で行動したのである。

私は一言いいたかったが、自分の思い通りにやらねば気の済まぬ、今のプロ根性旺盛な彼の姿に、もうアドバイスする気力も失せ、苦笑の俤、黙って見守っているより仕方なかったのである。

スナック・レイの太田氏は、この日に備えて、SMプレイする女性三人に、揃いの黒なめし革のS的な凝った衣裳をつくり、黒と赤の裏表になったマントを羽織らせ颯爽としていた。彼はこの衣裳代に、プライベートの金を十二万円も、つぎ込んでいる。

一方、秋山氏は、暑いからといって服を脱ぐと、ネックのセーターと、ズボンをとったが、ラクダ色のシャツとズボン下姿の俤である。SM的な夢をブチ壊すことも甚だしい。

天保山ホテルの稽古のシーンも、これに近く、最後には暑くなってシャツを脱いだに過ぎない。

私はこの稽古シーンに、物足りなさを感じて、彼の光栄のために、翌朝、再度の稽古のシーンを頼んでみたが、彼は一條さゆりが検挙された事例を挙げて拒み通したのである。

私のカメラ・ハントのフォトでは、堂々とSMプレイの真髓を発揮し、ダイコーミュー

ジックの舞台では、強烈すぎる程に演じる彼が、何故、映画の場合、かくも恐れるのであろうか――。

ストリップ劇場にて、ダンサー達は、もの見事に特出し披露するが、カメラの撮影は絶対にさせない、あの心理と、どこか一脈相通じるものがあつた。

と、ならば、私宅でのSMの耽溺のプレイと、私のカメラは、彼は唯一の特例として許容してくれていたのかも知れない。

(辻村さんは自由の立場だからいいが、私達プロは一旦、警察から眼をつけられると、もう仕事は、やってゆきにくいのです。全国封切の映画は、そうした点では眼をつけられ易いから、尚一層自重せねばならんとですよ)

彼は、私の要請に対して、苦しそうにそういった。彼等の立場上、分かる気もするのである。分かってい乍ら、一方では、激しいものを追求する私の心は不満なのであつた。

『性倒錯の世界』は、私の、SM面での全力投球であつた。『プロセクサー』は、残酷シヨウを売りものにする秋山夫妻を、ドキュメント映画に引っ張り出す役目にのみ終始し、そこにもう、SMの私の這入り込む余地はなかった。それが、私を不満にかり立てるので

あろうか――。

秋山夫妻は、夫妻なりに、懸命にシヨウの世界に打ち込み、充分すぎる程、東映のスタッフにも協力している。

シヨーマンとして、そのルポに徹する彼。ナマのSMプレイヤーを、彼等に期待する私。

この大きなギャップが、何がなし、秋山夫妻と私との間に、眼にみえない溝をつくつたようである。

映画『プロセクサー』の秋山夫妻は、私のルポしたカメラハント『放浪の旅が教えた快楽の味』の秋山夫妻とは、判っきり別個の人格であることを知って戴きたいのである。

この映画のカントクの、中島貞夫氏は、人も知る、東映ハエヌキのプロの監督さんである。『木枯し紋次郎』はじめ、彼の撮った商業映画は、平均的に興行価値をあげている。

そのカントクさんが、『性倒錯の世界』でもそうであつたが、今回の『プロセクサー』に於いても、私や秋山夫妻やレイの仲間のやることに、一言も口を挟まず、黙念と坐り込んで、唯、じーっと見つめているだけであつた。あれこれと指導され、ああしろ、こうしろといわれると、やり易いが、黙って、我々



のやりたい放題を、熟視されているのもシン  
ドイはなしである。

カントクさんにしてみれば、懼らく物足りない面、不満は、ゴマンとあるに違いなかった。あえて、それを吐露せぬところに、カントクさんの深慮があり、指導し、リードすれば、映画がドキュメントでなくなることを恐れたのではなかったか。

どこ迄も、かくしどり、追跡ルポという当初のテーマを崩さない態度には頭が下がる。でしゃばり一倍旺盛な私が、若しカントクならば、懼らく、ああもしてほしい、こうしてはどうだなどと、口うるさく嘴を挟んだことであろう。

映画企業の中で動くカントクさんであり乍ら、一言半句、口挟みせぬ中島貞夫さんの態度には、私は私なりに、内心、秘かに舌をまいて感服してしまった。

彼はドキュメント映画を撮り出すと、不思議に大腿部が疼き始める。

『性倒錯——』では右腿、『プロセクサー』では左腿が疼き始め、苦しそうである。

限られた期限の中で、日夜を分かたぬオーバークが、彼の肉体を、むしばんでゆくのではなからうか——。

秋山夫妻にしろ、中島監督にしろ、所詮プロの世界は、きびしい。その点、野次馬的存在の私など、独り喜んで悦に入っている。考えてみれば、しあわせな男かも知れない。

## 夫婦プレイと

## SM的スワッピングについて

最近、奇クサロン欄でも、夫婦交歓プレイを望む声が、非常に多い。奇クの編集部としても、真面目なプレイヤーなら、紹介の労をとりたいのはヤマヤマであろうが、迂かつに紹介して、尻拭いさせられても困るので、余りとりあっていないようである。

一対一の夫婦のSMプレイに飽いてくると次の刺激を求めて交歓プレイを希むのは、SM的想念が、それだけ前進したことになる。しかし、世の中には、自分勝手な考えの人も多くて、他人の細君とはプレイしたいが自分の女房とはプレイさせない連中も、かなり多い。自分の女房を、そこまで飼育していないから、交歓プレイを申し出て、妻に一蹴されるところというケースもあるらしい。

渡部光雄夫妻など、夫婦プレイには、かなり積極的な方で、同好の士あれば、決していはいはしないが、Uという同好者が、熱心に

渡部夫妻との夫婦交歓プレイを要請するので遂に懇望もだし難く、紹介の労をとった。

当日、約束通り渡部夫妻は所定の場所に夫婦で出掛けたが、Uの方は細君を伴わず一人である。その弁解は、唯今、生理中で都合悪いとのこと。生理など、少し以前から、夫婦なら分かっている筈である。渡部光雄もそれでは約束が違うと、引揚げようとしたら、今日は、何とか、自分一人だけとプレイして欲しいと懇願する。相手の腹が分かった気がして、流石の彼も、判っきり、断わって帰ったが、その後も、Uは、しきりにプレイを要請してきて、いつの間にか、当初の約束の、Uの細君の件は、立ち消えになってしまったというのであった。

これなど、夫婦プレイにかこつけて、渡部好美さんとプレイしたいハラが見えすいていて、下手に紹介すると、こういう結果になりかねないが、案外、こうした連中が多いのではなからうか——。

夫婦交歓プレイの場合、いつの時も、一つの障害になるのは、子供の処置である。里親のある夫婦、両親や親のいる夫婦なら、子供を預けてもゆけようが、近頃の核家族で夫婦と子供だけという家庭は、その意あっても、

いざとなれば、なかなか夫婦揃っての外出は大変である。

渡部夫妻と関東の阪東太郎夫妻の間に、交歓プレイの約束は、とくに出来ているが、どちらも子供があるので未だに実現しない。三浦敬一、純子夫妻にしても、二人の子供と商売の為、意馬心猿でも、夫婦きりで外出しにくいのが実情である。

それと共に、夫婦交歓プレイの場合、お互いの年令、家庭状況、SM度、趣好、細君の容貌、肥瘦の条件など、お互いの好みに合えばいいが、それが、なかなかピタリと、ゆかない。

自分の女房は、内心は人前へ出しても恥か

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかなねます。

しくないなどと自負していても、いざとなると、相手の細君に対して、何がしかのコンプレックスを感じるものである。所謂、他人の花は赤いという、たぐいであろうが、内心、忸怩たるものを感じて躊躇するようになる。

SM度の強弱の面が、プレイの場合、大いに左右して、夫だから、妻に対して、あらゆるプレイを行ない得ても、他人の妻に対してそのSM度を尺度としてプレイした場合、あるいは強烈すぎたり、なまぬるすぎたりで、よくよく交際した上でないと、うまくゆかないのが、SMの夫婦交換プレイである。

その点、セックスを主体にした、当今流行りのスワッピングは、性の交換であるから、案外すんなりと、ことが運んでいるが、実際となると、三流週刊誌の記事のように愉し性の饗宴は出来ないものである。

私の同好仲間、K氏に、アングラのルートがあつて、スワッピングの誘いを受け、細君を口説いたが、到底、そのハレンチに、細君はついてゆけず、K氏は散々考えた末、ゆきつけの小料理屋のおかみを口説いたのであった。おかみといっても三十四、五才の、ダンナはいるが、六十いくつとかで、月に、二、三度、顔を出す程度の、色より欲の方になり

かかっているオッサンである。K氏とおかみの仲は、既に三年来で、これは、SM抜きの単純セックスの仲だという。

興味と好奇心で、おかみはハナシに乗り、K氏の奥さん然をよそおって、スワッピングの、秘密の家に乗り込む。場所は名古屋西郊の、医師の家であった。

このスワッピングは、SMを伴わない、純粹のセックスの方である。

集うもの、四組。主催者の医師夫婦は、まぎれもなく本モノ。個人商店主の夫婦と、某会社課長夫婦は、K氏にとっても初対面で、本当の夫婦かどうか分からないという。

会費一切不要。唯、当日の料理を、四等分してワリカンで払うという。場所は医師の提供である。

お互いのプライバシーには、一切触れないというルールのもとで、当日は、魚すきパーティであった。

因みにK氏は四十六才、おかみ三十五才。医師推定、夫は五十才前後、妻四十数才。商店主推定、夫四十才位、妻三十才前後。課長推定、夫は五十才位、妻四十七八才。で、年令的に、かなり世の中の、酸いも甘いも噛み分けてきた連中である。商店主の妻



というのが、最も若く、一見ホステス風だというが、どうやら本妻ではないらしいと、彼は推測していた。

すき焼と酒で、雰囲気はやわらぎ、かなりさわどい冗談も出て、なごやかになる。

医院は、看護婦、お手伝い等、すべて外出させて、休院してあるから、跡片附けは、女性達が、皆で手伝ってすませる。

医師の家の、応接間の、ソファや、道具など取り除き、草色のジュータンを敷きつめてルックスの低い、光彩ランプをつけてある。

ここで、いよいよ始めようという段になって、さてとなると、もじもじして、仲々試合は開始されない。何となくお互いが牽制し合って相手の出方を観察しているのであった。

結局が銘々の細君？を抱いて、抱擁から愛撫へと移行してゆく。

数組が、暗いジュータンの上で、愛撫し合っていることが、かなり女性の性感を昂めてゆく。自分達の行為を、第三者にみられているといふ実感が、何かなし、昂奮を喚起するようであった。

Kは、おかみを抱き乍ら、そっと商店主の若い細君に手を伸ばしていったというのであった。

女体がビクリとして、彼女は、尚更、商店主に、韓としがみついてゆき、彼のチョッカイは徒労に終わった。

パイプが、どこかの組で響き、押し殺した嬌声が洩れ始める。

結論をいおう。女体は、幾度となくアクメに到達するが、いつもいう様に、男性のこの年令では、一度——せいぜい頑張っても、二度がいいところである。

Kは夜明け迄に、おかみと一度、医師の妻と未遂で終わったというのであった。

男共は、果てると、何がなし、自己嫌悪の状態になって、呆然と白けている。

商店主の契めで彼の同伴してきた女性（三十才前後、彼女は商店主をパパと呼んでいたが、瞭らかに水商売の女性だったという）を男達四人が、女体探究し、他の三人の女性は男達の狂宴を、ぼんやりみつめていたということであった。

やはり男達にとって、美貌の若い女性が、どうしても狂宴の対象になるらしい。

翌朝、朝食に顔を揃えたが、何がなし白けていたことは否めなかった。

乱交のスワッピングといっても、所詮は、男性にも女性にも、それぞれの好みがある。

愛情の伴わない乱交というものが、いかにむなしいかを、Kは帰りの新幹線の中で、しみじみ感じたといっていた。

お互いに気心が知れ合い、いくばくかの交際があった上で、意気投合して、スワッピングに突入するのならいざ知らず、いきなり未知の人間が一堂に会しても、肉体の饗宴に、愛情の這入り込む余地のない場合は、果てたあとの空しさだけが、残るのみである。

これならいっそのこと、検挙されたが、ミナミの秘密クラブの、ハレムの様に、若い娘数人の裸身が、たむろする中に飛び込んで、若いエネルギーを吸収して、あの娘、この娘に戯れる方が愉しそうである。

二度、三度、同じグループで、スワッピングの会合をすれば、又違った雰囲気生まれるかも知れない、とK氏は、いう。さもあるう。とあれ、K氏にとって、生まれて始めての、乱交スワッピングへの誘いは、さして面白くもなかったらしく、あとになって、その場の雰囲気想像した方が、意欲をかきたてられるという。

現実には、案外、そんなものであるのかも知れない。

## — &lt;M 女 通 信&gt; —

## 『黒い乳房』に 答 え て

— 諏訪大路 健さまへ —

高 村 浩 子

諏訪大路健さま。

編集部を通じて、お送り下さいました小包有難く受け取りました。

本当は、もっと早く、私の手に入る筈だったのですが、実は昨年十一月中旬に、前のアパートを引っ越して今のところに移りましたのに、編集部へは、そのことをお知らせしなかったものですから、遅れてしまいました。

私が編集部に出しました年賀状に、新しい

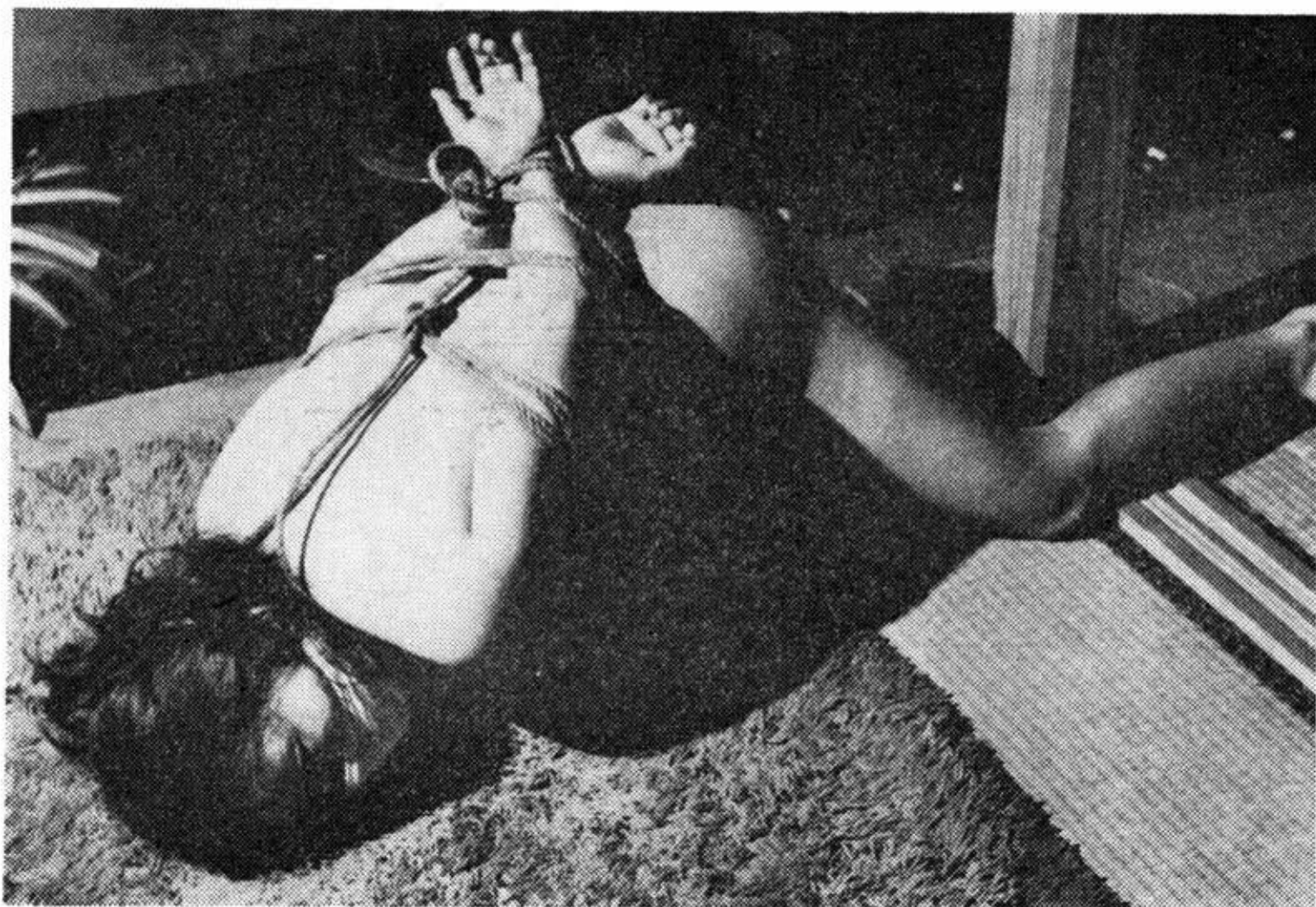


住所を書いておきましたところから、一月十三日になって、やっとお心づくしの小包を手したわけです。数ならぬ身の私に対しまして、こうしたお心づかい、本当に有難く、厚くお礼申し上げます。

今日、一月十五日、成人の日は朝から雨で私は、ずっと部屋にこもりきりで、本を読んだり、編物をしたりしております。

昨年、こちらのアパートへ移ってきました





のは、妹が勤めている会社の寮へ入りましてからは、余りかけ離れていては何かと不便なので、私の方が妹の勤める会社の近くへ移ったわけなのです。地理不案内の妹が、休みの日に、私のところへ遊びに来たりするのに、困るだろうと思ったからなのです。

ここは大阪府の地図をひろげますと、ずっと上の方（北の方）になります。どちらかといえば、むしろ兵庫県に近いのですが、大阪市内と違って緑も多く静かです。

小包でお送り下さった原稿の公開書簡、第二信『黒い乳房』は、何度となく拝見いたしました。私には、むづかしくて、わかりかねる個所もあるのですが、わかりましたところだけ、お答えさせていたできたと思います。

私が奇クの誌上にのせていただいた文章はその時点で頭

に浮かびましたことを、正直に偽りなく書きましたものですので、それについて、いろいろ御教えいただけますことは、身にしみて有難く存じますものの、お言葉のように「身から出た錆」と思って諦めねばなりませんでしょうね。

でも、私は決して、貴方さまのおっしゃるように「過失」なんては思っておりません。思っていることを、ただ忠実にペンにただけでして、それに対してのご批判は素直にお受けするつもりですけれども、思ったことや書いたことは決して『過失』などとは思っていません。

それに引きかえて、貴方さまが、高村初子さんと私とを混同なさいましたことは、重大な「過失」でございましたわね。初子と浩子と、はっきりと違った名前で、しかも、少しもまぎらわしい文字ではないのに、それを自分勝手に混同なさるなんて、軽そつも甚しいと思いますけど、如何でございましょうか。

それを、私や編集部の子になさるなんて男らしくもないと思われても仕方がないと存じます。初と浩という全然違った文字を、よくお読みにならないなんて、私には不思議でなりません。このように綺麗な文字で、しっ

かりした文章をお書きになられる諏訪大路さまが、なぜ、そのような初歩的なミスをするのか、私にはどうしてもわかりません。

私が奇クに文章を投稿したのは、すすめられるまま、思いのたけを書き綴りましただけで、決して原稿料がほしいとか、名を売りたいとかいうような気持はありませんでした。でも、誌上に自分の文章がのってしまいますと、やはり同好のお友達もほしく、反響も気にするようになってまいりました。

それにしましても、言えますことは、私の書いておりますことは、その時その時の、胸に浮かびましたことを、正直にペンに托しましたことです。ですから、それにつきましての、ご批判は甘んじて受けます。

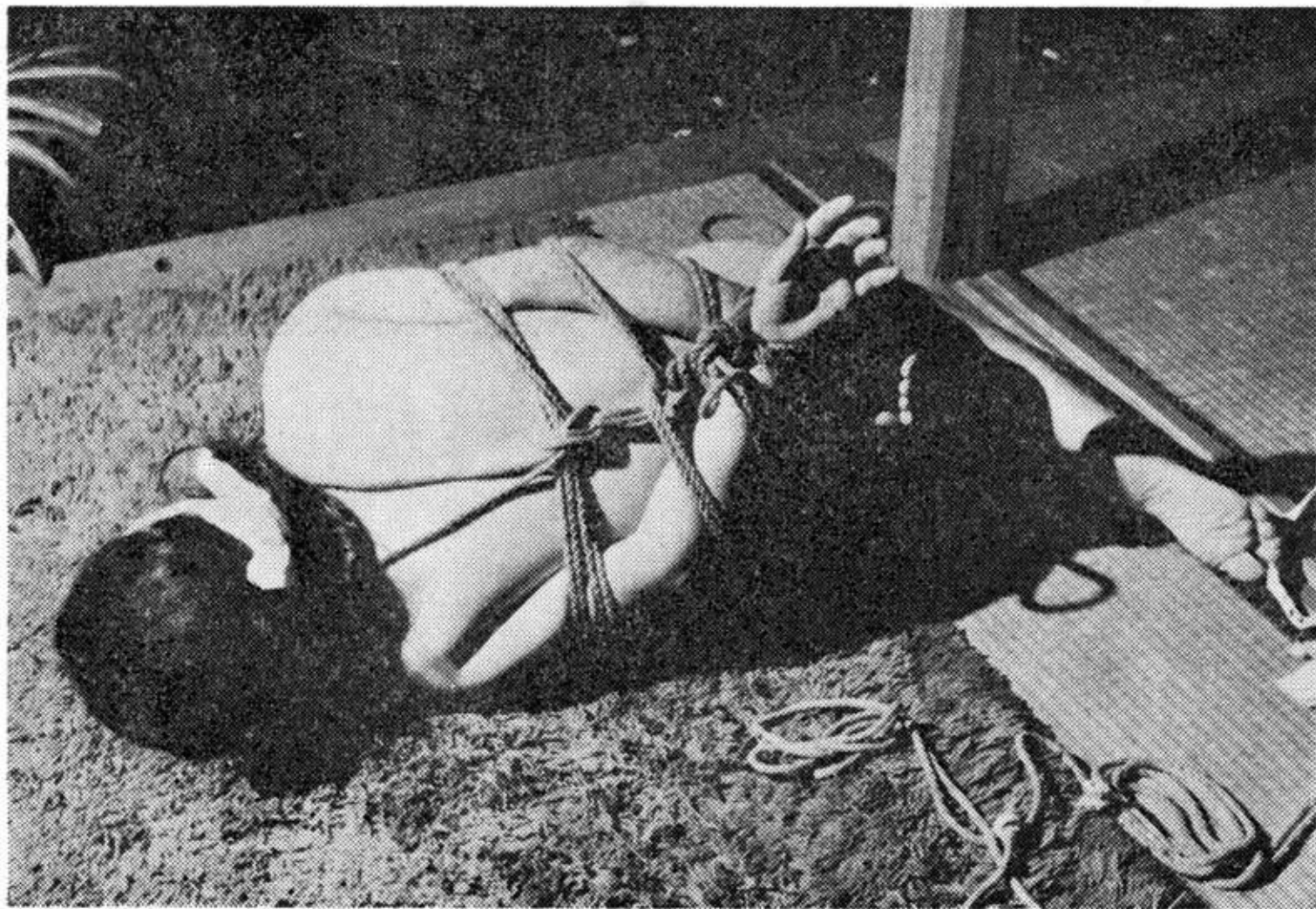
私は才女でも美女でもありません。ごくありふれた無口で引っ込み思案の一女性です。ただ、偶然の機会から奇クの誌上にのせていただいたことから、奇クの愛読者の方々の間に少しばかり知られたに過ぎません。

貴方さまのご心配下さったような、街を歩いている時や勤め先で男性の方から誘われたというようなことは、幸か不幸か、まだ一度もございません。もし、そのようなチャンスがありましたら、そのいきさつを、詳しく文

章に書いて広く奇クの愛読者の方々に、楽しみに読んでいただきたいと思うのですが、現実には、そんなスリルに富んだことなどって、起こらないものですのね。

つくりごとじゃなくて、それが本当のことでしたら、もし奇クの誌上に、私の書いた文章としてのったとしても、その男性の方は文句一つ言えないのじゃないでしょうか。諏訪大路さまは、どうお考えでしょうかしら。

それから、ウエイトレスから更に転職してホステスへと水商売への道へ踏み込んでゆかないかと、ご心配下さいましたが、私はホステスが卑下するほどの職業とは思っていませんけれど、自分には向いていないと自覚しておりますので、今のところは、ホステスになる気は少しもございません。



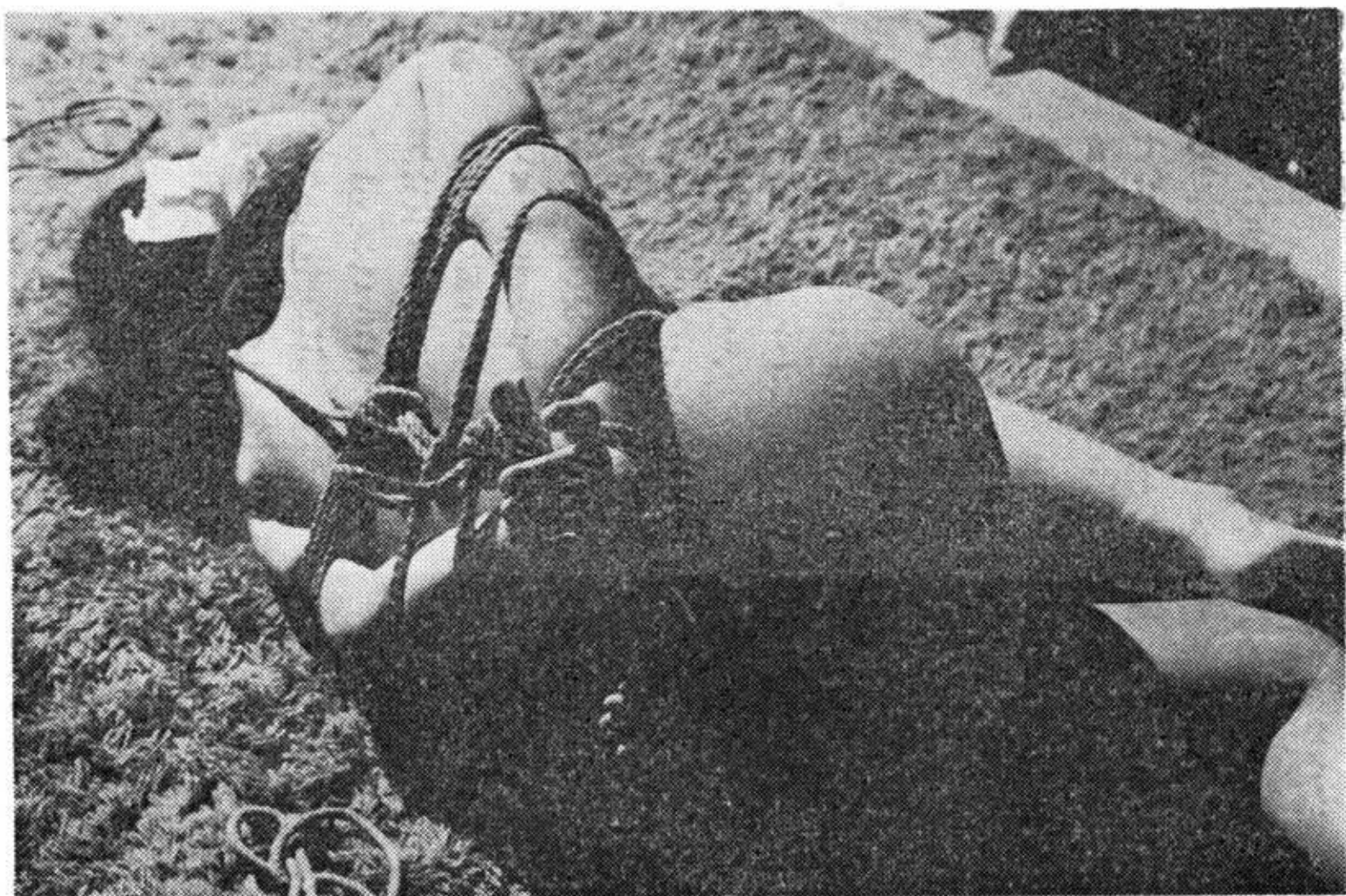


もし私に、お酒を飲む男性の機嫌をとる才能がありましたら、もっと早くバーかキャバレー、或はアルサロに勤めていたかもしれません。今、私の通勤しております所は、日曜祭日がお休みで、朝九時から夕方五時までが勤務時間のアルミサッシの会社です。

貴方さまがお考えのように、そう変化のある日常ではございません。毎日が、きわめて平凡で、ありきたりの生活です。

それだからこそ、私の被虐の夢も、妄想のなかでだけは、飛躍的なものかもしれない。『白い馬にまたがった素晴らしいSの騎士』の出迎えを夢想している私も、現実ばなれしていますが、貴方さまもまた、この浩子に対して、現実とはかけ離れたことをお考えになっ

ていられるのではないでしょうか。昭和三十六年十一月号の奇譚クラブ一冊、本当に有難うございました。今まで、デパートの古書即売会などで見つけて、奇クの古い号を数冊やっと求めましたが、この号は、まだ手にしたことはございませんでした。



私がまだ子供だった頃に発行されたこの奇クが、今、読んでいまでも、少しも古さを感じないのは何故でしょうか。

この十一月号では色頁で、塚本鉄三様が、「緊縛フォト撮影の実際」という題で、梨花悠紀子さんと大塚啓子さんの写真を沢山のせて、撮影の裏ばなしのようなことを書いておられるのを興味深く読みました。

私は他の女性の方の縛られた写真を見るのは、余り好きではありませんが梨花さんという方の表情は大変、豊かで美しいと思いました。

大塚さんの責められている写真や文章を読んでおりますと、自分が責められた時のことを思い出して、身につまされました。私は、今でも、責められたい、いじめられたい、という気持は強いのですが、やはり、それは、そう期待し願望している間の方が、心たのしい気がします。

諏訪大路さまのお住居が、もし、お近くであったなら、週末にでもちょっと、という気持が私の胸を、ふっと熱

くさせますが、貴方さまがお案じ下さいますように、私は纏ったお金を、手っ取り早く手に入れるような才能の持ち合わせがありませんから、そうした経済的な自由もございません。

次に目が引かれましたのは、やはり『読者通信』です。今から十二年前に発行された奇クだということを承知していながら、読んでいて、とても身近に感じました。

それから一緒にお送りいただきました小説の「オー嬢の物語」は、まだ全部、読んでおりませんが、序と1の「ロワシイの恋人たち」に目を通しただけで、何か、大変、私には、むづかしいように思いました。やはり翻訳だからでしょうか。

私がちょっと不思議に思いましたことは、序のところへあなたが女であることを、わたしはほとんど疑わない。それはあなた好みの描写——緑の縞子のドレスとか、ワスプ腰のコルセットとか、クリップに巻いた髪の毛のうに幾重にも巻き上げられたスカートとかの細部の描写によるのではなくて、つぎの点である。それはルネがOに新たな拷問を課した日、彼女は恋人のスリッパがすり切れている

のを見て、別のスリッパを買い直さなければならぬと気づいたりする沈着さが十分にあらることなのだ。これはわたしには想像もできないことである。男には絶対に考えつかないことだし、絶対に表現しないことだろうVと書いていますが、こんなことぐらいで、女の人の書いたものだとは断定するのは、単純なように思えてならないのです。

それは、まあ、いいとしても、女性として、このオー嬢のように、恋人ばかりか、その友人たちに、寄ってたかって犯されるということが、果して幸福なのかどうか、大変疑問に思いました。小説として、男の方が希望される筋書きとしましては、その方が面白いかも知れませんが、女性の立場から見まして、決してマゾの心持を満足させてくれるものではないと私は思います。

私も一時期、Sの傾向を持つ男性だったら誰でもいいから責めてほしいと思ったこともありましたが、でも、私も少し経験を積んでまいりますと、実際には、やはり責めていただく相手にも、女の側から見た「好み」というものがあるのを、はっきりと意識するようになりしました。

Sの男性の方が、Mの女性だったら誰でもいいと思われないうと同じように、女性の側からも、そうした「好み」はあります。奴隷の身分で、そんなより好みをするのは、大それた考えだと言われるかも知れませんが、これは理屈じゃなくて、自分自身、どうすることも出来ないのです。

初めの頃は、自分の抱いている男性の理想像を、Sの方の上に描いて、胸をわくわくさせているというより、そう思い込んでしまっているのですが、現実では、余りにも、掛けはなれていることが多くて、途惑ってしまいうのでした。

「オー嬢の物語」は、Sの男性の方が読まれて、エキサイトされる小説なのでしょうか。私には、なんだか作り物のように思えて、少しも楽しくはありませんでした。もっと、勉強しなければいけないのかと、自分ながら、反省しております。

自分の思った通りのことを、好きなように正直に書いてまいりますと、我ままで、高慢な娘のように思われそうですので、このあたりで、ペンを置かせていただきます。



連載・アブ紳士行状記

## M 派 交 友 録

(37)

〓劉騎麗の巻(2)〓

カット・岡 たかし



## 驚異のアルバム

劉騎麗の傍には、いつの間にかタキシード

「これから彼女のお部屋へ御案内しますわ、  
 お手を御洗いになったら……」  
 私達は「洗手間」に行き、手を洗い、髪を  
 整え、服装の乱れを正した。

を着た若い男が二人、  
 両側から守るようにし  
 て、カジノを去って行  
 った。  
 チップをマネーチェ  
 ンジする時間が、私と  
 門馬氏を、劉騎麗から  
 遠ざけた。しかし、李  
 芳春は私達を待ってい  
 てくれた。

## 鬼 山 絢 策

エレベーターの中で李芳春は早口の英語で  
 しゃべった。私には、よく分からなかったが  
 大要は、

「今夜の正式のお客様は門馬先生、あなたで  
 す。鬼山先生には悪いのですけれど」

と言っていた。劉騎麗は、門馬氏に興味を  
 おぼえたらしい。

エレベーターは十三階で止まり、それから  
 かなり長い間、廊下を歩かされた。ホテルリ  
 スボアが、こんなに広いとは、いまさらなが  
 ら驚いた。途中ボーイやら、タキシードを着  
 た用人棒風の男の立っている関所みたいな入  
 口があった。最後の廊下へ出ると急に天井が  
 一メートル以上も高くなった。そこに二米近

い大男が立っていて、私達を見るとドアのボタンを押した。扉は中から開かれ、六十才ぐらいの上品な執事風の男が私達を迎えた。

それは、まさしく宮殿のような豪華な室だった。家具調度も時代ものでドッシリと落ちついた重味があった。このホテルリスボアはアメリカ式のホテルで、よく言えば合理的、悪く言えば殺風景な部屋が多いのに、この部屋だけは、まるで違っていた。

しかも、まだ奥に何部屋もあるらしい。ナイトクラブの唄うたいの部屋とは、とても想像もつかない。

劉騎麗とは一体、何ものなのであろうか。最初、ナイトクラブで彼女の美貌とサジステイックなムードに魅せられて、会って見たに思い、李芳春に頼んだのだが、可憐な踊り子の李芳春とはケタ違いの大もので、ステージアナウンサーが「傾国の美姫劉騎麗」と紹介したのが、あながち誇大な讃辞ではないことが分かってきた。

「彼女は毎晩、唄うのですか」

「いえ、気の向いた時だけ、お唄いになるのです。今夜はアメリカのお客様が見えたのでそのために唄いになりました」

「では二回目のショーには、お出にならなか

ったのですか」

「ハイ、アメリカのお客様を、おもてなししていらっしやいましたから」

李芳春が、お姫さまにでも対するような敬語を使うので我々も釣りこまれてしまった。

「それでは我々が彼女の唄を聞けたと言うことは非常にラッキーだったのですね」

「ええ、でも今夜の唄は、あまり気がのっていない御様子でした。ほんとうに、お唄いになると、すばらしいですわ」

「ホウ、非常にすばらしいと思ったが、あれでも、よくないのですか。では、どういう時が、よいコンディションなのですか」

李芳春は、つと立って、堆朱の書庫をあけて大きなアルバムを一冊、持ってきた。

「どうぞ御覧下さい」

四つ切りの写真が楽に貼れる大きさで純金の縁取りがしてある豪華なアルバムだった。

劉騎麗のポートレートが、実に綺麗に撮られている。「これはブルース・ローレンスさんが撮影されたものです」

ブルース・ローレンスと言えば世界的なカメラマンである。

五、六枚目から彼女のステージ写真が現われた。彼女の好みは、服装からアクセサリ

まで、総べて単色で整えることであつた。赤のイヴニングならネックレスはルビー。靴も赤。白ならパール。白のエナメル靴。ただしどの写真を見ても、指輪だけは、していなかった。しかし、彼女の長い指は優美で、しなやかで、豊富な表情を見せていた。

そのステージ写真を、めくって行くうちにハツとするような写真に、でくわした。

いつも、長いドレスを着ていたのが、突然全裸に近いストリップのような、乳房と腰部を真珠の飾りで僅かに掩ったスタイルで現われたからである。彼女のヌードの何と、すばらしいことか。スラリと伸びた長い足。豊かな胸にモックリと盛り上がった乳房。くびれたバストから逞しい丸味をみせたヒップ。

だが、それよりも我々をハツとさせたのは足の部分であつた。彼女は素足であつた。

その足の下に男の顔があつた。

彼女は両足をひろげて、腕を組んで立っていた。その両足の下に、踏まえられた男の横顔があつた。よく見ると、二人の男は舞台に長々と、うつ伏せに寝そべり、顔だけを横に向けていた。その横顔を足の指で掴むようにしっかりと踏まえて、立っているのだ。男の一人は黒人で、一人は白人のようだった。



私は李芳春を見た。

李芳春は門馬氏の顔の動きを、じっと見つめていたが、私の視線を感じると私の方を向いて、

「それは今年の二月、お正月のスペシャルショーの時の写真です」

「すばらしいですな、彼女の身体は」

門馬氏は魅入られたように、いつまでも写真を見つめていた。

次の写真は、もっと凄かった。

十数人の男が、パンツ一枚で二列に並び、長い棒を、かついでいた。その足首は、鎖でつながれ、奴隷を象徴していた。

劉騎麗は座椅子のような小さな輿にお尻だけを乗せ、白い長い足は、奴隷達の頭の上を長々と伸びていた。

奴隷の中には、白人も黒人も、黄色い人種も居て、若い男も中年の男も居た。大きいのも小さいのや、肥ったのや瘠せたのや、かなり不揃いであった。

「この男達は、どういう人ですか」

「それは此処へ見えた、お客様達です。アメリカ人や、フランス人、ポルトガル人、日本人や韓国の方も居ます。でも中国人は一人も居ません」

李芳春は、その「居ません」のせんに強い

アクセントをつけた。

「ヘエ、この人達は光栄ですな」

私の言葉に耳をかさず、芳春は門馬氏に向かって、

「あなたは、どう思われますか」

写真を見つめていた門馬氏は、我に返ったように、

「あ、いや、うらやましい。この人達が非常に、うらやましいと思います」

その言葉に、李芳春は満足そうな笑みを浮かべた。

### 奴隷ベラフォンテ

十数人の奴隷を従えた劉騎麗の写真は、まだ何枚もあった。

劉騎麗は金の冠をつけ、金の腕輪をつけた他は、腰に金色のサテンの腰布を巻いただけのヌードであった。桃色の乳首さえ露わしていた。二人の奴隷が正座して頭を前に二つ並べて差し出す。その頭ヘッドシリと腰かけた劉騎麗は、舞台に寝そべて、ちょっと頭を持ち上げた奴隷の頭に、右足を上げてのせ、左足は舞台に顔を伏せた奴隷の顔を踏みつけ

て唄っていた。

「これは今年の六月のグランプリのお祭の時のスペシャルショーです」

マカオのオートレースは、いまや世界的なショーである。町中は沸き返り、ホテルや飲食代が十倍に、はね上がると言われる。

「この時のクラブの入場料は百ドルです。それでも満員で入れない人が、たくさん居ました。世界から一流のシンガーや、タレントが大勢、出演しました。でも劉姫には、かないません。お客さんは劉姫のスペシャル出演を楽しみにしているのです」

劉騎麗は靴をはかず、素足であった。

「彼女の足は、きれいですね」

「ハイ、劉姫のおみあしは、一度も舞台を直接、踏むことはありませんでした」

なるほど、次の写真は多くの奴隷を絨氈のように敷き詰め、その奴隷の身体の上で、踊っている写真があった。

この踊りは激しい動きを、とらえたものであったが、静止している時の写真では彼女はめったに奴隷の背中や足は踏まなかった。いつも頭か、顔面か、首筋を踏まえていた。

彼女の美しい肢体もさることながら、私を狂おしいまでに惹きつけたものは、彼女の表

情の美しさであった。ヌードの時は、アイラインが、いく分、濃い目にひかれ、眉尻が強くアップリルされたメイクアップであったがその目は冷厳なサジスチックな光が漂い、そして崇高な女王の如き気高さを備えていた。すべてのアクションが、ナチュラルであった。

写真を撮るためにつくられたポーズではなく、それは飽くまでも、ショーを演じている時のスナップであった。

こういう写真を撮れたら、すばらしいと思った。アルバムは門馬氏の前に置かれ、李芳春の説明を聞きながら門馬氏が、ゆっくり、めくっていたが、次に現われる写真に、私は息が詰まるほどの期待をもった。

彼女の体を露わにした写真があるだろうか？　そういう期待もあった。それはワイセツな気持ではなく、これほど美しい、そして暴虐な女王の神泉は、いったいどんなかたちをしているのであろうか。それは国宝にも優る御神体を拝観する、そうした期待であった。

門馬氏の武骨な指が、アルバムの端にかかると、私は次の写真が出る前に、心臓の鼓動が、たかかった。

次の写真はステージ写真ではなく、劉騎麗

の個室で撮られたもののようであった。この部屋の奥の、どこかの室ではなからうか。

一人の黒人が、彼女の前に平伏していた。

薄紫のシースルーのガウンをまとった劉騎麗が、靴のまま、その黒人の頭を踏まえていた。

「この方はハリー・ベラフォンテさんです」

李芳春の説明に我々は、びっくりした。あの世界的な大歌手、ベラフォンテのことであろうか。日本へ来た時は、熱狂的な女性ファンの歓迎せめに逃げるようにしてホテルへ避けたベラフォンテ。帝劇公演は満員で、日本の楽団が、へたくそだとか、設備が悪いとかさんざん文句をつけたベラフォンテ。いかな我がままを言われても平身低頭して彼の機嫌をとらざるをえなかった日本の楽界や、主催者達。その偉大なベラフォンテが、次の写真では、彼女の靴のヒールを口に押しこまれて舐めていた。その顔は、まさしくベラフォンテであった。

「劉姫の唄を聞いていたベラフォンテさんは昂奮して俺も唄ってやると言って、マネージャーのとめる暇もなく、ステージに駆け上がって行ったのです。何曲か唄って大喝采を博しました。マネージャーは正規の出演ではな

いが、ともかくギャラをよこせと言ってきた。しかし、このボスは、こちらから頼んだのではないからと、五百ドル差し上げたのですが、マネージャーは少なすぎると承知しませんでした。それで劉姫がその報酬として、写真のようなことをしてあげたのです」

李芳春は、そう言って門馬氏の顔色を、うかがった。それは「この意味は、お分かりでしょうね」と問いかけていた。

「ハリー君は幸せですな。金では得がたい報酬を受けられて」

それから門馬氏は考え考え、英語でしきりに李芳春に頼みこんでいた。

後に門馬氏に、その意味を尋ねると、  
「イヤあの時は弱ったですよ」と頭をかきながら説明したが、要するに「できれば、ぼくも劉姫の奴隷の末席に加えてほしい」と言い「ここまでは簡単なんですがね」

それから、むずかしかった。なるうことなら劉姫の神秘の扉に、たとえ一瞬でもよいから、くちづけさせてほしい。そして彼女の花蜜を一滴でも恵んで頂くことができれば、自分は死をも、いとわな——。

「これを最大の賛辞と、できるだけ上品な形容で、理解させようとして、苦心したんです



ナミオM画廊

『肩甲骨のウタ』

春川 ナミオ



よ。露骨で下品なスラングなら、いくらでも知っていますがね」

### 中国が世界を征服する

李芳春は門馬氏の頼みを理解したようだった

だが、顔色ひとつ変えず、微笑したまま、

「私から劉姫に、お願いしてみますわ」

と答えた。そこへ、さっきの執事風の老人が現われて、

「大変お待たせしました。御主人様が、お目にかかりたいと、おっしゃっています。どうぞ、こちらへ——」

と、我々を次の間へ案内した。

そこは純中国風の居室で、らでんのテーブルに紫たんの椅子がドッシリと置かれ、それ等は何百年も経た時代ものと思われた。

ほのかな、かおりが漂っていた。

劉騎麗は正面の椅子に、ゆったりと腰かけていた。茶に赤の刺繍の入った中国服を着ていた。

門馬氏に対し、微笑を浮かべ、

「セットダウン」

と愛想が、よかった。傍に寄ると、何とも言えぬ魅力的な匂いがした。それは香水でもない。いかなる匂いかわからない。まさか彼女の体臭ではないと思うが、そう思われるような、ふしぎな薫りであった。

劉騎麗は、すべて中国語で話した。付き添いの老人は語学に通じていると見え、それを日本語に訳して我々に通じた。

「マカオは、はじめてですか」

「ハイ、鬼山先生に連れてきて貰いました」

劉騎麗は、私にチラと目をはしらせただけで、あとは門馬氏をジッと見つめながら、

「現在の中国を、どう思われますか」

と質問してきた。突然の質問に門馬氏は返事ができなかった。

劉騎麗は張恒栄老人を通じて、現在の中国台湾の政情を語り、毛沢東、林彪、等の人物を批評した。（注、林彪の死は、まだ未発表の頃であった）

料理と飲み物が運ばれてきた。

中国料理であったが、それは東京でも横浜でも、香港でも食べたことのない料理であった。

えび、かに、牛、鶏、などを基本に、燕巢や、くらげなどを配し、その味つけは北京風なのか広東風なのか、そのどちらでもない独特のものだった。

殊に酒の肴として出されたピータンは、すばらしくネットリとして、舌にまつわりつくようなコクのある、おいしさを、いつまでも舌先に残しておいてくれた。

酒はブランデーと老酒が出た。ブランデーはナポレオンのVXらしかった。

老酒には、なつめのような一種独得の薫りがあって、普通の老酒とは違っていた。

劉騎麗の話は中国の英雄伝から世界各国の国民性の批判に移った。

アメリカ人は単純で根気がないし、ドイツ人は非情で、フランス人はケチで弱虫。イタリア人は、やくざ。日本人は小心で、へつらい者。インド人は、ずるくて、なまけもの、だと言う。

要するに批判ではなく罵倒論であった。

ひとり中国人こそ信義に厚く、精神文化は世界のどの国よりも高く、高貴で度量のある一番優秀な国民であると賛美した。

「あなた方は、そう思いませんか」

劉騎麗の発言を、張恒栄は実に豊富な日本語で私達に聞かせた。その論旨は堂々としていて、中国賛美に偏していながら、卓見であった。

「そう思います」

門馬氏は劉騎麗の美貌に魅せられたように言い、私も、また黙って、うなずいた。そうせざるをえない雰囲気、かもし出されていたのである。

劉騎麗の紅唇は早口に動き、目は威厳をこめて門馬氏を見据えている。

「中国人は世界中に八億の人間が散在しています。東南アジアは既に華僑が政治経済の中核に入っています。やがては中国人が世界を征服するのです。いや征服しなければなりません。何故なら、中国は世界中で一番、人口が多く、また優れた人種であるから、それが当然なのです」

確かに東南アジアを旅行すると、どの都市にも中国人街があり、シンガポールやクアラルンプールなどの中心街は中国人街で占められていて、香港へでも来たのではないかと錯覚するくらいである。

### 招待の正体

堅い話題ばかり続けられているなかで、どういうわけか、私は淫心が、うつぼつとしてくるのを抑えることができなくなった。

中国賛美結構、中国人崇拜結構。そんなことは、どうでもよくなり、劉騎麗の中国服からムッチリと露れた二の腕や、時々足を組み替える時にチラリと見える太腿に視線を奪われた。

だが、目の前の美姫を抱きたいという衝動は、おきなかった。私の対象としては相手が



あまりにも大物で、高貴にすぎるように思われた。

そこで何か、わけのわからぬ焦燥感に悩ませられた。

門馬氏を見ると、顔を真っ赤に紅潮させ、劉騎麗の肉体に熱っぽい視線を送り、何か両足を動かして落ちつかない様子である。

恐らく私と同じ状態を呈しているであろう。

ハハア、料理の中に催淫剤を入れたな。

私は、ピンときた。

途端に私の慾心はスーッと、さめてしまった。

何を、たくらんでいるのだろうか。大したことはないと思うのだが、ふと警戒に似た気持が、わいた故か、私は冷静になれた。

張恒栄老人の目が、私の心の中の変化を見逃がさなかった。柔和な目が一瞬、鋭い光を放ったが、それは、すぐに消えた。

「ところで門馬先生。これは私個人のお願いなのですが、きいて頂けますか」

「ええ、何ですか？」

「実は私は、香港でレンズを作っているのです。あなたと御同業です。いま新しいレンズを作っているのですが、その製造過程に、ち

よっと疑問があるのです。あなたなら、ひと目でお分かりになると思いますが、一度、工場においで願って、御指示を、仰ぎたいのです」

「ああ、折角ですが、私達は明朝、帰らなければならぬのです」

「分かっております。よろしければ一日、お延ばしになっては、いかがです。もちろん、帰りの交通費や、宿泊費は私の方で負担させて頂きます」

門馬氏は、問いかけるように私を見た。

それは門馬氏自身が決めることで、私は招かれた客ではないのだから何も言えない。

「失礼ですが、劉姫に何かお望みの御様子を李芳春から聞きました。今夜は、もう遅いのです。四時半ですよ。よろしければ明晩、私からも劉姫にお願いしてみますが――」

「分かりました。お役に立つかどうかは分かりませんが、ともかく拝見しましょう」

門馬氏は決心した。

「ただし、ひとつだけ、ぼくからも、お願いがあります。鬼山さんも、御一緒させて下さい」

「結構です」

張老人はチラリと私の方に、うとましい視

線を投げたが、OKは、してくれた。

いよいよもって私は刺身のつまである。

しかし、門馬氏が私の残留を希望してくれたのには感謝した。

門馬氏が何故に、正賓として招ばれたか、彼等の意図も、これで読めた。つまり極東光学の試作部長である門馬氏の知識を必要としたのである。そんなことなら、お安い御用だと思った。

私という人間は先方側にとっては全然不用の人間である。ただ私が李芳春と知り合い、芳春に門馬氏を紹介した時、彼の職名を言った。芳春から劉騎麗、或は張老人に伝えられて、急に招く気になったのであろう。

だから紹介者として、お情けに、お相伴させてもらっている程度である。

「では、もう遅いですから、今夜はこれでおやすみなさい」

張老人は門馬氏と握手した。劉騎麗は、それを見てニッコリ微笑んだ。

門馬氏と私は劉騎麗に「グッドナイ」を言っただけだったが劉騎麗は礼を返さず、僅かに口もとを、ほころばしただけであった。

扉のところまで、張老人と李芳春が送ってくれた。廊下に出ると二人のボーイが待って

いて、我々の寝室への案内をした。

私は李芳春と、もう少し話がしたかったが言葉をかけるわけにも行かず、李芳春を見ると彼女もジッと私の方を見ていた。劉騎麗の傍では、かすんでしまう彼女も、こうして見るとチャーミングで可愛らしかった。

当然、我々が泊まるべき寝室へ案内してくれるものと思っていたら、幾曲がりもした廊下のかどで、案内役のボーイは私と門馬氏を右と左に引き離した。

「あの、ちょっと彼に話があるのだが……」

門馬氏がボーイに英語で言った。

「もう遅うございます。お話は明朝……」

ボーイは日本語で、そう言い、大きな門馬氏を抱き抱えるようにして連れ去った。

私の案内された寝室は、団体客として割り当てられた米国式の室よりも、はるかに立派な部屋であった。

「御用は？」

「別にない」

ボーイに十ドル、チップをやると、一礼して引き下がった。

一人になると、いままで、やっぱり緊張していた故か、何かホッとした気分になった。

また、淫心がムラムラと起こってきた。

「しようないやつだ」

道楽息子が頭を持ち上げてくるのを持てあまして、バスルームに入って湯と水のコックをひねっておいで服を脱いだ。

驚いたことに三面鏡の鏡台の上に、丹前と浴衣とパジャマが置かれていた。外国のホテルでパジャマや浴衣を出されたのは、あとにも先にも、この時だけである。

私は浴衣を着て、広いベッドの上に寝こんだ。

門馬氏とは、まだ交際が浅い。Mについて語り合ったことがあるが、果たして彼が、ほんとうのマゾヒストであるかどうかは、まだよく分からなかった。彼は、これまで、いつも他人のMについて語っていたからである。

明日は劉騎麗が彼を奴隷にするだろう。

どんなプレーをするのだろうか。

それを見ることが、できるのだろうか。

その時、電話のベルが低く鳴った。

門馬氏からかと受話器をとると、

「まだ、おやすみにならないの？」

李芳春の声であった。

「ああ、眠れなくて困っているよ」

「お話があるの。行ってもいい？」

「おう、歓迎だ。どうぞ！」

間もなく、しのびやかなノックと共に李芳春が現われた。

「よく来てくれたね」

「よく来られたね」と言おうと思ったが、途中で改めた。この深夜に、廊下のコーナーに立っているボーイの、いくつもの関門を抜けて、ここまで来るのは大変だと思ったからだが、それでは失礼だと思い直したのである。

「先生、私を東京へ連れて行って下さい」やぶからばうに言われたので面喰らった。

「劉姫の許しを得ているのかい」

「私は、劉姫の召使いではありません。ボスには許可をとってあります」

「フーン、ボスは何という人？」

「張さんです」

「あの張恒栄老人？」

「違います。でも張さんが本名かどうか分かりません。中国の名前だけでも他に三つ四つあるようですし、日本名も、英語の名前も、もっている人です」

「ボスは紅幫ホンバンか青幫チンバンの、どっち？」

中国には紅幫、青幫という巨大な秘密結社があることは有名である。

「アイトンノー」

李芳春は笑って首を振った。



イメージギャラリー 『ブタの悦鳴』 岡 たかし



「東京へ行ってストリップやるの」

「そう」

「あッ、いけねえ。バスのお湯を出しっ放しにしておいた」

私は、あわててバスルームへ行って見るとお湯と水が溢れていた。

「君も入る？ ストリッパーになるなら、身

体を見ておかなくちゃ」

案外、素直にうなずいて、芳春は着ていた中国服を脱ぎにかかった。

### 同じ阿呆なら

李芳春の肌は、きめが細かく、弾力に富んでいた。

私は芳春の片足を湯槽のふちに上げさせてその前に坐り、立っている一方の足を片手で抱いた。

ほのかな香りは、日本の女と変わりなかった。私は芳春が無性に可愛くなり、唇をつけた。

「いや、ここで、こんなこと、しないで」

しかし私は我慢ができず、芳春が冷たいだろうと思って、桶でタイルの床へお湯を流しその場に抱えて寝かせた。

何年振りかと思うほど、若者のように元気なので、薬の効きめを、いまさらながら想い出した。

そこで果ててしまうのは惜しい気がして、ベッドへ戻った。

私が頼むと、芳春は羞らいも見せずに、私の顔に跨がってくれた。下から見上げると、かなり大きく膨らんだ乳房が見え、可愛らしい乳頭がポツンと出ている、その上に芳春の笑顔があった。その表情は、水上カジノのフ

アンタンで、初めて彼女の顔を見た時と同じ表情であった。

劉騎麗の、凄絶なまでの妖艶さとは全く異なっていて、あくまでも愛らしさに、あふれた魅力であった。

芳春は膝で立つと、私の顔の上で向きを変えて、後向きになり、右手に摺んで口に含んだ。

彼女の舌技は非常に巧みであった。

すぐ私は暴発の危険を感じて、彼女から離れようとしたが、彼女は、なかなか許してくれなかった。

その時、電話のベルが低く鳴った。

「チョッ、チョッ、チョッ」

と彼女は舌打ちしながらも、はじかれたように受話器をとった。

早口の中国語が、しばらく続いた。どうやら電話は、彼女にかかってきたもののようにだった。

「私の室に、かかってきたのよ。交換に、この室に切り替えてもらうように頼んでおいたのよ」

「誰からなの」

「張老人からよ。私が部屋に居るかどうかをたしかめてきたのよ」

「ここに居てもいいの」

「もう大丈夫よ。朝までゆっくりできるわ」

途中で途切れることには私は馴れている。

途切れたこと自体は何でもないのだが、あのいんぎんな中に底知れぬ無気味さをもった張恒栄老人の顔を思い浮かべると、欲心が萎えてしまった。何か理由のない不安に襲われたのである。

十分ほどそうしているうちに、芳春は両手で私の頭を持って離し、私の顔をジッと覗きこんだ。

彼女が、もう大丈夫だと言うのだから、それを素直に信ずれば、いいのだ。もし仮に、ここへ組織の男達が入って来たとしたら……何もしないでいても、寝室に裸で二人きりで居れば、弁解の余地はないのだ。

やる阿呆に、やらぬ阿呆。同じ阿呆なら、やらなきゃ損々……

私は度胸を、きめた。途端にモリモリと元気を回復した。

もう明日のことは考えまい！

ここ数年来、味わったことのない充実した夜だった。二十代の若さに戻ったような素晴らしい夜であった。

李芳春から劉騎麗のこと、その周辺のこと

を、もっと聞き出したいと思っていたのだがそんなことは、もうどうでもよくなってしまうった。

ここが異国の、正体の知れぬ寝室であることも、相手が中国人であることも、何もかも時間さえも忘れて芳春を求め続けた。

電話のベルが、けたたましく鳴っている。

それで目がさめた。そうだ、この電話は、低音、中音、高音と三段に切り替えられるのだと昨夜、芳春から聞いたわけ。

李芳春は、いつの間にか居ず、おおいさるような疲労感が、まず意識された。

時計を見ると三時である。まさか午前三時ではない。して見ると七、八時間、眠ったことになる。受話器をとった。

「まだ寝てらっしゃるの。ウフフ」

李芳春の声だった。

「昨夜は、どうも。門馬氏は、どうした？」

「今朝、早く香港へ、行ったわよ。もうそろそろ帰ってくる頃じゃない？」

そうだ。張氏のカメラ工場へ行ったのだ。

私の所へ電話したかもしれないが、私は前後不覚で眠っていた最中だ。もっとも今日の仕事は専門的だから私は必要ないはずだ。



「お食事、お部屋へ運びましょうか」

「ウン、頼むよ」

熱いバスに入ると、身体の節々が、ようやくシャンとした。

芳春はミニの下から美しい足を惜し気もなく見せて食事を運んできてくれた。

「ねえ、昨夜の約束、きっと守ってね」

「えっ、何だっけ。ああ、大丈夫だよ」

芳春は日本へ連れてってくれと言う。私は今日、帰るのだから、それまでに君の準備が整わないだろうと言うと、彼女は例の関西ストリップ興行主の名刺を見せて「この人の所へ行って、あたしを招くための出演契約書を送ってもらうように頼んでくれ」と言う。ただの観光旅行では出入国のビザの期限が短い、正式の理由にならないから、ぜひとも招待状がほしいのだと言うのである。その位のことなら、できそうに思ったので引き受けたことを思い出した。

食事のあと、芳春と二人でマカオの街へ散歩に行き、夕方から又、カジノでルーレットに興じていた。

十二月頃になって、門馬氏が現われた。

「どうでした？」

「イヤ、どうも忙しくて……」

仕事の話には触れたがらぬ様子であった。

門馬氏はその夜、ルーレットで、かなり勝ち、二千ドルぐらい勝った。

二時頃になって、タキシードを着た男が、

「劉姫が、呼びです」

と門馬氏を連れて行ってしまった。

私は明け方まで勝負したが、大したことはなく、疲れて部屋へ引きあげようとする、張恒栄老人に呼ばれて、彼の部屋へボーイに案内されて行った。

「まことに恐縮ですが、門馬先生は、いま暫く御滞在を願うことになりました。つきましては貴方とお目にかかる機会がなくなると思いますので、貴方は、ひと足先に御帰り願いたいと言うことでした」

門馬氏が、そんなことを言うはずはない。

しかし、張老人の鋭い眼光が、私に有無を言わせぬ、強い圧力を感じた。

「分かりました。ただ、その前に一度、会いたいですな」

「門馬先生は今、香港にいらっしゃいます。お忙しいので、お会いになるのは無理でしょう」

「では、電話はかけられませんか。先方からこつちへかけてくれてもよいですが」

「それは、お伝え、して見ましょう」

翌朝八時頃、電話のベルで起こされたが、門馬氏からだった。「元気だから心配しないでくれ」と言ったが、どうも誰か傍について話している様子で、私の質問とトンチンカンな返事が返ってきた。

「とにかく今日、帰るが、あなたの会社から私に問い合わせがあると思うが」

「ああ、会社には食当たりして二、三日、休むと電報してありますから、そう言っておいて下さい。大したことはなく、間もなく帰るからと」

### 戦 慄 の 鞭

東京へ帰って、二、三日後に門馬氏の会社へ電話してみると、彼は帰っていた。「今夜夕食を一緒にしませんか」と言ってきた。

大井の阪急ホテルのグリルで門馬氏と会ったが十日も会わなかったような気がした。

門馬氏は元気で、前と少しも変わらぬ様子であった。

「意外に早く、解放されましたね。待遇は、どうでした？」

「悪くありませんでした」

「あちらのカメラ工業の状態はどうですか？日本と比べて」

「それは遅れていますね。いまや日本のカメラ工業は世界一ですからね」

仕事の話には余り深く立ち入らなかった。

門馬氏が避ける風を見せたからである。

酒が入ったところで、本題に触れる。

「劉騎麗とは毎晩、お会いでしたか」

「ええ、会う事は会っているのですが、一対一で会う機会は最後の夜、ちょっとだけでした」

門馬氏の話によると――

仕事の終わる時刻は不規則で、早く終わることもあれば、夜十二時頃まで、かかったこともある。

早く終わればカジノに行く。香港にもカジノはあるが、非公開のもので、Fホテルの奥まった部屋で会員組織でやっているらしい。

劉姫にお会いしたいと言うと、そのホテルの一室に通された。そこには既に四、五人の先客が居た。どこの国の男達か分からないが東洋人は門馬氏の他、だれも居なかった。

長いこと待たされたあげく、劉騎麗が白いドレスに五カラットもあるダイヤのネックレスを、きらめかせて現われた。後に若い男が

従っていた。

タキシードを着たその若い男はピアニストで、グランドピアノの前に腰を降ろした。

劉姫は門馬氏達の方にニコリと一べつを与えただけで、譜面を片手にピアノの前に立った。

ピアノが大きな共鳴音を、とどろかせた。部屋は広いけれども、劇場と比べれば、ずっと狭いだけに、ピアノの音が、かなり大きく響いた。

劉姫が唄い出した。凄い声量である。

劉姫が、こんな真剣に唄うのを見たのは始めてだった。マカオのクラブで観衆を前にして唄った時よりも、はるかに真剣であった。歌は門馬氏は分からなかったが、オペラの抜すいのようなだった。

途中で劉姫は美しい眉をしかめ、ある小節を何度も唄い直した。どこが悪いのか門馬氏には分からなかったが、何回、唄い直しても劉姫には気に入らないらしく、何度か中国語でピアニストと言いつつ合ったが、劉姫は次第に機嫌が悪くなり、突然、大声でピアニストをどなりつけると、ピシリと頬に平手打ちをくれた。

「あの男は劉姫が少女の頃から、ずっと指導

しているドイツ人のピアニストです」

いつの間にか門馬氏の傍に坐っていた張老人が説明した。

「では、劉姫の音楽の先生なんですか」

「ええ、日本流に言えば家庭教師と言うのでしょうか」

その「家庭教師」は、殴られて顔面蒼白になった。劉姫は何か叱りつけている。

再びピアノが鳴り出した。独奏である。劉姫がトンと足踏みすると、また最初から弾き直した。腕組みして聞いていた劉姫は又、短く鋭い叱声をあげると、ピアニストの金髪をわし掴みにして、椅子から仰向けに、ひっくり返した。

ぶざまに転がったピアニストは、劉姫のスカートの前に、

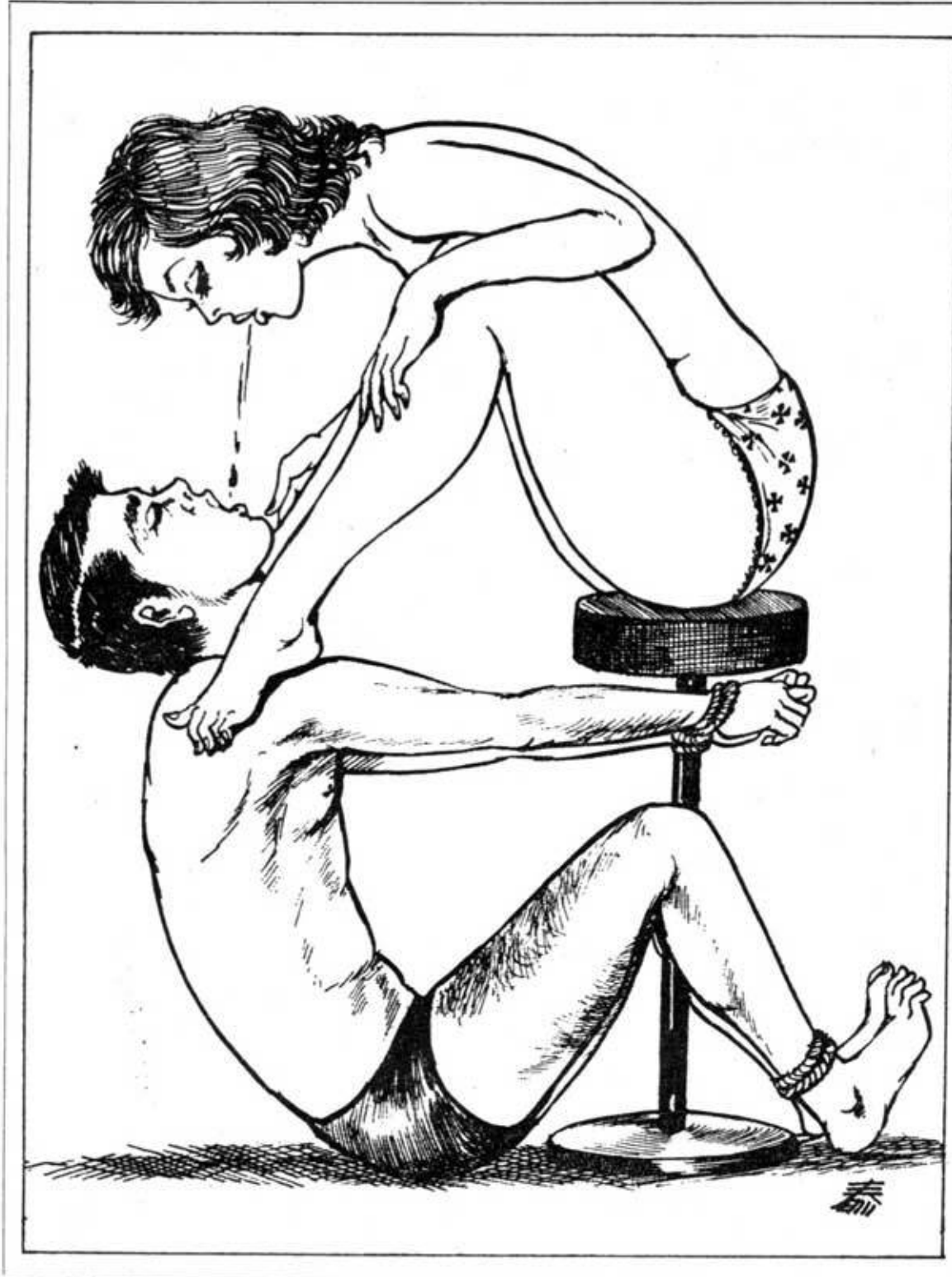
お許し下さい！

と慈悲を乞うた。だが、劉姫は片足をあげると、白いエナメル靴をピアニストの額に当てて、思いきり蹴倒した。

タキシードを、きちんと着こなして出て来た端正さは見るかげもなく、頭髪は乱れネクタイは、ひん曲がった。二人の付け人が出て来てピアニストを両脇から抱えるようにして連れ去った。張老人は門馬氏にささやいた。



ナミオM画廊 『お情けの賜りもの』 春川 ナミオ



「今日は劉姫は御機嫌が悪いです」  
劉姫はピアノから離れて二、三步、紳士達  
の方へ近寄った。すると紳士達は一斉に立ち  
上がり、我先に彼女の前へ殺到した。

「いまがチャンスです。ホラ、あなたも行き  
なさい！」  
張老人が門馬氏の背中を押した。門馬氏も  
立ち上がって紳士達の後へ続いた。

紳士達は劉姫の前に片膝ついて両手を差し  
出し、一斉に中国語で何か言った。

それは「私奴にお恵みを垂れ給え」と言う  
言葉だと、あとで聞かされたが、門馬氏は知  
らなかった。見よう見まねで片膝ついて  
両手を差し出した。何かそうすることが儀式  
かエチケットのように思われたからだった。

一番前に居た髪の黒いイタリア人らしい男  
が、更に劉姫に近寄り、白い服のスカートに  
口づけしようとした。

劉姫は足を引いて、裾をとらせず、下から  
見上げる男に向かって、

チッ……

と、軽く唾を吐きかけた。

アッ、と男は軽い叫び声をあげ、両手で顔  
を掩った。立ち去ろうとする劉姫に、その男  
を残して、他の男達が追いかけた。

劉姫は立ち止まり、扉の方に向かって、あ  
ごを、しゃくった。すると男達は訓練された  
犬のようにドタドタと駆け出して、一人が、  
じゅうたんの上に、うつ伏せになると、次の  
男が、その後へ、うつ伏せになり、次々と、  
それに習った。

門馬氏は一番遅れて後の男の靴に頭をつけ  
るようにして腹這った。

長い「男の橋」が出来た。

劉姫は無雑作に靴のまま、先頭の男から踏みつけて「橋」を渡った。ある者は背中を踏まれ、ある者は尻を、また頭を踏まれて行った。最後の門馬氏の背中にグッと重みがかかった。そこで劉姫は、とまった。

門馬氏の前に寝ていた男が、劉姫の声に呼び起こされ、バネ仕掛けのようにとび起きて扉を開いた。劉姫が入る。続いて、その男が後を振り返って、いかにも嬉しそうに仲間の男達に笑いかけて得意そうに扉の中に消えた。今夜「選ばれた、たった一人の男」なのだ。

「ああ、今夜もダメか」

アメリカ人らしい男が落胆して、つぶやいた。

張桓栄老人が、残りの紳士達を別間に案内した。そこには酒肴が用意されていた。

門馬氏は、そこで男達を観察したが、皆、いっつある風貌で、一芸に秀でるか、特殊の技能を持っている人々のように思われた。

中には顔馴染みの者も居て、話し合っていた。門馬氏が一番、新顔と言った風だった。部屋の片側に赤いどんすの短い幕を垂らした部分がある。張老人が、その幕をサッと取

り去り「どうぞ」というゼスチュアをした。

そこへ大きな箱型のカメラを抱えた男が入ってきた。カメラマンらしく、カメラはハッセルブラッドだったが、別に肩から一眼レフを二本、ブラ下げていた。

幕が取り去られたあとには、硝子の長い窓が現われた。男達は椅子を持って、その窓の所へ集まった。椅子に腰かけると、ちょうど目の高さの所に、その窓があった。

そこから覗くと、隣室が丸見えだった。

隣の室は、こちよりも一米ぐらい高く、隣室の床が、すぐ目の下にあった。

隣の室は豪華な調度で飾られた中国風の立派な二十畳ほどの部屋だったが、中央に黒い一坪ほどの鉄板が置かれてあった。その鉄板の表面には、細かい鉄のとげがビッシリと植えられていた。

そのとげの鉄板の上に、全裸で後手に縛られた男が坐らされていた。さっき、男達に向かって、選ばれた男として、笑って消えた男である。

部屋の奥の椅子に腰かけてワインを飲んでいた劉姫が、立ち上がって男の傍へ、ゆっくり歩いてきた。劉姫は黒い長靴を、はいていた。

黒いビロードのマントを羽織っていたが、

その下は何もつけていなかった。

右手に鋭いとげの出た、長い鞭を垂らしていた。

劉姫の顔は、先刻のグランドピアノの前に立っていた時とは別人のようだった。眉は吊り上がり、アイシャドーは濃く、目尻の切れ込み鋭く、残酷無慈悲な女王の形相に変わっていた。

「カバレロ！ この鞭を、お受け！」

ピューッ！ と鉄鞭が一閃した。凄い、うなりを立てて、裸の男の頭上を一回転した。

傍のテーブルの上に、白菊の花が一輪差しに差されてあった。中国で白菊を飾るとは珍しい。中国では白は死を意味するのだ。

その白菊めがけて、劉姫はスナップを、きかせて鞭を軽く振った。鞭の先端が花に触れると、パァーッと花吹雪となって、茎も葉もみじんに、くだけ、花びらは鉄板の男に振りかかった。凄い破壊力である。

男は恐怖を、いっぱいに浮かべて身を固くしていた。

ピューッ、ピューッ、ピューッ。

男の頭上に鞭が嵐を巻き起こし旋回する。劉姫は残忍な、まなざしで男を見据える。



パシッ!

遂に鞭が男の背中で凄まじい音を立てた。鮮血がパアッと、飛び散った。

「ウォーッ、アアアッ」

猛獣のような、男の悲鳴が、おこった。

男の背中はギザギザに切り裂かれ、血が背中一面に流れた。

「アッハハハハ。こたえたかッ!」

カッカッとハイヒールの音が鉄板を踏み、

劉姫は高々と足を上げ、男の額に靴底をピツタリと、あてがって、思いきり蹴倒した。

「ウッ、ウィーッ!」

傷つけられた背中が、一面に、とげの出た鉄板の上に、ささるように転がった。

「起きろッ、カバレロ」

劉姫は、倒れた男の顔の真上に両足を拡げて跨がるように見下ろし、苦しみ悶える男に命令した。男は必死に、もがいて、半身を起こした。その背中には、血あばたのよう一面に、とげに刺された血穴が、あいていた。

「この鞭を三回、受ければ、お前は死ぬ。いま、死にたいか。あたしに殺されたいか」

起き上がった男の背中を跨いだ劉姫は、女性の果実を男の口先に突きつけた。

そして鞭の、とげを口先に持って行き、

「サアお前は、どっちをとる。鞭か果実か」

「もう……お許し下さい」

「三日以内に、あの絵を仕上げるか」

「仕上げます」

「きつとだよ。仕上げなかったら、この鞭が

三度、お前を打ち据えるよ」

「必ず、仕上げます」

男は犬のように舌を出し、ハッハッと、あえいでいた。

その口に、救いの果実が与えられた。

「これを飲めば、お前は一晩で回復するよ」

ジュースが頻死の男の舌先に恵まれた。

男が、むさぼるように吸いつこうとするのを、髪の毛をつかんで引き離れた劉姫は、男の目の前に、もう一度、鞭の先と果実を剥きつけ、

「いいか、お忘れでないよッ!」

跨いでいた足が上がって、再び男は鉄板に蹴倒された。劉姫の片足は、太腿から、ふくらはぎまで、男の血がベッタリと、ついていった。室のあかりが、スーッと暗くなった。

カメラ三台を取っ替え、ひっかえしてパチパチ、シャッターをきっていたカメラマンが窓から離れると、張老人が再び赤い、どんすの幕を下ろした。

### 貴重な一滴

その翌晩、門馬氏が劉姫に選ばれた。

「正直に言って、その時の気持は、嬉しいような怖いような、へんな気持でしたね。なにしろ昨夜の、あの凄惨な光景を見せられた直後でしょう。自分もまた、昨夜の男のように背中を、ざくろのように切り裂かれるのかと思うと、背筋が寒くなりましたよ」

容貌魁偉、堂々たる押しだしの門馬氏が、いまでこそ悠然と盃を口に含みながら話しているが、この人が恐怖にふるえるさまが目につかぶようであった。

「そりゃ、ぼくだってMっ気はあるけれど、背中を裂かれるような、ひどいめには、あいたくありませんからね。しかしその時は、どうにも拒否できないような状態に陥っていたのです」

「それは、どういうわけですか」

「サア、いま考えても説明しにくいですね。何と言ったらいいか、要するに、ぼくは劉姫の奴隷に心身ともになりきっていたというところでしょかね。何か宿命的なものが、課せられているような気持になってしまったので

す。それが劉姫の、あの世にも稀な美貌と、そこから立ちのぼる妖気に、あてられてしまった、せいでしょうか。イヤそれとね、向こうへ行ってから、どうも夜になると何だか、こうムラムラとして、おちつかない気持ちになっってしまうんですよ」

劉姫に触れることは、できなくても、毎夜美しい姑娘がベッドに待ったと言う。

「どういうわけかハッスルしちゃってね」

「それは、催淫剤を飲まされたからですよ」

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	三万円
秀作	一篇につき	二万円
佳作	一篇につき	一万円
可作	一篇につき	五千円

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

「ああ、そうでしょう。まるで十八、九の青年時代のようなハリキリかたでしたから」

「で、劉姫と会って、どうしました？」

「いままで劉姫と会った時は、必ず誰か傍に居ました。二人きりで会うのは始めてだったんです。何とも言えぬ興奮が襲ってきて手足がブルブルふるえる気持ちでしたね」

門馬氏は、ひとのことは委しく話してくれしたが、自分のこととなると、あまり話したくない様子であった。

## 手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

その夜の劉姫は、昨夜とはメーカーキャップを変えて優雅な化粧をし、クリーム色の衣服と靴で、すべてを単色で統一した服装だった。

「昨夜は、さぞ驚いたでしょう。あたしを悪魔のような女だと、おぼし召したでしょう。でも、それは違います。昨夜の男は怠け者で仕事を遅らせていたので励ましてあげたのです。それに、あの男自身、ああされることを望んでいたの、望みを叶えてやっただけのことです」

「ああ、それで安心しました。実は、あなたと、こうして二人きりで、お会いすることをどんなに待ち望んだことでしょう。しかし昨夜の光景を見て、内心ビクビクしていたのです。もちろん、あなたが御命令することなら何でも服従しますが」

「フフフ、誰にでも、あんな乱暴な、はしたないまねは、いたしません。近く中国は日本と国交を復活することになるでしょう。そうなれば日本人はお友達です。あんな、ひどいことなど日本人には、しませんわよ」

ニクソンが中国を訪問する直前のことである。にも関わらず劉姫は、日本と中国との国交回復を予言したのである。

こんな重大なことを門馬氏も私も、当時は



単なる外交辞令と軽く聞き流してしまったのである。所詮、我々は役人でも商人でもないやはり単なる職人でしかなかったのである。

門馬氏が、お上品な話ばかりしているの私は業を煮やして単刀直入に突っ込んだ。

「で、結局どうされました。劉姫の肌に触れることは、できたのですか」

「ええ、劉姫の肌というのは全くすばらしいですね、フワフワとした中に弾力があって。

彼女は中国式の技術とか、鞭の使い方とか、いろいろ武術めいたものも稽古しているらしいのですが、それでいて筋肉は、やわらかく

すき通るような白い肌が、ぬめぬめと、まっわりついてくる感触は最高ですね」

「なるほど。で、どの程度までに行ったのですか。ベッドを、ともにされたのですか」

「イヤイヤ、とんでもない。そんな大それたことは、できませんよ」

「では彼女の果実に、くちづけぐらいは、さ

れたんですか」

「イヤ、それも許してはくれませんでした」

酒が入っていなかったら門馬氏は、もっと話を流したであろう。

間接的に聞き出したことを類推すると——劉姫は最後に門馬氏の太い首を、まるやか

な内股に、はさみ、秘宝を真上から拝ませてくれた。魅入られたように門馬氏は、そこから視線を、はずすことができなかった。少しでも接近しようと首を持ち上げようとするのだが、軽く、やんわりと、はさんでいるだけのように見えて、劉姫の足は意外に力強く、近づくことが、できなかった。

それは何に、たとえたらいいだろう。香水でもなく、香料でもない、果実の香りとも違った、妖しい匂いが、ふくいくと上から、そそがれている。

たとえ、一瞬でもよい。その扉に舌を触れてみたい、という門馬氏の慾望は、どうしても叶えられなかった。

上を見上げると劉姫の美しい笑顔がある。

「あの顔は中国人のものではありませんね。彼女は国粋主義者だけど、ハーフじゃないかな」

「あなたはカークダグラスの主演したシンドバッドを見ましたか。あの中でシルバーナマングァーノが魔女に扮して出てくるでしょう。あの時の顔に似ていましたね」

門馬氏が、わずかに慰められたのは、ネットリと糸を引いた、ひとしずくが唇に垂らされた。彼女の最後のプレゼントは、それで終

わったのだった。

門馬氏が香港で、どんな仕事をしたのか話してくれない。だが世界一を誇る日本のカメラ技術の真髄を五日の間に、どの程度、授けたか、私には、それを詮索する興味はない。

だが、劉騎麗という女性は、まことに特異な女性であった。

たぐいなき美貌と姿体に恵まれ、あらゆる技能を身につけ、そして愛国者である。

彼女は中国こそ世界一の強国であり、やがては中国が世界の覇者になると堅く信じている。そしてその信念のもとに行動している。

彼女の後ろに、彼女をあやつる大ボスが存在することは間違いないが、そのボス、或はその組織が、政治や経済や戦力に、どの程度まで浸透しているのかは、うかがい知ることではできなかったが、彼女が中国人以外には肌身を許さない。外国人は、すべて奴隷として扱うという信条を、あからさまに示しながらなお、彼女の渴仰者を殖やして行くところに底知れない彼女の魅力があることを知った。

「近いうちに、香港へ遊びに行きませんか」

別れぎわに、門馬氏は、さり気なく私に言った。

(終)